ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ ｗｏｒｌｄ ｔｏ ｂｅ ｎａｍｅｄ ａ ｖｉｒｔｕａｌ－ｒｅａｌｉｔｙ

早水慧大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｎ ａ ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ ｗｏｒｌｄ ｔｏ ｂｅ ｎａｍｅｄ ａ ｖｉｒｔｕａｌ－ｒｅａｌｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ３４１８ＢＺ

【作者名】
早水慧大

【あらすじ】
悪友と夏休みの宿題をやった帰り道に、世界初のバーチャルリアリティを使用したネットゲームを、福引で手に入れる。明日がサービス開始なので、早速みることにした。妹や悪友はβテスターだが、自分は違う。興味が無いふりをしていたので、持っていることを秘密にしてゲームを始める。パートナーの精霊とともに。――――――――ホントに良く有る物語。たぶんオリジナルです。さすがにテンプレモンスターは出ます。自由気のままに不定期

投稿。

この幼女！？　自重も無双もする気なし！

始まりの始まり（前書き）

プロローグ

始まりの始まり

２０３８年、ある一つの会社が仮想現実、バーチャルリアリティ技術の開発に成功した。

その技術は数年であっという間に医療や軍事の分野に波及した。しかし、始めは大掛かりで高価な装置が必要であったため、政府や研究機関しか所有・使用ができなかった。

２０４３年、しかし、始めにバーチャルリアリティ技術を開発した、ある一つの会社が、小型で安価な端末の開発に成功した。それにより、一般の家庭でも仮想現実の体験が可能になり、数々のゲームが開発された。

２０４６年、仮想現実の五感と呼べるものを、ほぼ完全に再現できる技術が生まれ、現実と仮想現実はほとんど区別がつかないほど鮮明に、かつ色鮮やかに変わっていった。そして、最新のゲームの中には、第六感や気力、魔力などと呼ばれるようなものも、体感・操作出来るようになった。しかし、仮想現実は情報量の関係で、クローズドゲームにのみでしか使い物にならなかった。

それからさらに数年後、

２０５２年、情報量の大小に関わらず、タイムラグゼロでの通信方法が確立・開発された。机上の空論と言われたこの技術の開発を、世界は驚愕をもって受け入れた。一部のものは疑ったが、実際にあるのだから認めざるを得なかった。そして、その技術は爆発的に世界中へと普及した。

そして、
２０５４年、とある日本の大手企業と、とある一つの会社が手を組み、バーチャルリアリティを利用したネットゲームの開発を発表した。その発表は世界中を駆け巡り、その名前もまだ無いゲームは世界中で話題となった。その開発に、国の内外問わず多くの企業が資金の出資に協力し、さらに数多の研究機関が技術提供を申し出た。

２０５６年春、クローズドテストが行われた。
２０５６年冬、実際に世界中のサーバーと繋ぎ、αテストが行われた。その時、情報伝達速度が現実を超えていることが判明。仮想現実の中と外で動きに誤差が生じる危険があったが、一度見送られβテスト時のアンケートの項目に入れることになった。

そして、
２０５７年夏、一般の参加者を募りβテストが行われることになった。応募は世界中で行われ、募集定員が１万人のところに１０００万人を超える応募があった。そのため、募集定員を急遽１０倍に増やし１０万人として行った。

２０５７年末、βテストは無事に終了した。αテスト時の懸念は、一般のユーザーには許容範囲内で、むしろ好まれる傾向が強かった。それでも、始めに少し違和感を持つものも多かったので、始めは現実と同じ設定をし、ステータスの上昇によって徐々に反応速度の上昇するようにした。これはテスト組と正規版参入組の差を、出来るだけ無くす狙いもあった。

そして、
２０５８年夏、正規版の完成が告知され、また、全世界同時発売も
発表された。

２０５８年７月２０日、全世界同時発売。

２０５８年７月２７日、現地時間１２時、サービス開始。

全ての人が主人公になれる世界。

それぞれの大陸より始まる物語。

そして、世界の人々が出会う世界の幕が揚がる。

その世界の名は……。

始まりのキッカケ（前書き）

お願いします。

始まりのキッカケ

7月20日土曜日、月曜日に終業式を行ったら、夏休み（夏季休暇とも言う）という日の朝。
（土日と繋げて、今日から夏休みでもいいと思う今日この頃。）

ガチャ、乱暴にドアを開け

「兄ぃ！　おはよぅ」

「うおう、……おはよう。どうした？いきなり」

妹が勢いよく部屋に入ってきた。

「ついに、ついに届いたんだよ！」

「何が？」

「E2だよぅ。ついにきたんだよぉ」

「E2？」

テンション爆上げな妹とは対照的に、疑問を呈した。もといE2なるものに見に覚えがない。

「《Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｅａｒｔｈ　Ｏｎ－ｌｉｎｅ》の略で“E2”。今、唯一つのバーチャルリアリティを利用したネットーゲームよ。俗にいうＶＲＭＭＯってやつ。βテストに参加していて、やっ

と正規版が出たんだ。今年は長かったよ～。」

「βテスト？ああ、そういえば去年の後半、なんか毎日夜遅くまでやってたな」

思い出して納得した。確か、なんか国まで手を貸してるって噂のゲームだっけ？

「そぅ！ついにその正規版が完成して届いたの、βテスターは特別プレゼントだよぅ」

「お、おう」

朝からさらにテンション爆発していた。

「じゃあ、友達に話してくる。友達もβテスターなんだ」

バタバタバタバタ、と妹は走って部屋から出て行った。ドアが掛けっぱなしなのは、妹のでデフォで何回言っても直る気配なし。そういえば、この町は何故かβテストの当選者が多いらしい。なんか奴の気配を感じるな。

その後、土曜日曜と、妹はテンションが常時高かった。

◇◇◇

そして月曜日。

「おはよう」

「おはよう！来たか来たか、やっと来たか！」

そこにはテンションの高い馬鹿がいた。

「朝からテンションが高いな。明日から休みだからって、暑苦しいわ」

手団扇で顔を扇ぎながら言った。

「んで、どうした？」

「Ｅ２がついに始まるぜ！」

なんか妹を思い出した。ってか、お前もか。いや、お前らもか。周囲のみんなもテンション高い。

「ああ、そういえば妹も土曜届いたとかで、始終ハイテンションだったな。月曜にはある程度落ち着いていたが。というか、お前らも買ったのか？」

ハイテンションなクラスメイトたちに聞いた。

「俺らはβテスターだぜ。土曜日に届いてるよ。ちなみに、お前の妹たちともパーティ組んだこともあるぜ。しかも、俺はトッププレイヤーで攻略組だ。知らなかったのか？」

攻略ってことはＲＰＧ形式のゲームなのかな。

「知らんよ。ってまさか、去年の中盤ごろ冬休み頃まで遅刻が多かったのは……」

「もちっ！」

親指を立ててそう宣った。周りの奴らも、一緒に親指を立てていたり、逆に目を逸らしていた。

「もちってお前は……。ってか、反応から見てβテスター多くね？」

少なくとも反応した人はクラスの半数はいかないまでも3分の1くらい。詳しく言うと１０人くらいって感じ。

「ああ、うちの会社は資金を出資している中でも筆頭にはいるからな。このくらいの融通は利くぜ。っといっても、この地域の当選確率上げてもらっただけだから、ここまでクラスにそろうのは想定外だな」

想定外以前によくそんなことできたな。ちなみにこの学校は3年間クラスがえがない。選択科目で一応分かれるが、移動教室なのでクラスは不動。

「想定外って、……そんなことしてたのか。いいのか？」

「みんなで楽しみたいじゃん」

卓巳はいい笑顔で言った。確かにそちらのほうが楽しいだろうな。気にしたら負けかなと思い、話しを変えた。

「まあ、それは置いておこう。でも、俺はソフトもハードも持って

ないからなぁ」

「なん……、だと……！」

驚愕したように卓巳（金持ち）は言った。

「なぜ持っていないと言わなかった！」

「聞かれて無いことを言えるか！第一に妹どもがやっていることも、土曜まで忘れてたんだぞ」

「そうか。結構ニュースでも特集をやっていたんだが。しかし、俺が持ってる分は、他のクラスメイトに売ったしな」

卓巳はそう悔しそうに言った。周りの確認してみたら、確かにみんなゲームの話しをしているようだった。

「まあ、いいよ。気にすんな？」

「なんで疑問？しかし、今からじゃ2次販売も予約分のみで完売してるし、3次もキャンセル待ちらしいからな」

「まあ、やりたかくなったら、4次や5次にでも望みを託すよ。それに今すぐ、ソフトとハードであわせて5万はきついしな」

そんなに人気があったことに驚きつつ、無難な答えを出した。

「そうか。……それじゃ、そういう訳で、夏休みの宿題を頼んだ！」

「おう。ってなんでだよ。出来るんだから自分でやってよ」

もう少しでスルーしてしまうところだった。そして卓巳に文句を言った。去年もこんな感じだったなと思い出しながら。

「トッププレイヤーへの道はすでに始まっているんだ！」

「βテスターだから、別にいいだろう」

「甘い、甘すぎる、甘甘だ！βテストの時と同じなわけがない。というか、すでに大幅に違うを情報が来ている。なんでもβテストのときのフィールドは、βテスト用のものらしい。正規版では、接続する国ごとに出る大陸が違い、そしてモンスターやフィールドも完全に違うらしい。だいたいβテストには、一つの町から全員で始まったしな。日本国内でも、地方ごとに複数の町から開始で、町同士を繋げないと出会うこともできない。大陸間をつなげる場合は、専用クエストをクリアする必要があるんだと。それに、外国の人とでも言語翻訳が付いているから、βテスト時代でも問題なく話せたぜ」

「そ、そうか。まあ、頑張れ」

マシンガントークに気圧されながら答えた

「という訳で、任せた」

「はぁ～。少しは自分でやろうと気合を見せろ」

ため息をついて、そう言った。

ガラガラ

「みなさん。席についてくださーい」
そのタイミングで先生が入ってきた。

◇◇◇

大掃除中

「頼むよ。夏休みの宿題をさぁ。E2が俺を待っているんだよ」
「まったく。わかったよ。手伝ってはやる」
「シャー。サンキュー」
中学時代からこんな感じだ。

◇◇◇

終業式終了後

「よし。おれは行くぜ」
そういって卓巳たちは駆け出した。
「まてい」

ビタタタンッ！
僕は卓巳と、それと一緒に駆け出した奴らを止めた。というより、一番前の卓巳に足かけしたら、みんなを巻き込んだ。

「痛ッ。何すんじゃい！」

なぜか憤慨しながら卓巳は言った。ほかのみんなは卓巳に少し憤慨中。意味分からんな。

「もう少しで終わるんだから待て」

「少しならいいじゃん。俺らβのトップ争いはすでに始まってんだ」

うんうんと頷くβテスターの中に、なぜかβテスターで無い人もいた。てか何混ざってんの？

「確か開始は２７日だろう？」

「しかし、戦いは始まっている。今日、公式サイトに正式な情報が公開されるんだ。だから見逃してくれ」

なんか目がキラキラしていた。

「そうか。だが待て。それに卓巳は今日から２６日までに宿題を粗方終わらせるんだろう？」

「うぐッ、それは」

卓巳は目を逸らした。こいつ忘れていたな。

「分かった。その代わり宿題を頼んだぞ」

「はいはい。それに5日間もあったら、宿題はほとんど終わるだろ」

手をひらひらさせながら言った。

「よっしゃ。みんな！言質取ったぜ」

他の奴らも写す気のようだ。まあ、いいが、危なくない？

ガラガラ

そんなことを思っていると、先生が入ってきた。

「席についてぇ～」

みんなが席についたのを確認して、

「みんな居ますね。ではここにプリントと通知表を置いておきますので、各自とってください。みなさん、夏休み気をつけてくださいね。ではこれで終わりです」

よし。とばかりに先生は頷き、教室から出て行こうとする。

……ん？

「「「

「とめないでください。トップへの戦いは既に始まっているんです！」

卓巳たちと同じようなことを言って駆け出した。みんな完全にとまっていた。

「さっきはごめん。これないわ。とめてくれて助かった」

「気にすんな。わかってくれればそれでいいよ」

自身の行動を客観的にみた卓巳が、さっきの事を謝ってきた。

その後、先生は半泣きで戻ってきて、無事に夏休み前のＨＲは終了した。

余談であるが、後日聞いた話によると、先生はその後、校長、教頭、学年主任に酷く叱られて、マジ泣きしたらしい。ご愁傷様です。

◇◇◇

２６日、卓巳の家にて

「終わったー」

世界史を終わらせ、卓巳はぐったりしながら言った。

「あと現代文の読書感想文（？）と数学が残ってるけどね」

「しっかーし、明日からゲーム三昧だぜ。んじゃ、早速情報集めだ」

「現代文と数学はいいのかよ。だいいちお前はβテスターだから、ネットに乗ってるような情報は収集済みだろ」

すこし呆れながら卓巳に言った。実際操作性はそんなに変更はないだろう。

「甘いな。新要素はたっぷりあるようだし、テスターという有利はほとんどない。第一、舞台が違うらしい。お金とと成長させた精霊1体は引き継げるらしいが。そして、現代文は意図が難しすぎるて意味不明だ」

「現代文に関しては納得できるな。それで精霊って？」

「プレイヤーは始めに精霊と契約を交わすんだ。始めの段階で選択できるのは属性のみで、容姿や階位はランダム。他にも契約はできるから、最初のものを育て続ける人もいれば、複数育てたり、後から仲間になった精霊を重点的に育てる人もいたな」

「ふ～ん。そうか。いろいろあるんだな」

「まあ、そんなに多くの精霊と契約はできないけどな。レベル依存で契約可能数は増えるから、どうしても上限はあるからな。しかし、楽しみだぜー！早く明日にならないかな！！」

卓巳がいきなりテンションを爆上げした。

「そ、そうか。それじゃ、俺は帰るな。途中買い物しないといけないし」

僕は（物理的および精神的に）少し引きながら言った。

「おう、サンキュー。数学は２８日にみんなでやろうぜ」

「ん？ゲーム三昧じゃないの？」

「連続プレイ時間に限界があるんだよ。それに昨日連絡があって、頼まれてな」

「直に来ないんだな。良いのか悪いのか、微妙だな」

「ははは。まあ、腹ぁ括れや」

笑いながら卓巳はなんか違うことを言いながら、嫌に似合うウインクをしてきた。

「それはなにか違うだろ。ったく。わかったよ。じゃあ、またな」

そう言い、帰路に着いた。

◇◇◇

帰り道の商店街にて、

「カレー粉に豆腐って、何を作るつもりだ！？」

母に驚愕しながら、頼まれた買い物をした。

「こちら福引券です。外で引けますのでよろしかったらどうぞ」

そう言って定員さんは福引券を渡された。

母があまり福引とかに興味が無いので、全て貰っている。今回で前に貰った分も含めて、ちょうど2回分になった。

せっかくなので、福引を引くことにした。

「2回お願いします」

福引券を10枚渡した。

「はい。どうぞ、2回回してください」

ガラガラガラガラぽん

白い玉がでた。

「参加賞のティッシュです。どうぞ、もう一回お願いします」

ガラガラガラガラぽん

透明な玉がでた。

カランカラン

「おめでとうございます。特賞の《Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｅａｒｔｈ　Ｏｎ－ｌｉｎｅ》のソフトとハードのセットが当たりました。どうぞ、お持ち帰りください」

「えっ！？　そんな簡単に当たるものなのか」

なんとなく、作為的なものを感じたが、それでも嬉しかった。

◇◇◇

家に帰った。また親は帰ってなかった。買ったものを冷蔵庫に入れ、部屋に入った。

「まさか、当たるとは、……なんか今年分の運をすべて使った気がする」

ちなみに妹は家にはいるようだが、明日の準備をしているのか、部屋から出てこない。

「せっかく当たったんだから、やってみるか」

なんか少しワクワクしはじめた。

「しかし、卓巳や妹どもには知らせないほうがいいかな。あんなに興味なさそうにしていて、やっていると知られたら、何を言われるか分からないからな」

特に双子な妹のステレオの文句は頭に響くからな。

こうして、世界で始めてのバーチャルリアリティを使用したネットゲーム、

《Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｅａｒｔｈ　Ｏｎ－ｌｉｎｅ》

を始めることになった。

始まりのキッカケ（後書き）

ありがとうございました。

一人称変更しました。

自分作成と精霊と選択肢なし（前書き）

お願いします。

自分作成と精霊と選択肢なし

ハードの名称はバーチャルリアリティポータル、略称ＶＲＰという頭をすっぽりと被う形状で、ヘルメットみたいな形だが、開発当時のものより軽く小型で、現在最高峰の技術が使われている。

取扱説明書を読んだところ、すでにベースキャラクタークリエイトは可能らしい。まだ夕食まで時間があるので、早速開始した。

っと、その前にインストールとパーソナルデータの登録が必要らしく、結構時間が掛かるようなので、まずインストールを行って、夕食を取った。

ちなみに夕食中、妹は終始Ｅ２のことでテンションが上げ上げだった。妹が言うには幼馴染（βテスターらしい）と友達（本人曰く親友）は準備ばっちりで、始まったら合流するらしい。幼馴染と妹の友人はβテストの時に、何度かパーティを組んだ仲らしい。

夕食後、インストールが終わったようなので、パーソナルデータの登録を行う。ＶＲＰを装着し、身長、体重、性別、脳波の登録を行う。ちなみに、性別はネットを介して、国と情報のやり取りを行うため、性別詐称は不可能。そのため、１時間ほど待つ。

インストールとパーソナルデータ登録が終わったので、早速キャラクリエイトを開始。

「それじゃ、いざ、《ダイブイン》」

睡眠誘導の効果であっという間にまぶたがおちた。

◇◇◇

気が付いたら青空が広がる草原にいた。

「おおう！」

あまりにも現実と変わらない感覚に驚きの声をあげた。少しポーっとしていると、どこからか中性的な声が聞こえてきた。

〔アバターデータがありません。アバターを作成しますか？〕

「は、はい」

〔かしこまりました。アバターを作成します〕

どうやらインフォメーションのようなものらしい。

温かみのある、白い部屋に風景が変わった。

〔アバターの作成を開始します。まずは性別を確認ください〕

《男／女》

もちろん男で、

〔男で間違いありませんね？〕

「はい」

〔照合を開始します。……照合完了しました〕

その時、自分の姿が現れた。

「おー！？　自分ってこんな風に見えているのか」

〔アバターの作成が終了しましたら、完了をお願いします〕

「わかりました」

確か身元ばれ防止のために、髪と目の色を変えるといいんだっけ。顔を変えなくても、それだけで結構わからないって取説に書いてあったな。あと、顔を大きく変えると違和感がでて変になるとも書いてあったな。それじゃ、髪と目だけでいいや。髪の色を菖蒲色にして、目の色を蜜柑色に変更。ふむ、身長も動きに支障がでるらしいから、身長もこのまま変更なし。

髪と目の色を変えただけで《完了》っと。ポチッとな。

「よし。完了っと。う～ん。これは卓巳や妹にばれるかな？　でもまあ、結構印象違うし、いるとは思ってないだろうから、大丈夫かな」

〔アバターの登録を完了しました。種族、アビリティ、スキルの設定はサービス開始時から可能です。どうぞ《Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｅａｒｔｈ　Ｏｎ－ｌｉｎｅ》をお楽しみくださいませ〕

おわったかな。あとは明日だな。

「よし。《ダイブアウト》」

今出来ることが無くなったので、現実世界に戻ってきた。

「さて、出来ること無いし、風呂でも入って、明日に備えて寝ようかな」

ＶＲＰをはずしながらそう言った。明日をワクワクしながら待っている自分がいた。

◇◇◇

２７日１２時よりサービス開始。ワクワクしながらＶＲＰを装備して待っていた。

「そろそろ１２時だな。楽しみだ」

自然と笑みがこぼれていた。

3

2

1

「《ダイブイン》」

◇◇◇

〔ようこそ、精霊の加護を受けし大地へ〕

キャラクリエイトのときより、女性よりな声が聞こえた。

オープニングが流れ出した。いつでも見れるらしいが、どうせなので最後まで見た。大体3分強くらい。

〔アバターの作成は完了しています〕

〔プレイヤー名、種族、精霊属性、スキル、ステータスの設定を開始します〕

空中にキーボードが現れた。ちなみにモニターも含め、すべて透けています。

〔始めに“名前”をお教えください〕

「名前かぁ～。本名をもじって〈Ｎｉｚ〉かな」

〔〈Ｎｉｚ〉でよろしいですね〕

「はい」

〔次に“種族”を選択してください〕

そういうと、種族の一覧が出てきた。
見ると、獣人、妖精、竜人、鬼人、ランダムから選択で、さらにその分類の中にも区分があった。試しに獣人選ぶと、中に色々な種類があり、ランダムもあった。どうやら、獣人と妖精は、大枠をきめてからランダムも可能なようだ。そして、妖精以外は種族パーセンテージを選べるみたいで、たとえば猫獣人ならば猫耳尻尾付からケット・シー的な感じまで可能。

「人がないと思ったら、人は猿獣人なのか。これは言い得て妙だな」

どこか納得と感心をしたように独り言を言った。

「ここは良く分からないし、どの種族でも楽しめそうだから、ランダムでいいかな」

ポチッと押して、決定。

〔種族は〈ランダム〉でよろしいでしょうか〕

「はい」

なにが出るかなぁ～。いい種族ならいいな。

〔それでは次に“精霊属性”を選択してください〕

また空中に一覧が出てきた。
属性は地水火風光闇とランダムから選択。説明を読んだところ、地属性は阻害、水属性は回復、火属性は攻撃、風属性は補助とのこと。

光属性は防御と回復、闇属性は攻撃と阻害で光と闇は上位属性に分類されるとのこと。精霊を育てていく中の得手不得手はかわるから、一概には決められないとのこと。ランダムは文字通りランダム。

「う～ん。なんの属性がいいかな。やっぱりランダムかな」

〔データを読み取りました。精霊属性が決定されました〕

「ん？　へ！？　どういうことだ？　精霊属性が決まったって」

なんか良く分からないことになった。もしかして、自分でランダムを押したかな？

〔契約精霊の“名前”をつけてください。精霊を映します〕

そこに精霊がぼんやりと現れ、ぺこっと頭をさげた。

「なんかよくわからないが、これも縁だよね。さて。……う～ん」

精霊をジーっと見る。なんだか顔を薄く赤くして俯いた。

こっちまでなんか恥ずかしくなった。

「決めた！名前は〈スフィリア〉」

ポチッな。決定。

〔名前は〈スフィリア〉でよろしいでしょうか〕

「もちろん」

その瞬間、精霊〈スフィリア〉は嬉しそうな雰囲気を出していなくなった。先に行ってるのかな？

〔それでは次にスキルを選択してください〕

〔スキルは６個が選択可能で、残りの４個はランダムとなります〕

迷うな。てか、そもそも種族がランダムだから何が得意か分からないな。なんにでも役立ちそうなものを取っておくかな

「よし。［回避］［身体強化］［発見］［魔力操作］で、決定」

〔スキルが２個、未選択ですがよろしいでしょうか〕

「はい」

〔それでは選択可能スキルのうち２個はランダムとなります。他のスキルは［回避］［身体強化］［発見］［魔力操作］でよろしいでしょうか〕

「はい」

武器や魔法は種族特性がわからないので取得しなかった。

〔最後にステータスの決定を行います〕

〔フリーポイントＦＰにより割り振りを行ってください。また種族値は加算されていません。また、残したポイントは半分になります〕

＝＝＝

ＨＰ：２００
ＭＰ：５０→１５０
Ｓｔｒ：１０
Ｖｉｔ：１０
Ｉｎｔ：１０
Ｍｉｎ：１０
Ｄｅｘ：１０
Ａｇｉ：１０
Ｌｕｃ：１～９９（ランダムのため、振り分けできません）
＝＝＝

そして目の前が真っ白になり、始まりの町へと降り立った。

自分作成と精霊と選択肢なし（後書き）

次回はステータス確認予定。

一人称変更しました。

ありがとうございます。

始まりとステータスと精霊と……（前書き）

始まりの町の名前はしっかりあります。

始まりとステータスと精霊と……

始まりの町に降り立った。町並みはヨーロッパの首都から外れた郊外の町っぽい雰囲気。行った事が無いので、あくまで雰囲気。初日は混雑しないように、キャラクター設定時の時間経過を遅延させたり、加速したりして時間をずらしているらしい。自分は遅延か加速かは分からないが。そのせいか、最初に降り立つ噴水広場は、ほとんど混雑していなかった。

「おお！まるで違う国に、いや、どちらかというと異世界か。どちらにしても凄いな。感じる熱や空気の匂いまで、まさに本物だ！」

その時、なにか違和感があった。何だろう？　声がなんか高いな。それに、なんか周りが異様に大きいような？

「大きい？いや、僕が小さいのか？……いや……でも。うん。まあ、とりあえずステータス確認だな。ちょっと見てから移動しよ」

設定時にチュートリアルが無い代わりに、誘導マーカーがついている。誘導マーカーは一度その行動を行うと自動的に消えるので、邪魔にならない。ちなみに、メニューからヘルプ→チュートリアルで、チュートリアルを受けることも可能だそうだ。

ちなみに音声入力も可能。

＝＝＝

種族：美幼女
契約精霊：スフィリア［神精霊：無元］
Ｌｖ：１
ＨＰ：１００
ＭＰ：２５００
Ｓｔｒ：７
Ｖｉｔ：９
Ｉｎｔ：１２
Ｍｉｎ：９
Ｄｅｘ：１１
Ａｇｉ：１１
Ｌｕｃ：１００９９

ＦＰ：０
ＳＰ：１０

アビリティ
［精霊完全具現化］

セットスキル
未セット

控えスキル
［巨神剣Ｌｖ１］［双剣Ｌｖ１］［光魔法Ｌｖ１］［布防具Ｌｖ１］［回避Ｌｖ１］
［身体強化Ｌｖ１］［魔力操作Ｌｖ１］［発見Ｌｖ１］［調合Ｌｖ１］［研磨Ｌｖ１］

称号
［神精霊の愛娘］

装備
M武器：巨神剣《神代》（不顕現）
S武器1：未装備（初心者の双剣）
S武器2：未装備
頭：白いリボンの付いた麦藁帽子
胴：白いワンピース
手：未装備
腰：白いハーフパンツ
足：白い靴
アクセサリ1～10：未装備
＝＝＝

種族【美幼女】
あどけなさの中に婉然さを持つ、羞花閉月・天衣無縫な超絶可愛い至高の美幼女。
シークレットでネタなユニーク種族。ネタとして作られた種族。ネタゆえにワンオフであり、さらに男女関係なくなれる。ふざけて入れたので、当たる確率は極々０％に近い。当てた人は、ある意味で幸運であり、ある意味で不幸でもある。
種族としては、全種族中唯一種族値平均がマイナスになっている。
〈種族特性〉
布防具以外の防具を装備した場合、Ａｇｉが０になる。
１つ目のスキルが変更できなくなる代わりに、そのスキルのスキル経験値が１００倍になる。そして、１つ目のスキルを完全習得した場合、その後すべてのスキルの必要経験値が半分になる。
ＭＰ＋１０００、以降がレベルアップ毎に、ＭＰが１０００増加する。
身長は９７ｃｍ、体重１０ｋｇです。
なお、運営や開発への苦情や変更などは、一切受け付けません。
「強く生きてください」　ｂｙ運営及び開発一同

「な！？　運営も開発もロリコンばかりか！　……いや、なんか一部の暴走な気配のほうが大きいような。……しかし、あんたネタって。しかも説明に苦情や変更不可って。確かに経験値１００倍と必要経験値半分は嬉しいが、この姿は……。……よし！　プラスに考えよう。これなら妹や友人にばれない！　よし！」
無理矢理自分を納得させて次へ行く。
「他はどうなんだ？」

そういいながらアビリティ欄をタッチ

［精霊完全具現化］

精霊をＭＰ消費及び時間制限なしで具現化できる。また、精霊が具現化中に、いくら力を行使しようとＭＰ消費なし。

「アビリティは……。ずいぶん精霊よりの能力だな。でもＭＰ消費なしってことは、普通は消費するってことだから、ないよりはいいな」

とりあえず保留にして、次はスキルをみる。

［巨神剣Ｌｖ１］：ユニーク武器〈巨神剣《神代》〉を使えるようになる。美幼女専用スキル。巨大な剣を振るって戦う幼女っていいよね。

［双剣Ｌｖ１］：双剣を扱えるようになる。二刀流と違い双剣でしか効果を発揮しない。

［光魔法Ｌｖ１］：光魔法を扱える。マジック：ライトシールド、ライトヒール

［布防具Ｌｖ１］：布防具装備ボーナス。布防具の装備時に耐久力の減少を軽減する。

［回避Ｌｖ１］：　回避行動に補正。回避時に行動速度やクールタイムの減少がおこる。

［身体強化Ｌｖ１］：行動全てに補正が掛かる。

［魔力操作Ｌｖ１］：魔力の操作が容易になり、魔力反応を探れる。

［発見Ｌｖ１］：見えないものを見つけられる。

［調合Ｌｖ１］：調合を行える。薬や毒など、あらゆるものが調合できる。
［研磨Ｌｖ１］：あらゆるものを磨ける。剣は切れ味が増し、宝石はより輝く。

うん。巨神剣ってユニークだね。俺専用らしいから、とりあえず、これを一つ目にセットしておこうかな。

さて、後は装備かな。って装備が白いな。すべてＶｉｔ＋１で、Ａｇｉ＋２か。まあ妥当なのかな。

よし。次は武器。
［初心者の双剣］
初心者の使う双剣。双剣のスキルを始めに取得した場合にプレゼントされる。
効果：Ｓｔｒ＋５　スキル：なし

［巨神剣《神代》］
美幼女専用のユニークワンオフ武器。巨大な剣を持つ幼女っていいよね。
効果：Ｓｔｒ×２　スキル：〈衝撃破付加〉

巨神剣って、なんか凄いな。Ｓｔｒが＋でなく×ってなんですか。
……うん。これも気にしたら負けだな。ありがたく使わして貰おう。

それでは、スキルをセットして、ほかの装備も適用するっと。武器

は双剣のみ装備で、巨神剣はメイン武器からはずせないようなので、巨神剣は不具現化？のままっと。

＝＝＝

控えスキル
未セット
＝＝＝

「Ｌｕｃ異常の原因はこれか」

疲れたように呟いた。

「さて、称号を見たら契約精霊召喚するのが怖いんだが」

「実はずっと傍に居たり」

「な！？」

驚いて後ろを振り向いた。

「宜しく。主」

そこには現実ではありえないほどの魅力を持った美少女がいた。

「何があろうと、一生絶対に離れないからね♪」

キラキラした綺麗な目で彼女は言った。

「あらためまして、私が主の契約精霊です。名前は、主に貰ったスフィリアです。不束者ですが、一生宜しくお願いします♪」

彼女は澄んで弾んだ声でそう言った。

「よ、宜しくお願いします」

なんかとんでもないことを言われた。

「スフィ。初対面なのに、なんでそんなに好意？をよせてくれるの

？」

称号が好意？から来ているようだったが、理由がわからないので疑問を投げかけた。

「スフィ。って私？」

「う、うん。愛称があったほうがいいかと思って。嫌だった？　嫌なら呼びk「嫌じゃないよ！　全く嫌じゃない！　むしろ嬉しいよ！　そっかぁ“愛”称かぁ。うふふふ♪」そ、そうか。ならよかった」

スフィがあまりにも喜んで笑っていたので、こちらも嬉しくなった。なんか怖い気もしたが。

「あ、そうだ。質問の答えなんだけど。ず～っと、見てたからだよ」

嬉しそうにそう言った。

「ずっと？」

「うん。あれってどこにでもあるからね」

「あれ？」

なんだろう？あれって。でも、どうしてか背筋は寒くなって、鳥肌が立ってきたぞ。

「そう。名前はカメラだよ。今はどこも繋がってるし、どこにでもあるよね。それで生まれてからず～っと見てたから。だからホント

の姿も知ってるし、家の場所も家族構成も学校も知ってる。もちろん身長、体重、視力に、学校の成績。それとスリーサイズも血液型も、好きなものも嫌いなものも、な～んでも知ってるよ。一応だけど、主の友達関係の顔も家も会社も把握済みだよ」

暗に、逃がさないよ。と言われている気がした。なんかもう、冷や汗と震えがとまりません。

「愛してる人を知ることは、大切だよね」

スフィは満面の笑みを浮かべてそう言った。

「そ、そうか、ま、まあ、これから宜しくな」

はい、詰んだ。

「はいっ♪」

上機嫌に恍惚とした表情でスフィは言った。

◇◇◇

いろいろあったが、気にしないことにした。誰がなんと言おうと気にしないことにした。精神衛生上それが一番いい。現実逃避とも言うが、とりあえずは何かあっても家族には迷惑が掛からないようにしよう。きっと大丈夫だ。スフィのテンションも落ち着いて来たしな。

いろいろ決心がついたので、気を取り直して他の気になっていることを聞いた。

「スフィ」

「なぁに」

「スフィの属性ってなんなの？」

「私の属性？　私は無元だよ」

えっへん、と胸を張りながら答えた。

「むげん？」

そういえば。とステータス画面を確認した。

「ホントだ。確かに無元ってある。これは属性だったのか。しかし、無元なんてあったか？　シークレットかな？」

「シークレット？　これは私だけのものだよ」

こてん、と傾げながらスフィは言った。

「スフィだけって、ユニークか！？　でもユニークなんて属性にあったか？」

……。うん。気にしたら負けだな。

「大丈夫？主の傍には私がずっといるよ。私と主は魂が繋がっているからね」

「あ、ありがとう」

ひとまず区切りがつき、気がついたら１４時になっていた。夕立の可能性あり、なんていっていたので《ダイブアウト》し、洗濯物をしまうことにした。ちなみに思考加速？により時間が2倍になっている。この世界にいたのは１２時から１４時なので、４時間ゲーム世界にいたことになる。

「んじゃ、一度、ダイブアウトするな」

「うん。ホームでいるね」

「わかった。《ダイブアウト》」

◇◇◇

現実世界に帰ってきた。

「ふぅ。なんか疲れた。しかし、ユニークを複数手に入れたが、幸か不幸か分からないな」

そんなことを呟いて、庭に洗濯物をしまいに行った。

庭にて

「ん？　そういえばホームってどこ？」

首を捻った。そして、もう一つ思い出した。

「！　もしや今もスフィに見られてる！？」

キョロキョロ周りを見渡しながら言った。目に付く範囲にカメラはなさそうだ。

「って、冷静に考えてそんなこと出来るのか？　てか、できたらどんなＡＩだよ。……もしや、ホントに魂があるのか！？　でも、魂が繋がっているとか言ってたし、なんだかその結論が一番あっている気がする」

う～ん、だとしたら本気で逃げ場が無くない？

考えても結論は出なさそうなので、洗濯物をたたんでから再度《ダイブイン》をした。

◇◇◇

《ダイブイン》したら、スフィがすぐに来た。もとい既にいた。

「おかえり」

「ただいま」

例のベンチまで行き、早速気になったことを聞いた。

「ねぇ、ホームにいると言ってたが、ホームってどこ？」

「ホームは、主のホームだよ」

「そんなのあるのか」

確か説明書にも、そんな記述は無かったが、一応お金を貯めれば買うことは出来るらしいが。ギルドを作るのに必須条件の１つらしい。

「うん。主がこの世界にいないときは、オフラインになっていることがあるから、出入りするときは一緒に行った方が確実だけど」

？　オフラインのこともある？まさか

「そ、それってパーソナルホームってこと？」

まさか、だよな！？

「そうだよ」

まさかでした。何を当たり前のことを。と言わんばかりに答えた。

「入れるのか！？　もとい居れるのか！？」

「無論だよ。そのためにＶＲＰ？の中身を改良改変したからね」

どうだ！　と、胸を張った。……この子、ＡＩを超越してないか？

「ここまでくると、尊敬の念すら沸いてくるな」

少し引きながら行った。

さて、気を取り直して

「ひとまずは自分の力で頑張ってみたいから、少し休んでていいよ」

「え～」

「何かあったり、聞きたいことがあったら召喚するから。　ね？　」

「ん～。分かったよ。中にいるからいつでも呼んでね」

そう言いながら、スフィは僕の中に入った。

「なかって、ホントに中か。これは召喚って言うより、呼ぶって感じだな」

中にいるから召喚ではない。複数いたら召喚魔法とか覚えるのかな？

スフィが中で眠っている気がする。何と無くであるが確信が持てる。

一応、スフィリア［神精霊：無元］の詳細を確認することにした。

【スフィリア［神精霊：無元］】

無の中の無、無の元を司りし神。創造神を創りし神。世界の生まれる前に生まれ、その力は森羅万象・摂理・因果を支配・掌握する。

「怒らせないでね。いや、フリじゃないから！　マジでヤバイから！！　頼むよ！？　本当に頼むよ！！」　ｂｙ　運営及び開発一同。

……うん。見なかったことにしよう。

ポーン

〔称号［受け流す者（ザ・スルー）］を取得しました〕

スルースキルが急激に上昇した。

始まりとステータスと精霊と……（後書き）

称号［受け流す者］
数多の事柄を、華麗にスルーした者に進呈される。

ありがとうございました。

初心者フィールドの先の先は、初心者フィールドの延長にある（前書き）

おねがいします

初心者フィールドの先の先は、初心者フィールドの延長にある

「さて、なんか時間も掛かったが、フィールドに出る準備を始めようかな」

称号のことも華麗にスルーし、歩き出した。

っと、そこでアイテムボックスを確認していないことに気がついた。

「そういえば、アイテムボックスを確認してないな。回復アイテムがあったら、すぐにいけるな」

そんなことを言いながら、メニューよりアイテムボックスを確認した。

［アイテムボックス：消費アイテムタブ1］

回復薬（初心者マーク）×5

解毒薬？

解麻痺薬？

非常食×5

アイテムが4種類入っていた。

「状態異常の回復薬もあるのか」

説明を確認した。

［回復薬（初心者マーク）］

初心者用回復薬。最大ＨＰの７０％を回復する。Ｌｖ１０まで使用可能。

［解毒薬？］
効果の弱い解毒薬。毒？の状態異常を回復する。毒？以上は１段階ランクをさげる。猛毒には効果なし。

［解麻痺薬？］
効果の弱い解麻痺薬。麻痺？の状態異常を回復する。麻痺？以上は１段階ランクをさげる。

［非常食］
非常時にどうぞ。味はあまりよくないが、飢えはしのげる。

確認をひとまず終わらせ、考える。

「これならこのままフィールドでても問題ないかな」

ここ始まりの町には４つの門が東西南北にある。サイトを見たところ、北は［朝霧の森］、東は［新緑の草原］、南は［夕霧の森］、西は［深き沼地］がある。
東の［新緑の草原］は難易度が一番低く、西の［深き沼地］は毒の状態異常攻撃持ちが多くいる。北の［朝霧の森］は朝の時間は特殊なモンスターがでるらしい。南の［夕霧の森］は夕方の時間に特殊なモンスターがでるらしい。難易度でいうと西＞南＝北＞東らしい。
βテスターが早速特攻して調べたらしい。
ちなみに、βテスターの特典はお金と精霊の引継ぎが可能らしい。
歩いて東門に入ったが、人の山で湧くたびにすぐに狩られる状態だ

った。

「ここら辺じゃ、狩れないな、かといって違う門から出るのはなぁ、初心者には厳しいな」

そのあと少し歩いたところで、だんだんプレイヤーも減ってきて、ついに人っ子一人いなくなった。

「なんか草原が終わって森に着いちゃったんだけど、まあ初心者フィールドだから大丈夫か」

森の名前は［小鬼の森］だった。

巨剣は目立つので双剣を携えて森に入っていった。
少し歩くとなんか不思議な感じがした。

「ん？なんだこれ」

ガサッ、草を掻き分ける音がした。
不思議な感じがしたほうから、定番のゴブリンがでてきて襲い掛かってきた。

［ゴブリン（剣）］
ＨＰ：３５０
ＭＰ：０

ギャギャギャギャ
変な鳴き声（ゴブリンの定番な）を出して、持っている剣を振り下ろしてきた。

「なっ！？」

ガキンッ、と音と共に咄嗟に双剣を抜いて、振り下ろしてくる剣に打ち合わせ……、られなかった。
そのまま俺は剣をふり貫いて、剣ごとゴブリンを切り飛ばした。

「え？え！？え！え～！な、なんで～！」

自身のステータスを思い出した。

「あ、そうか、確かにＳｔｒが６００もあればこうもなるか、それに、あの不思議な変な感じは敵の気配だったんだな」

とりあえず、何とかなりそうなので何かの草をとったり、発見を使ってみたりして拾ったものを片っ端からアイテムボックスに放り込んでいった。
その間に何度かゴブリンに出会ったが、全部一撃で消し飛ばした。

さらに奥に行くと、
ゴブリン４、ゴブリンナイト２、ゴブリンアーチャー２、ゴブリンマジシャン１、ゴブリンリーダー１、合計１０匹
の混成部隊に出会った。そして、出会いがしらに消し飛ばした。

「ここら辺の敵は初期だからやっぱり弱いな」

一撃で消し飛ばしているから、あまり敵の強さが分かっていない。

「もう少し奥にいってみるか」

ある程度倒したので奥に行ってみた。

少し歩いたところで広場に出た。

「なんだここは？休憩所かな、あ、セーフティエリアか」

ふぅ、と一息いれた。

「自分の体で動くって結構大変だな、体が疲れるって感覚がないのに疲れたよ、そうだ、どうせだから巨神剣を装備してみようかな」

早速、巨剣を顕現させた。何の前触れもなく、明らかに１０Ｍ以上はある綺麗で神々しい巨大な剣が出てきた。少しボーっと見惚れたあと、ふと気付く。

「よく俺これ持てるな」

身長が１Ｍ満たない幼女が、１３Ｍの巨大な剣を持っているという、異様で奇怪な光景が出来上がっていた。

その時、

ワァオーン

「ん？犬の鳴き声、いや、狼かな？」

突然遠吠えが聞こえた。タッタッタッタッ、何かがだんだん近づいてくる足音？がした。

「鳴き声に足音って、嫌な予感しかしない」

タンッ、ダンッ、
大きく踏み出す音と共に、正面に黒い巨大な狼が仲間をつれて現れた。

ポーン
［サドンアタックボス［呪狼ヴァルゼン］にエンカウントしました、セーフティエリアは戦闘が終了するまで無効化します。特殊戦闘フィールドへ移動します］

なんか理不尽な戦闘が開始した。

「セーフティエリアを突破とか。こんなボスいるの？……って、ボス！？」

［呪狼ヴァルゼン］
ＨＰ：３６０００
ＭＰ：６７００

ヴォンヴォンヴォンヴォン、と吼えて、仲間というか取り巻きが明らかに威嚇している。ちなみに今確認したら、ここは［勇気の森］でなく、［黒血狼の森］だった。境界線はどこにあった。

「逃げ切れるわけないし、やるしかないか、ス（スフィを呼んだら虐殺が始まる気がするな）よし、頑張ろう。自分でここまで来たんだからな」

よし、では、

「かかって、こいや～」

なぜか関西訛り風で叫んだ。その掛け声を合図に、取り巻きがこちらに向かってきた。ヴァルゼンは動かず。

［ブラックウルフ（黒狼）］
ＨＰ：１７８０
ＭＰ：１２０

［ダークウルフ（暗狼）］
ＨＰ：１８３０
ＭＰ：１００

［ブラッドウルフ（血狼）］
ＨＰ：２２００
ＭＰ：６２０

ちなみに、［ブラックウルフ］が１０匹、［ダークウルフ］が５匹、［ブラッドウルフ］が１匹の合計１６匹。

巨神剣をしまい、双剣を装備。さらに身体強化のアーツ《スピードブースト》を発動し飛び込んだ。

［ブラックウルフ］と［ダークウルフ］は囲むように動き、同時に飛び掛ってきた。スピードは速いが直線的のため、迎撃は難しくない。右から来た［ブラックウルフ］を右の剣で叩ききり、その勢いのまま正面の［ダークウルフ］を切り裂く。左の剣は左を切り裂いたあと後ろに回し叩ききる。その間に［ブラッドウルフ］は真上から飛び込んできたので、双剣のアーツ《クロススラッシュ》を叩き込む。一撃で沈め、さらに周りをとまることなく仕留めていく。

ワァオーン、ワァオーン

あと、２匹というところで、静観していたヴァルゼンが遠吠えをした。

「なんだ！」

タタッ、タタッ、タタッ、タンッ、と足音がして、さらに［ブラックウルフ］と［ダークウルフ］が各１２匹、［ブラッドウルフ］が３匹の合計２７匹が来た。

「呼ぶのかよ！なんか増えてるし、てかこれヴァルゼン倒さないと無限ループか！？」

ザッ、ザンッと裂いては倒し、斬っては吹き飛ばし、残りの２匹を仕留める。直後に２陣の狼どもが襲い掛かってきた。まだ止まることなく敵を切り伏せ続ける。

「一撃で倒せるといっても結構きついぞ、これ」

ちなみに倒してもステータスは不明。ちなみにステータスは鑑定などのスキルが必要。
ただし一度倒すとレベルは見えるようになる。黒狼：Ｌｖ２１、暗狼：Ｌｖ２６、血狼：Ｌｖ３２、ちなみのゴブリンはＬｖ３～６でした。この取り巻きのレベルは固定のようだ。

ワァオーン、ワァオーン
２陣の半数を仕留めたあたりで、再度ヴァルゼンが遠吠えを行った。

「ちょっと待て、残りの数じゃなくて時間なのか！」

タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タン

ッ、と足音と共にやってきた。明らかに足音が多い。
3陣は［ブラックウルフ］が32匹、［ダークウルフ］が20匹、［ブラッドウルフ］が12匹の合計64匹が来て、一気に襲い掛かってきた。

「これは無理ゲーだろ、敵の量が多過ぎる」

ここから攻撃がかすることも出てきたので、光魔法の《ライトシールド》を使用し、かわせない攻撃を防ぐ。［ブラックウルフ］の爪がかするだけでHP7割持ってかれた。直撃なら即死だろう。
回復薬（初心者マーク）をつかいHPを回復する。そして、剣を振るい続けた。2割を倒したところで、ヴァルゼンが遠吠えを行った。

タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タタッ、タンッ、とさらに足音が増えた。
4陣は［ブラックウルフ］が63匹、［ダークウルフ］が56匹、［ブラッドウルフ］が28匹の合計147匹が来て、一気に襲い掛かってきた。

「いい加減にしてくれ！　仲間か配下か分からないが、呼ぶ前に自分で掛かって来いよ」

ヴァルゼンに文句を言ってみたが、無反応。

「ここまで来て、死に戻りは悔しい気もするがきついな」

全体の1割を倒したところで、またヴァルゼンが遠吠えを行った。

タタタッ、タタタッ、タタタッ、タタタッ、タタタッ、タタタッ、

タタタッ、タタタッ、タタタッ、

気合を込めて入れた一撃は、ヴァルゼンの取り巻きを切り裂き吹き飛ばし、5割近くの狼を倒した。さらに外側にいた生き残りが、一気に襲い掛かってくるので、もう一振りして3割、さらに一振りして残り2割を一掃した。集まっていたので振り回したときの衝撃はでも結構散っていった。

ポーン、ポーン、ポーン

〔特殊スキル開放条件をクリアしました、スキル［双刃紅葉］を開放します〕

〔特殊アーツ取得放条件をクリアしました、アーツ［絶対領域（パーフェクト・サークル）］を取得します〕

〔称号取得条件をクリアしました、称号［一気倒千］を取得します〕

「なんとかなったかな、それにこの巨神剣って衝撃波が出るんだな」

ふぅ、と息をつきながら言った。その時、Ｇｏａａａａａｈとヴァルゼンが咆哮を発した。取り巻きよりも、さらに遠くにいたためか、かわしたか分からないが無傷でそこにいた。

咆哮を聞いた瞬間に俺は動いた。ＭＰも残りがあったので、巨神剣のアーツを放った。

「いい加減に終われ！《山崩》！」

１３Ｍもある巨剣をヴァルゼンの真上から叩きつけ地面ごと吹き飛ばした。

「続いて！《地割》！」

ヴァルゼンを地面ごと切り裂き、それと同時に衝撃で消し飛ばした。

ヴァルゼンは断末魔もあげることなく消えた。

ポーン

〔称号取得条件をクリアしました、称号［孤立戦陣］を取得します〕

「終わった～。しかし、確かにこれは山崩しに、地割れだわ。連続で放つ必要なかった気がする」

嬉しさ8割、呆れ2割で、崩れ落ちながら呟いた。ちなみにちょっとしたクレーターみたいなのと、谷が出来ました。

ポーン

〔サドンアタックボス［呪狼ヴァルゼン］を討伐しました。セーフティエリアを有効化します〕

【初回討伐ボーナス】

太刀［ヴァルン］

【ＭＶＰボーナス】

呪狼の魂核

【ソロ討伐ボーナス】

短剣　［カースネイル］

【通常ドロップ】

呪狼の呪魔核

呪狼の鉤爪×３

呪狼の爪×５

呪狼の牙×５

呪狼の毛皮×８

呪狼の尻尾

呪狼の肉（１１ｋｇ）

黒狼の爪×１０２５
黒狼の牙×１０３８
黒狼の毛皮×１０７６
暗狼の爪×６２８
暗狼の牙×６３６
暗狼の毛皮×６５１
血狼の爪×３７６
血狼の牙×３６３
血狼の毛皮×３８９

報酬をみて止まった。

「なんで、あ、そうか、アイテム総取りかつラックが異常だからか」

アイテム総取りといっても、ソロの場合はドロップ数が減るけどね。納得できたが、ちょっと現実逃避した。ちなみにアイテムボックスを確認したところ、１ページに９９個が２０セット入り、それが１０ページの合計１９８００個、２００種類入るようだった。確認してなかったが、容量が十分にあってよかった。（余談だが、アイテムボックスの収納量はＳｔｒ依存とのこと）

「しかし、双剣はでなかったなあ。これで作るか。確かＮＰＣよりＰＣのほうが高品質出来易いんだっけ？　これ全部売ったら値崩れしそうだからどうしよ。それに、なんか木材やら何かの草やら、他にも結構はいっているんだが、壊しても手に入れたことになるのか。……これも多いなどうしよ」

「大量に売れるところを探せば？」

「そんなところあるん……、スフィ？」

振り返った先にはスフィがいた。

「何で呼んでくれなかったのかな？呼んでくれるのを待ってたのに」

なぜか冷や汗が止まらず、体が勝手に震えだした。

「（何か言い訳を）ス、スフィに頼めばすぐに終わるのはわかっていたけれど、スフィに危険なことして欲しくないし、それにスフィにいいところを見せたかったからね」

「ふ～ん、ホントに？」

「勿論だよ、やっぱり自分の力で乗り越えなきゃならないこともあるからね」

「……わかった、かっこよかったから許す」

「そうか、ありがとう」

やっと冷や汗と震えが収まってきた。

「でも、もしも負けてたら……」

「ま、負けてたら？」

また震えが、

「ふふふ、負けてないからいいじゃない」

きれいなのに何故か怖い笑顔でスフィは言った。

「そ、そうか」

「うん」

「そ、そういえば、なんか戦闘中に音がなってたな、確認は、……町に戻ってからでいいか」

空気を変える為に、話しを変えた。この雰囲気を壊さないとヤバイ。

「町にもどるか、スフィ、行こう」

手をスフィに差し出しながら言った。

「うん♪」

立ち上がりセーフティエリアから出て、マップを見ながら町や向かった。

道中、気を良くしたスフィは、向かってくる黒狼や暗狼、血狼、ゴブリンを、片っ端から塵も残さず消し飛ばしていった。

モンスターには悪いが、機嫌が直ってよかったと思います。手を繋いだかいがあった。

初心者フィールドの先の先は、初心者フィールドの延長にある（後書き）

Ｌｖ１↓Ｌｖ２３
巨剣Ｌｖ１↓Ｌｖ４１、双剣Ｌｖ１↓Ｌｖ１８、回避Ｌｖ１↓Ｌｖ２１、身体強化Ｌｖ１↓１９、発見Ｌｖ１↓Ｌｖ８、魔力操作Ｌｖ１↓Ｌｖ２１、光魔法Ｌｖ１↓Ｌｖ１１、布防具Ｌｖ１↓Ｌｖ３

呼んだ狼は、雑魚扱いのため、経験値の取得はほとんどなし。

ありがとうございます。

高レベル帯のため、レベルが鰻登り。

ありがとうございます。

塵も積もれば山となる。　ならば、塵じゃないものが積もったら？　～初日

お願いします。

無事、町に着いた。道中のモンスターは無事でないが。

「着いたぁ。結構遠かったな」

「そうだね。私は幸せだったけど」

スフィは満面の笑顔で、そう言った。ちなみに、今も手は繋ぎっぱなしである。

実はスフィが具現化しているので、まるで姉妹が手を仲良く繋いでいる様に見える。

それをスクショで取られていることに、幸か不幸かニズは気付いていない。

「それじゃもうすぐ6時だから、一度ダイブアウトするね。そういえば、スフィはご飯とかどうなの？」

気になっていたことを、いい機会だからと訊いてみた。

「私？　私は食べなくても大丈夫だよ。食べると美味しいものは美味しいと感じるし、それに精霊は基本的には契約主か大気中からマナを摂っているけれど、高位の精霊は食事からでもマナを摂れるからね」

「そうなんだ。んじゃ、戻ってきたら一緒に食べようか。道中、非常食を食べたけれど、不味くもないが美味くもなかったからな」

確かに非常食はあったが美味くなかった。空腹が進むとステータスが減少したり、ＨＰやＭＰの自動回復が遅くなるから食べざるをえない。最終的にはＨＰが減少し、死に戻りする。
簡単に言うと、食べないと餓死する。

「うん。待ってるよ♪」

◇◇◇

そのあとダイブアウトして、読書感想文のために読書をしていた。
ちなみによんでいたのは、宮沢賢Ｚ著［注文〇多い料理店］。学校の図書館で借りた。夏休みは長期で借りることが可能なので活用した。（そういえば中学校にはなかったな。うちだけか？）

ちょうど読み終わった時、夕食ができたといわれたので下におりた。

「お腹すいた～。今日はカレー……。？」

「麻婆カレーを作ってみたの」

母はそう言った。今日のメニューは麻婆カレーでした。

「え！？　それって、って言うか、これって、あれだよね！」

「瑠璃が食べてみたいって言ってたのを、急に思い出して作ってみました。ネットは便利ね」

「……商品化もされたから、ありか。それで食べたいって言った妹は？」

「まだ降りてきてないわ。ちょっと呼んできてくれない？」

母にウインクされた。ちなみに母は童顔で高校生と言っても通じる程である。結婚後も何度か補導されたことがある。そのため、父にはロリコン疑惑があるが、そこは語ると長いのでまたの機会に（その機会はないかもしれないが）お話しする。

「了解。呼んでくるよ」

タンタンタンと階段を上がり、妹のドアをノックする。

コンコンコンコン

「おーい。ご飯だぞ」

反応がない。まるでしかばｎ……いやいや。

「（しょうがない）中に入るぞー」

ガチャリ

案の定ベッドの上でＶＲＰを着けて寝ていた。

「起きろー！おーい。……ふむ、よく考えれば、見た目は寝ているが、脳は寝ているわけではないんだよな。って、ことはある程度衝撃を与えれば気付くかな？」

よし。

「メールは届くだろうから、メール送っとくか。無理に外して戦闘中とかだったら面倒だからな。とりあえず茜だけでいいか」

さっと、茜の携帯で、ご飯だとメールを送り部屋を出て下りた。なぜ、自分の携帯を使わないかというと、取りに行くのが面倒だからです。

リビングに行き、母に

「メール送っといたから、気付いたらすぐ来ると思うよ」

「ありがとう。でもなんでメールなの？」

分からないとばかりに、聞いてきた。

「ネットゲームしてるから、無理に起こして戦闘中だった、とか文句いわれそうだからね」

「そうなんだ」

ゲームをやらないからか、よく分からない様子だった。

「まあ、何であれ伝えたから大丈夫だよ。いただきます」

僕はそういって、麻婆カレーを食べた。結構おいしかった。

食べ終わっても妹は降りてこないので、風呂に入ってから部屋に戻

り、ダイブインをした。

◇◇◇

入った瞬間に

「おかえり」

とスフィが言った。空は薄暗くなり丁度夕食の時間だった。

「ただいま。食べ物を食べに行こうか？」

「うん」

笑顔で手を繋いで来た。

町のメインストリートを歩いていった。

その後、オープンテラスでスフィに、あ～ん、をして食べさせあいをする破目になったのは、心の中にしまっておく。まあ、過ぎたことだから後悔はしていない。過ぎたからこそ後悔とも言うが。

食後、手に入れたアーツと称号、それに開放されたスキルを確認した。

アーツ　［絶対領域（パーフェクト・サークル）］

一定の領域内に入った敵を、光の如き速度で切り裂く。

効果：領域内の敵を切り裂く毎に、ＭＰを消費する。発動時間制限及び発動中攻撃回数制限なし。
消費ＭＰ３０、Ｓｔｒ×１．５

称号　［一気倒千］
単独で数多の強敵を、打ち倒したものに与えられる。
効果：ＨＰが満タンの敵へのダメージ１．５倍。毒、麻痺、睡眠を無効。

称号　［孤立戦陣］
一人で圧倒的強者と戦い、生き残ったものを称えて与えられる。
効果：ＰＴを組んでいない状態のとき、移動中や戦闘中であっても徐々にＨＰおよびＭＰが回復する。Ｖｉｔ，Ｍｉｎ＋５０

「なかなかの効果だな。取得条件はなんだろう？」

短時間で多くの敵を倒すとかかな？　ログをみたら１０００匹以上いたものなぁ。……って、そんなに倒してたんだ。よく生きてたな、俺。

「主、すご～い」

スフィが横から除いて感心していた。契約精霊って可視化していないステータス見れるんだ。と、俺は少し驚いた。

「さて、あとはスキルだな。」

スキルのページを開いた。結果から言うと、開放はされたが取得はまだできなかった。

スキル［双刃紅葉］
二つの刃が紅葉と舞い踊る。刃の通った軌跡には、敵のみ切り裂く刃が残る。
双剣Ｌｖ５０より派生可能。

「スキルへ派生までまだまだだな。しかも、派生可能にならないと、詳しい効果は見られないのか。しかしこれって、最後に巨神剣を振り回したから、取得や開放できた感じだよね」

巨神剣は凄いな。でも巨神剣は目立つから、日頃は双剣を使おうかな。

「さて、どこかにドロップアイテムを売りに行こうかね」

スフィを伴って、ＮＰＣの方々にきいてまわった。結果、無人換金所なるものがあると分かった。本来は、大量の材木の端材なんかを売るためのものらしいが、ドロップアイテムも売れるらしい。ただし、１００個以上からしか売れないとのこと。今回は問題ないな。量が多いのは５０個ずつ残しておく予定。アイテムを移した後、換金するものを確認してＯＫを押した。

内訳はこうなった、
一個当たり、黒狼の爪が１９００Ｄ、牙が２０００Ｄ、毛皮が１８００Ｄ、暗狼の爪が２２００Ｄ、牙が２３００Ｄ、毛皮が２０００Ｄ、血狼の爪が２７００Ｄ、牙が２８００Ｄ、毛皮が２６００Ｄ。
合計、１２，１３４，７００Ｄだった。

？……！？……！！！

「なっ！？　こんなにか！！」

「分からないけど、数は力って言うから、このくらいじゃない？」

あまりの金額に唖然とした。しかし、物価が分からないのと、サラのセリフが納得できたので、すぐに回復した。［受け流す者］の名はだてじゃないぜ。……さすがにその補正はないと思うが。

「そうかぁ。そんなもんか。数も多いからな。さて、とりあえず、換金もしたし区切りはいいかな。時間的には大丈夫だけど、宿題もあるから戻ろうかな」

「えっ！　もう！？」

「うん。宿題は早目にやっておかないとね」

「ん～。うん。確かにそうだね」

残念そうだったが、とたんに笑顔になって言った。なんか思いついたのかな？　でもうちの中にカメラなんてないし、……ん？　あ！？　そうか！　まさか衛星か！！　いやいや、そんなまさか。あれはそんな簡単に操作できるものじゃないぞ。だっｔ「主。人が作る壁なんて、私にとったら壁じゃないよ♪」　……俺、声に出してないよね？

「そ、そうか。そ、それじゃまたね」

「はい。主、おやすみなさい」

「おやすみ」

まだリアルタイムでは8時前だが、《ダイブアウト》することにした。

ダイブアウト後、現代文の読書感想文（執筆時の筆者の気持ちを考え、編集者が励まし苦言を呈した時の、筆者の感情と執筆箇所の変更前と変更後を書きなさい。また、編集者に何か言われても、変更しなかった箇所を書き、筆者の気持ちで理由を述べなさい。って、難しすぎない？）を少し書き、歯を磨いてから、布団に入った。

初めての体験ばかりで疲れたのか、あっという間に眠りについた。

塵も積もれば山となる。　ならば、塵じゃないものが積もったら？　～初日

現在の所持金　１２，１３５，７００Ｄ
お金の単位はＤ（ディル）。

金額が多かったのは、本来は端材を売るところに売ったので、多量に端材を売ったときの救済措置が発生して、売値に＋補正が入ったためです。また、売値は今までの平均の質より計算するため、適正の時期に売った場合は半分以下に売値は下がります。

ありがとうございます。

人の宿題を写すと、何故か勘付く先生っているよね？　～βテスターの友人達～

お願いします。

少し眩しくて目が覚めた。

「朝か……。」

時計を見たら7時３０分をさしていた。昨日は結構健康的に１０時３０分頃に布団に入ったので、９時間睡眠だな。

「今日も暑いな。さて、」

そう言って、体を伸ばした。

カチャ、スタスタ、トントントントン……トタン、スタスタ、キュッキュッ、シャー、シャカシャカシャカシャカ、シャー、パシャパシャ、フキフキ、キュッ、トタトタトタ、カチャ、

と、部屋から出て階段を下り、洗面室で顔を洗ったりしたあと、リビングに入ると、少し涼しかった。

「おはよう。って、誰も起きてないのか」

雨戸は開いているので、親は夫婦仲良く旅行に出かけたようだ。「結婚記念日を海外で過ごしたい」との母の提案で、夫婦水入らずで７日間のヨーロッパ旅行とのこと。去年、一昨年と僕と妹の受験があり、毎年の旅行を控えていたので、今回はその貯蓄があるので、贅沢に、とのこと。

妹はひそかに「ゲーム三昧の一週間だぁ～」と喜んでいた。

「もう出たのか。ん？」

机にメモが残っていた。

＜それじゃ、行ってくるね。朝ごはんは昨日の残りが冷蔵庫の中にあります。瑠璃と茜にゲームはほどほどに、って行っておいてね。

ＰＳ．子供は男の子と女の子、どっちがいいかな？　母より＞

妹よ。ばれているぞ。そして、母よ。俺にどんな回答を求めている？

「……姉に妹２人。男の方が精神的にはいいかな。って、何　真面目に考えてんだよ。僕！」

自分に自分でつっこみを入れた。今日も朝は清々しいな。暑いが。

「さて、妹はまだ寝てるのかな。まあ、寝てるよな。どうせ夜更ししてるだろうし」

１日のプレイ時間の上限が確か１２時間で、連続プレイ時間の上限は６時間。連続プレイ時間が上限に達した場合は、１０分前にお知らせがあって、従わない場合は強制ダイブアウト。その場合は１時間以上の休憩を必ずはしないといけないんだっけな。確か例外があって、特殊戦闘フィールドや特殊イベントなどの通常とは異なる場合はこの限りでないらしい。実際に３日間ダイブインしっぱなしでも、脳への負担はないけど、体に悪いとかだったよな。まあ、それだとご飯を食べれないし、トイレもいけないから、さすがに無いだろうが。それに思考加速は最大で１６８倍まで出来るとか。ネットゲームの場合は、あまり加速しすぎると、都合が悪いらしい。まあ、そうだよな。

「１日の上限までやった場合は、最低でもまとまった休憩が６時間

以上だったっけ？」

「そうだよぅ、兄ぃ」

「よく知ってるね、兄ちゃん」

「おっ。今　起きたのか。おはよう」

ちなみに、兄ぃと呼んだほうが瑠璃で、兄ちゃんと呼んだほうが茜だ。ちなみに姉の名前は林檎だ。名前の由来は、妹の場合　秋に生まれて先に生まれたほうに、秋からイメージして茜。次に生まれたのが思い浮かばなかったので、付き合い始めた頃に初めて貰った指輪の石の名前から瑠璃。姉はその前に行った旅行が青森だったからしい。（俺だけに教えてくれた。当事者には秘密らしい。悪くはないと思うのだが。そういえば、僕、自分の名前の由来を知らない。帰ってきたら聞いてみよう。覚えていたらだけど）

「おはよぅ、兄ぃ」「おはよう、兄ちゃん」

「「　気分は、こんばんはですけれど（ぉ）　」　」

声をそろえて、この妹（双子）はそう言い放った。

「こらまて。もしや寝てないのか？」

「寝たよぅ。それにまだ上限時間までやってないよぅ？」

瑠璃はそう言った。横で茜がうんうんと頷いている。

「まあいい。これ母さんからのメモだ」

そういって机のメモを妹に渡した。ふむふむと呼んで。

「麻婆カレー食べる（ぅ）」

「火を通すから待ってて。その間に顔洗ってこい。」

「「　了解です（ぅ）　」」

敬礼して洗面所に向かって行った。敬意を持っているかは別にして。

さて、麻婆カレーを温めますか。

冷蔵庫から出してコンロに置き、中火でかき混ぜながら火を入れていく。あんまり混ぜると豆腐がデロるから、焦げ付かない程度に混ぜる。

「顔　洗ってきたよぅ」

「ご飯はできましたか？」

顔を洗って戻ってきた。さっきと違い眠そうな気配は消えている。

「今、温め中。ご飯はこれぐらいでいい？」

晩御飯よりも小盛の量で聞いた。

「いいですよぉ」

「私もそれで問題ないです」

もういい具合に温まったようなので、ご飯に麻婆カレーをかけた。

「それじゃ、はいよ」

「「いただきます（ぅ）　」」

お腹が空いていたのか、出したとたん食べ始めた。

「そんなに、お腹が空いてたのか？」

「いやぁ、えとぉ、そのぉ、中で食べてたから空腹感がなかったんだけどぉ」「実際食べ始めたら、空腹感が一気にきて、ついね。それにこっちのほうが美味しいし」

ちなみに前半が瑠璃で、後半が茜だ。

「なるほど。味はこっちのほうが美味しいのか？」

「そうだね。料理スキルの開放条件もわかってないし。それでもデザートなんかはＮＰＣショップでも十分美味しいからね」「取ろぅとしてる人もいるけど、なかなか見つからないんだよぉ」

残念そうにそんなことを言っていた。

「ふ～ん。料理スキルとか初期スキルのような感じもするけどな」

「そこらへんは少し特殊でね。趣味に近いスキルは初期スキルにないんだよ。他の特殊スキルもそうだけど」「だからぁ、スキルの開放方法特設掲示板っていぅのもあるんだよぉ」

妹は得意気に言った。妹は戦闘職でなく、趣味とかに興味があるの

かな？　がちがちの戦闘職で、瑠璃が魔法で、茜が物理っぽい気がするが。

「へ～、詳しいな。二人はそういうのに興味があるのか？」

「う～ん。あまりないかなぁ。私は基本戦闘職で魔法使い、」「あたしが剣士だよ。ちなみに瑠璃が魔法で広域殲滅をやって、あたしが特攻で切り込んで撹乱、って感じかな」

予想通りだった。ぶれないな。

「そうなのか。確かに、ぽいな」

「ぽい。ってなによ」「そうだ、そうだぁ」

ふくれて文句を言ってきたので、笑いながら、

「ははは。いやいや、褒めてるんだよ」

「そうなのぉ。ならいいやぁ」

「瑠璃……。易すぎるわよ」

確かに瑠璃は易かった。もともと、悪い意味で言っているわけではないが。

「しかし、空腹度というか満腹度があるんだから、料理が初期にあってもいい気がするけどな」

「そうなんけどねぇ。なかなか、そうは行かないのさぁ。それに、

さっきも言ったけどぉ。ＮＰＣの料理でも、結構十分なんだよねぇ。だから、あえて趣味にしてのでは？　って、噂だよぉ」

「そうそう、それに食べ物に付加効果もないし、地味なんだよね。だから、趣味に入ってるし、その前に、他のスキルあげろってなるんだよ」

「ははは、なるほどな」

僕は苦笑しながら、時計をみた。

「んじゃ、洗濯機動かして、それが終ったら昼ご飯と夕飯の買い物してくるな。そうそう、昼から卓巳の家に行くから」

「卓巳さんの家ですかぁ？」

何回聞いても、瑠璃の卓巳さんが巳の発音が弱すぎて、沢山に聞こえるのは僕だけだろうか？

「おう。夏休みの宿題の残りを終らせようってな」

「どうせまた、写させてって言われてるんでしょ」

知った顔で茜は言った。間違ってはいないが、今回は、

「今回は、あえて終らせない状態でいくから大丈夫だろ」

そういいながら、洗面所に向かった。洗濯機を回し、その間に掃除をした。洗濯機が止まったので、洗濯物を干し終わったころには１０時になっていた。その間、妹は手伝うなんて事はしないで、自分

の部屋に入ったきり出てこなかった。たぶんダイブ中だな。

「あいつらは、ほどほどにって言われていただろうに。まあ、いい。買い物言ってくるね。晩御飯は何がいい？」

２階に向かって階段から聞いた。……返事がない。本当にダイブ中のようだ。

待っても切りがないので、メールをした後、財布を持って買い物に出た。ちなみにご飯は独断と偏見でオムハヤシにしました。ハヤシ部分は作ると面倒なので、レトルトでカバー。

特に問題なく買い物を済ませて家に帰ると、丁度妹がリビングにいた。

「ただいま。お、いたのか」

「おかえり。今出てきた。瑠璃はまだダイブ中。新しい杖を注文するから遅れるってさ」

買ったものを冷蔵庫に入れながら、話しを続行した。

「新しい杖って？」

「βテスト時に初めの方で使ってた杖の素材が、やっとこさそろったんだ。」

「そうか。よく分からないが、強いのか？」

「初期装備よりは強いし、それに少しだけだけど、ＭＰ自動回復と詠唱速度短縮が付くんだ」

「ほほう。そういうものなのか」

「そうなのよ。特に宝石を探すのに時間がかかったよ。レアドロップの中のレアだからね。その分、初回ではいい性能になるはず」

「そうか。ん？　はず？」

「うん。始めの町からβテストの時と違うから、“はず”なのよ。でも同じモンスターからドロップしたから問題ないと思う」

「そんな変わってるのか。よく分からないが、頑張ったんだな」

ふと時計をみたら１２時半を過ぎていた。

「あ、そろそろ卓巳んちに行かないとな。」

問題集と教科書を詰め込んだ鞄を、２階から持って来て肩にかける。

「それじゃ、いってきます」

「いってらっしゃーい」

僕は卓巳の家に少し早足で向かった。

◇◇◇

卓巳宅に着きました。

「おじゃまします」

卓巳の家の執事に案内されて入った。↑執事って実在するのを、卓巳にあってから初めて知りました。ちなみにメイドさんもいたりします。

「いらっしゃい。お前が最後だ」

卓巳がそういったので、部屋に入って中を見渡した。想像以上に人がいた。

って

「何人呼んでんだよ！」

「実はさ、始まりの町のそばにレイドボスが発見されてさ。今日はこの後に皆で行くつもりなんだ。たぶん弱いと思うんだけどな」

「だからこんなにいるのか。……皆は写させてとか言わないよな？」

恐る恐る聞いてみた。反応はもちろん、

「「「

葉の男性6名、女性5名の計11名。

「わかったよ。でも数学はまだ半分しかやってないからな」

「大丈夫だ。無問題（モーマンタイ）」

なんか卓巳が似非中国語？　で返答した。

「これでちょうど男女半々ね」

紅葉はいい笑顔で俺を見ながら言った。

「若干中性的とは自覚しているが、間違えられたことは……。さて、とっととやるか」

「あ、ごまかした。間違えられたことあるんだ～」

「ないよ。だた勘違いされたことがあるだけだ」

「それを間違え「もう帰るかな」ごめんごめん」

ったく。こいつらはテンションが変、ってそうか！まさかこいつら寝てないんじゃ！？

「一応お前らに聞くが、ちゃんと寝てるよな？」

一斉に目を逸らした。おい、こら、まてや。

「まったくお前らは。とりあえず、その徹夜明けのテンションを元に戻せ。だいいち連続プレイ時間が決まってんだから寝る時間はあ

ったろ？」

「みんなでチャットをやってたら盛り上がりまして」

卓巳が代表して答えた。ここにいる皆でチャットしてたのか。それも一晩中。

「これは何言っても無駄っぽいな。まずははじめるか。って、その手はなんだ」

卓巳以外が手をこちらに出していた。大体意味はわかるが、

「出頭か？」

「「「

ようやくすると、レイドボスの打ち合わせ（他のメンバーもいるらしい）、新しい町への行き方がβテストの時と基本は同じらしい（やっぱりボスがいる）、朝霧の森と夕霧の森、深き沼地には結構いい狩場があるらしいが時間帯では死ねるとのこと、とこんなかんじ。盗み聞き（勝手に聞こえてくる）しているだけなので、話しに加わってはいない。

ちなみにキャラクターネームは
美津橋卓巳＝タク、藤沢和哉＝カズ、東一＝モノ、辻堂淳樹＝ジュン、高坂雄太＝レスト、大路春＝スプリ、寒川南月＝ユエ、大宮優佳＝カナタ、香川愛奈＝アイ、川崎柚＝ユズネ、乃木坂紅葉＝クレハらしい。一部よくわからないものもある。あと、おまえら、よくその名前とれたな。ちなみにみんな名前はカタカナらしい。

「それじゃ、今日はここで解散。北門で8時に集合な。他のメンバーにもそう伝えてあるから」

皆それぞれの返事をして帰って行った。僕も一緒に玄関まで行った。

「それじゃ、僕も帰るな。頑張れよ」

「おう。任せとけ。それじゃ今日はありがとうな。助かったぜ。」

「出来るくせに頼むんだもんな、お前は」

「ははは。やっぱり面倒だからな。……今日はすまなかったな」

笑ったと思ったら、いきなり真剣な顔で謝った。

「どうした？」

「いやさ。今日呼んで宿題写させてもらったのにさ。俺らしかわからない話しをしちゃってたからさ」

「ああ、そういうことね。」

「もしよかったら、2次販売の分をどうにか手に入れようか？」

「すでに予約がいっぱいで、受け付けてないだろ？　できたとしても遠慮しておくよ。だから気にするな」

なんか嬉しくなって、笑顔でそう言った。

「でもさ　「そのおかげで集中して宿題で来たしな」　……そうか。ありがとう」

まだ渋っていたので、割り込んだ。

「どういたしまして。それじゃ帰るな。おじゃましました」

「おう。またな。」

僕は帰路についた。外はまだ少し明るくじめじめして暑かった。

◇◇◇

「ただいま」

返事がない。さてはダイブしているな。いや、出かけてる可能性も、って靴あるから出かけてないか。

「さて晩御飯の支度を始めるかな」

まずはご飯を炊く。

シャッシャッシャッシャ、シャー、シャッシャッシャッシャ、ジャー、と、お米を磨いでいるが、どのくらいすればいいんだっけ？まあ、水の白がほとんど無くなるまででいいか。よし。あとはセットすれば自動で炊ける。最近の技術でも、ここらへんの変化はないね。そのあと鞄を2階に持っていき、その後リビングでテレビを見ていた。

ご飯が炊ける頃には7時になった。妹にご飯だよ、とメールを送る。

ストトトトトトトタン、と急いだような、足音が聞こえて、妹が降りてきた。

「おかえりなさぃ。ご飯はなんですかぁ」

「おかえり。早くご飯を」

「はいはい」

オムハヤシを作りはじめた。トントントントン、ジュウジュウジュウジュウ。よし。次に卵だな。卵を溶いて生クリームをいれて、レ

ッツ半熟。乗っけて開いて、温めたハヤシをオン。はい、完成。

「はい、できたよ」

妹の前に出した。すでにスプーンを持っていた。そういえば昼はしっかり食べたのかな?まあ、聞かないでおこう。だいたい答えはわかるから。

「「いたがきます（ぅ）」」

朝のような様相で食べている。これは朝と同じパターンかな。自分の分も作って食べた。

「「ごちそうさまでした（ぁ）」」

カチャカチャ、トタン、タタタタタタタタ

食べ終わった食器をシンクにおいて、急げとばかりに部屋へ行った。

「誰か待たせているのかな?」

そういえば、卓巳が8時からレイドボスとか言ってたな。それに出るのかな。レイドボスしては初期の弱めのやつらしいからな。

僕は食器を洗い、風呂に入り、そして歯を磨いてから自分の部屋に入った。

「さて、あまりできないが少しやってから寝るかな」

ＶＲＰをかぶり、異世界へとダイブした。

人の宿題を写すと、何故か勘付く先生っているよね？　～βテスターの友人達～

集まっていた友人は、みんなβテスターでした。偶然か必然かは不明。

ありがとうございます。

ドラゴンとの出会い。　～頭上注意。もし君が主人公ならば、鉄骨が落ちてくるお願いします。

《ダイブイン》をして、まず空をみた。

「今は昼ごろかな？」

太陽の位置で大体の見当をつけた。さて、

「スフィ。いる？」

「はい。主」

元気よく現れた。どこからって？　僕の中からです。

「今日は装備品でも作りに行こう。と考えてたんだけどさ、このアイテムじゃ呪いの装備が出来そうだよね」

「確かに色はおどろおどろしいですし、名前もあれですもんね」

なるほど。と、スフィも納得したように言った。

「そうなんだよ。だからフィールドに違うものを捕りに行こうとおもうんだ」

「なるほど。では、今回はどこに？」

「今回は［夕霧の森］に行こうと思うんだ。［朝霧の森］のほうはレイドボス討伐があるみたいだからね」

卓巳の話を思い出しながら言った。

「ってことで、自分のスキルあげたいので、スフィはおとなしくしていてね」

「は～い」

スフィはそういいながら僕の体に入っていった。別に外にいても良かったんだが。

「さて、南門にいきますか」

意気揚々と歩き出した。そして門を出て森の中に入っていった。

「おお！新緑の草原の方より、草とか発見できるものが多いな」

相変わらず鑑定を持っていないので、手当たり次第にアイテムボックスに放り込んでいく。ちなみに草系は調合のスキルで確認可能であるが、まとめて調べようと思うので、今はまだ把握していない。

ガルルル

少し森に入ったら、モンスターの気配を感じ構えた。気配のある方向から狼が３匹現れた。

［グレイウルフ］
ＨＰ：１２０
ＭＰ：１０

レベルは分からないが、双剣を抜いて一撃を入れた。一撃で倒した。

「おそらくゴブリンより弱いよな。でも防御力とかが高いかもしれないから、ひとえにはいえないか」

うんうんと自己完結し、奥に進むとセーフティエリアがあった。さすがに前回のようなことはないだろう。

早速セーフティエリアに入り、スフィを呼んだ。

「主呼びましたか？」

「うん。少し試してみたいことが合ってね」

ちなみに、今セーフティエリアの中には俺たちしかいない。

「［研磨］って、スキルがあるからやってみようとおもってさ。さて、って、あ！」

「どうかしたの？」

「研磨するにも、砥石がないか。何か使えるものはないかな」

アイテムボックスを開いて中を見てみる。なんか謎の実や謎の草、謎の石が一杯入っていた。その横に道具タブがあった。

「道具？　なにか役立ちそうなものは入ってるかな？」

［アイテムボックス：道具アイテムタブ］
魔法の砥石
不思議な研磨セット

研磨用っぽい道具が入っていた。名前が？

「あるにはあったが、これは初心者用なのかな。説明見ればわかるかな」

［摩訶不思議な魔法の砥石］
どんな武器でも最高な状態に研磨できる砥石。決して消費や消耗することない。
スキル［研磨］を所持していないと使用することができない。
ユニークアイテム。

「不思議な研磨セット」
摩訶不思議な研磨セット。なぜか消耗や消費しても、時間が経てばベストコンディションになる。

ふむ。これはなかなか。って、

「ユニークアイテム！　って、どれだけ幼女に凝ってるんだよ。……まあ、貰ったからには使うけども」

ふと、研磨（スキル）の方も気になり、説明を読んだ。

スキル［研磨］
あらゆるものを磨ける。剣は切れ味が増し、宝石はより輝く。
研磨は本来、鍛冶スキルの一部として存在するが、こちらは研磨のみに特化した幼女専用スキル。研磨することにより、さまざまな特殊効果が付与される。
真剣な顔で武器と向きあう幼女っていいよね。

うん！？　……よし！　受け流す者の称号はだてじゃないぜ。

「研磨を始めるか。スフィ。手伝ってな」

双剣はまだしも巨神剣は大変だからね。サイズ的に。

「わかった。それで何をすればいいの？」

「まずは双剣から磨いてみるから少し待ってて」

「うん」

「んじゃやるぞ」

魔法の砥石を取り出して、研磨を始める。って、この砥石！？　適度な水が勝手に出て、……なんか凄いな。なしかにこれは魔法の砥石だな。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ　よし。まず一本。
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、よし、終了。

１回砥いごとに刀身が光り輝いて、数回砥いだら一際大きく光り輝

いた。

「やってみたけど、どうかな？」

「キラキラしていてきれいだよ」

武器のステータスが、［初心者の双剣：切れ味増大］ってなっていた。攻撃力はあがってないな。何が違うんだろ？

［初心者の双剣：切れ味増大］
初心者の使う双剣。双剣のスキルを始めに取得した場合にプレゼントされる。
効果：Ｓｔｒ＋５　耐久∞　スキル：なし
切れ味増大：物理防御貫通７０％アップ　１ｈｉｔごとに５％ダウン

ふむ。……これは凄いのか？　ダメージ増加でなく、物理防御貫通って。

うん。ないよりはいいか。それに、永続じゃないっぽいしな。

「とりあえずは成功かな。よし、次は巨神剣もやろう。手伝って」

「はい！」

スフィは張り切っていった。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
……、
……、
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
よし、出来た。って、時間が掛かるな。

確認してみたら、［巨神剣《神代》：破壊力増大］、どうやら補正がおきるのは、武器の種類によって異なるようだ。それに、かかる時間も違うようだ。

「わぁ～、きれ～」

スフィは感嘆としていた。さすが、だてに神剣と付いていないね。これからも、たまに磨いてあげよう。そう思いながらしまった。

「さて、もう少し奥まで行こうかな」

「なら私はまた主の中にいます」

そういって、スフィはまた中に入っていった。

「よし。行こう」

僕はまた、森の奥へ踏み出した。

「とりあえず、まっすぐ山に向かって進もう」

山に向けって進んでいく。途中、木が邪魔で山が見えなくなっても、山があるだろう方向へ歩く。ある程度進んだところで、大きな声？がした。

Ｇｙａｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈ！

「ん？なんだ？ここはセーフティエリアじゃないぞ。」

またかと焦りながらいったが、前とは状況が違うことに気付いた。

ゴンッ、ドバシャン、ザザザザザザザザ、ドゴン！

そんな鈍い音と共に地面が揺れた。それとともに気が折れるような音もした。

「あっちのほうか。気になるけど。う～ん。……よし。行ってみよう。さすがに前回みたいなことにはならないだろう」

木が邪魔で空も見えないところで、音を便りに駆け出した。走っていると光の射しているところが見えた。そして光に向かって飛びだした。そして、その光景に目を見張った。

「なっ！！」

そこにはドラゴンがドラゴンを叩き潰している光景が広がっていた。

「どういう状況だ！？」

その時、一体のドラゴンがこちらを見つめて、

「人の子か、こんなところに幼子がなんのようだ？」

と語りかけてきた。ちなみにどちらも５０Ｍ級のドラゴン。

「いえ。大きな音がしたので気になって来たのです。あっ、ちなみに僕はニズと申します」

「そうか。それで様は済んだかな？」

「はい。音の原因が分かりました。それで、なんでこんな状況になったのですか」

恐る恐る気になったことを聞いた。

「ははは、それは教えられない。聞きたくば、我に力を認めさせてみよ」

笑いながらこちらを威圧してきた。こちらはむっとして、

「言いたくないというのは分かりましたが、こちらが名乗ったのですから、そちらも名乗ってはどうですか？」

つい売り言葉に買い言葉で返してしまった。

「ははははは！　よかろうならば力を見せてみよ。幼子よ」

ポーン

〔ディザスターユニークボスに遭遇しました。特殊戦闘フィールド

へ移動します」

アナウンスが終わった瞬間、何かがドラゴンの口元に集束したかとおもったら、開幕ブレスよろしく、光線を放った。

「なっ！」

すぐに横に力いっぱい飛んだ。

ズゴシュンボシュン、シューーーーーーーーーーと、轟音が轟いた。

「ほう。力加減をしたとはいえ、避けるとは」

そのセリフを聞きながら、光線は進んだ方向をみて愕然とした。そこにはなかったはずの４車線の車道くらいの道が出来ていた。しかも、着弾表面が溶けてる。

いや、地面が溶けるって、火力がおかしいでしょ！？

「……よし、何とかしないと死ねるなこれは」

呆然としながらも双剣をしまい、メインの巨神剣を具現化した。そして、具現化と同時にドラゴンへ斬りかかった。

「どりゃ、《山崩》！」

「なんだその剣は！　くっ」

ドラゴンにかわされたが、そのままドラゴンいた場所から周囲を、ドラゴンもろとも一気に吹き飛ばした。

「外したか。次は《海裂》！」

ドラゴンに向かって衝撃刃が走った。「ぐっ」といいながら、ドラゴンは羽ばたきかわした。

「こんどは、《空破》！」

空に逃れたドラゴンを追うように、上空に放った。衝撃は右の翼に当たり、「ぐはっ」と声を放って落ちてきた。その隙に飛び上がり、

「沈め、《地割》！」

ドラゴンを真上から地面諸共叩きつけた。この一撃で周囲は荒地から更地になり、いつの間にか山際まで来ていた。しかし、

ドゴン

瓦礫をどけて、ドラゴンは起き上がった。

「ふふふ、中々の攻撃であった。しかし、この　「止め、《山脈崩》」　なっ！」

ドゴーーーーン！！！

ポーン、ポーン

〔称号取得条件をクリアしました。称号［神代之姫神］を取得しました〕

〔　［巨神剣　《神代》］の覚醒開放条件をクリアしました。［巨神剣　《神姫遣神星乃御柱》］に覚醒開放しました〕

一撃で山々を完全に崩し、見渡す限りの岩や巨石を砕き、見渡す限り生い茂っていた木々をなぎ倒し消し飛ばした。しかし、ドラゴンはボロボロズタズタだが、息はあった。

「まだが息はあるのか。しかし、見渡す限り更地にする一撃でも止めをさせないとか、このドラゴンは最初の森に出るにしては硬すぎじゃないか？」

確認してみた

［真竜］
ＨＰ：１２７８／１３８０００００
ＭＰ：６２３２９７６／６２３７０００

「んな！　ＨＰ多すぎでは？しかし、まあ、よくここまでＨＰ削れたな」

驚いていたら、ドラゴン、いや［真竜］が目を開けて話しかけてきた。

「おい、幼子よ」

「幼子ではないですけど、ニズって名前があります。それでなんですか？」

「では、ニズ。なぜ、とどめをささない？」

「なんとなくです。とどめをさして欲しいんですか？」

「いや。やはり死にたくは「なら、主に忠誠を誓えば助けてあげる」んな！？」

「おお、いきなりだな。聞いてたのか？」

今までノータッチだったスフィが、いつの間にか出てきて、どう？いい提案でしょ？とばかりに胸を張って言った。

「貴女は……。そうか、そうだな、それもいいだろう。貴女と契約をしているようだし、そして、その力。こちらから是非お願いしよう」

真竜は何かに納得してそう言った。何と無く予想は付くが、ここはスルーだな。

「なら決まりだね。ほら、主、早く早く」

スフィは急かす様に言ってきた。ちなみに急かす理由は特にないらしい。

「わかったよ。どうすればいいんだ？」

「名前をあげればいいのよ」

「名前か～。真竜の本名は、性別はどっちなの？」

名前を決める前の聞いておこうと、真竜に聞いた。

「我に名はない。我以外に真竜は存在しないから、名など必要なかった。それに性別はない。どちらでもある。ではなく、どちらでもない。というのが正しいか」

「どちらでもないか。わかった。う～ん」

名前だから良く考えないとな。どうしようかな。ビル、じゃ建物だし。Bルス、じゃ破滅の呪文だし。……ベル、ベルニールはどうだろうか？

「“ベルニール”ってどうだろう？　略称はベル」

略称がすこし女性よりになったが、どうだろ？

「うむ。“ベルニール”、ベルか。……うむ。気に入った。我のことはベルニール、ベルと呼んでくれ」

ポーン

〔竜種と契約しました。これにより、称号取得条件をクリア。称号〔竜の友〕を取得します〕

「それでは、宜しく頼むぞ、ニズ。いや、我が主殿」

「こちらこそ」

笑顔で言った。ちなみに契約した瞬間にベルの傷が完全に治り、HPも完全回復していた。

凄いな。どうゆうことだ？

ポーン
〔ディザスターユニークボス［真竜］戦が終了しました。もとの場所に戻ります〕

戻ってきたら、橙色ドラゴンが倒れていた。ちなみにベルは、ぼんやり光っているような透き通った白色をしている。

「でさ、結局こいつはどうしたの？」

今まで忘れていたが、今回の発端はこいつだったんだ。

「我は基本、放浪しているのだが、いきなり縄張りがどうだとか言って、身に覚えもないのに襲ってきたやつがいてな。こいつはそう言っていたやつの配下の竜だ。だから返り討ちにした」

「文句いってきた本人ではないんだ。それで配下ってことは眷属みたいなもの？」

「そうだな。たいした知能もない下位の竜だ」

そんなのもいるんだな。下位ってことは中位や上位もいるのか。僕は少し考え込んだ。

「主、ベル、ほっといて行こうよ」

「そうだな。こういうやつは放って置くに限るぞ、主殿」

「まあ、そうだな。それじゃいくか」

ヒューーン、ザク
Ｇｙａｏｏｏ

なんか倒してしまった。おそらく《山脈崩》で吹っ飛んだ岩だな。吹っ飛ばして形が残ってたから、僕の持ち物の扱いだったんだな。きっと。

「なんか、倒しちゃったな」「たおしちゃったわね」「あやつも運がないな」

そういいながら、みんな一様にスルーした。そして、下位のはずなのに、レッサーとか付いてなかった。……うん。そんなこともあるか。

「そういえば、ベル。いつもはどうするの？　その大きさじゃ、町に入れないし」

「我か。小さくなれるからそれで問題ないだろう。ほかの皆から見えないようにもできるぞ」

ぽむっ。っと音をたてたかのように小さくなった。

「おお。そんなこともできるのか！すごいな、それなら大丈夫だ」

そういいながら、スフィと手を（なぜか）繋ぎ、ベルを頭に乗せて町に向かって歩いていった。町までのあいだ、スフィの地水火風光闇の6属性コンビネーションとベルのレーザーで、敵をすべて蹴散らしていった。それとふたりとも完全に溜めがない。そのことを聞いたところ、本気じゃないから溜めは不要を言われた。僕の仲間は何者なのでしょう？

途中から僕の修行のためといい、サブの双剣を装備して戦闘。ついでに発見で拾い物をして、町に戻ったのは暗くなってからだった。

ちなみに双剣は、なぜか大量発生していた［フォレストホッパー］のおかげで、スキルも結構成長したと思う。他がわからないから比べられない。

「戻って来た～。もう真っ暗だな。ご飯でも食べて、今日はここまでにしよう」

「そうですね。承知しました」

「承知だ。主殿」

ふたりとも二つ返事で了承してくれた。さて、どこに行こうかな。今回は定食屋さんに行こうかな。そう思い、定食屋さんに向かった。僕がシチュー、スフィがパスタ、ベルがステーキを食べた。ベルは小さいからだでどこに入っているんだろ?と、言うくらい食べた。さすがファンタジー。

その後、時計で時間を確認したら現実時間が0時を超えていたので、いそいそとダイブアウトをした。

歯は磨いてあったので、そのまま布団に入って眠った。

ドラゴンとの出会い。　～頭上注意。もし君が主人公ならば、鉄骨が落ちてくる～

Ｌｖ２３→Ｌｖ２８
巨神剣Ｌｖ４１→ＬｖＭ（マスター）、双剣Ｌｖ１８→Ｌｖ２０、回避Ｌｖ２１
→Ｌｖ２４、身体強化Ｌｖ１９→Ｌｖ２１、発見Ｌｖ８→Ｌｖ１３、
魔力操作Ｌｖ２１→Ｌｖ２６、光魔法Ｌｖ１１→Ｌｖ１２、布防具
Ｌｖ３→Ｌｖ６、調合Ｌｖ１、研磨Ｌｖ１→Ｌｖ１９

ありがとうございます。

生産職と依頼。そして、おちゃめな契約精霊&竜の自由時間（前書き）

お願いします。

生産職と依頼。そして、おちゃめな契約精霊&竜の自由時間

次の日、顔を洗って、歯を磨いた後、洗濯機を動かしている間に、朝ごはんの準備をする。朝ごはんを食べたら、買い物は済ませてあるので、《ダイブイン》するつもりだ。

「朝はホットケーキでいいかな。簡単で美味しいし」

ホットケーキミックスをシャカシャカ混ぜている間に、

「「おはよう（ぅ）」」

妹が起きてきた。

「おう。おはよう。眠そうだな」

「昨日は少し遅くまでやってたからねぇ」「今、次の町へ向けてのボス攻略に忙しい。今日か明日にはボスを見つけて、明後日までには倒す予定だよ」

「そんなに急ぐこともないんじゃないか？　てか、話にあったレイドボスはどうなった？」

トッププレイヤーとか攻略組と呼ばれる人たちは忙しないな。と、思いながら、フライパンにバターをひく。

「ああ、ビッグマウスマウスね。あれは結構楽勝だったよ。それで急いでる理由は、急がないと、初回討伐ボーナスが取れないし、そ

れに次の町からホームを持てるようになるって発表されているんだよ」「そぅなんだよぉ！　これでギルドなんかも出来るようになるよぉ」

レイドボスよりギルドが大事か。まあ、そうか。それじゃ、僕も流すか。それに、レイドだから人数も多かっただろうしな。ちなみに、パーティが６人、ユニオンが３パーティで１８人、レイドが２ユニオンで３６人、ダブルレイドが２レイドで７２人、レギオンが３ダブルレイドで２１６人、フォースが１０００人以上。公式サイトより抜粋。

「ギルドねえ。あ、ホットケーキ食べる？　牛乳と卵入れたら嵩は増えすぎた。まえ良く作ってたからって、目分量はいかんな」

バターをひいたフライパンに生地を入れたら、ボウルに結構生地が余った。作りすぎたな。

「「うん。食べる（ぅ）」」

「かけるものは、蜂蜜とバターとメイプルのどれがいい？」

「メイプルの方がいいですぅ」
「蜂蜜がいいな」

瑠璃がメイプルで茜が蜂蜜っと。

「それで、ギルドって言うのは、作ると色々な得点が付くんだよ。たとえばギルド単位のクエストなんかは最たるものだね。ギルドクエストって言うんだけど、レアなアイテムが手に入ったり、経験値が他よりも多かったりするんだよ」

「ちなみにぃ、ホームがギルド設立の必須条件の一つになっているのさぁ」

「ほう。だから、ホームが帰るようになる次の町から、ギルドが出来るようになるのか」

納得したが、あまり自分には今は関係ないように思える。

「でもホームって高いんだよね。ホームの値段は、最低でも１，０００，０００Ｄで、最高で１，２００，０００，０００Ｄらしいよ。それに、ギルド設立の必須条件のホームは、３０，０００，０００Ｄ以上のホームらしい。一応、１人からでもギルドは作れるけど、そんな制約もあるから、ギルドは大人数になるんだよね。そっちのほうが経済的に楽だし。あと、基本的には最低金額の１，０００，０００Ｄは、店舗やパーティホームに使うものだね。とは言っても、設備の増設や家具などは、また別にお金がかかるから店舗の場合でもパーティホームでも、１，０００，０００Ｄで済むことはまずないけどね。パーティホームでも２，０００，０００Ｄで、店舗なら３，０００，０００Ｄは欲しいかな」

「ふ～ん。ホームの金額は、本当にホームのみの金額なんだ。設備も結構かかるんだな。でも１，２００，０００，０００Ｄのホームとか気になるな、どうなっているんだろう？」

最低金額の１２００倍の金額のホームだ。どんなのか気になるよね。

「それがぁ、分からないんだよねぇ。βテスト時にも、だれも購入できなかったからぁ」「それに、公式に次の町からホームが買える

って分かっているだけで、βテストと同じかは分からないからね」

「そうか。まあ、そうだよな。　はい、完成」

妹の前にフォークを添えて出す。ちなみに瑠璃にはメイプル、茜には蜂蜜をかけてある。

「「ありがとう（ぅ）。いただきます（ぅ）」」

黙って、中々の速度で食べだした。

「……瑠璃、茜、お前ら、まさか、また」

「「違うよ！　兄ちゃん（ぃ）！　偶然お腹が空いてただけだよ（ぅ）」」

長文が揃うときは、ほとんど図星なんだよな。いつもは揃わないくせに。何も言わず妹を見つめてみた。

「「ごちそうさまでした（ぁ）」」

妹は朝ごはんを食べたら、まるで逃げるようにすぐに部屋に向かった。さて、宿題か、E2か。宿題であることを祈ろう。確かまだ終わってないらしいからな。

その後、食べ終わったので、食器を洗い、洗濯物を干して　《ダイブイン》　した。

◇◇◇

ダイブインして広場の中央で町に降り立った。ちなみに妹情報だと、βテスト時は始まりの町はどこでもダイブアウトしても、時間経過でＨＰとＭＰが回復できるが、始まりの町以外では宿屋かホームでダイブアウトしないと、回復できなくなったとのこと。

「さて、今日は新しい服と、双剣と、他にサブウェポンでもそろえよう。そのためには、やっぱりプレイヤーに頼むのが一番かな？」

スフィとベルは、なんか別の場所に行っているみたい。呼べばすぐに来てくれそうだが、彼女ら（ベルは性別がないが）にも用事があるだろうから呼ばないでおく。さて、露天の方に行ってみようかな、っと。スタスタと歩いて行った。

「ん？　なんだろう？」

露天に行く前に何かのスロットを見つけた。何か書いてあった。

“〔辻スロット〕月に一回どこかの町の、どこかの場所に５分間だけ出現。１回のみプレイ可能。ハズレなし。最低でも１倍になるスロット。勝手にランダムで止まるから、君の運次第。「さあ、これに出会えたラッキーな君、レッツスロット」”

〔掛け金を設定してください〕

やって見るか。なんかレアらしいし。あえて全額ぶち込んでみた。ちなみに最低１倍、最高３０００倍だ。ジャックポットだけが破格の倍率だ。まあ、１倍でもプラマイゼロだし。

〔掛け金は“１２，１３５，７００Ｄ”でよろしいですか。よろしければレバーを引いてください〕

スロットのレバーを引いた。

チャラララララララララ

チャラン

７

チャラン

７

チャラン

７

チャチャチャ、チャチャチャ、チャーン

〔７７７が揃いました。掛け金が３０００倍、“３６，４０７，１００，０００Ｄ”をバックします〕

〔次回の出現は1月後になります。ご利用ありがとうございました〕

そう言い残し。ふっ、っと、煙のように辻スロットが消えた。

……うん。そういえば、Ｌｕｃが１０，０００オーバーでしたね

よし。露天に行こう

僕は露天に向かって、歩き出した。

◇◇◇

露天は賑わっていた。とても、賑わっていた。

「ほ～。まともに露天に来たのは初めてだな。いろいろ見てみようかな」

露天を巡って行く。ＰＣもいればＮＰＣもいる。鍛冶や木工、調薬などの生産職は初期スキルに存在するが、料理は趣味要素があるためか、よくわかっていない。空腹がある以上、料理スキルがないことはないので、おそらく行動によって開放されるタイプのスキルらしいと予想されている。

「さて、そろそろ、素材をどこかで売ろうかな」

そう思ったとき、すぐに見つかったＰＣの露天に言った。下を向いて何か作業をしていた。

「すいません。今大丈夫ですか」

「はい。なんでしょうか」

そういって女性は顔を上げた。そして、止まった。

「え！？　ああ、お買い物ですか？」

「え？　はい。そうですが」

「えらいねぇ。お母さんかお父さんの手伝いかな？」

「いえ。あの、素材を売りたいのですが、いいですか？」

「え、ええ。いいですよ」

「それじゃあ、これをお願いします」

そう言って、僕はアイテムボックス内のゴブリンと狼素材とバッタ素材をすべて出した。

「な！　この素材って！」

「あと、灰狼の素材で服を作って欲しいのですが」

なんか驚いているが、そんなにおかしいか？　とりあえず竜と呪狼は抜いてある。

「ちょっと！　これどうしたの！？　今のレベルを遥かに越える素材じゃない！　しかもこんなに大量に」

彼女は興奮して、小声で叫ぶと言う器用なことをしていた。

「え、そうなんですか？　結構厳しかったですけど、倒せましたよ」

「え？　倒したって！？　もしかして、あなたプレイヤー！？」

「そ、そうですけど」

「ごめんなさい。完全にＮＰＣだと思っていたのよ」

「そうなんですか？」

「ええ。ＰＣとＮＰＣの区別方法が、ほとんどないからね。店を持ってたりするのがＮＰＣで、武器を持っているのがＰＣって、ところかしら。あと服装の違いからわかるけど、あなたみたいに初期服だと分からないわ」

「そうなんですか。確かにそうですね。話していても違和感も何もないですからね。あ、買取はどうですか」

「ええ。……それにしても、この素材は凄いわね。いったいどうやったのか気になるけど……。まあ、いいわ。これ全部売ってくれるの？」

「ええ、いいですよ。そうだ、もう一種類、狼の素材があるんですけど、なんか使いにくいので、買ってくれます？」

「使い難いんですか？」

「はい。なんか名前が呪われそうで……」

そういいながら、僕は呪狼の素材を渡した。

「これは……」

彼女は唖然としていた。なんで唖然としているかは分からないが。

やっぱり使い難いのかな？

「やっぱり、使い難いですよね？」

「こ、」

「こ？」

「こ、この素材はどこで手に入れたの？」

「他の狼と同じ、［黒血狼の森］ってところですよ」

なんかまずったのかな。確かにいきなりで面倒だったけど、ソロじゃなければあんなに苦労しなかった。って、くらいのところだと思うんだけど。

「こんな素材は見たことないわ。βテストの時も聞いたことないよ」

「そうなんですか？　確かに面倒な敵でしたけど」

思い出して、若干げんなりした。対照的に彼女はテンションが上がっていた。

「どんな敵だったの？」

そんな質問をされたので、何があったのか話した。

「セーフティエリア関係なしに戦闘開始か。そんなのがいるなんて聞いたことも見たこともないよ。というか、よく生きて帰って来られたね」

「ええ、まったくです」

しみじみ言われたので、しみじみ返した。

「それで、買い取ってくれますか？」

「ええ、いいわよ。これはやりがいがありそうだもの。でも、装備は灰狼の素材でいいの？」

「はい。お願いします。あ、忘れてました。僕の名前はニズです。よろしくお願いします」

なんだ？　今、僕っ娘はやっぱり最高ぉ～。って、声が聞こえた気が……。いや。気にしたらダメだな。

「私も忘れていたわ。私の名前はナツキよ。宜しくね。あ、どうせだからフレンド登録しましょうか？」

そう言って、彼女、ナツキさんはフレンド申請と飛ばしてきたので、了承した。
何気に初めてのフレンドだったりする。

「は、はい。宜しくお願いします」

「ふふふ。そういえば武器は揃ってる？」

少し焦った僕をみて、少し笑って言った。

「武器ですか？　まだです。これから探そうかと思いまして」

「なら、私が紹介してあげる。と言っても、ここから四軒となりなんだけどね」

そういって、右のほうを指した。

「分かりました。それじゃ行って見ます」

スタスタ。と行こうとしたら、

「ちょっと待った！　まだ、買取金を渡してないよ」

と、慌てつつ苦笑しながら呼び止められた。

「ああ、すいません。おいくらでしょうか？」

「う～ん。どうしよう。全部買うと店舗買うために貯めているお金がなくなるし、でも欲しいし」

「お金には困ってないんで、安くてかまいませんよ」

ホントにお金には困ってないので、大丈夫です。

「それはダメよ。やっぱり、お金は適正価格で払わないと、やっぱり」

真剣で真面目な表情で言った。これは曲げそうにないな。

「でしたら、この素材で防具を作って、その防具の売った時の利益の一部を貰うというのは、どうでしょうか？　そこから、注文した灰狼の服代を除けばいいですし」

曲げそうにないので、代案と提示してみた。

「う～ん。……わかったわ。それでお願い。それで、利益の何％がいい？」

「そこは良く分からないので、ナツキさんが決めていいですよ」

「それじゃ、３０パーセ「多すぎます」そんなこ「そんなことあります。それじゃ、多くても５％でお願いします。これ以上は受け取りません」それじゃ、少なすぎるよ」

「いいですって。お金には本当に困ってないんですよ」

所持金が１００億Ｄを軽くオーバーしていますからね。

「そう？　それじゃ、５％ね。武器のほうの代金もこっちから出してあげるね」

「え？　いや、う～ん。わかりました。お願いします。それと、いい防具お願いします」

ここで断ったら、無限ループに入りそうな気がしたので。

「まかせなさい。ちなみに、何を強化する」

防具の強化項目を聞いてきた。確か腕のある人は、素材特性以外にも追加できるんだっけ？　って、聞くって事は凄腕なのか。さっきチラッとβテスターのようなことも言ってたし。

「それでは、Ａｇ１でお願いします」

「了解。Ａｇ１にしとくね。いいの作るよ～」

「あははは、お願いします。それじゃ武器屋に行きますね」

「まかせなさい！」

「はい」

と言って四軒となりの武器屋に行った。そういえば、ナツキさんの口調がどんどん砕けていってたな。そんなこと思っているうちに、もう着いた。

「すいません。こちら武器「おお、来たか。まあ、四軒となりだからな」間違いないようですね」

「いらっしゃい。武器が欲しいんだって、なかなか面白い素材を持ってるらしいね。そして、ホントにプレイヤー？　持って帰りたいくらい幼可愛いね」

「はい。この素材で双剣を作って欲しいんですけど。あと、れっきとしたプレイヤーです」

そう言って、橙竜の角と牙と爪、それと橙竜玉を渡した。

「そうか。ははは。それにしても双剣って、また珍し、い……。これって、ドラゴンの素材だよな？」

笑ったあと、ナツキさんと同じように、唖然としながら言った。

「はい。偶然倒しまして、手に入れたんですよ」

「偶然で倒せるのもなのか？　だってドラゴンだぞ？」

そういわれても、これはホントに倒す気がなく倒したからなぁ。

「まぁ、簡単に言うと、ドラゴンが寝ているところに、上から尖った巨石が降ってきて刺さったといった感じですね」

「よくそれで大丈夫だったな」

「僕が落とした物だったんで、僕が倒したことになったんだと思います」

まあ、あの状況は、そうとしか考えられないよな。

「それは運がいいな。しかし、この辺にドラゴンなんているんだな。出会ったら壊滅しそうだ」

「なんか本来は山脈の中の方を住処にしているそうです」

そういいながら、［夕霧の森］の方の先にある山脈の方向を指した。

そうしたら、彼女は。そうなのか。と言い考え込んでしまった。

「あ、名乗り忘れてました。僕の名前はニズです。宜しくお願いします」

「ん？　ああ、すまん。私はトーカだ。よろしくな」

思考回廊（トリップ）から彼女もといトーカさんが帰ってきた。

「それで、武器はどうでしょうか？」

「まかせておけ。しかし、ドラゴンの素材なんて、こんなに早く触れるとは思わなかったぞ。ただし、加工できなかったら、ごめんな。多分、β時の下級蛇竜（レッサースネークドラゴン）と同じだと思うんだが」

嬉しそうにも、苦笑しながらトーカさんは言った。

「かまいません。宜しくお願いします」

「おう。最高のものを作るってみせる！」

にかっ、と笑って、まかせろ！　といった。

「どのくらい掛かりますか？」

「う～ん、1日くれ。代金についてはナツキから連絡を貰っている。ナツキに貰っておくから気にするな」

「はい。わかりました。それではまた来ますね」

さて、どこに行こうかな。と、歩き出そうとしたときに、

「ニズ。忘れてた。ほれ」

トーカさんから、フレンド申請が飛んできた。僕は承認した。

「完成したら、メッセージ送るからな」

「わかりました。ありがとうございます」

そういうと、トーカさんは手をひらひら振った。

さて、武器と防具の注文もしたし、今日はどうしようかな。

ポーン

〔契約竜［真竜ベルニール］がフィールドボス“森狼王フォリルシル”を討伐しました〕

ベル。いったい今何をしているの？

ポーン

〔契約精霊［神精霊スフィリア］がフィールドボス“海王龍レヴィアトリス”を討伐しました〕

スフィ。お前もか。

二人して、いったい何をしてるんだ。……でも、ユニークボスじゃなくてよかった。

◇◇◇

その後、少したって“新緑の草原”の少し外れにて、

「ただいま」「今、戻ったぞ。主殿」

「おかえり。で、なんか、よく分からないアナウンスがあったんだが」

「途中で邪魔されたから倒した」「散歩中にいきなり掛かってきたのでな。打ち倒したまでだ」

二人とも、それがどうかしたの？　とばかりに言った。

「そうか。まあ、そういうこともあるか」

まあ、僕に迷惑が掛かっているわけでなし。別にいいか。と考えなおした。

「私たちが倒した敵のアイテムも、主のアイテムボックスに入っているはずだよ」

スフィがそんなことを言うので、確認してみた。……確認したところ、それぞれのタブが存在した。どうやら、遠くにいるときなんかは、別タブにアイテムが入るようだ。

ちなみに、内容はこんな感じ。

アイテムボックス：スフィリア
長剣　［レヴィアス］
海王龍の藍龍玉
海王龍のひげ×２
海王龍の角×２
海王龍の爪×６

海王龍の牙×５
海王龍の鱗×９
海王龍の肉（２０ｋｇ）
海王龍の逆鱗

アイテムボックス：ベルニール
曲剣　［フォルシル］
森狼王の碧魔核
森狼王の鉤爪×２
森狼王の爪×６
森狼王の牙×５
森狼王の毛皮×８
森狼王の肉球×２
森狼王の尻尾
森狼王の肉（１２ｋｇ）

ふむ、ボスのみってことは、近くにいないと、通常のモンスターのドロップは入らないってことか。それはいいが、両方とも“王”って付いているんだが、これは……。

うん。とりあえず、これは褒めないとね。

「さすがだね。ありがとう。凄いよ」

「そう？　えへへ♪」「そうか。ふむ。これくらいどうってことはない。ふふふ」

二人とも、上機嫌で笑っていた。すると、スフィがふと、気付いた

ように。

「そういえば、装備は頼めたの？」

「うん。ばっちりだよ。まだ時間がかかるから、今日はどこか場所を借りて調合でもしているつもりだよ」

「そうなんだ。それじゃ、私たちはもう少し出かけてくるね」「行ってくるぞ。主殿」

「うん。いってらっしゃい。気をつけてね」

「はい」「うむ」

スフィとベルはそういって飛んで行った。

……どこ行ったか気になるけど、まあ、呼べば来るらしいからいいか。

「さて、調合って道具や設備が必要だよな？　研磨セットはあったけど、調合セットは入ってなかったしなぁ。どこに行けばいいんだろう？　道具屋さんで道具を買えばいいのかな？」

スタスタと歩いて道具屋に向かった。

カランコロン、カランコロン

「いらっしゃい」

ＮＰＣのショップへ入った。基本的な道具はＮＰＣショップが基本だよね。

「こんにちは。すいませんが、調合するための道具って売ってますか？」

「調合？　調合の何をする道具ですかい？」

調合と言ったら、細かい内容を聞いてきた。

ん？

「調合っていろいろあるんですか？」

「ああ。調合は調薬、調金、調理の総称したものを言うんだ」

「どう違うんですか？」

なんか、結構あるようです。説明をお願いした。

「調薬は文字通り薬を作る技術だ。回復薬や解毒薬、凄いものになると蘇生薬なんかも作れるらしいな。それで、調金は異なる金属や素材を併せて新しい金属を作る技術だ。これは鍛冶師が使い技能でもあるな。最後に調理は食材を扱いって様々なものをつくる技術だな。料理と違って結果でなく、作ったものでなく作る過程で、出来たものの効力が変わるのも特徴だな。他にも調木って言うのがあるらしいんだが、これはよく分かってないんだ。調金は金属を扱うが、金属でなく木材を扱うのが、おそらく調木だと思う」

なかなか奥が深いようです。そして、疑問を聞いてみた。

「調木はなんでよく解ってないんですか？」

「調木は、エルフの上位種族のハイ・エルフの技術なんだ。だから、名前以外の詳細が外に流れてこないんだよ。どうやら秘匿しているようでな」

「そうなんですか。それじゃ、知りようもないですね」

なるほど。納得。しかし、ハイ・エルフなんているんだな。まあ、エルフがいるんだからいるか。

「それで、どうする？　調木以外なら、どの道具もあるぞ」

一通りやってみたいな。よし。

「すべてお願いします。やってみたいので」

「全種類か？　なかなか大変だぞ」

「覚悟の上です」

「ははは。わかった。全部買うなら、値引きして２５，０００Ｄでいいぜ」

笑いながら、値引きしてくれた。あと、最初のころより少し話し方が崩れてる。これがもともとの話し方かな？

「ありがとうございます。ハイどうぞ」

金額ピッタリを手渡して、調薬セット、調金セット、調理セットをもらった。ちなみにすべて中級セットでした。結構値引きしてない？

「これもおまけだ」

桃色のエプロンをもらった。

「いいんですか？　ありがとうございます。また、何かありましたらきますね」

「おう。いつでも来な」

「はい」

気前のよいＮＰＣショップを後にした。ホントにＮＰＣ疑わしい感じだったが。……中に人が入ってないよね？

「よし。これでいろいろできるな」

どこでやろうか考え中。やっぱり綺麗な水があるようなところのほうがいいかな。ならば［朝霧の森］でも行ってみようかな。なんかいい水がありそうだし、ついでに薬草なんかも採れるし。

スタスタ

と歩いて向かった。

ポーン

〔契約精霊［神精霊スフィリア］がフィールドボス“一角龍モノレリス”を討伐しました〕

スフィ。……またか、

ポーン

〔契約竜［真竜ベルニール］がフィールドボス“甲王魚カドレルウス”を討伐しました〕

ベルも、本当に今何をしているの？

二人とも何して、って、なんで同時なの？

……ふう、しかし、今回もユニークボスじゃなくてよかった。

気にせず、［朝霧の森］に行く為、北門を目指し再度歩き出した。

生産職と依頼。そして、おちゃめな契約精霊&竜の自由時間（後書き）

所持金３６，４０７，０７５，０００Ｄ

ありがとうございます。

ネズミと聖霊と調合と……。　～一匹いたら十倍はいると思え～（前書き）

お願いします。

ネズミと聖霊と調合と……。　～一匹いたら十倍はいると思え～

北門についた。時間は間違いなく朝ではないから、［朝霧の森］に霧は出ていない。

「さて、出発しますか。スフィもいないのは初めてだな」

そういいながら、中に森の中に入っていった。

何かの魔力の気配？　いや、乱れ？　がした。ウルフやホッパーとは何か違う気がする。

ガサガサ

ん？

チュー、っと、なんかでかい灰色の鼠が出てきた。

［大食鼠（ハングリーマウス）］
ＨＰ：１４０
ＭＰ：０

ＭＰないけどグレイウルフよりＨＰが高い。
なるほど。ＭＰがないから、魔力の乱れみたいに感じたのか。

チューチューチューチューチューチューチューチューチュー、と鳴

き声が森に木霊する。
「って、多いわ！　何匹いんだよ」
ログを確認。７８匹、……そういや、鼠って子供を多く生んだよな。そんなことを思い出しながら、
「逃げても追ってきそうだから」
シャランと双剣を抜いた。
「先手必勝！」
双剣を構えて、群れに突っ込んで行った。
噛み付いてくる鼠を一撃で葬り、ひっかいてくる鼠を蹴り飛ばし（蹴りや体術のスキルなくても一撃で倒せる）、木の上から飛び掛ってくる鼠を裏拳で撃墜（拳や体術のスキルがなくても必殺です）、なんか混ざっていた、大きい黒っぽい鼠［大喰鼠］を踏み潰し（スキルなくても瞬殺です）、捌ききれない分は光魔法の《ライトシールド》で防ぎ、その後真っ二つにする。ライトシールドにはお世話になっています。するといつの間にか周りに鼠はいなくなっていた。
魔力の反応がないか確認して、特に何も……。あるな、なんだろ？
ニャー
猫が現れた。しかも三毛猫です。
［三毛猫♂（飼い主：ノーラン家）］
ＨＰ：１０

ＭＰ：１２０

……普通の猫だよね。いや、三毛猫って♂は珍しいんだっけ？
てか、ＭＰ多くない？

〔捕まえますか？　《Ｙｅｓ／Ｎｏ》〕

ふむ。これは捕まえておくかな。よくわからないが。てことで近寄って抱きかかえてから、Ｙｅｓを押した。捕まえてからじゃないと選択できなかったからね。

猫を抱えたまま行くのは、ぽん！　……って、アイテムボックスの大切なものに入ったよ！　猫！！
ありなの！？　ん？　ああ、暫定的にアイテム扱いなのね。イベントか何かなのかな？

「とりあえず、猫は保留で進むかな」

また、森の奥に向かって歩き出した。綺麗な水の湧く場所を探して。

◇◇◇

途中、謎の草や謎の実、謎の石を採ったり発見したりして進んだ。
すると、霧が出てきた。

「霧が出てきたな。朝はおろか夜にもなっていないんだが、引き返すかな、……え？」

後ろを見たら真っ白で、道もありませんでした。

「迷ったかな？　まあ、マップもあるし、……現在地不明とは何ぞや？」

迷子になりました。どうしようかな。……ん？

チャプ、チャプ

何か水っぽい音がした。

「水の音？　あっちの方か。どうせ遭難中だから行ってみるか」

水の音がする方向に歩き出した。途中、敵にまったく会わなかった。謎の草はそれなりにあったので収穫した。

進んでいくと、突然、開けた場所にでた。エリア名は［遺跡の湖］にと表示されていた。どうやら、湖岸に敵は来ないようだ。湖岸を歩いていると、湖に注ぎ込んでいる小川を見つけた。

ふむ。上流のほうなら綺麗な水が手に入るかな。そう思い小川を登ることにした。

だんだん険しくなるが1時間ほど歩いていくと、泉があった。名前は［聖鈴の泉］とマップに記載された。

「［聖鈴の泉］か。なんで鈴なんだろう？　でも、綺麗な水だな。ここから水をもらったらダメかな？」

う～ん。と悩み。

「まあ、落ち着いた場所だし、ここで調合でもしようかな」

水のことはひとまず置いといて、調合の準備を始めた。まずは調薬からかな。

「ねえ」

「ん？」

なにか鈴みたいな、綺麗な声？音？がした。

「きこえてる？」

「気のせいじゃないな。うん。聞こえてるよ。どこにいるんだ？」

僕はキョロキョロしながら周りを見回した。人影はなかった。

「こっち」

今回はしっかりと声が聞こえた。声の方向をみると、泉の上に女性が立っていた。

「え！　いつの間に！」

「こんにちは。よくここに来れたね」

女性は微笑を浮かべながら言った。そして、泉の水面を歩きこちらに近づいてきた。

「こ、こんにちは。あなたは、……もしかして精霊ですか？」

水の上を歩くのでなく滑るなんて離れ業、今の段階でできるのは精霊くらいだよね。これからできるようになるかは分からないが。

「ええ、私は泉の精霊？」

泉の精霊？　って、ことはきこりの話しの？

「私は泉に落し物なんてしていないのだが」

「違う」

違う？　う～ん。これはわからないな。

「もしかしたら、ここは入ってはいけないところだった？」

「水のこと」

「水？　泉の水のこと？」

「そう」

泉の精霊は肯定した。水を使っていいか悩んでいたからか？

「水を使ってもいい」

「え？　あ、ありがとうございます」

「ただ、条件がある」

綺麗な水だし、使えたら嬉しいがどんな条件だろ？

「条件というのは？」

「私と契約して」

……？　けいやく、って、契約だよね。泉の精霊って契約していいのか？　普通は離れられないのでは？

「契約してもいいんですか？」

「私は泉の精霊というか、泉を作って住んでいる精霊。だから、問題なし」

問題はないらしい。

「そろそろ、引越ししたいと思っていた」

引越しですか。

「あなた、気に入った」

う～ん。本人がいいというならいいのか？

「ここにたどり着けた人と、一緒に行くと決めていた」

それは、また自分勝手な気がするが、スフィも結構自由な感じだよな。精霊はみんなこうなのかな？

「だから、責任とって」

何の責任か解らないのですが。う～ん。

「わかったよ。契約するよ。どうすればいいんだ？」

「名前、欲しい」

あ！　やっぱり？　名前をつけるのが契約の証なのね。
後に聞いたが契約は終身契約らしい。まあ、精霊は寿命の概念がないらしいから、こちら側の問題だよね。

「名前かぁ。“トレファノ”略称はファノって、どう？」

「“トレファノ”、ファノ、……気に入った。よろしく。ご主人様」

「うん。よろしく」

呼び名はご主人様なんだ。まあ、主と主殿と呼ぶ人……人？、まあ、いるし、この世界では珍しくもないのかな。

ポーン

〔［水聖霊：水聖］と契約しました〕

うん。契約が済んだな。なんか見覚えのない属性だが。それに、精霊じゃなくて聖霊か。……誤字ではないんだろうな。気にしてもしょうがないな。

「それじゃ、調薬でも始めようかな。ファノ。水もらうね」

「どうぞ」

ちゃぽん

ファノが水を空中に出現させた。

「ありがとう。使わせてもらうね。これだけあれば十分だよ」

精霊が作った水だから、なんか凄そうだな。調薬セットに入っていた大きなビンに水を入れてもらった。

「うん。それじゃ、中で寝てる。欲しくなったら呼んで」

そう言ってファノは、僕の中に入っていった。スフィにも思ったが、外にいてもいいのに。って、言うか中に入るのって、デフォルトなの？

「さて、まずは調合で謎シリーズの鑑定からかな。調合で鑑定が出来るとは驚きだな」

ちなみに鑑定スキルじゃないから、敵のステータスはわからないし、自分に所有権がないものは、基本的には名前さえもわからない。モンスターは名前とＨＰとＭＰまではわかる。

ちなみに、鑑定スキルはレベルが上がれば、敵の所持スキルやアーツ、ステータスまで、まるわかりだそうです。

内約はこんな感じ、

薬草×１６５、月下草×１１６、火花草×１２、始祖の葉×６、暮桜の花びら×１４、麻痺草×５６、毒草×７５、即死草×８、睡眠草×２４、茶葉×１５４、始祖の苗木×２、凪桃の苗木×２、なにかすごい苗木、胡桃×２４、悪夢の実×９、コーヒー豆×１４３、アルプ×５６、知恵の実×３、凪桃×７、パナポ×４９、ツピナ×２３、落花の実×８７、何かの原石×９７、何かの鉱石×１３２、ただの石×１０２、ただの石に見える石×１５４、ただものじゃない大きな石×７

謎の草が苗木とかありなのか？　それに、ただものじゃない大きな石って……。なにはともあれ、原石は研磨して、鉱石は調金するかトーカさんに渡すかな。ただものじゃない大きな石も研磨すればいいのかな。ただの石は、敵に投げつけてみようかな。ただの石に見える石は、もうわからないな。

「さて、まずは回復薬からだな」

まずは、せっかくなのでもらったエプロンを着る。その後、乳鉢を取り出す。他に試験管やフラスコなどの理科の実験でお馴染みのものも取り出す。熱を加えるために発熱石（ヒートストーン）と発火石（ファイヤーストーン）を準備しておく。中に入っていた取扱説明書によると、じっくりは発熱石を使い、通常は発火石を使う。発熱石を使った場合は沸騰しないらしい。

薬草を取り出し、ビーカーに水を入れ、熱する。（試しなので、水は普通の水を使用）　ここで発熱石を２つと発火石を１つで分けて

試す。だんだん色が出てきたので、発熱石のほうは現状維持で、発火石のほうは沸騰したほうと沸騰させないほうで、また別にする。５分くらいたったら、火から放して中の薬草を取り出し冷ます。これで、一応回復薬は完成らしい。

［回復薬？］　沸騰させた物
ＨＰを８％回復する。出来のあまりよくない回復薬。とても苦い。

［回復薬？］　発熱石を使用
ＨＰを１１％回復する。出来はあまりよくない回復薬。とても苦い。

［回復薬？］　発火石で未沸騰
ＨＰを１０％回復する。出来はあまりよくない回復薬。とても苦い。

ぜんぶ苦いのね。確かに初心者マークも少し苦かったけど。それに初心者マークより回復量が低いな。なぜだ？　腕の問題か。

作った回復薬は使えそうにないので、実験のため目の細かい濾紙で濾過して、水分を取り除き乾燥させる。

今度は月下草を加えて薬草と同じように発火石２つに発熱石１つで熱した。それぞれは薬草と同じ条件で行った。だんだん色が出てきたので、発火石の沸騰と未沸騰、発熱石で、それぞれ５分くらいで、火から放して冷ます。

［マナ回復薬？］　沸騰させた物
ＭＰを３％回復する。出来のあまりよくない回復薬。とても苦い。

［マナ回復薬？］　発熱石を使用
ＭＰを５％回復する。出来はあまりよくない回復薬。とても苦い。

［マナ回復薬？］　発火石で未沸騰
ＭＰを４％回復する。出来はあまりよくない回復薬。とても苦い。

作ったマナ回復薬も使えそうにないので、実験のため目の細かい濾紙で濾過して、水分を取り除き乾燥させる。

濾過した回復薬の濾紙とマナ回復薬の濾紙、薬草と月下草を、調合のアーツ〈状態促進〉で乾燥させる。その後、乾燥した薬草と月下草を別々に乳鉢で粉砕する。

よく分からない始祖の葉は、１枚だけ実験に使う。始祖の葉を発熱石で作った回復薬とマナ回復薬の濾液にいれて、発熱石で煮る。十分に熱していると、だんだん始祖の葉は分解されて融けていったので、融けきったら火から放す。そして、味付けに凪桃を摩り下ろした果汁を入れて冷ます。冷ます過程で、魔力操作をつかって目一杯魔力を加えてみる。魔力は有り余ってるから使わないとね。それで完全に熱が取れたあと、魔力を加えるのを3分ほど続行して完成。

［蘇生薬］
死者を蘇生させる秘薬。魔力に溢れており、人以外の生命にも絶大な効果を発揮する。ただし、効力が強すぎるので、生者に使用すると命を奪う。すっきりとした桃味。

凄いものができたが、反動が怖いな。……うん。とりあえず封印かな。

ぽいっとアイテムボックスに放り込んだ。

それにしても、始祖の葉と凪桃のどちらが蘇生薬の原料なんだろう？

よし。別々に作ってみよう。　……こうなりました。

［始祖の万病薬］

あらゆる状態異常を治し、一定の時間は状態異常にならなくなる。

また、あらゆる病気を治し、同じ病気には一生ならなくなる秘薬。

魔力が溢れているのでＨＰ・ＭＰともに５０％回復。

［凪桃ジャム］

凪桃の美味しいジャム。さっぱりとした甘さと、ほんのりと残った酸味が食欲を爆発させる。一度食べたらもう虜。魔力が宿っているので、飲むとＭＰ３０％回復。

両方とも蘇生薬にはならなかった。両方併せたらなるのか。他には、ん？　あ、レシピに入ってる。勝手にレシピに入るのか。同じものを作った場合は更新も任意で可能か。回復薬とマナ回復薬も入っているが、効果が悪いから更新したいな。

よし。さて、乾燥させた薬草と月下草で回復薬をつくろうかな。結果のよかった発熱石を使って作ろう。水に入れて薬草の代わりに乾燥薬草をいれて加熱。５分煮て冷やす。熱が取れたら魔力操作で魔力を流す。鮮やかな緑になった。これで完成？

［ポーション？］
ＨＰが３７％回復する。薬草と魔力が反応を起こし活性化した回復薬。味は苦い。

おおう。いい感じだ。
それでは次は、月下草で作ろうかな。同じ操作を行って、最後に魔力を通した。色は鮮やかな青色になった。完成だよな。

［マナポーション？］
ＭＰが１９％回復する。月下草と魔力が反応を起こし活性化した回復薬。味は苦い。

できた。そして、味は相変わらず悪い。ならば次は薬草と月下草のミックスで。
おなじ工程で作って、最後に魔力を流した。色はにごった緑になった。

［ミラクルポーション（劣化品）］
ＨＰが３％、ＭＰは１％回復する。飲むとランダムで状態異常になる。味は酷く苦い。

まあ、こうなるよね。そんな簡単にいかないよね。劣化品ってことは、他に必要なものがあるんだろうな。たぶん。

次は水じゃなく、あえて、このりんごっぽいアルプの果汁で煮て作ろうかな。果汁なので、かき混ぜながら発熱石で過熱し、５分たったら熱をとり。魔力を通す。色はあまり変わらないが、おそらく完成。

［ライフアルプジャム］
アルプのジャム。甘酸っぱくて、中に残ったアルプの果肉がよい歯ごたえ。ＨＰが３２％回復。

［マナアルプジャム］
アルプのジャム。甘酸っぱくて、中に残ったアルプの果肉がよい歯ごたえ。ＭＰが２１％回復。

ふむ。こうなったか。水を入れてやり直せば、液体に出来そうだな。さらに加熱してみるかな。かき混ぜながら加熱していくと、粘度がさらに増してきた。最後に魔力を通して完成。

［ライフアルプドロップ］
アルプの果汁１００％ドロップ。薬草の効果か、何故か上手くできた。舐めている最中、ＨＰが回復し続ける。合計ＨＰ回復量は１７３％。

［マナアルプドロップ］
アルプの果汁１００％ドロップ。月下草の効果か、何故か上手くできた。舐めている最中、ＭＰが回復し続ける。合計ＭＰ回復量は１１２％。

添加物なく飴になるのか。蜂蜜１００％の飴もあるから出来なくはないか。

次は、アルプだけでなくパナポでも作ってみようかね。同じ肯定で作成。

で、完成したのが［ライフパナポジャム］［マナパナポジャム］［ライフパナポドロップ］［マナパナポドロップ］で、効果は同じでアルプと味違い。ちなみにパナポは、パイナップルのような見た目と味だった。

想像通りのできだな。まあ、製法は同じだからな。試しにライフパナポジャムとマナパナポジャムを混ぜて、加熱してみた。にごった色にはならず、パナポな色になった。

［パナポドロップ］

アルプの果汁１００％ドロップ。舐めている最中、味が続く。空腹がまぎれ、甘くて美味しい。

回復効果が消えて、普通の飴になっていた。薬草と月下草は効果は打ち消しあうのか。ならば二つが完全に混ざらなければいいのでは？　試してみよう。

ライフアルプジャムとマナパナポジャムを別々に加熱し、水分をなくしていく。そして、もうすぐ固まるところで、二つを併せて作った。混ざり合わずマーブルな感じの飴ができた。最後に魔力を通し完成。ただ、色が近いので、見分けずらい。

［ミラクルミックスドロップ］
アルプとパナポの果汁１００％ドロップ。二つの味が混じり合わず、それでいてハーモニーを奏でる良いでき。舐めている最中、ＨＰとＭＰが回復し続ける。合計ＨＰ回復量は８６％、合計、ＭＰ回復量は６２％。

出来はしたが、効果は少し弱いようだ。また、即効性が低いので、実用に耐えるかは不明。とりあえずは自分のお菓子だな。

その後も、同じものを手作りで少々作成した。

ん？

空をみたら日が結構阿多向いていたので、ふと、時計を見たら、リアル時間が2時半になっていた。

「そろそろ、お開きにして、町にもどるか。洗濯物しまって、少しご飯も食べたいからね」

どうせだからと、使いかけの素材をすべて釜に突っ込み、魔力操作で魔力を使いきるつもりで注ぎながら混ぜた。だんだん水分がなくなってきたら、さらに注ぐ魔力の量を増やして冷ました。最後に魔力を内側に収縮するようして、魔力を使い切ったら完成。

ぶち込んだ材料は薬草、月下草、始祖の葉、アルプ、凪桃、パナポの残り。

［ニズの秘薬］

ニズが作成した秘薬。莫大な魔力が宿っていて、持っているだけで永続的にＨＰとＭＰがじわじわ回復していく。使うと使用者も含めた周囲５０ｍ以内のものは全回復する。また、その後、継続的に１０分の間、ＨＰが毎分３１％回復、ＭＰが毎分１８％回復する。

なんか壊れ性能のアイテムが出来た。……うん。これも封印だな。あ、これもレシピに入ってる。

道具を片付けて、今回作ったアイテムの確認をした。
ポーション？×５、マナポーション？×５、ライフアルプジャム×２５、マナアルプジャム×１０、ライフパナポジャム×２５、マナパナポジャム×１０、ライフアルプドロップ×３０、マナアルプドロップ×２０、ライフパナドロップ×３０、マナパナポドロップ×２０、ミラクルミックスドロップ×１０

ポーション系は2割くらい失敗した。

蘇生薬と始祖の万病薬、凪桃ジャム、ニズの秘薬は、とりあえず封印。いろいろ危なくて使えないな。と、いうか、なんでこんなに高レベルっぽいアイテムが出来た？
考えても、せんないか。

さて、帰り道が分からない。

「ファノ」

体の中から出てきた。

「なに？」

「帰り道わかる？」

精霊ならわかるのでは？　と、聞いてみる。

「人が住んでいるところは、あっち」

そう言って、ファノはとある方向を指差した。

「あっちか。さて、向かいましょうかね」

ファノが指差した方向へファノとともに歩き出した。

ポーン

〔契約精霊［神精霊スフィリア］がフィールドボス“偽樹魔メアーディス”を討伐しました〕

ポーン

〔契約竜［真竜ベルニール］がフィールドボス“聖山鳥クラインフォルト”を討伐しました〕

……ユニークじゃないな。よし。

気にせずに歩き出した。

ポーン
〔契約精霊［神精霊スフィリア］がフィールドボス“偽樹王アルボルリヴァ”を討伐しました〕

歩き出した。

ネズミと聖霊と調合と……。　～一匹いたら十倍はいると思え～（後書き）

Ｌｖ２８
巨神剣（マスター）ＬｖＭ、双剣Ｌｖ２０↓Ｌｖ２２、回避Ｌｖ２４↓Ｌｖ２６、
身体強化Ｌｖ２１↓Ｌｖ２３、発見Ｌｖ１３↓Ｌｖ１７、魔力操作
Ｌｖ２６↓Ｌｖ４３、光魔法Ｌｖ１２↓Ｌｖ１４、布防具Ｌｖ６↓
Ｌｖ８、調合Ｌｖ１↓Ｌｖ２９、研磨Ｌｖ１９

ありがとうございました。

隠れ里と恐怖と晩御飯　～今晩は、ロールです。～（前書き）

お願いします。表現っていろいろ難しいですね。

隠れ里と恐怖と晩御飯　～今晩は、ロールです。～

町を目指して1時間くらい歩いている。

「こんなに遠かったか？」

なぜか一度も敵に会っていない。ずっとまわりに霧が出ていてわからないが、ファノに案内してもらっている。

「もう少しで着く」

もう少しらしいので、歩きますか。

10分くらい歩いていると、人らしき魔力を微かに感じた。

「ん？　人か？　しかし、朝じゃないのに霧が晴れないな」

5分後、町に着いた。正しくは町の正面に着いた。

「だれだ！」

なんか、門番がいた。っていうか、知らない町についた。どこだろここ？

「ファノ。ここどこ？」

「人がいるところ」

確かに人がいるところは知っているといってたな。

「なんの用だ！」

門番を無視するのもあれなので、

「申し訳ないです。この町は、なんと言うのでしょうか？　私は道に迷ってしまって、こちらに人がいるとのことで来たのですが」

「迷子か。いや、しかし、おかしい」

こちらを不審に思っているようだ。

「なぜこのような場所に、貴様のような幼子が１人で来れた。どの町からでも幼子が１人で来れるほど、この森は甘くないぞ」

なるほど、確かに１人で来たのはおかしかったか？　でもファノもいるし、って、いない！　どこ行った！？

ファノを探してキョロキョロしていると、

「貴様！　やはり、魔物の類か！」

「え？　いや、違いｍ「待ちなさい」　？」

突然、声が響いた。若い女性の声のようだ。声のした方向を向くと、２０代中盤くらいの美女が立っていた。

「ご主人様。話しの分かりそうな人、連れてきた」

「え？　あ！？　そうなの？　ありがとう」

「どういたしまして」

ファノがつれてきてくれた人のようだ。若い女性だ。偉い人なのかな？

「はじめまして。聖霊の契約者よ。私はハイ・エルフのアリアと申します。このノエアイナの長をしております」

にこ。っと、笑顔で挨拶をしてくれた。

「はじめまして。ニズと申します」

こちらも笑顔で挨拶に応じた。ハイ・エルフであることはスルーの方向で。そういや、ハイ・エルフといえば調木ができるんだっけ。しかし、秘匿されてるらしいから聞いてもしょうがないか。一応、機会があったら聞いてみよう。

「この町には、容易に入れないように結界が張ってあったのですが、貴女には意味をなさなかったようですね」

結界？　そんなものを通った記憶はないのだが。エルフの結界って事は、迷って入れないとか、間違った道を通るとどこかに転移（とば）されるものかな？

「アリア様！　このものは危険です。幼子の姿をしていますが、結

界を破ってきたのですよ。今すぐ排除した方がｙ「いいえ。その必要はありません。彼女が招いたのでしょう。その証拠に結界に欠けも綻びも感じません」どういうことですか？」

門番は警戒しているが、長は冷静だな。しかし、結界なんてものを破った記憶はないな。

「言ったでしょう？　聖霊の契約者と」

「せ、聖霊の契約者！」

門番は驚いたようにこちらを見た。そして、ファノを見て硬直していた。

「え～と。どういうことでしょうか？」

「聖霊様という存在は、神霊様の代弁者にして、聖域を司るものです。この場所も聖域のひとつなのです。そして、その聖域に聖霊様が訪れた。ということです」

ふむ。理解したくなかったな。あんなに簡単に契約してよかったのか？

「そうなのですか。聖域に聖霊がいつもいるわけではないのですか？」

「ええ。加護を受けている地というだけで、実際にその場に居続ける聖霊様は稀なのです。最後にこの聖域に聖霊様が訪れたのは、もうずいぶん昔ですから」

ハイ・エルフ基準の昔がどれくらいか気になるが、聞いてもしょうがないか。

「そうなのですか。私は町に戻ろうとしてここに来てしまったのですが。……ちなみにここから町に戻るにはどう行けばよろしいですか？」

「私が魔法でお送りしましょう。これでも、里内随一の空間魔法の使い手なのですよ」

これでも、と言われても分からないが、それは嬉しいな。

「そうなのですか！　ありがとうございます。宜しくお願い致します。それで、先ほどから門番さんが動かないのですが、大丈夫ですか？」

固まったまま、まったく反応がなくなったので心配になってきた。

「は！　申し訳ありませんアリア様。今、なぜか聖霊様にお会いした夢を見ておりました」

「それは夢じゃなくて真実よ」

「え！？　本当なのですか？」

「ええ。でも、そんなに騒ぐ必要はないですよ。さあ、ニズさん、どうぞ私の家にいらしてください」

町に入って歩いていく。正面には巨大な樹が在った。

「あの巨大な樹はなんの樹なのですか？」

ぼんやりと樹は光っていて気になったので、アリアさんに聞いた。

「あの樹は、この地が聖域である証、“聖樹ララリーフ”です」

「聖なる樹ですか。あのぼんやりと光っているのはなんですか？」

「あれは、“生命之根源（マナ）”が溢れているのです」

「マナですか。人が扱うものとは、なんと言うか感覚が違いますね」

そう。聖樹のマナと人に感じるマナでは、何かが違うのだ。

「よく分かりましたね。聖樹のものは“生命之根源（マナ）”ですが、人が持つものは“霊粒子（マナ）”または“魂粒子（マナ）”ですからね。……でも、貴女が持っているものはそれとは違いますね。なんでしょう？　私も知らないものです」

目を細めて俺を見て、首をかしげている。そうしたら、ファノが唐突に。

「ご主人様の力は、“根源之根元（マナ）”」

そう言った。なにか知っているのか？

「私たちよりも、さらに根幹の力。はじめに契約した存在の力に感化されてる」

そうファノは続けた。

ん？　はじめ？　契約？　ああ！

「そういうことか。わかったよ、ファノ。ありがとう」

「うん」

ファノは嬉しそうに頷いた。

「どういうことですか？」

アリアさんが不思議そうに聞いてきたので、そのまま答えた。

「私がはじめに契約した存在が、とても強い力を持つ存在なんですよ。だから、おそらくはその影響かと」

「強い力を持つ存在ですか。　……もしや、大精霊様？　それとも……」

アリアさんが何か考え込んで呟いたが、後半は聞こえなかった。

「着きました。ここが私の家です」

結構普通の家だった。小さいか大きいかでなく、周りと同じサイズの家だった。長でもあまり他と変わらないんですね。

「おじゃまします」「します」

「いらっしゃいませ」

中に入ったら、外観と合わない広さだった。

「ええ～！　外観と内観のサイズが合わない！？」

「ふふふ、やはり外の方は驚かれるのですね。私は転移魔法が得意といいましたが、正しくは空間魔法が得意なのですよ」

笑いながら、そうネタ晴らしをした。

「あ、なるほど。魔法で部屋の空間を広くしてるんですね。確かにそれなら納得できます」

「ハイ・エルフは多少優劣ありますが、この程度の空間魔法ならば皆使えますから」

そうなんだ。ハイ・エルフ凄いな。ん？　皆？

「一つお聞きしたいのですが、この町はどのような方々が住む町で？」

「え？　この町ですか？　この町はハイ・エルフが住まう隠れ里ですよ」

なにをいまさら。的な顔でアリアさんは言った。

「あ、そうなんですか。僕はよく入れましたね」

いや、ホントに。ハイ・エルフの結界を何事もなく通過できた僕が怖い。それに、ハイ・エルフって、なんかこう排他的なイメージな

んだけど。こう、他の種族を見下してる的な。

「ええ。確かに聖霊様がご一緒とはいえ、凄いと思います」

やっぱりか。結界に隙間でもあったんだろうか？　それともファノの力かな。……あ、洗濯物。ここで、ダイブアウトはできるのかな？　セーフティエリアだし、マップ表示にも［聖域の町ノエアイナ］ってなってるからいけるだろう。

「結界に大きめの綻びがあったから、そこから入って来た」

ファノが唐突にそう言った。

「綻びですか！　どこでしょうか！？　まったく気付きませんでした。案内して頂いても宜しいでしょうか？」

アリアさんは突然の話に驚いて、ファノに詰め寄っていた。もしかして、結構一大事？

「うん。いいよ。ご主人様。ちょっと行ってくる」

「あ、うん。いってらっしゃい」

「申し訳ありません。聖霊様にこんなことを頼むなんて」

「気にしないで」

アリアさんは恐縮していた。もしかしてファノって凄い人？　いや聖霊か。

「ニズさんは家で休憩していてください。結界は特別な技術も使われているので、そう簡単に見せるわけには行かないのです」

「わかりました」

そういうと、ファノとそそくさといってしまった。

特別な技術か。ただの結界魔法じゃないんだな。

「さて、ちょうど良いから、《ダイブアウト》」

現実世界に一度帰還した。

◇◇◇

目が覚めて時計をみる。

「3時半か。とっとと洗濯物をしまおう」

俺はＶＲＰを外し、洗濯物をしまいに行った。

洗濯物をたたんでいると、お腹が空いてきた。

「お腹すいたな。何かつまむか」

たたみ終わったので、林檎を1つ食べてから、《ダイブイン》した。

◇◇◇

戻ってきました。ここに

「おかえり」

「ん？　おお。ただいま。どう？　作業は終わった？」

後ろから声をかけられて振り向くと、ファノが佇んでいた。

「うん。終わった」

「そうか。アリアさんは？」

アリアさんが一緒ではないようなので、疑問に思い聞いた。

「結界の修復と、他の場所の検査に時間がかかるって」

「そうか。なら、もう失礼しようか？　ここにいてもしょうがないし。置手紙でもしていこう」

アリアさん宛に、感謝の置手紙を書いて置いた。

「それじゃ、行こうか」

「うん。行こう。ここ以外の町はあっち」

そういいながら、ファノは指差した。

「今度は大丈夫だろ。よし。出発」

そう言って町の外に向かって歩き出した。

ポーン
〔契約精霊［神精霊スフィリア］がエキストラボス“神獣王スレグイル”を討伐しました〕

……そろそろ来ると思っていたよ。エキストラ？　まあ、ユニークじゃないな。よし。

気にせずに歩き出した。

ポーン
〔契約竜［真竜ベルニール］がフィールドボス“紅炎猪ヴォノルス”を討伐しました〕

だから、なんで同時なんだ？　まあ、そんなこともあるか。

「どうかしましたか？　ご主人様」

「大丈夫。まあ、なるようになるかな。さあ、行こうか」

そう言って歩き出した。内容確認はすべて後回しの方向で行きましょう。

◇◇◇

何事もなく始まりの町についた。本当に何事もなかった。［ノエアイナ］の結界は出るときには反応しないのか、何事もなく通過したし、敵は確かに襲ってきたが、一撃で終わるので問題なかった。問題があるとすれば、

「主。その隣に寄り添ってる精霊はなにかな～？」

この状況だろうね。

「ふふふ。ねぇ。主？　きいてますかぁ？　返答内容によっては私と一つになってもらいますからね。そうすれば、私だけのものに出来ますから。ふふふふ♪」

笑顔が怖い。そして、言葉の意味はよく解らないが、凄く怖い。ベルもファノも怯えて真っ青になってるし、僕もなぜか震えが止まらない。笑顔って本当に怖いものですね。ヤバイ。混乱を超えて錯乱しそうだ。

「ス、スフィ？　どうかしたのか？　ああ、そうだ。まだ紹介してなかったな。彼女はトレファノっていうんだ。新しい仲間だよ。ほら、ファノ。挨拶して」

必死に何とかしようと考える。

「ト、とト、トレファノと申します。宜しくお願い致します」

ファノは震える声で自己紹介をした。ファノ。言葉使いがさっきと

違うんだが。まあ、気持ちは分かるが。

さて、ここからどうするべきか。いや、マジでどうする！　……

あ、ああ、それしかない！

「ファノ。それでこちらが、一番最初から一緒にいて、一番頼りになって、一番大切で大事で、一番愛している契約精霊のスフィリアだよ」

一か八か掛けてみる。あざといか！？

「そんな、頼りになって、愛しているだなんて」

スフィは真っ赤になりながら言った。

「そうだな。今更なことを言って悪かったな」

「そんなことないです。主。ファノでしたね？　これから、“私のことを一番愛している”主ともども宜しくね」

凄い満面の笑みを浮かべ、上機嫌に声を弾ませながら言った。その後、スフィは「主が私のことを、一番愛してるって、ふふふふ。愛してるって、愛してるって、愛してるって、

うん。よし。僕は助かった！　よし！！

「ファノ。それでこっちが、契約竜のベルニールだ」

「うむ。我が名ベルニール。主殿にはベルと呼ばれている故、ベルと呼んでくれ」

「は、はい。トレファノです。こちらもファノと気軽に呼んでください」

ファノの言葉使いが、相変わらず丁寧だな。

「しかし、主殿。ナイスフォローだ。さすがにあれは我でも肝が冷えた」

僕にだけ聞こえる音量でベルは言った。

「まあな。僕もマジで怖かったからな。殺されるかと思ったよ」

「主殿もか。我もだ」

「ご主人様、私もです」

「ファノはいつもどおりの口調に戻っても平気だと思うよ」

ファノの言葉使いが未だに少しおかしかった。なんというか丁寧？

「今は戻すのが少し怖いからこのままで行きます」

ははははは。と、三人で乾いた笑いをした。

◇◇◇

幸運埋没（トリップ）から帰還したスフィは俺に質問してきた。

「主。これからどうするの？」

「一度、戻って、晩御飯の準備をするよ」

「そうなのですか？」

「うん。まあ、妹に任せてもいいが、どうせＥ２関係で色々やってるから、忙しいって言われるのがオチだな。食べ終わったら再度ダイブするからさ」

妹は料理がへたなんていうのは幻想だ。普通はある程度は出来る。まあ、今は自動クッカーなんてものもあるから、料理できなくてもなんとかなるが。

「それじゃね。いってきます。《ダイブアウト》」

「「「いってらっしゃい」」」

◇◇◇

目をあけてＶＲＰを外し、体を伸ばした。

「ん～。っと、さて、晩御飯の準備でもしますか」

ベッドから降りて１階へ行った。

「今晩のご飯は何にしようかな。簡単にロールキャベツでいいか」

冷蔵庫をかけて材料をだして、コンソメスープの素を探す。鶏がらスープの素が出てきた。……あれ、使うのどっちだっけ？　ど忘れした。

「ん～。ん！　両方入れよう。風味は違うがまずくはならないだろう。ついでに昆布と鰹節でだしを出そう」

そうと決まれば、材料を切ったり張ったりして材料をこねる。タネをキャベツでロールして、一個はレタスでロールしておく。煮るスープはトマトベースの鶏がら大目のコンソメ少な目な昆布と鰹節のスープでいく。鶏がらとコンソメの風味の違いが喧嘩しないことを祈りつつ作る。

……ん。結構いけるな。トマトベースの鶏がら大目コンソメ少な目な昆布と鰹節のスープ。

あとはロールをじっくりことこと煮込んで完成。

煮込んでる最中は火から離れずに、テレビを観賞。お！　Ｅ２のＣＭやってる。次の第２次販売は８月の１７日土曜で、販売本数は初回の２倍の予定。どこも予約分で完売らしいが。

ガチャ、とドアを強めに開けて入ってきた。

「ご飯はできたぁ？」「お腹が空きました」

妹がリビングに入ってきた。

「おう。今煮込んでるところだ」

「煮込む？　煮物なんですか？」

「まあ、ある意味では煮物と言っても間違いではないかな。たぶん」

まあ、煮込んでいるから、当たらずとも遠からずかな。

「なんなのですかぁ？」

「ロールキャベツ（一部除く）だよ」

カッコの部分は小声でカバーしております。

「そうなんだぁ。確かにいいにおいしてるねぇ」

「お！？　もういいかな」

鍋の中をみて確認する。うん。見てもわからんな。一つ割って中を見る。火はしっかり通っているようだ。

「ハイ完成。ご飯は自分で盛ってな」

そう言いながら、ロールキャベツ（一部除く）を皿に盛っていく。
切った分はもちろん自分の皿へ。

「はいよ」

「「いただきま～す（ぅ）」」

妹は声をそろえて言い、食べだした。こいつら、昼ごはん食べてないな。って、僕もか！！

「兄ぃ。なんと今日中に次の町にいけそうなんだよぉ」「そうそう。ボスも見つけたから、後は倒すだけ」

ボスってどんななんだろ？　やっぱり強いんだろうな。

「そうなのか。ボスってどんな感じのやつなんだ？」

「ボスは［ジャイアントボア］っていう、でかい猪で」「それを倒せば新しい町だよぅ」

でかい猪か。そういえば、なんか猪っぽいのベルが倒していたな。
確認するか。

「それでそのボスを倒せば、皆次の町にいけるようになるのか？」

倒せば次の町ってことは、そうなのだろうな。

「そうだよ。それで、ジャイアントボアは倒して新しい町に行くと、中央広場に“道（ゲート）”があって、それを起動させればいいのさ」「まぁ、起動しなくても3時間経ったら勝手に起動するんだよねぇ。その代

わり3時間は自分たちだけでいろいろ回れるのさぁ」

ふむ。ようは、新しい町に行けば、みんな次の町に行けるようになる。って、ことか。生産職にはやさしい設定だね。

「それって結構簡単じゃないのか？」

「そうでもないんだよね。2つ目の町に行くのはそれでいいんだけど、そこ以降の情報がまったくないんだよ」「そぅなんだよぉ。だから、これからが大変だよぉ」

2つ目の町までの情報はあるって事は、3つ目の町に何かあるのか？　まあ、そのうち分かるか。

「ボスを見つけたってことは、茜や瑠璃のパーティもボス討伐に行くのか？」

「「うん。行くよ（ぉ）」」

「初回討伐ボーナスが気になるし。それに、ボスを見つけたのは、うちのパーティだからね」「情報流すまえにぃ、れっつごーだよぉ」

興奮気味に大き目の声で妹は言った。いや、叫んだに近いかな。

「そうか。頑張れ。それで、急がないと初回討伐ボーナスが誰かに取られないか？」

「「はっ！」」「「確かにっ（ぃ）！！」」

妹は携帯をいじったと思ったら、そこから黙々と晩御飯を食べて、

部屋に戻って行った。
ちなみにパーティメンバーは学校の友達で、全員女子らしい。

「急がせてしまったかな？　初回ボーナスが欲しいなら、急がせて正解かもな」

一人で納得した。
その後、食器を洗ってお風呂に入り、歯をみがいてから自分の部屋に戻り、《ダイブイン》をした。

隠れ里と恐怖と晩御飯　～今晩は、ロールです。～（後書き）

ちなみにエルフとハイ・エルフの耳は人と違いはありません。妖精系統で耳が尖っているのは、ピクシーやレプラコーンです。他に森人という種族も耳が尖っています。

ありがとうございました。

武器と防具とケモミミと・・・・・。（前書き）

お願いします。

武器と防具とケモミミと・・・・・。

《ダイブイン》した↓

ポーン
〔称号を取得クリア。称号［ハイ・エルフに認められし者］を取得しました〕

ん？

↓途端になんか称号を得た。
なんだろこれ？　まあ、認められることは、悪いことじゃないから良いか。

ピロリーン
ん？　なんか視界の右下の方でチカチカしてる。メッセージのようだ。メールマークが浮かんでいる。メッセージって、こんな感じなんだな。ちなみに、ナツキからだ。

称号はスルーして、メッセージを開封した。ナツキさんからだ。
〈防具と双剣ができたから取りに来て！ｂｙナツキ、トーカ〉
連名で来ていた。

ふむ。それじゃ、いきますか。歩きだした。

ポーン

〔称号〔受け流す者（ザ・スルー）〕が特殊条件をクリア。称号〔森羅万象を受け流す者（ザ・オール・スルー マイスター）〕に進化しました〕

さあ、急いで行こうかな。防具に双剣、どんなのだろう。楽しみだな。

何も気にしないで歩き出した。

◇◇◇

露天に着いたので、記憶を確かに歩き出した。

「確かここらへんにあったはず……」

探していると、

「ニズちゃ～ん。こっち、こっち！」

名前を呼ばれた。

「あ、いた」

呼ばれた方向を見たら、ナツキさんとトーカさんが揃っていた。

スタタタッ、と近寄って行った。

「おまたせしました」

「いいよ～。たいして待ってないし。それに何もしてなかったわけじゃないからねぇ？」

「ああ、そうだ。それに、なかなか凄い。と言うか、使えるかわからない双剣ができたしな。とりあえず、見てくれないか？」

使えるかわからない？　どういう事だろう？

「加工できたんですね。わかりました。それで、どんな感じに出来たのでしょうか？」

「まずは、問題がない防具の方からね。はい」

そう言って、ナツキさんが防具を出現させた。

やっぱり、双剣のほうに問題が？　ドラゴン素材はまずかったか？

ちなみに、後で聞いたが、アイテムボックス同士で渡すことも可能だが、こっちのほうが主流らしい。

「ありがとうございます」

ちなみにこんな感じ。

［灰狼のニット帽］

モフモフな少し灰色の混ざった白い耳付ニット帽。夏は風を通し、冬は暖かい不思議なニット帽。獣人の方も安心設計。

効果：Ｖｉｔ＋3、Ｍｉｎ＋1、Ａｇｉ＋1　防寒耐性小

［灰狼のワンピース］

サラッとした白いワンピース。糸を結っている間に、いつの間にか白くなっていた。夏は風を通し、冬は暖かい不思議なワンピース。

効果：Ｖｉｔ＋５、Ｍｉｎ＋２、Ａｇｉ＋３　防寒耐性中
［灰狼の手袋］
サラッとしてるに何故か武器を持っても滑らない白い手袋。夏は風を通し、冬は暖かい不思議な手袋。
効果：Ｖｉｔ＋２、Ｍｉｎ＋１、Ａｇｉ＋１　防寒耐性小
［灰狼のショートパンツ］
いい感じに動きやすい白いショートパンツ。夏は風を通し、冬は暖かい不思議なショートパンツ。獣人の方も尻尾を出せる安心設計。
効果：Ｖｉｔ＋３、Ｍｉｎ＋２、Ａｇｉ＋３　防寒耐性中
［灰狼の靴］
いい感じに動きやすい白い靴。夏は風を通し、冬は暖かい不思議な靴。
効果：Ｖｉｔ＋２、Ｍｉｎ＋１、Ａｇｉ＋５　防寒耐性中
セットボーナス：Ｖｉｔ＋５、Ｍｉｎ＋３　極寒耐性

いい感じだね。セットボーナスなんてあるんだね。

「なんか、防寒耐性っていうのが付いてますね！」

驚きながら言った。そんな簡単に耐性付加なんて出来るのかな。

「そうでしょ～！　私も驚いたよ。初期の方の装備で、防寒耐性に極寒耐性だもん」

作った本人も驚いたようだ。しかし、ここら辺では極寒地域なんてないのでは？

「でも、極寒の地域ってβでもなかったから、たぶん新要素なんだ

ろうね。こんな耐性があるなんて新発見だよ」

僕とは驚く場所が違ったようだ。

「と、とにかく、ありがとうございます。大切に使わせて頂きます」

「うん。使って使って。　それじゃ、次は「私の番だな」……あれはねぇ」

なんか、含みのある言い方だな。ホントに何があったんだろう？

「これなんだが……、一応双剣扱いになっている」

そう言ってトーカが出してきたのは、二振りの大剣だった。

「え？　……これって、明らかに大剣ですよね？」

長さは１８０ｃｍくらいで大剣としては普通のサイズ？

刀身は橙色にぼんやり光っているように見える。

「そうなんだが、一応は双剣だ」

そういわれたので確認した。

双剣　［黄昏之双子（トワイライト・ジェミニ）］

大剣のような大きさの、黄昏色に輝く刃を持つ双剣。ドラゴンの２本の角を材料としており、その強度は同位のドラゴンの鱗さえ、容易く切り裂き貫くことができる。

効果：Ｓｔｒ＋１１８６　耐久１５０００００　スキル：［斬

撃範囲拡張」［黄昏の刻］

うん。確かに双剣ですね。

「な？　“双剣”だろう」

「はい。確かに“双剣”ですね。なんでこんなことになったんですか？」

「よくわからないんだ。もしかしたら、“オーダー”で作ったからかも知れない。もしくは無理矢理つくったことも、関係しているかもしれない」

「“オーダー”で作ると何か変わるんですか？　それに無理矢理って」

「ああ。素材をもらって、そのプレイヤー用として作ると、そのプレイヤーの特性に合わせて性能が変わったりするんだ」

そうなのか。う～ん。それは知らなかった。

「無理矢理って、言うのは、スキルランクはβからの貢献度特典に足りてるが、道具のランクが足りなくてな」

「そうなんですか。う～ん。とりあえず、装備してみます」

「おう。でも、持てるのか？」「大丈夫？　持てるの？」

心配そうに二人はそう言った。

「僕用に作ってこうなったなら、装備できるはずですよ」

とりあえず装備っと。

双剣を鞘にしまい、装備したら。あら、不思議。　普通の双剣サイズになりました。

「「「「……」」」」

「「「「……？……！？……なんで！！」」」」

三人で声を揃えて叫んでしまった。こちらに視線が集まったが、なんでもないと言ったら、今まで通りの喧騒に戻っていった。

「なんで縮んだ？」

「わかりません。装備したら、としか言えないです」

「オーダーメイドの特性なのかしら？」

小声で質疑応答をしていた。

「試しに抜いてみてくれないか？」

「わかりました」

双剣を抜いた。ら、何故かさっきの大剣が出てきた。……ん！？？

「「「「……」」」」

「「「……？……！？……なんで！！？」」」」

またしても三人で声を揃えて叫んでしまった。そして、またしてもこちらに視線が集まったが、なんでもないと言ったら、今まで通りの喧騒に戻っていった。

「なんで元に戻った？」

「わかりません。鞘から出したら、としか言えないです」

「オーダーメイドの特性にしても凄いですね」

小声で質疑応答をしていた。

「それ、鞘にしまえるのか？」

「しまってみましょうか」

双剣を鞘に納めた。ら、何故か普通の入った。……ん！？？

「「「……」」」

「「「……はぁ」」」

今回は叫ばなかったが呆然としてしまった。

「なんで鞘に入った？」

「わかりません。鞘に戻したら、としか言えないです」

「オーダーメイドの特性にしても、まさに幻想的（ファンタジー）ね」

力が抜けたように質疑応答をしていた。

「……これはもう、これでいいか？」

「……そうですね。装備できて使えそうなので、問題ないです」

脱力して、僕とトーカさんは言った。

「いまさらだけど、ニズちゃんよくそんな双剣を普通に持てるよね」

するとナツキさんが、今更なことを言った。

「そういえば、そうだな。俺でも完成後は1本ずつでも、まともに持てないくらいの重さだったんだが……」

トーカさんも、思い出したかのように言った。

「オーダーメイドだからですかね？」

「かもな。βから正規版でずいぶん仕様変更があったのか。それとも、ドラゴン素材の特性か。ドラゴン素材はまだ少し残ってるから、これでいろいろやってみよう」

うんうん。と頷きながら、トーカが何か言っていた。

「討伐者がオーダーした場合限定だったら、調べるのは今の段階では無理そうだけどね」

「それは、そうだな。……ニズ。なんとかならないか？」

「そんな簡単にドラゴンなんて倒せませんよ」

「「だよねぇ～」」

ナツキさんとトーカさんは笑って言った。

「あ、でも龍素材はありますよ」

「「　え　゛」」

二人は固まった。

◇◇◇

二人とも固まったまま帰ってこないので、確認してなかったアイテムボックスを見てみた。

《アイテムボックス：スフィリア》

大剣　［ノウレイズ］
一角龍の角龍玉
一角龍のひげ×２
一角龍の一角
一角龍の爪×５
一角龍の牙×７
一角龍の鱗×８
一角龍の龍骨
一角龍の肉（１８ｋｇ）
一角龍の逆鱗

狩弓　［メアディス］
偽樹魔の魔樹核
偽樹魔の幹
偽樹魔の枝×７
偽樹魔の皮×９
偽樹魔の蔦×３
偽樹魔の根
偽樹魔の材木×２０

大弓　［アルリヴァ］
偽樹王の王樹核
偽樹王の幹
偽樹王の枝×６

偽樹王の皮×１１
偽樹王の蔦×５
偽樹王の根
偽樹王の材木×１８

神剣　［スレグイル］
アクセサリ　［神獣耳（ケモミミ）］
神獣王の神珠
神獣王の魂核
神獣王の爪×８
神獣王の神牙×２
神獣王の牙×８
神獣王の毛皮×８
神獣王の肉（１５ｋｇ）

《アイテムボックス：ベルニール》
曲剣　［カドレル］
甲王魚の青魔核
甲王魚の牙×９
甲王魚の鱗×１２
甲王魚の骨×６
甲王魚の背骨
甲王魚の尾びれ
甲王魚の目×２
甲王魚の肉（１０ｋｇ）

聖短剣　［クラフォル］
聖山鳥の穹魔核
聖山鳥の鉤爪×２

聖山鳥の爪×４
聖山鳥の嘴
聖山鳥の羽根×８
聖山鳥の風切羽×２
聖山鳥の尾羽
聖山鳥の肉（１２ｋｇ）

炎大剣　［ヴォノルス］
紅炎猪の紅魔核
紅炎猪の炎牙×２
紅炎猪の紅爪×４
紅炎猪の炎毛皮×８
紅炎猪の角
紅炎猪の肉（２５ｋｇ）

ふむ。海王龍と森狼王は、スフィとベルのタブから勝手に移動してるな。

一回閉じて、再度開けた。

スフィとベルのタブがなくなっていた。

「一度見ると、勝手に移されるのか。アイテムの収納量を増やさないようにするためかな？」

なんとなしに装備を見ていたら、なんか獣耳があった。

「獣耳。アクセサリか。そういえば１つも着けてないな。装備するか」

獣耳はカチューシャ型でなく、実体がないようだった。
不思議な感じがしたが、気にせず装備した。獣耳と尻尾が生えてきた。
ふむ、ネタ装備か？　気になり詳細を確認してみた。

アクセサリ　［神獣耳（ケモミミ）］
神獣王の証の耳。装備すると耳と尻尾が生える。神々しい不思議な耳。着けているものは神獣の王となれる。
効果：ＨＰ＋３０００、ＭＰ＋１０００、Ｓｔｒ＋８００、Ｖｉｔ＋６００、Ｉｎｔ＋７００、Ｍｉｎ＋６００、Ｄｅｘ＋５００、Ａｇｉ＋１２００
全ダメージ８０％減、全状態異常無効、行動阻害無効
スキル：［空間把握］［霞如駆］　［神獣耳（ケモミミ）覚醒］

ネタな名前なのに、狂った性能の装備だった。
いや、あんた、神獣の王になれるって何よ！？
そして、ニット帽の耳部分が獣耳にフィットして、窮屈感がまったくない。ナツキさん素晴らしいです。しかし、獣耳の方が大きいのに、なんでこんなにも良いフィット感が出るんだ！　そして、獣耳と尻尾に感覚がばっちりあることに驚いた。しかし、本来ないものの感覚があるって変な不思議な感じがする。

よし。獣耳は装備しっぱなしでいいだろ。これなら獣人だと思ってくれそうだし。くれるよね？

さすがに種族が幼女は、少し恥ずかしいです。

……しかし、ナツキさんもトーカさんもなかなか復帰しないな。
もうちょいかな？

仕方がないので、今度は武器を見てみた。

……神剣って、これは良いのか？　神獣王か。まあ、獣耳でも、ん？　神獣！？　倒してよかったのか？　もとい、倒せたのか！
スフィ！　……その強さが頼もしく怖いです。

あ、そういえば、会った時のスフィが怖すぎて、いろいろ倒してることに関して、何も言ってなかったな。今更言うのもなぁ。まあ、迷惑は掛かってないからいいか。

「「なんだってぇーーー」」

ビクッ！
「な、なんですか。いきなり叫ばないでくださいよ」

二人がいきなり叫んだ声で、僕はかなり驚いた。今回も視線を集めたが、またか、みたいな反応だった。
どうやら復帰したようだ。結構長い時間固まってたな。

「それは叫ぶだろう。だってお前、龍って」

「そうよ。そんなモンスターいなかったよ。いったいどこで出会ったのよ」

どうやらβ時代には龍いなかったようだ。でもドラゴンはいたのか。
まあ。ドラゴンは定番だからな。

「契約精霊がどこかからか勝手に狩ったみたいで、場所はわかりませんよ」

そうなんだよ。スフィもベルもどこにいってるんだか。そういや、ファノもいないな。ファノは大丈夫かなぁ。

「「契約精霊はそんなこと出来ないでしょ（だろ）！？」」

「そうなんですか？」

「当たり前だ！　一応、中位精霊から実体化できる。そして、βテスターなら中位精霊と契約しているやつもいる。けどな、実体化を維持するには多くのＭＰが必要なんだ。中位精霊で３分が限界なんだ、龍を倒せるレベルの精霊を実体化なんてしたら、一瞬でＭＰがなくなって終わるわ！」

「そうなのよ。中位精霊に精霊が育ったら［精霊具現化］っていうスキルを覚えるけど、実際に使うとＭＰ全回復状態で３分もたないよ」

二人は食い気味に言ってきた。
すると、これはアビリティのほうに原因があるな。でもあれって常時発動型のアビリティだったのかな。

「多分アビリティのおかげですね」

「アビリティ？　もしかして［精霊具現化］のアビリティか？」

「いえ。少し違います。［精霊完全具現化］です。ＭＰ消費なしで召喚が可能な。多分、［精霊具現化］のＭＰ消費がないタイプだと思います」

これって結構便利なアビリティなのかな？

「そんなアビリティがあったのね」

「レアアビリティであることは確かだな」

「そうなんですか。ラッキーですね」

ははははは。と僕は笑った。ナツキさんとトーゴさんもつられたのか微笑んでいた。

「あ！　スキルやアビリティの詮索は基本的にマナー違反だったな。すまんな」

「確かにそうだったね。ごめんね」

「別に良いですよ。いろいろ情報も聞けましたし。勝手に言っただけですし」

やっぱり公式サイトはしっかり読むべきか？　でも、知りすぎるのもつまらないしなぁ。

……うん。わからなかったら聞けばいいし。現状維持だな。

「そうか。ならいいが。……そうだな。公平に私のアビリティも教えよう。私は［職人の技量］だ。効果はＳｒｔとＤｅｘの成長にプラス補正が入るのと、作ったものに特殊効果が通常より付きやすくなる」

「なら私も。私のアビリティは［素材解析］よ。効果は簡単に言うと鑑定の上位効果ね。特に素材に関しては詳細な分析が可能ね。あと、それによって素材の特性を引き出しやすくなるの」

二人ともアビリティを教えてくれた。

「二人とも、やってることとベストマッチしてますね」

「まあね。運がよかったよ」

「日頃の行いがいいからな」

ははは。と二人とも笑いながら言った。ついでに僕もつられて笑った。

「それで、龍素材はどうします？」

「あ、……そうだな。今はまだ使わない。明らかにオーバースペックになるからな」「それに、オーダーメイドじゃなきゃ値段が決められないよ」

「そうなんですか？」

「「いやいや」」

「本来、龍やドラゴンはそんな序盤に出るようなモンスターじゃないから」

「そうなんですか。……それじゃ、この双剣は不味いですかね？」

双剣を触りながら言った。

「う～ん。第一にその武器の性能ってどうなってんだ？」

「「え！？」」

ナツキさんと二人して驚いた。

「いやな。分からないんだ。ナツキみたいなアビリティがあれば別だが」

「そうなんですか？　ナツキさんが普通に見てましたから、分かってるんだと思ってました。って、なんでナツキさんも驚いてるんですか？」

「え？　だって大体の性能は分かるようになっているから。でないと、オーダーの時に値段が決められないでしょ？」

「いや。今回は例外なんだ。確かに普通は見たら分かるんだ。だが今回は見られなかった。作った物の性能に対する標準価格のようなものが、ある意味物価のようなものが普通出るが、今回はそれもわからないんだよ。おそらく、今のレベルに比べて格上だからかもな」

「出なかったんですか？」

「ああ。こんなこと初めてだから、わからないんだ。まあ、経験値は旨かったからいいんだが」

「そうなの？珍しいこともあるのね。それにしても経験値、い～な～」

「お前の方が経験値は旨いだろうが！」

「ふふふふ」

ナツキさんは不適に笑っていた。
てか、話しが大幅にずれているな。戻すか。

「それで、双剣の性能見ますか？」

「おう！」「うん！」

「でも、どうやって見せればいいんですか？」

「レンタル機能を使えば大丈夫だよ」

レンタル？　お！　これか。　ポチッとな。（そんな効果音は設定しないとしません）

「はい。どうぞ」

「おう」「ありがと」

二人に双剣の性能を開示した。

「「……」」

ん？　どうかしたのかな？

「「……「あの、どうかｓ」　なにこれぇーー！」」

ビクッ。

かなりビックリしましたよ。いや、本当に。

「「なにこの壊れ性能！！」」

「やっぱりこれは壊れ性能なんですか？」

「「気付いて！！」」

二人の声がレゾナンスしてます。仲良いな、二人とも。

「渡された時にそう思ったんですが、その後二人とも平然としてましたし。それに、サイズの方に意識が行ってしまって」

「そうだな。その気持ちはわかる。あれは驚愕だった」

「そうね。確かに驚愕だったわね。魔法より魔法っぽかったもの」

「そうですよね。あれは魔法以外の何ものでもなかったです」

うんうん。と三人で頷きあった。ちなみに再度、視線を集めていた

が、気にならない衝撃があったので、気にならなかった。

「しかし、これは。う～ん。ドラゴン素材にしてはスペックがオーバーしすぎてる気がするな。高くても７００いかないと思ったんだが。もしかしたら、やっぱりあれはクリティカルだったのか？」

「クリティカル？　ですか？」

「クリティカルが起きたの！？　しかもドラゴン素材で！？」

僕は疑問を浮かべ、ナツキさんは驚いていた。

「ああ。俺も夢中になって作っていたから、気付かなかったが。おそらくクリティカルが起こっているな」

「クリティカルって、なんですか？」

「クリティカルっていうのはね。言うなれば作成大大大成功、いわゆる超大成功だよ」

なんかナツキさんが、若干ではあるが精神幼児化を起こしている。

「それじゃ、分からないだろう。簡単に言うと、素材の持つ性能の上限以上の武器ができることかな。武器や防具には作り手の技術とは関係なく素材による上限が存在する。その上限以上のものは出来ないはずなんだけど、極稀にその上限を超えるものができるんだ。それがクリティカル」

「ほとんど公式サイト通りの説明じゃない」

「しょうがないだろ。クリティカルしたことなんて、βも含めてないんだから。ってか、出来た人は今まで一人もいないんだから」

「確かにそうね」

ものすごく起こり難いことだけはよく分かった。

「クリティカルって、相当起こり難いんですね。そんなに起こり難いんなら、起こしたら称号とか取得しそうですよね」

難しいなら、起こした本人にも相応のメリットがあってもいいと思います。

「「確かに！」」

二人は、ハッ！　っとなった。

「か、確認してみる」

慌ててステータスを開いたようだ。

「どう。あった？」

「え～と。……あ、あった」

どうやらあったようです。なんだろう？

「なにがあったの？」

「［会心の一振り（クリティカル）］と［竜の鍛冶師（ドラゴン・スミス）］があった」

少し震えた声で、トーカさんはナツキさんの質問に答えた。

「「おお～」」

僕とナツキさんは、パチパチパチと拍手しながら歓声上げた。

「キャーキャーー。称号だよ。やったぁーー！」

そして、トーカさんは凄く喜んでいた。

◇◇◇

「すまん。はしゃぎすぎた」

やっと落ち着いたトーカさんは顔を真っ赤にしていた。

「まあ、嬉しいのはわかるよ」「落ち着いてくれてよかったです」

僕とナツキさんは苦笑しながら言った。

「結局、この双剣は使っても大丈夫なんですかね？」

「まあ、大丈夫だろ」「そうよ。大丈夫よ」

「なら、大丈夫ですね」

ひとまず、僕の双剣と防具の受け渡しは完了した。

ここで、ふと、あの狼素材の事を思い出した。

「ナツキさん。そういえば、おの狼素材は大丈夫でしたか？　呪われたりしませんでしたか？」

「ええ。大丈夫だったわよ。一針縫うごとに針がダメになる強度だったけれど」

「ちなみに、ドラゴン素材も似たようなものだったぞ。一振りごとにダメージをくらったし、完成までに現段階で最高の鎚を１６個潰したぜ。それに、さっき龍素材といっていたが、それは多分加工できないな」

「そうなんですか！」

「まあ、今の段階では本来扱うことのないランクの素材だしな。私たちでも、スキルランク不足だな。今回のドラゴン素材は、β時代と加工方法が同じだったからできたことだ。もし違ったら出来なかったな」

「ええ。それに、道具のランクもまだ届いてないのもあるわね」

「「でも、その代わりに経験値が旨かったよ（ぜ）！」」

ホクホク顔で二人は言った。

「いい笑顔ですね」

「「もちろん」」

本当にいい笑顔です。

「なんにせよ、呪われなくてよかったです。どんな性能になったのですか」

「まだ加工中よ。凄いスピードでＨＰとＭＰが減っていくから、加工しきれていないの。ノンストップで加工したら、完成前に死に戻るわね。出来たとしても、今の段階では凄くオーバースペックね。今のところは店舗を持ってから売ろうと思ってるんだよ」

「そうなんですか。でもなんでですか？」

「高すぎて、買える人がいそうにないのよ。だから、ごめん。お金渡すの先になりそうなの」

手を合わせて、すまなそうにいった。

「別にかまわないですよ。お金に困ってませんから」

「ありがとう」

ひとまずはこれで、用事は済んだかな。あ、龍素材。まあ、保留でいいか。加工できないらしいし。

ポーン

「全プレイヤーにお伝えします。ただいま、パーティ［透き通った水（クリア・アクア）］が次の町へ到達しました。これにより、中央広場から第2の町【ソラルル】への“道（ゲート）”が開きます」

どうやら無事に妹たちは、ボスを倒せたようだ。たぶん妹たちだよな。パーティ名を聞いてないからわからないな。

「お、次の町への道が開くか。これであと少しだな」「そうだね。よっし、お店持つために頑張るぞ」

「どうゆうことですか？」

「ん？　ああ、第3の町に着くまではチュートリアルみたいなものらしいんだ」

「だから、店を持つのも第3の町。ってこと。第2の町でも、戸建ってものがあるらしいんだけど、なんかホームじゃない気がするんだよね」

「チュートリアルなんですか？　それに戸建って、ホームとは違うんですか？」

「戸建については分からないが。チュートリアルは、まあ、慣らしのようなものだ。公式サイトで3つ目の【精霊使帝都市（せいれいしていとし）エレスト】ですべての日本のプレイヤーが交わる。って、ニズのメッセージを送る少し前に公表されたんだ」

「そうなんですか！　確かに違うところからスタートって聞いてますけど、そんなことになっていたんですか！」

だから3つ目の町に行くまでの条件しか公式サイトに載ってないって、妹が言っていたのか。なるほど、確かにこれはチュートリアルだ。

「それで、チュートリアルなのに、ホームがあるっていうのもおかしいからね。公式サイトの発表も、ホームでなく戸建って書いてあったし。βに戸建なんてものなかったから、ホームじゃないって話しになってるのよ」

ふむふむ。確かに、チュートリアルでホームが買えるのはおかしいか。

「ちなみに、公式サイトによると、2週間くらいで第3の町に行けるように、頑張れば全員がＬｖ１０前後のパーティで倒せるボスらしいよ。」

「それは確かにチュートリアルですね」

「ちなみに、一人でも到達したら、全員が“道（ゲート）”を通れるようになるのは、第2の町【ソラルル】だけだってさ」

「それも、最新情報ですか？」

「ああ。なかなか生産職泣かせだな。まあ、他にも何か隠し要素があるらしいからな。って、いうか【エレスト】到達と同時に新要素が色々と解禁になることは発表されてる。詳細はその時になってからだそうだが」

「楽しみよね～。だれか一人でも到達すればいいんだから」

「でもなんとなくですが。時間でなく場所で決めているってことは、その場所に入るには時間も関係してる気がしますね。それに2週間くらいで到達って、ちょうど第2陣の発売日に被りますからね」

そう。一人でも到達すればいいのは第2の町までなのに、第3の町でも到達で。というのは少々おかしい。

「確かにそれも一理あるわね」

「2週間っていう期間が鍵になりそうだな」

僕の仮説に二人とも肯定してくれた。何かのイベントでもあるのかねぇ。楽しみが増えたな。

「とにかく、やっぱり店舗は【エレスト】に作りたいわね」

「ああ。そうだな。そのためにも更にお金を貯めないとな」

「ええ」

二人はニコニコしながら、今後のことについて話していた。

「それじゃ、僕はもう行きますね」

「ええ。何かいいものを入手したら持ってきてね。他より高く買うよ」

「だが、あまりむちゃくちゃなものは困るからな」

「ははは、分かりました。その時は持って来ます。それと、そう何回もドラゴンとか龍とかの素材なんて、手に入りませんよ」

「「それもそうか」」

お互い笑いながら、二人と別れた。

しかし、既にいろいろと凄まじい素材（モノ）が揃っております。そういえば武器の性能を確認してないな。……まあ、使えるものがないからいいか。

さてと、ダイブアウトして寝ますか。結構話し込んだし、しかし、スフィにもベルにもファノにも会わなかったな。

ポーン

〔［神精霊スフィリア］［真竜ベルニール］［水聖霊トレファノ］が、ユニークエクストラボス［黙示録の赤い竜（グレイト・レッド・ドラゴン）］と戦闘を開始しました。プレイヤーも戦闘に参加する場合、中央広場の“道（ゲート）”より参加が可能です〕

……ふう。それはダメだろ！　ユニークはまずいよ！！

僕は［神獣耳（ケモミミ）］の付加スキル［霞如駆］でギリギリ認識できない速度で駆け出した。

◇◇◇

中央広場“道（ゲート）”についたら、人が一杯いた。

「あ、そうか！　第2の町いけるようになったからか」

よく見ると談笑しているようで、並んでいるわけではないようだった。

話をこっそり聞いてみると、どうやら次の町までの“道（ゲート）”を開放したパーティがそろそろ戻って来るらしく。お祝い激励する為に集まっているらしい。

ちなみに、メンバー全員が女性のパーティらしい。

それと、その後でないと、次の町への“道（ゲート）”が開かれないらしい。

「なるほど。そういえばそんなことを聞いた気がするな」

なら今のうちにと、“道（ゲート）”まで駆け足で行くと、魔法陣のようなものがある。そこに進むと選択肢が出て、タップするか、名前を言うとそこへの扉が出てくる仕掛けのようだ。

こっそり行って、こっそり操作する。

選択肢は二つ浮かんできた。

〔“道（ゲート）”を繋ぐ場所を選択してください〕

≪ノエアイナ≫

≪ユニークエクストラボス［黙示録の赤い竜（グレイト・レッド・ドラゴン）］≫

ん！？

ハイ・エルフの里も行けるのか！　なんで！？　と、とりあえずは、スフィの所へだ。

名前を言わずに選択肢から、ポチッ、とな。（さすがに声を出したら、目立つからな）

選択肢をタップしたとたんに、“道（ゲート）”が光り、光の扉が出てきたので、すぐさまそこに飛び込んだ。

ちなみに、開いた“道（ゲート）”には、開いた人か、その人が許可した人しか入れない。って、注意事項に書いてあった。

武器と防具とケモミミと・・・・・。（後書き）

ありがとうございます。

間違い修正しました。指摘有り難うございます。

所期→初期へ

赤い竜と財宝と王家の・・・・・・。（前書き）

お願いします。月並みですが、戦闘場面が難しすぎる。

赤い竜と財宝と王家の・・・・・・。

扉の向こうは戦場でした。

馬鹿でかい赤い竜と、三人は戦っていた。
赤い竜は咆哮し、空中に無数の燃える赤い槍を出現させて、高速で打ち込む。それをファノが空中で待機させていたであろう水球で真横から叩き落とす。その隙にベルが周囲の風を渦巻かせるように集束させて打ち出す。その攻撃を赤い竜は自分の影？　を伸ばして正面に壁を作り防ぐ。赤い竜は壁を作ったまま攻撃を行おうと口を開いた時に、その口のスフィが衝撃波を叩き込む。その反動で壁が解けた瞬間にベルが空中に待機させていた光の投槍を射出する。再度、赤い竜は影の壁を作り出し防ごうとするが、光の投槍が貫通し赤い竜に襲い掛かる。しかし、赤い竜は真紅オーラのようなものを纏い、攻撃をはじいて防ぎ、翼を大きく羽ばたかせて空に舞い上がった。その時、スフィは何事もなかったかのようにオーラを消し飛ばし、地面から白くぼんやり光る縄のようなものが無数出現し、赤い竜を地面に縛り付けた。

そして、こちらに気付いた。

「あっ！　主～」
「おう。主殿。来たな」
「いらっしゃいませ。ご主人様」

三者三様に挨拶してきた。ちなみに順にスフィ、ベル、そしてファノ。ファノの口調が、あれから完全には戻らないな。衝撃が強すぎたのか？

「主。大物ですよ」
「主殿。これは相当強いぞ」
「ご主人様。私には凄くきついです」

ふむ。スフィは遊んで、ベルは真面目に、ファノは油断したら死ぬ感じか。

「……って、お前らちょっと待てぃ。ユニークは倒したらまずいだろ！？」

「大丈夫です。これは魔神ですから」

「そういう問題か？」

スフィと話していると、

「ほう。仲間が増えたか。しかし、なかなか見目麗しい女子（おなご）だな。ふはははは。よい。殺さずに存分に愛でてやろう。ふはははは」

ニヤニヤ、と笑いながら、王冠を被った赤い多頭の竜が、白い縄を切り飛ばし話しかけてきた。
なんか。ぞわっ、として、むかっ、と、しました。

「気持ち悪いわ！」

「ふはははは。生きが良いな。すぐに従順にしてくれｒ「私の主に色目を使うなら死になさい」　ふはははは。本当に笑わせてくれる。貴様も朕のものにしてやろう」

よし。フルパワーで殺ろう。

「本当に死にたいｙ「スフィ、少し退いて。こいつ抹殺す」　主？」

「ちょっとこいつはムリだ」

「わかりました。ベル。ファノ。主が殺るらしいから、攻撃でなく行動阻害と防御優先で」

「承知」「わかりました」

二人は攻撃から妨害にシフトした。ファノはもともと阻害や防御が主だったが。

「ふはははは。なかなか面白いことを言うな。それｄ「［巨神剣］顕現」　な！？　なんだ、その剣は！」

なんか驚いていた。そういえば名前も変わっているな。まあ、いいや。

「消えろ。［御元切伏］」

右上から左下へ斜めに斬り下ろした。ちなみに一番消費ＭＰの多いアーツを使いました。

その瞬間、周囲に光を帯びた、やわらかい風の様なものが広がった。

……ん？

――――――

「主？　ベル、ファノ？　どうかしましたか？」

「このアーツは封印だな」

「ああ。それがいい」「それがいいと思います」

俺は何も言わずに、巨神剣の顕現を解いた。

ポーン、ポーン

〔アビリティの特殊進化条件をクリアしました。［精霊完全具現化］は［万物顕現］へ特殊進化します〕

〔称号取得条件クリア。ユニーク称号［黙示の終焉を覆す者］を習得しました〕

〔称号取得条件クリア。特殊称号［不可能を撃ち壊す者］を習得しました〕

【ユニークボーナス】
闢焉剣　［開闢と終焉を齎す混沌（ブラック・アンド・ホワイト）］

【ＭＶＰボーナス】
頭［赤い竜の王冠（グレイト・レッド・クラウン）］

【ソロ討伐ボーナス】
アクセサリ［恋美と夜天（ウェヌス）の髪飾り（ニュクス）］

【特定部位破壊ボーナス】
終焉竜の魔神珠

【通常ドロップ】
終焉竜の真紅玉
終焉竜の真紅爪×６

終焉竜の白尖牙×１０
終焉竜の真紅竜鱗×８
終焉竜の真紅尻尾
終焉竜の肉（２７ｋｇ）

うん。倒したようですね。

ポーン
ん？　まだ何かあるの？

〔特殊条件をクリアしました。種族［美幼女］は［美幼女（美幼女神）］に特殊進化します。また、それに伴い、スキル［巨神剣　ＬＶＭ］が［巨神剣　ＥＬＶＭ］に覚醒しました〕

〔討伐が完了した為、特殊フィールドより元のフィールドへ戻ります〕

特殊フィールドから出たようだ。

「とりあえず、あれだな。どんだけネタに凝ってんだよ！　いや、むしろ幼女に凝ってるのか！？」

なんか考えてもしょうがない気がしてきた。というか、条件はなんだったんだ？

「はあ。まあ、進化してこれ以上使いにくくなることはないだろう。見た目も目線も変わってないようだし」

体をキョロキョロ見ながら言った。

「ええ。主は変わらず愛狂わしいですよ♪」
「うむ。主殿は変わっていないようだ」
「そうです。相変わらず可愛いです」

「そ、そうか。ならいいんだが。……そういえば、ここからどうやって帰るんだ？」

キョロキョロ、と周りをみると、どうやら大きな谷の底のようだ。

「谷の底か。谷にしては何か違和感があるが」

「ここは、谷じゃないですよ」

スフィがそんなことを言った。
谷じゃない？　それじゃここはどこなんだ？

「ここは洞窟の中だった場所です。私たちは洞窟に入って行ったんです。そうしたら大きな広場に着いたんですけど、何か大きなものがあって。それをスフィさんが邪魔と言って蹴り飛ばしたら、あの変態な竜だったんです」

ファノが大体の経緯を話してくれた。

「それがなんで、洞窟が谷？　大穴？　になったんだ？」

「うむ。いきなり変態竜が暴れだしてな。ブレスで天井を消し飛ばしたんだ」

今度はベルが説明してくれた。

「なるほど。吹き飛ばしたんならこうなるか」

うん。気にしたらダメなんだろうな。

「それで、ここからどうやって帰ろうか？」

「あちらに小道というか、洞窟がありますよ。もしかしたら、出口かもしれません」

ファノが指差しながら言った。

ファノ。もう完全に口調が変わってる。それとも、これが地なのか？　まあ、悪影響ないしいいか。

「そうか。なら行ってみますか」

スタスタ、と、歩いていった。洞窟に入っていった。ベルは小さくなって飛んでいるが。

◇◇◇

中は暗かったので、光魔法の《ライトボール》を浮かべて進んだ。

「お、少し先が明るいな。出口かな？」

さらに進んで行くと、

「……うん。出口ではなかったな」
「そうですね。なんか輝いてるね」
「我には、分からないが、人には価値のあるものではないか？」
「光ってますね」

順に、僕、スフィ、ベル、ファノがそう言った。
そこは、行き止まりで、なんか財宝的なものが山積みになっていた。

「これは、どうすればいいのかな？」

呟きながら、財宝に近寄って行った。財宝に触った瞬間。

チャリーン
〔「黙示録の赤い竜（グレイト・レッド・ドラゴン）の財宝」を入手しました。アイテムボックスに自動的に収納します。リストを作成し開きます〕

［アイテムボックス：リスト］
取得金額１，２８３，９７０，２６３，９７２，０００Ｄ
アダマンタイト　６１ｋｇ
オリハルコン　２２９ｋｇ
ミルリル銀　１５８ｋｇ
ヒヒイロカネ　９６ｋｇ
神鉄　３５ｋｇ
魔鉄　４２ｋｇ
聖鉄　５８ｋｇ
玉鋼　２１２ｋｇ
ダマスカス鉱　１１２ｋｇ
天金　３１ｋｇ
白金　３４１７ｋｇ

金　１８６７３ｋｇ
白金剛石（リヒトディアライト）×１２
星晶（ステラクリスタル）×８
月の雫（ルナペルル）×７
太陽の光晶（ソレイユクリスタル）×８
波斯石（アッライス）×５６
蛋白石（オパルス）×７４
青玉（サピュルス）×４８
紅縞瑪瑙（サルドニュクス）×３８
翠玉（スマラクト）×５３
紫氷晶（アマティスタ）×６２
灰鉄柘榴石（イリス・カルブンク）×７３
翡翠（クリューソ）×６８

「……」

「……いや、意味分からないから」

なんか知らないが、半端無い量のアイテムが手に入った。

「主のアイテムボックスって、どんな容量してるんでしょうね」

「うむ。さすが我が主殿」

「私のご主人様は器が大きな方なのですね」

驚く方向（ベクトル）が少々異なるようだ。てか、ファノはもう、その話し方が標準になってるよね。

ん？
財宝の先の扉を見つけた。
「扉だな」
「ね」「だな」「そうですね」
みんな肯定した。
「今まで無かったよね」
「うん」「だな」「そうですね」
みんな頷いた。
「埋まっていたのかな」
「たぶん」「だろうな」「おそらくは」
みんなも埋まっていたから、気付いていなかったようだ。
「行ってみようか。ここに居てもしょうがないし」
みんな頷いてくれたので、一緒に扉に向かった。
扉の向こう側には小部屋があった。
「うん。宝箱と、……なんだと思うこれ」

「棺でしょうか？」「人が使う棺に似てるな」「棺っぽいですね」

やっぱり、棺だよね。これ。

とりあえず、近づいて触る。

ポーン

〔「刻止の封印柩」を入手しました。アイテムボックスに収納します〕

なんか手に入れました。

これは、持って行っても大丈夫なものなのか？　……あ、持っていくしかないようです。あと、チャリーンじゃなくて、ポーンだったのが、なんか気になる。

次に宝箱の方に進む。

宝箱は棺？　を挟んで左右にあり、右が赤い宝箱で、左が白い宝箱。

どちらも異様に大きい。

赤い宝箱に触る。すると、宝箱は勝手に開き、

チャリーン

〔「黙示録の赤い竜（グレイト・レッド・ドラゴン）の秘宝」を入手しました。アイテムボックスに自動的に収納します。リストを作成し開きます〕

［アイテムボックス：リスト］
天剣　［天宙虚空（ウラノス）］
真刀　［風色琴音（かざいろことのね）］
星槍　［星屑聖槍（エンハンブレ）］
雷鎚　［鋼砕雷鎚（ユピテル）］
覇斧　［地裂焔斧（アーレス）］
穹弓　［一穹千想（エトス）］
梓弓　［事象境界（ながれず）］
絶盾　［不破返撃（イアジス）］
天冠　［天頂閃鈴（イーオンカエルム）］
天衣　［天翔夢現（ラクテウスオルビス）］
天掌　［天掴万壊（クラルスドーヌム）］
天装　［天蓮刻祈（メンスメンシス）］
天歩　［天駆無歩（アンフィーネ）］

秩序と混沌の魔道書（アルス・マグナ）
世界樹琥珀（スーキヌム）×５
賢人の宝石（サージュ・リトス）×３
世界樹の宝珠（ユグドラシル・オーブ）
生命の小瓶（命の神水）×１０
失われし神樹の種子

うん。まだあったのね。って、ことは、白い方がハズレか。中身に関してはスルー。

次に白い宝箱に近づいて触る。すると、宝箱が、またしても勝手に開き、

チャリーン
〔［レニクス王家の財宝］を入手しました。アイテムボックスに自動的に収納します。リストを作成し開きます〕

［アイテムボックス：リスト］
王剣［レニクス王家の王剣］
王杖［レニクス王家の杖］
頭［レニクス王家の王冠］
頭［レニクス王家の髪飾り（ティアラ）］
アクセサリ［レニクス王家のマント］
アクセサリ［レニクス王家の指輪（ホワイトリング）］
アクセサリ［レニクス王家の指輪（ピンクリング）］
レニクス王家の羽ペン（ライト・フェザー）
レニクス王家の鍵
レニクスの古文書
レニクス神霊金貨×４
レニクス精霊金貨×２７
レニクス王金貨×３７１
レニクス白金貨×１５６８
レニクス金貨×９８６

うん!?　普通、片方は罠（トラップ）だろ！　両方とも当たりとか、……
あの赤い竜はコレクターだったのか!?　収集癖があったのか？
いやいや、落ち着け。多分、あの赤い竜が本当に集めたものじゃないから落ち着け。
だんだん落ち着いてきたので、他に何かないか、皆で周りを調べる。

「隠し扉も、何もないな。そっちは何かあった？」
「ないよ」「見当たらないな」「見つからないです」
みんな何もないとなると。
「戻ろうか？」
「うん」「ああ」「はい」
みんなの了承が得られたので、小部屋の外に出た。
ん？
視界に何か光るものが入った。
「なんだ？」
そこには、さっきまでなかった、魔方陣っぽいものがそこにあった。
「魔方陣だな」
「ね」「だな」「そうですね」
みんな肯定した。
「今まで無かったよね」
「うん」「だな」「そうですね」

みんな頷いた。

「行ってみようか。他に行けそうな場所もないし」

「うん」「応」「はい」

みんな頷いてくれたので、一緒に魔方陣に向かった。

「うん。広場の魔方陣と同じような魔方陣だな」

魔方陣の中に入ると、選択肢が浮かんできた。

〔“道（ゲート）”を繋ぐ場所を選択してください〕

≪ファスト≫

≪ソラルル≫

≪ノエアイナ≫

どうやら、町への“道（ゲート）”を繋ぐ魔方陣のようだ。

「これで始まりの町に帰れる。さて。って、始まりの町って【ファスト】って名前だったんだ」

この名前の【ファスト】って、ファーストのもじりだよね。他の第1の町はなんて名前なんだろう？　掲示板には載ってるかな。まあ、そのうち分かるか。

そんなことを思いながら、【ファスト】をタップした。

そして、出てきた光の扉に入っていった。

◇◇◇

【ファスト】の広場に出たら、なんか賑わっていた。

パーティの勧誘や呼び掛けをしていたり、物々交換の交渉をしていたり、戦闘職や生産職関係なく、ここに集まっているようだった。

俺はここにいてもすることがないので、そそくさとその場を離れて、広場を出た。その間に聞いた話だと。ソラルルの“道（ゲート）”を開通させたパーティ［透き通った水（クリア・アクア）］メンバーの名前は、メリア、ラピス、ミリシュ、みかん、くるみ、ミム、らしいとはわかった。メリアとラピスは双子で、βテスト時のトッププランカーらしく、ほかのメンバーも有名どころとのこと。

トッププランカーか。そういえば、何のランキングのトップなんだろう。行動にポイントみたいなものがあって、それの総合点とかかな。

そんなことを考えながら、今のリアル時間を確認した。結構いい時間だった。

「こんな時間か。そろそろは、《ダイブアウト》するかな」

その後、いつの間にか、姿が消えていた、スフィ、ベル、ファノを呼んで、皆でご飯を食べて、僕は《ダイブアウト》した。

◇◇◇

《ダイブアウト》をしたら、ＶＲＰをはずしてベッドを降りた

「ん～。軽く飲み物を飲んでから寝るかな」

１階に下りて、水を飲んでから部屋の戻り布団に入った。

「あいつらは、まだやってるのかな」

そんなことを呟いて、今日もあっという間に寝てしまった。

赤い竜と財宝と王家の・・・・・・。（後書き）

Ｌｖ２８→Ｌｖ２５５→Ｌｖ１２

巨神剣　ＥＬｖＭ（エクシードマスター）、双剣Ｌｖ２２、回避Ｌｖ２６、身体強化Ｌｖ２３、発見Ｌｖ１７、魔力操作Ｌｖ４３、光魔法Ｌｖ１４、布防具Ｌｖ８、調合Ｌｖ２９、研磨Ｌｖ１９

カンストして種族進化しました。本来１人で倒すボスじゃないので、経験値がおかしなことに。

ありがとうございました。

オムレツと三毛猫♂と研磨と……。　～ある意味では、素振りです～（前書

お願いします。

茹だる様な暑さで目が覚めた。

「つぅ～。今日は昨日より増して暑いな」

体をベッドの上で、体を起こす。時計を見ると時間は8時過ぎだった。

「寝過ぎたかな。さて、洗濯でもしますか」

ベッドの上で体を伸ばしてから、ベッドから降りて1階へ下りた。

カチャ

リビングに入ったが、妹はまだ起きていないようだ。

顔を洗いに洗面台へ行って、ついでに洗濯機を回す。

「よし。これで洗濯はいいから。朝ごはんは、確か卵とパンがあったから、パンにスクランブルエッグか目玉焼きでも乗っけて食べるか」

そんなことを一人言いながら、キッチンへ行き、卵を冷蔵庫から2つ取り出し、ついでにオムハヤシのときに余った生クリームも取り出した。卵と生クリームをボウルで混ぜ始めた。何と無く生クリームを混ぜて泡立てたあとに、卵を入れた。フライパンを火に掛けてバターをいれて、卵を混ぜながら投入する。手早く混ぜながら、形

を整えて完成。

「あれ？　これオムレツだよね。どこで間違えた？　まあ、いいか」

ケチャップと塩胡椒を取り出し、焼いたパンとオムレツを持ってリビングに行き、机に並べた。

「いただきます」

テレビをつけて、見ながら食べ始めた。

あ。E2のニュースやってる。3次予約分の出荷が早まるのか。へぇ～。

「ごちそうさま」

思いのほか美味しかった。生クリーム結構すごいな。いろんな意味で。

ちょうど洗濯機が止まったので、洗濯物を干し始めた。

「「おはよー（う）」」

「おう。おはよう」

妹が起きてきた。それにしても、なんで同時に起きて、……まさか。いや、皆まで言うまい。

「ご飯は何？」

「パンがあるから焼いて食べて」

「えぇ、パンだけぇ」

「なら、待ってて。洗濯干したら、何か作るから。って、言うか卵あるから、自分で作れ」

瑠璃が文句を言ったので、言い返した。

「私が作ってもいいんだね」

「茜。お前は頼むから作るな」

「あはは、茜は、ひどいからねぇ」

僕が茜を止めたら、瑠璃が大笑いしていた。

「はあ。分かった、作るから。茜は拗ねるな。瑠璃は落ち着け」

とっとと洗濯物を干して、簡単な卵料理を作った。ついでにウインナーも焼いてやった。ケチャップで。

妹が椅子に座って待っていたので、完成した、断食破(あさごはん)りを持って行った。

「「いただきます（ぅ）」」

もぐもぐもぐ

「あ、兄ちゃん。昨日倒したよ。ボス。それで次の町に行けたよ。

一番乗りで初回討伐ボーナスをゲットしたよ。もう少しでタクさん。あ、卓巳さんのキャラネームがタクって言うんだけど。で、もう少しで、そのタクさんのパーティに取られるところだったよ。あの時、急げって言ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

やっぱり、クリア・アクアは妹のパーティでしたか。そういえば、卓巳のパーティって、なんて名前なんだろう。学友（あいつら）のキャラネームは覚えてるから、そのうち分かるかな。

「次の町はねぇ、ソラルルって名前なんだよぉ。そこでは宿屋以外でダイブアウトするとＨＰやＭＰが回復しなくなってるんだぁ」

うん。そんなことを前に聞いた気がするな。

「ちょっと、瑠璃。兄ちゃんはやってないんだから、それじゃ分からないでしょ。始まりの町ではどこでダイブアウトしても、町の中なら時間経過でＨＰとＭＰが回復できたんだけど、ソラルルではそれがないんだよ」

「それなら、はじめの町に戻ってダイブアウトすればいいのでは？」

「それは現実的じゃないんだよ。町の広場にゲートがあるんだけど、始まりの町とソラルルでは１日に１回しか使えないんないだよ。それが、始まりの町だけなのか、今後もそうなのかはまだ分からないけど」

「そうなのか。場合によっては大変だな。ホームとかギルドの話はどうなったんだ？」

第2の町では、ホームが買えると聞いた。あと、ホームがギルド設立の条件とかも言ってたよね。

「ホームじゃなかったよぉ。ホームは第3の町［エレスト］からだってさぁ。公式通り、“戸建”だったよぉ」

「そうそう。確かにあれは“戸建”だね」

？

「ホームとは違うのか？」

「うん。あれは、ホームじゃなくてぇ、貸家みたいな感じかなぁ。最低でも1週間単位で借りれば宿屋よりも安いからねぇ。それにぃ、あらかた中に揃ってるんだよねぇ」

「そうそう。公式サイトにホームでなく、家が持てるって書いてあったところを気にするべきだったね。けど、鍛冶なんかの生産職にはいいかも。貸家には生産設備が付いてるところもあるからね。しかも、宿の必要がないから、普通に生産設備借りるよりかなり安く済むからね」

「ほほう。それはいいんじゃないか」

ナツキさんやトーカさんは喜びそうだな。

「生産職にはね。私たち戦闘職にはあまり恩恵がないのよね」

「そうなんだよぉ。それにぃ、1日1回は行けるからぁ、あまり利点がないんだよねぇ」

「そうか。もしかしたら、生産職は設備にお金が掛かるだろうから、その分の初心者救済とか補填かもな」

初心者の生産職は、金欠で苦労しそうなシステムだったからな。ただ、乗れば一番儲かりそうだよね。

「「なるほど（ぉ）、一理あるかも（ぉ）」」

納得できるってことは。やっぱりお金がかかるのか。

「「ごちそうさまでした（ぁ）」」

自分の部屋に戻ろうとしていたので引き止めた。

「そうだ。晩御飯は何がいい？」

そう。晩御飯を聞くために。

「回鍋肉　（ぅ）」「エビチリ」

「なんで中華風なの！？　まぁ、海老は高いから、今晩は回鍋肉ね」

「「は～い」」

そのまま、二階に上がっていった。僕は回鍋肉の素と材料を買いに行ってから、《ダイブイン》した。

◇◇◇

「さて。今日は何をしようかな。っと」

今日も空は真っ青に晴れていた。

ピロリーン

ん？

「主」「主殿」「ご主人様」

「おう。みんな。今日は勢ぞろいだな」

今日はみんないた。まあ、どこかに行って、昨日みたいなことになるよりはいいか。

「今日は主と回ろうと思いまして」

「そうか。なら行くか」

「今日は何をするのですか」

「う～ん。……あ、猫を忘れてた」

僕はアイテムボックスの猫を見た。

［三毛猫♂（飼い主：ノーラン家）］

ＨＰ：１０　ＭＰ：１２０

ノーラン家の飼い猫。ノイル・ノーラン町長に一番懐いている。

町長の家の猫か。って！　町長なんていたんだ。いや、そりゃいるか。

「猫ですか。ああ、あのときの」

「そう。今見たら、町長の猫みたい。届けに行こうかな」

「それが、いいと思います」

よし。行くか。ちなみにＮＰＣの皆さんに場所を聞きました。たぶんＰＣは把握してないだろうから、答えてくれたのはＮＰＣのはず。

◇◇◇

町長の家に着きました。周りの家と大きさは同じくらい。いや、きもち大きいかな。

「こんにちは～。誰かいませんか～」

何故か語尾を伸ばしちゃうよね。なんでだろう？

「は～い」

トタトタトタ、ガチャ

「どちらさまですか？」

女性が出てきた、町長の奥さんにしては若いからから娘さんかな。
僕は、さっと猫をアイテムボックスから出した。

「すみません。こちらノーラン町長のお宅でしょうか？」

「そうよ。でも、あいにく父は出かけておりまして、今居ないんです」

やっぱり娘さんのようだ。町長さんはいないか。でも、間違ってないならいいか。

「あ、いえ。ノーラン町長のお宅でしたら、問題ないです。この猫なんですけど」

そういいながら。三毛猫を見せた。

「あ！　ミケちゃん」

名前まんまじゃね！？

「探していたのよ。半年前にいなくなって、死んでしまったと思っていたのに」

渡したら、涙ぐみながらそういった。
もしかして、あの森の中で半年か！　いや、さすがにそれはないか。

「どこにいたのですか？」

「北の森を少し奥に入ったあたりです」

「白闇の森ですか。そんなところに行っていたのね。でも、無事でよかった。お父さんも喜ぶわ。一時期すごく沈んでいたから。本当にありがとう」

白闇の森？　朝霧の森じゃないのか？

「どういたしまして。喜んでもらえてよかったです。それで、白闇の森というのは？」

「？　ああ。白闇の森というのは、朝霧の森の別名です。この町では、白闇の森のほうが、みんな分かりやすいと思います」

「それは、また、どうしてですか？」

「あの森の先には、湖があるんです。その湖の周辺から深い霧に包まれていまして、先に進むことが何故かできないんです。運がいいと、なんとか湖までは行けるのですが、そこから先は、完全に霧に包まれて、何があろうと先に進めないんです。その場所が、まるで闇の中のようになので、真っ白な闇の森で［白闇の森］なんです」

「なるほど。……もしかして、他の場所にも別名とかはあるのですか？」

「ええ。西の沼地にはあるわ」

「なんて別名なんですか？」

「巨兵の沼地っていうの」

「巨兵ですか？」

「そうよ。あそこに沼地には、巨大な兵士が眠っているって言い伝えがあるの」

「だから、巨兵の沼地ですか」

「そういうこと。まあ、巨兵の話は子供のしつけに使う話だから、本当にいるか分からないけどね。それに白闇の森の先にはエルフの里がある、なんて、言い伝えもあったわね」

「へぇ～。いろんな話しがあるのですね。参考になりました。ありがとうございます」

エルフの里は本当です。ハイ・エルフですが。

「いえいえ。こちらこそ、ミケちゃんを見つけてくれて感謝してるわ。お礼ができたらいいんだけど……」

「いえいえ、話しが聞けただけで十分です。それでは、これで失礼しますね」

「あっ、ちょっと待って」

スタタタ、と家の中に入っていった。そして、スタタタ、と出てきた。

「はい。これ持っていって。せめてものお礼」

アップルパイだった。名前はアルプパイだけど、見た目はアップル

パイだ。

「美味しそうですね。遠慮せずにいただきます」

「ええ。それじゃ、いつでも遊びにきてね。歓迎するわ。え～と」

「あ、申し遅れました。僕の名前はニズといいます」

「わかったわ、ニズ。私の名前はアイネよ。いつでも来てね」

「はい。ありがとうございます」

そう言って、町長の家を後にした。

◇◇◇

次は何をしようかなっと。あ、そういえば、さっき三毛猫を見たときに、アクセサリに髪飾りがあったな。アクセサリが獣耳だけじゃ寂しいから、着けとこ。（さすがに、マントとかは着けたくないです）

さて、ああ。

「そういえば、何か音が鳴ってたな。多分あの音は」

気付いたら、視界の端っこにチカチカしていた。

やっぱりメールか。だれから、って、ナツキさんかトーカさんしか

ないか。

メッセージを開封した。トーカさんからだ。

〈ニズの貰ったドラゴンの素材が、余っていたから、リベンジにニズオーダー扱いで普通の双剣を作ったんだが。なんか、また変なことになった。また、価格が出ないんだ。とにかく渡したいから来てくれ。場所は昨日と、同じ場所だ〉

いったい何があったんだろう？

結構近かったので、早速露天に向かった。

歩くこと数分で着いた。トーカさんはお客さんの対応をしていたので、少し待ってから声をかけた。

「トーカさん。お待たせしました」

「おう。来たか。早速だが見てくれ」

そう言いながら、トーカさんは扇子？　扇？　を2本出した。

「え！？　双剣ですよね？」

「ああ。双剣だ」

受け取って質問した。やはり双剣のようだ。

「それあえず、見てくれ」

「分かりました」

僕は受け取って、詳細を見てみた。

双剣　［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］

扇のような形状の、夕暮色に輝く刃を持つ双剣。ドラゴンの鱗を材料としており、その強度は同位のドラゴンの鱗さえ、容易く切り裂き貫くことができる。扇の形状をしているので、扇のようにつかえる。扇ぐと無数の風の刃が飛ぶので、自分や仲間を扇がないように。

効果：Ｓｔｒ＋６７２　耐久８０００００　スキル：［扇起衝刃］［夕暮の刻］

うん。

「確かに双剣ですね。はい、どうぞ」

そう言って、トーカさんにも見えるようにした。

「おう。……これは、また凄いな。でも、双剣って言って、扇って説明があるな」

「はい。鉄扇とかでなく双剣っていうのが、凄いですね」

「ああ。……これ、使うか？」

「いいんですか？」

「ああ、お前から貰った材料だしな。お金もいらん」

トーカさん。男前です。ですが、さすがにこれを無料はいただけませんな。

「トーカさん。どのくらい壊しましたか？」

「今回は鍛冶鎚を１３個と炉を１つだ」

「さすがにそれで無料は、ダメですよ」

「う～ん。でもな。これも金額が出てないからわからないんだよな。もしかしたらオーダーでドラゴン素材を使ったものは、価格が出ないのかもしれないな」

「う～ん。ならば、私の作ったものと、交換でいかがでしょうか」

ジャムや飴なら、無駄にはならないだろう。明らかにこっちのほうが安いが、まあ、このくらいなら受け取ってくれるでしょう。

「何を作ったんだ？」

「ジャムです」

「料理のスキルが見つかったのか！？」

「いえ。調薬で薬を作ってるつもりが、ジャムが出来ました。あ、後、飴も付けますよ」

「薬作って、ジャムと飴って。それはなんか凄いな」

「いやいや。照れますね」

「褒めてはいないが」

はい。知ってます。そんな気はしていました。

「それでどうでしょう？」

「まあ、いいだろう。俺もスキル経験値が美味しかったし、無料でもいいんだがな」

「ダメですよ。　はい。どうぞ」

とりあえず、ミラクルミックスドロップ以外のジャムと飴、ついでにポーションも渡しとくか。

「おう。貰っておくよ」

「それでは、もう行きますね」

「おう。気をつけてな。俺はこのあと【ソラルル】に行こうと思うから、何かあったらそっちに来てくれ」

貸家が目当てかな。なんか臨時店舗としても使えるようだし。

「わかりました。それでは」

「おう」

さて、深き沼地で巨兵でも探しましょうかね。見つかるとは思えないが。
そういえば、トーカさんの一人称が、私とか俺とか変わっているのだが、どっちが素なんだろう？
そんなことを思いながら、西門に向かって歩き出した。

◇◇◇

と、いうわけで、やってまいりました。［深い沼地］は思いのほか暗い。
「なんか。暗いね」
「そうですね。沼地というからには沼や池があるのでしょうね」
「そうだね。でも、ここら辺にはないな。それに、確か状態異常攻撃を持ってる敵が多いんだっけな」

ん？　魔力の反応が
ぐにょん、ぐにょん、ぐにょん
なんか芋虫みたいなのが現れた。
ふしゅーーー

「な！」
なんか、糸みたいなものを出してきたので、真横にステップしてかわした。

［ポイズンビートル］
ＨＰ：１１０
ＭＰ：２０

名前からして毒持ちか。ちなみに見た目はキャタ○ピーです。あれは迷作だよね。迷作になったのは途中からで、最初は名作だったらしいが。（※個人の感想です）

ふしゅーーふしゅーーふしゅーー
なんか、連発してきた。

こちらは、糸をかわしながら、今日貰ったばっかりの双剣［夕暮（ダンシン）之妖精（グ・フェアリー）］を装備して、鞘から抜く。

「いくぜ」
鞘から抜いた時に、同時に扇を広げて、掛け声と共に牽制のために扇いだ。

スパパン、スパン
なんか、衝撃破。というか、衝撃刃が扇から出て敵を細切れにした。

「……。うん。凄いなこの剣」

「主」「主殿」「ご主人様」
じーーーーーーーー

三人がジト目で見てきた。
しょうがないでしょ。近づくの何か嫌だったんだもの。

「もっと奥まで進もうか」

気にしない。気にしない。

採取をしながら、更に森の奥のほうに進んでいった。

◇◇◇

結構、奥のほうまで来たと思うんだが、ここには芋虫以外にモンスターはいないのか？　状態異常が多いというから、蜘蛛とか、スライムとか、蜂とかいると思ったんだけどなぁ。

何かいないかと歩いていると、ふと気付く。

「そういえば、気にしなかったけれどトーカさんの所でスフィやベル、ファノのことは聞かれなかったな」

「通常、精霊は契約した者以外には見えませんし、触れることもできませんから。ベルに関しては街中では、気を使って姿を消してますから」

「なるほど。ん？　じゃあ、僕って独り言が多い人になるのか？」

それは恥ずかしいな。とにかく恥ずかしいな。

「街中では念話で話せばいいのでは？」

「そんなことできるの？」

「はい。『こんな感じです。どうでしょう』」

「凄いな。なんか頭の中に響いてくる感じかな。僕もできるの？」

『はい。私のことを強く思って話せば出来るはずです』

「わかった。う～ん『こんな、感じ？』」

上手くできてるかな。なんか、声も出てる気がするが。

『はい。できてますよ』

『そうか。うん。少し集中しないと出来ないけど、街中ならこの方がいいかな』

これで、不思議ちゃんにならないだろう。他の人もそうしてるのかな。いいこと教えてもらったな。

更に進むと大きな岩があった。そこで、何かの反応を感じた。

ん？

そっちの方向を見ても、岩しかなかった。

「何もないよな」

「どうかしたの」「どうした」「どうかしましたか？」

「いや。なんか、この岩から反応があってさ」

「反応ですか」

そういいながら、ファノがぺたぺた触りはじめた。するとベルが、

「まかせろ！」

シュゴッ、ドゴガゴーン

ブレスというか、火炎弾を岩にぶち当てた。

「きゃーーーー！！」

ファノがこちらに吹っ飛んできた。そこをスフィが華麗にキャッチ。

「ファノ。大丈夫？」「ファノ。大丈夫ですか？」「すまん。ファノ生きているか？」

みんな（ファノは除く）で安否を確かめる。

「大丈夫です。とっさに水盾で防ぎましたので。衝撃をすべて消すのは無理でしたが。ベルさん、次は攻撃する前に、事前に言っていただけると助かります」

「本当にすまなかった」

ベルは謝り、僕とスフィはほっと息をはいた。

ふと、ベルは岩の方向を見て

「ふむ。しかし、これでも、無傷とは。これは岩ではないのか？」

と、言った。

僕たちもそちらを見ると、確かにそこには無傷の岩があった。

「あの威力で壊れないか。うん。それならちょうど良いかな」

僕は双剣（夕暮）を抜いて、切りかかる。

カキン

ふむ。少しも欠けていないな。どっちも。

よし。これなら、双剣を振る訓練が出来そうだ。

「スフィ、ベル、ファノ。ここでちょっと訓練していいか？　素振りもいいけど、これならいくら切っても切れないから、訓練によさそうなんだよ。樹とか切るのは環境破壊になるからさ。」

「うん」「わかった」「わかりました」

よし。はじめるか。

ブン、カキン、ブン、カキン、ブンブン、カキンカキン、ブンブン、カキンカキン

よしよし。今までなんか敵に囲まれてとかで余裕がなかったからな。

よし。

「はあっ！」

カキン、カキン、カキン、

「はあ、はあ、はあ、疲れた。って、なんでスフィまで息が荒いんだよ」

「知りたいですか？　知られたら、もう止まりませんよ。主」

スフィは、頬を上気させ艶かしく微笑をうかべて言った。

「そ、そうか。なら気にしないでおこう」

「そうですか」

なにか危険な気がする。まあ、気にしない。としよう。

「あれ？　ベルとファノは？」

「ベルはちょっと狩ってくるって、ファノはちょっと獲ってくるって」

「なんだろう。少し不安なんだけど」

気にしてもしょうがないか。

そういえば、双剣の耐久度は大丈夫かな。

双剣　［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］

効果：Ｓｔｒ＋６７２　耐久　７７６９１３／８０００００

結構、耐久度が残ってるな。うむ、次は双剣［黄昏之双子］のほうでやろうかな。終わった頃には帰ってくるでしょう。

「んじゃ、スフィ。次はもう一本のほうでやるから。また、警戒をお願いね。軽くで良いから」

「気付いていたんですか」

「ん？　それは当たり前だよ。スフィが何もせずに見ているだけっていうのは考えにくいし、たまに気配が動いていたからね」

そういうと。ぱぁぁぁ～、っとスフィが笑顔になって。

「まかせてください。どんな敵でも芥灰燼にして見せます」

凄く張り切っていた。

「ほどほどにね」

そう言って岩の前まで行って、双剣（黄昏）を抜いた。

よし。はじめるか。

ブン、ガキン、ブン、ガキン、ブンブン、ガキンガキン、ブンブン、ガキンガキン

よし。

「はあっ！」

ガキン、ガキン、ガキン、

二人とも帰ってきていた。

「ありがとう。さすがに一度休憩したよ。そっちは何かあった？」

「あまり良いものはなかったな」

「こちらも、たいしたものはなかったです」

二人の基準でたいしたものっていうのが、何か気になるな。

「そうか。それは残念だったな。ここにはいないのかもな」

「そうだな」「そうですね」

二人はそこまで凹んでいなかった。もとより暇つぶしのようだ。

……そういえば、ステータスはどうなったかな。素振りでもスキル経験値が少しは入ると思うが。……まあ、町に戻ってからでいいか。

「そうだ。研磨しよう。と、その前に双剣（黄昏）の耐久度を確認しないとなっと」

耐久度を確認。

双剣［黄昏之双子（トワイライト・ジェミニ）］

効果：Ｓｔｒ＋１１８６　耐久　１４９０７８５／１５００００

結構耐久度が減ったな。

「さて。それじゃ、研磨手伝って」

「はい」「まかせろ」「わかりました」

双剣（夕暮）、双剣（黄昏）ついでに、巨神剣も出す。

まずは、双剣（夕暮）からはじめる。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
よし、出来た。

次に、双剣（黄昏）にうつる。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
よし、出来た。

最後に巨神剣を研磨する。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッシャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
ッ、シャッ、シャッ、シャッシャッ、シャッ、シャッ、シャッシャッ
ッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッシャ
ッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
シャッ、シャッ、シャッ、シャッシャッ、シャッ、シャッシャッ、
シャッ、シャッ、シャッ、シャッシャッ、シャッ、シャッ、
シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ
ッ、シャッ、シャッ、シャッシャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャ
ッ、シャッ、シャッ
・・・

さて、どうなったか、確認しようかな。スフィの頭を撫でながら確認した。

双剣　［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］：魅力増加
耐久　８０００００／８０００００
魅力増加：魅力が上がり、攻撃が美しく見える。

双剣　［黄昏之双子（トワイライト・ジェミニ）］：防御貫通
耐久　１５０００００／１５０００００
防御貫通：盾や魔法による防御を貫通する。

巨神剣　［神姫遣神星乃御柱（カミヒメノツカイミホシノミハシラ）］：万物切断
万物切断：万物をあらゆるものを切断する。

ふむ。防御貫通と万物切断は、まだ意味がわかる。いや、万物切断もある意味では、意味が分からないが、まだいい。魅力増加ってなんだよ！　魅力ってパラメータはないだろう！？　能力付加の基準が分からない。それに耐久も回復するのね！？

「みんな。ここには何もなさそうだし、訓練も十分だし、帰ろうか」

「うん」「おう」「はい」

同意を得られたので町に帰った。道中、スフィが張り切ってしまって、敵を感知した瞬間に瞬殺してしまい、僕は何もせずに町へ着き

ました。

オムレツと三毛猫♂と研磨と……。　～ある意味では、素振りです～（後書き）

ありがとうございました。

武器と素材とステータスと……。（前書き）

お願いします。

ほとんど説明、って、いうか設定集みたいになっているので、読み飛ばしても問題ないです。

武器と素材とステータスと……。

町に簡単に着いた。

さて、ステータスでも確認しますか。そういえば、アイテムボックスは確認したが、ステータスの確認って、開始時以来な気がするな。

俺は初日にお世話になったベンチへ行き、座ってステータスの確認をした。

ステータス画面を開いた。

＝＝＝

Ａｇｉ：１６５９８
Ｌｕｃ：２１０９９

ＦＰ：１１５２４
ＳＰ：１７７

〔アビリティ〕：［万物顕現］

〔セットスキル〕
［巨神剣ＥＬｖＭ（エクシードマスター）］［双剣Ｌｖ５０ＭＡＸ］［光魔法Ｌｖ１７］［布防具Ｌｖ１１］［回避Ｌｖ２９］［身体強化Ｌｖ３２］［魔力操作Ｌｖ５０ＭＡＸ］［発見Ｌｖ２１］［調合Ｌｖ２９］［研磨Ｌｖ４７］

〔控えスキル〕　なし

〔称号〕
［神精霊の愛娘］［森羅万象を受け流す者］［一気倒千］［孤立戦陣］［竜の友］［竜殺し］［トラップマスター］［神代之神姫］［ハイ・エルフに認められし者］［黙示の終焉を覆す者］［不可能を撃ち壊す者］

〔所持称号効果〕▼

〔所持金〕：１，２８４，００６，６７１，０７２，０００Ｄ

〔装備〕
Ｍ武器：巨神剣　［神姫遣神星乃御柱（カミヒメノツカイノホシノミハシラ）］（不顕現）

S武器１：双剣　［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］（納刀）
S武器２：双剣　［黄昏之双子（トワイライト・ジェミニ）］（未装備）
頭：［灰狼のニット帽］
胴：［灰狼のワンピース］
手：［灰狼の手袋］
腰：［灰狼のショートパンツ］
足：［灰狼の靴］
アクセサリ１：［神獣耳（ケモミミ）］
アクセサリ２：［恋美と夜天（ウェヌス）の髪飾り（ニュクス）］
アクセサリ３～１０：なし

〔装備付加効果〕▼

＝＝＝

やっと、時間停止から帰還し、
「まあ、こんなこともあるか。Ｓｔｒは巨神剣だと思うし、所持金は、あの財宝だな。うん」

よし。さて、次はスキルの確認だな。確かレベルが上限に達したら、成長させることが出来るはず。

まずは、双剣かな

［双剣Ｌｖ５０ＭＡＸ］

派生先はこの６つ
［瞬双剣］
上位スキル。速度が上がり手数で攻める剣術。
［地双剣］
派生スキル。地属性を付加した剣術。手数より攻撃力と突貫力に優れる。
［水双剣］
派生スキル。水属性を付加した剣術。変幻自在な攻撃に優れる。
［火双剣］
派生スキル。火属性を付加した剣術。手数より攻撃力と攻撃範囲に優れる。
［風双剣］
派生スキル。風属性を付加した剣術。手数と攻撃範囲により相手を翻弄すること優れる。
［双刃紅葉（ふたばもみじ）］
特殊スキル。二つの刃が紅葉と舞い踊る。刃の通った軌跡には、敵

のみ切り裂く刃が残る。

ふむ。ここはやはり［双刃紅葉（ふたばもみじ）］でしょう。ＳＰは２０も食うのか。まあいい。決定。

次は［魔力操作］だな。
この３つから選択するようだ

［魔法操作］
上位スキル。魔力を操作することが上達し、魔法を操作できるようになる。

［魔力感知］
派生スキル。魔力を操作することが上達し、感知能力が上昇。相手のステータスまで判別できるようになる。

［生命之根源操作（マナ）］
特殊スキル。生命体が持つ魔力だけでなく、空気中に存在する力さえも操作できるようになる。これは生命の根源（マナ）の存在を、真の意味で知るもののみがたどり着ける。

これは［生命之根源操作（マナ）］に決まりだな。これもＳＰ２０消費ですか。まあ、いいか。決定。

スキルはこんな感じかな。

そういえば、この種族はなんなんだろ？　進化したことに、気をと

られて確認してなかったな。えっと、詳細は。

［美幼女（美幼女神）］

あどけなさの中に婉然さを持つ、羞花閉月・天衣無縫な超絶可愛い至高の美幼女。そんな美幼女が、美幼女神様になった御姿。

シークレットでネタなユニーク種族の上位、もとい神。悪ノリと我が儘と悪ふざけのネタとして作られた種族の上位種族。そのため、よく進化条件を達成できたと感心してしまう。進化条件をふざけて入れたので、進化できる可能性は０％に等しい。ぶっちゃけ進化できた人は、幸や不幸を超えて、『もはやなんなの？』　状態である。その分、種族特性も、『もはやなんなの？』　状態である。いろいろ『もはやなんなの？』である。

〈種族特性〉

【美幼女神化】と【神眼】が使用可能になる。

布防具以外の防具を装備した場合、Ａｇｉが０になる。布防具の場合は、防具の耐久度が消費しなくなり、破壊不可能になる。

１つ目のスキルが変更できなくなる代わりに、そのスキルのスキル経験値が１００倍になる。そして、１つ目のスキルを完全習得した場合、その後すべてのスキルの必要経験値が半分になる。さらに、一つ目のスキルを使用した場合のスキル経験値は、他のセットしてあるスキルに分与される。

全ダメージ半減、全状態異常無効、呪無効、阻害妨害拘束系統無効、能力低下系統無効。

ＭＰがレベルアップ毎に、２０００増加する。

身長は９７ｃｍ、体重９ｋｇです。

なお、運営や開発への苦情や変更などは、一切受け付けません。

『Ｙｅｓ　ロリータ、Ｌｅｔ’ｓ　タッチ！　可愛いは正義、ロリ女神も正義だ！　そして、これは犯罪ではない！　ただ、愛でているだけだ！！』　ｂｙ運営及び開発一同

『俺はロリコンじゃない！！　よく考えてみろ。上過ぎるより、下過ぎる方が需要は絶対的に高いだろう！　ロリ最高ぅー！！　ロリこそが私のａｂｓｏｌｕｔｅ　ｔｒｕｔｈ　ａｎｄ　ｊｕｓｔｉｃｅ！！！　誰にも邪魔はさせないぜ！』　ｂｙ開発室室長

【美幼女神化】

真の御姿である、美幼女神となる。神々しく空を舞うことができ、全てに神の力が付加される。

効果：全ステータス１０倍、全ダメージ９９％減、全属性魔法無効、全防御透過貫通

全属性の魔法を範囲・威力の規模関係なく、タイムラグゼロで高速連射可能。

【神眼】

未来以外のすべてが見える。未来が見たければ、その手で掴み取ろう。

「いろんな意味で壊れ過ぎだろう！　あと、運営、愛でるのも犯罪だーーーーー！！　そして、室長！　犯人はお前か！！」

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はぁ

つい叫んでしまった。周りに人がいなくてよかった。しかし、なんなんだこれは。強いには強いが、いろいろはっちゃけ過ぎだろ！？

ふぅ。

まあ、僕以外に被害がないだけいいか。これなら、相変わらず妹や卓巳たちにばれないだろ。

一応、［巨神剣］をスキルも武器も確認しとくか。

［巨神剣ＥＬｖＭ］
美幼女神になったことにより、超越した力が解放された。美幼女専用スキル。その力を、多くの人を守るために。しかし、やっぱり、巨大な剣を振るって戦う幼女っていいよね。そして、ロリ女神もいいですね。
≪アーツ≫
〔山崩〕：山を崩すほどの一振り。
効果：Ｓｔｒ×２　消費ＭＰ２５　攻撃範囲拡大
〔海裂〕：海を裂くほどの一振り。
効果：Ｓｔｒ×４　消費ＭＰ５０　攻撃射程延長
〔地割〕：大地を割るほどの一振り。
効果：Ｓｔｒ×６　消費ＭＰ７５　攻撃範囲延長
〔空破〕：空を破るほどの一振り。
効果：Ｓｔｒ×８　消費ＭＰ１００　攻撃範囲延長
〔山脈崩〕：山脈を崩すほどの一振り。
効果：Ｓｔｒ×２０　消費ＭＰ２００　ダメージ減少無効、攻撃範囲拡大
〔幻砕〕：幻を砕く一振り。
効果：Ｓｔｒ×３０　消費ＭＰ３００　物理耐性・透過無効
〔真切〕：真を切る一振り。
効果：Ｓｔｒ×５０　消費ＭＰ５００　防御・耐性無効
〔天貫〕：天を貫く一振り。
効果：Ｓｔｒ×１００　消費ＭＰ１０００　防御・耐性無効、射程無制限
〔隕石砕〕：隕石を砕く一振り。
効果：Ｓｔｒ×１８０　消費ＭＰ１５００　衝撃浸透、耐久力

無効、防御・耐性無効
〔星切（ほしきり）〕：星を切る一振り。
効果：Ｓｔｒ×３００　消費ＭＰ２０００　攻撃範囲拡大、攻撃射程延長、
〔御元切伏（おんもときりふせり）〕：事象を改変する、終（つい）の一振り。
効果：Ｓｔｒ×１０００００００　消費ＭＰ１０００００００　全抵抗無効、？？？

巨神剣［神姫遣神星乃御柱（カミヒメノツカイミホシノミハシラ）］
［巨神剣《神代（カミヨ）》］が本来の力を解放し、覚醒した姿。
美幼女専用のユニークワンオフ武器。やっぱり、巨大な剣を持つ幼女っていいよね。
効果：Ｓｔｒ×１０　耐久∞　スキル：〈神星〉〈万有引力〉〈万無斥力〉〈衝斬撃刃〉〈神力纏〉

うん。見事にバランスブレイクな気がするなぁ。まあ、日頃使えるサイズじゃないし、使う予定もないからいいか。巨神剣はスキルも武器も外すことは出来ないが、スキルはセット状態で待機に出来るし、武器は不顕現にしとけば消えてるからＯＫだな。
そういえば、赤い竜に使ったアーツの威力と消費ＭＰが上がってるな。何故だ？　う～ん。スキルのレベル（？）　が上がったからかな。

あとは、アビリティの［万物顕現］ってなんなんだろ？

［万物顕現］
精霊をＭＰ消費及び時間制限なしで具現化できる。また、精霊が具

現化中に、いくら力を行使しようとＭＰ消費なし。
また、万物を顕現させることができる。

……ん？

説明を見ても分からないぞ。とりあえず、今までどおりってことでいいのかな。

よし、ステータスはこんな感じでいいかな。この効果の三角はなんだろ？　なにか効果があるってことかな？

ポチッ、ポチッ、とな。

＝＝＝

Ｍｉｎ：１５６２１
Ｄｅｘ：１５１８９
Ａｇｉ：１６５９８
Ｌｕｃ：２１０９９

ＦＰ：１１５２４
ＳＰ：１３７

〔アビリティ〕：［万物顕現］

〔セットスキル〕
［巨神剣（エクシードマスター）ＥＬｖＭ］［双刃（ふたばもみじ）紅葉Ｌｖ１］［光魔法Ｌｖ１７］［布防具Ｌｖ１１］［回避Ｌｖ２９］［身体強化Ｌｖ３２］［生命之（マ）根源操作（ナ）Ｌｖ１］［発見Ｌｖ２１］［調合Ｌｖ２９］［研磨Ｌｖ４７］

〔控えスキル〕　なし

〔称号〕
［神精霊の愛娘］［森羅万象を受け流す者］［一気倒千］［孤立戦陣］［竜の友］［竜殺し］［トラップマスター］［神代之神姫］［ハイ・エルフに認められし者］［黙示の終焉を覆す者］［不可能を撃ち壊す者］

〔所持称号効果〕▲
技能ステータス２倍。全ダメージ９０％減。全属性耐性５０％。全状態異常無効。行動阻害無効。ＨＰが満タンの敵へのダメージ１．５倍。ＰＴを組んでいない状態のとき、移動中や戦闘中であっても徐々にＨＰおよびＭＰが回復する。竜に限り、ダメージ大幅増加。

あらゆる罠を無効。破壊不可能なものを任意で破壊することが出来るようになる。

〔所持金〕：１，２８４，００６，６７１，０７２，０００Ｄ

〔装備〕

Ｍ武器：巨神剣　［神姫遣神星乃御柱（カミヒメノツカイガミホシノミハシラ）］（不顕現）
Ｓ武器１：双剣　［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］（納刃）
Ｓ武器２：双剣　［黄昏之双子（トワイライト・ジェミニ）］（未装備）
頭：［灰狼のニット帽］
胴：［灰狼のワンピース］
手：［灰狼の手袋］
腰：［灰狼のショートパンツ］
足：［灰狼の靴］
アクセサリ１：［神獣耳（ケモミミ）］
アクセサリ２：［恋美と夜天の髪飾り（ウェヌスニュクス）］
アクセサリ３～１０：なし

〔装備付加効果〕▲

極寒耐性。全ダメージ８０％減。全状態異常無効。行動阻害無効。・攻撃や状態異常を相手に反射させる。発動確率は相手と自分のｌｕｃの差に依存する。（基本の確率は５０％で、そこからｌｕｃの差が１００毎に１％プラスされる。差がマイナスの場合、確率は０％になる。また、反射させた際のダメージなどは、すべて相手のステータスに依存する）

＝＝＝

……うん。見なかったことにしよう。うん。
俺は静かに、効果を非表示にした。

ステータスはこれでいいかな、あとは、手に入れたアイテムの確認でもしようかな。

アイテムボックスを開き、確認した。結構な量が入っていた。
盾って武器に分類されるんだね。初めて知ったわ。
とりあえず順番に確認しますかね。

［アイテムボックス：武器］
闘焉剣　［開闢と終焉を齎す混沌（ブラック・アンド・ホワイト）］
終わりと始まりを混沌となす。左剣は開闢、右剣は終焉を表す、二本一対の双剣。双剣にも拘らず片手剣としても使える特異な剣。赤い竜を滅したものに与えられる。
効果：Ｓｔｒ＋３５００　耐久３０００００　スキル：［開闢之鈴］［終焉之鐘］［混沌之音］

神剣　［スレグイル］
剣神の使いし剣。使い手を選ぶ。中には神獣の魂が宿っている。
効果：Ｓｔｒ＋２８００　耐久２５００００　スキル：［神気纏］［神獣之魂開放］

天剣　［天宙虚空（ウラノス）］
天空を舞う剣。使いこなせれば、多くの分身を作り出ことができる。
効果：Ｓｔｒ＋３０００　耐久１２０００００　スキル：［宙舞千

剣］［閃剣穿天］

長剣　［レヴィアス］
水を操る長剣。水の魔剣に属すが、他の魔剣と異なり力を込めないと真価を発揮しない。
効果：Ｓｔｒ＋１７００　耐久８００００　スキル：［水氷魔剣］［水流操作］

炎大剣　［ヴォノルス］
炎を操る大剣。炎の魔剣に属すが、炎自体が意思を持っているわけではない。
効果：Ｓｔｒ＋１３００　耐久７５０００　スキル：［熱炎魔剣］［火炎操作］

大剣　［ノウレイズ］
一角龍の角が大剣になったもの。大剣ながら、斬ることより、穿つことに特化している。
効果：Ｓｔｒ＋１５００　耐久７８０００　スキル：［鉄貫穿角］［一閃通］

聖短剣　［クラフォル］
聖鳥の爪から出来ている短剣。聖剣に属すので、聖属性を帯びている。
効果：Ｓｔｒ＋８００　耐久３２００００　スキル：［聖域］［自然回復力強化］［聖光］

短剣　［カースネイル］
呪が付加された短剣。所持者に呪は掛からないが、斬った相手に呪が掛かる。
効果：Ｓｔｒ＋３２０　耐久１２０００　スキル：［十刺呪殺］

曲剣　［フォルシル］
様々な森の力が宿っている曲剣。斬った対象に状態異常をかける。
効果：Ｓｔｒ＋１２５０　耐久１２００００　スキル：［状態異常付加］

曲剣　［カドレル］
刀身が水で常に濡れている曲剣。特性上、使用者の力量次第で水・火系統の魔法が切れる。
効果：Ｓｔｒ＋１２００　耐久２１００００　スキル：［火水切断］［水絶］

真刀　［風色琴音（かざいろことのね）］
名刀中の名刀。振るうたびに、聞こえるはずのない音色が聞こえる。
効果：Ｓｔｒ＋３２００　耐久５０００００　スキル：［透刃］［風斬］

太刀　［ヴァルン］
呪が付加された太刀。所持者に呪は掛からないが、斬った相手に呪が掛かる。
効果：Ｓｔｒ＋４８０　耐久３０００００　スキル：［一斬呪滅］

梓弓　［事象境界（ながれず）］
破魔の力を持つ矢を放てる弓。放たれる矢は決して外れることはない。
効果：Ｓｔｒ＋２３００　耐久１８００００　スキル：［必中］［閃放烈刺］

穹弓　［一穹千想（エトス）］
放ってから当たるまでに、走馬灯さえ見せない矢を放つ。

効果：Ｓｔｒ＋２４００　耐久２１５０００　スキル：［瞬刹］［閃千討］［光ノ矢］

大弓　［アルリヴァ］
魔樹より出来た大弓。矢の刺さった場所からヤドリギが生えて、敵を締め付ける。
効果：Ｓｔｒ＋９８０　耐久１１０００　スキル：［宿木之種］［魔力修復］

狩弓　［メアディス］
魔樹より出来た狩弓。矢に一定確率で状態異常を起こす効果を付加する。
効果：Ｓｔｒ＋７６０　耐久８０００　スキル：［状態異常付加］［魔力修復］

覇斧　［地裂焔斧（アーレス）］
大地を裂くほどの一撃を放てる斧。魔斧に属し、意思を持つ炎が宿る。
効果：Ｓｔｒ＋４２００　耐久３６００００　スキル：［覇炎守護］［地爆炎鎖］

斧　［橙竜の牙斧］
橙竜の牙をつかった片手斧。下位竜程度の鱗なら切り裂ける。
効果：Ｓｔｒ＋６７０　耐久５６００　スキル：［斬鉄］

王剣［レニクス王家の王剣］
代々レニクス王家に伝わっていた王剣。象徴であり戦闘にはあまり使われない。
効果：Ｓｔｒ＋１００　耐久３００　スキル：［精霊召喚］

王杖［レニクス王家の杖］
代々レニクス王家に伝わっていた王杖。象徴であり戦闘にはあまり使われない。
効果：Ｉｎｔ＋１００　耐久１００　スキル：［精霊召喚］

星槍　［星屑聖槍（エンハンブレ）］
空に投げれば星となり、降り注ぐ。
効果：Ｓｔｒ＋３０００　耐久２８００００　スキル：［降注星屑］［天之星光］

雷鎚　［鋼砕雷鎚（ユピテル）］
重すぎて持つことさえ出来ない大鎚。雷の力が宿る、神が使ったとされる魔鎚。
効果：Ｓｔｒ＋５３００　耐久　スキル：［白雷招来］［雷珠］［雷星衝突］

絶盾　［不破返撃（イアジス）］
壊しても壊れない盾。神聖な力が宿っており、一定の魔法ははじき返す。
効果：Ｖｉｔ＋６２００　Ｍｉｎ＋６０００　耐久１２０００００
スキル：［魔法反射］［自己修復］

〔アイテムボックス：防具〕
頭［赤い竜の王冠（グレイト・レッド・クラウン）］
黙示録の赤い竜が被っていた王冠。どこの王の冠かは、わからない。
効果：Ｖｉｔ＋２００　Ｍｉｎ＋２００　耐久８６００００　スキル：［取得経験値激増］［魔力修復］

頭［レニクス王家の王冠］

代々レニクス王家に伝わっていた王冠。正式名称は神霊冠という。
王の証でもある。
効果：Ｖｉｔ＋１００　Ｍｉｎ＋１００　耐久５００　スキル：［神霊の加護］

頭［レニクス王家の髪飾り（ティアラ）］
代々レニクス王家に伝わっていた髪飾り（ティアラ）。王妃の証でもある。
効果：Ｖｉｔ＋１００　Ｍｉｎ＋１００　耐久３００　スキル：［聖霊の加護］

天冠　［天頂閃鈴（イーオンカエルム）］
女神が身につける髪飾り。もとい、鈴がついたリボン。鈴を鳴らすかは君次第。
効果：Ｉｎｔ＋１０００　Ｖｉｔ＋２４００　Ｍｉｎ＋２５００
耐久１０００００
スキル：［会心無効］［会心無効］［環境耐性］［マナ修復］

天衣　［天翔夢現（ラクテウスオルビス）］
女神が纏う衣。神々しい光を放つ白い服。もといワンピース。光らせるかは君次第。
効果：Ｓｔｒ＋１２００　Ｖｉｔ＋８１００　Ｉｎｔ＋１３００
Ｍｉｎ＋８６００　Ｄｅｘ＋２３００　Ａｇｉ＋１０００
耐久３５００００　スキル：［天翔］［会心無効］［環境耐性］［マナ修復］

天掌　［天掴万壊（クラルスドーヌム）］
女神が身につける手袋。真っ白な手袋です。身に着けるかどうかは君次第。
効果：Ｓｔｒ＋２０００　Ｖｉｔ＋１６００　Ｍｉｎ＋１３００
耐久２５００００

スキル：［魔法掌握］［会心無効］［環境耐性］［マナ修復］

天装　［天蓮刻祈（メンスメンシス）］
女神が身につける？ショートパンツ。真っ白です。身に着けると安全です。
効果：Ａｇｉ＋１２００　Ｖｉｔ＋３６００　Ｍｉｎ＋３５００
耐久３００００
スキル：［祈祷］［会心無効］［環境耐性］［マナ修復］

天歩　［天駆無歩（アンフィーネ）］
女神が身につける？靴。真っ白です。履くかどうかは君次第。
効果：Ａｇｉ＋３２００　Ｖｉｔ＋１７００　Ｍｉｎ＋１２００
耐久２５０００
スキル：［無天地］［会心無効］［環境耐性］［マナ修復］

［アイテムボックス：アクセサリ］
アクセサリ［レニクス王家のマント］
代々レニクス王家に伝わっていたマント。王の証でもある。
効果：Ｖｉｔ＋５０　Ｍｉｎ＋５０　耐久５００　スキル：［魔法抵抗］

アクセサリ［レニクス王家の指輪（ホワイトリング）］
代々レニクス王家の婚姻に使っていた指輪（ホワイトリング）。王が身につけるもの。
効果：Ｖｉｔ＋５　Ｍｉｎ＋１０　耐久５００　スキル：［婚姻の契り（甲）］

アクセサリ［レニクス王家の指輪（ピンクリング）］
代々レニクス王家の婚姻に使っていた指輪（ピンクリング）。王妃が身に着けるもの。
効果：Ｖｉｔ＋５　Ｍｉｎ＋１０　耐久３００　スキル：［婚姻の

契り（乙）」

……。

……なんか、これは、うん。売れないな。売ったとしても、上昇値が3桁までだな。あと、レニクス王家って、今の王家とは別なのかな?う～ん。考えても答えはでないか。ヒントが見当たらないし。

次は素材とか道具だな。

［アイテムボックス：素材］

薬草：どこにでも生えている。食べるとＨＰが少し回復するが、あまり効果は得られない。ＨＰ回復薬の素材。凄く苦い。

月下草：満月に近いほど多く萌える。食べるとＭＰが微少であるが回復する。ＭＰ回復薬の素材にできる。凄く苦い。

火花草：燃えやすく、火をつけると勢いよく燃える。山火事の原因は大抵これ。食べると口の中でパチパチ燃える。

始祖の葉：別名、化石の葉。太古より姿を変えていない希少な樹の葉。万病薬の素材。味は言わずもがな。

暮桜の花びら：初夏に花をつける希少な桜。味は砂糖を吐ける位、甘い。

麻痺草：食べたら動けなる危険な草。薬草に似ている。味は苦い。

毒草：食べたら危険な草。毒性はそこまで強くないので、多分死にはしない。薬草に凄く似ている。味は半端なく苦い。

睡眠草：食べたら寝てしまう草。食べる場所によっては死ねる。月下草に似ている。味は少し苦い。

即死草：神経系の麻痺毒が多く含まれている草。月下草に凄く似ている。味は甘くて美味しい。

茶葉：いろいろなお茶の原料。発酵の度合いで味が変わる。

胡桃：硬い外殻をしている木の実。リスが好きなイメージがある。

悪夢の実：別名、呪死の実。強力な呪をランダムでうける。アルプに似ているが、よく見ればわかる。味は絶品でどんな料理にも合う、味だけなら最高の食材。

コーヒー豆：赤い実。乾燥後、焙煎させて砕いてから、お湯に溶かしてお飲みください。

アルプ：林檎のような果物。味もそっくり。

知恵の実：林檎のような見た目の果物。食べると稀にＩｎｔとＭｉｎがあがることがある。味は甘酸っぱい。

凪桃：桃の様で桃でない。味はものすごく美味しい桃。食べると３年寿命が延びるらしい。

パナポ：パイナップルのような形と味をしている。食べても舌はピリピリしない。

ツピナ：落花の実の中身。地中に実をつける野菜。

落花の実：中にツピナが2つほど入っている。地中に実をつける野菜。

ゴブリンリーダーの指揮棒：リーダーな指揮棒。間違っても菜箸ではない。

ゴブリンリーダーの皮：ゴブリンよりも丈夫な皮。

呪狼の魔核：呪われそうだが、別に呪われない。武器に合成すると、スキル［呪殺］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［呪耐性］が付加される。

呪狼の呪魔核：呪われそうだが、別に呪われない。武器に合成すると、スキル［呪死］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［呪無効］が付加される。

呪狼の肉：呪われそうだが、別に呪われない。食べると、一定時間［呪耐性］がつき、スキル［呪耐性］が取得可能になる。

真竜の角：真竜の角。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

真竜の爪：真竜の爪。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

真竜の牙：真竜の牙。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

真竜の鱗：真竜の鱗。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

橙竜の肉：いわゆるドラゴンミート。美味な一品。食べられるのは、よっぽど運がいいか、金持ちか、竜殺しの強者。

竜殺しの尖巨石：竜殺しの尖った巨石。よくこれで殺せたな！？

海王龍の藍龍玉：とても綺麗な青い竜玉。武器に合成すると、スキル［水刃］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［水系統魔法無効］が付加される。

海王龍のひげ：長い長い青いひげ。

海王龍の角：鋭いが少々曲がった角。綺麗な青色をしている。

海王龍の爪：鋭い爪。少し青みがかっているが白い。

海王龍の牙：鋭い牙。少し青みがかっているが白い。

海王龍の鱗：丈夫な鱗。光に翳すと青く透き通って見える。

海王龍の肉：食べると、一定時間［水系統魔法耐性］がつき、スキル［水系統魔法耐性］が取得可能になる。

海王龍の逆鱗：触れてはいけない鱗。他の鱗と違い透明な鱗。少々

脆い。

一角龍の角龍玉：武器に合成すると、スキル［穿一閃］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［刃逸］が付加される。

一角龍のひげ：白くて長いひげ。

一角龍の一角：一本しかなく生涯伸び続ける角。真っ白。

一角龍の爪：白く鋭い爪。少し薄い。

一角龍の牙：白く鋭い牙。普通の竜の爪より弱い。

一角龍の鱗：白く透き通った鱗。竜の中では上位の強度を誇る。

一角龍の龍骨：極めて強靭な骨。貴重すぎるのと、強靭過ぎて、加工できるものがいない。

一角龍の肉：食べると、一定時間［刃耐性］がつき、スキル［刃耐性］が取得可能になる。

一角龍の逆鱗：触れてはいけない鱗。この鱗は異様に丈夫で、貫くことは不可能。

偽樹魔の魔樹核：武器に合成すると、スキル［木刃］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［自己修復］が付加される。

偽樹魔の幹：最高級の木材。その価値は１本で、一般の高級木材１００００本分。

偽樹魔の枝：異様にしなる枝。弓に最適。

偽樹魔の皮：燃えない樹の皮。生半可な剣では傷もつかない。

偽樹魔の蔦：強靭な蔦。千切ることは人の力では不可能。

偽樹魔の根：動くために発達しているためか、柔軟性が高い。

偽樹魔の材木：最高級の建材。これを使った家は魔力を持ち、住人を健康にすごせる。

偽樹王の王樹核：武器に合成すると、スキル［木斬］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［自己高速修復］が付加される。

偽樹王の幹：最高級の中でも至高の木材。その価値は1本で、一般の木材１０００００本分。

偽樹王の枝：異様にしなり、木とは思えない強靭な枝。弓に最適。

偽樹王の皮：燃えない樹の皮。名剣を持った達人でも傷つけるのは困難。

偽樹王の蔦：異様に強靭な蔦。ドラゴンでも千切るのは不可能に近い。

偽樹王の根：柔軟かつ強靭で、魔剣でも切れるかどうか疑わしい。

偽樹王の材木：至高の建材。これを使った家は魔力を持ち、住めば不治の病さえ治る。

神獣王の神珠：武器に合成すると、スキル［神獣の加護（攻）］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［神獣の加護（守）］が付加される。

神獣王の魂核：武器に合成すると、スキル［獣王牙］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［基本属性魔法耐性］が付加される。

神獣王の爪：神獣王の爪。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

神獣王の神牙：神獣王の神牙。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

神獣王の牙：神獣王の牙。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

神獣王の毛皮：神獣王の毛皮。極めて丈夫で、加工は超一流の職人でも不可能。

神獣王の肉：食べると、一定時間［基本属性魔法耐性］がつき、スキル［基本属性魔法耐性］が取得可能になる。

森狼王の碧魔核：武器に合成すると、スキル［樹木操作］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［森隠］が付加される。

森狼王の鉤爪：樹の上を跳び回るために使う爪。樹を傷つけることはない。

森狼王の爪：獲物を狩るための爪。鉄も切れそう。

森狼王の牙：鋭い牙。なぜか犬歯がない。

森狼王の毛皮：森に隠れるための毛皮。迷彩機能がついている。

森狼王の肉球：ぷにぷにもきゅもきゅな肉球。

森狼王の尻尾：柔軟な尻尾。狼なのに猿の尻尾のような形状をしている。

森狼王の肉：食べると、一定時間［木属性魔法耐性］がつき、スキル［木属性魔法耐性］が取得可能になる。

甲王魚の青魔核：武器に合成すると、スキル［水刃走］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［水・氷魔法吸収］が付加される。

甲王魚の牙：鋭い牙。鉄さえも噛み切る。

甲王魚の鱗：魚の鱗がでかくなったような鱗。竜の鱗の様に丈夫。

甲王魚の骨：鉄よりも丈夫な骨。鉄のような特性も持っている。

甲王魚の背骨：鋼鉄の様に丈夫だが、柔らくもある不思議な骨。

甲王魚の尾びれ：扇子や団扇に使えるひれ。水を湛えているので、涼しい風が遅れそう。

甲王魚の目：食べると目が良くなる。

甲王魚の肉：食べると、一定時間［水・氷属性魔法耐性］がつき、

スキル［水・氷属性魔法耐性］が取得可能になる。

聖山鳥の穹魔核：武器に合成すると、スキル［聖羽］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［聖護］が付加される。

聖山鳥の鉤爪：獲物を捕まえるための爪。

聖山鳥の爪：鋭い爪。下位の竜程度なら切り裂ける。

聖山鳥の嘴：鋭い嘴。下位の竜程度なら噛み千切る。

聖山鳥の羽根：不思議なオーラを纏った羽根。聖属性の魔法媒体になりうる。

聖山鳥の風切羽：不治の病も治す効果がある。

聖山鳥の尾羽：死に掛けている人を全快させ、不治の病も治す効果がある。

聖山鳥の肉：食べると、一定時間［風属性魔法耐性］がつき、スキル［風属性魔法耐性］が取得可能になる。

紅炎猪の紅魔核：武器に合成すると、スキル［炎属性付加］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［火魔法吸収］が付加される。

紅炎猪の炎牙：燃えている牙。加工方法が思いつかない。

紅炎猪の紅爪：燃えている爪。加工方法が思いつかない。

紅炎猪の炎毛皮：燃えている毛皮。加工方法が思いつかない。

紅炎猪の角：燃えている角。加工方法が思いつかない。

紅炎猪の肉：燃えている肉。加工方法が思いつかない。食べると、一定時間［火・炎属性魔法耐性］がつき、スキル［火・炎属性魔法耐性］が取得可能になる。

終焉竜の魔神珠：武器に合成すると、スキル［？？？］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［？？？］が付加される。御伽噺（ファンタジー）な職人でも合成が不可能。

終焉竜の真紅玉：武器に合成すると、スキル［全状態異常攻撃］が付加される。武器以外に合成すると、スキル［全状態異常無効］が付加される。伝説の職人でも合成が不可能。

終焉竜の真紅爪：伝説の職人でも加工が不可能な真紅の爪。

終焉竜の白尖牙：伝説の職人でも加工が不可能な白い尖牙。

終焉竜の真紅竜鱗：伝説の職人でも加工が不可能な真紅の竜鱗。

終焉竜の真紅尻尾：伝説の職人でも加工が不可能な真紅の尻尾。

終焉竜の肉：伝説の職人でも加工が不可能な肉。食べると、一定時間［全状態異常耐性］がつき、スキル［全状態異常耐性］が取得可能になる。

アダマンタイト：もっとも硬い鉱物。色は真黒で、鈍い光沢がある。莫大な魔力を加えながらでないと加工ができない。

オリハルコン：魔力伝達率は高いが、強度が低く、派手な光沢がある真金色なので武器には向かない。装飾に使うのが一般的。一般？

ミルリル銀：アルミニウムよりも極めて軽く、鋼鉄よりもはるかに硬い金属。白銀色。魔力伝達率はオリハルコンに少々劣るが極めて高い。防具に向いている。通称、聖銀。

ヒヒイロカネ：意思を持つ鉄と言われる。強い意志がなければ、打ちおわる前にヒヒイロカネの意思に負けて、完成させることができない。色は緋色。自己修復する金属。

神鉄：特殊金属。扱うには神霊の許可が必要。重さは普通の鉄と変わらないが、硬度はアダマンタイトをはるかに超え、魔力伝達率はオリハルコンを超える。遺失金属（レリックメタル）。

魔鉄：特殊金属。扱うには絶大な魔力が必要。重さは普通の鉄と変わらないが、硬度はアダマンタイトを超え、魔力伝達率はオリハルコンをはるかに超える。

聖鉄：特殊金属。扱うには聖霊の許可が必要。重さは普通の鉄と変わらないが、硬度はアダマンタイト、魔力伝達率はオリハルコンと同程度を誇る。

玉鋼：貴重な金属。東方の島国独自の真刀という武器を作るのに必要。魔力伝達率はあまり高くないが、一流の刀匠が打てば、無類の切れ味を持つ真刀ができる。

ダマスカス鉱：独特の波紋を生む。耐久力が他の鉄よりも高く、弾力もある。

天金：天の力が宿った金属。特定の金属と併せることで、特殊な効果を発揮する。遺失金属（レリックメタル）。

白金：ミルリル銀と同程度の魔力伝達力を持つ。武器には向かない。

金：９９．９９。魔力伝達率はなかなか高い。武器に使うのは無謀。

白金剛石（リヒトディアライト）：強固な宝石。宝石の中では最高の魔力伝達率を誇る。

星晶（ステラクリスタル）：星の加護を持った水晶。

月の雫（ルナ　ペルル）：月の加護を持った宝石。

太陽の光晶（ソレイユ　クリスタル）：太陽の加護を持った水晶。

波斯石（アッライス）：代表的な宝石。

蛋白石（オパルス）：代表的な宝石。

青玉（サピュルス）：代表的な宝石。

紅縞瑪瑙（サルドニュクス）：代表的な宝石。

翠玉（スマラクト）：代表的な宝石。

紫氷晶（アマティスタ）：代表的な宝石。

灰鉄柘榴石（イリス・カルブンク）：代表的な宝石。

翡翠（クリューソ）：代表的な宝石。

世界樹琥珀（スーキヌム）：世界樹の樹液が化石になったもの。極めて高い魔力伝達率を持つ。遺失石（レリックストーン）。

賢人の宝石（サージュ・リトス）：魔法の石。魔法薬の効力を極限まで高める。使用時には絶大な魔力が必要。遺失宝玉（レリッククリトス）。

《アイテムボックス：道具》

何かの原石：磨けば光る石。

何かの鉱石：削るか溶かせば、正体のわかる鉱石。

ただの石：何の変哲もない石。一応、名称はあるが、学者にしか分からない。

ただの石に見える石：何の変哲もない石に見える石。なんだろう？

ただものじゃない大きな石：ただならぬオーラを纏っている大きな石。

始祖の苗木：始祖の樹の苗木。大切に育てよう。

凪桃の苗木：凪桃の樹の苗木。大切に育てよう。

なにかすごい苗木：何が凄いか判らないが、凄い苗木。煌々と輝いている。

世界樹の宝珠（ユグドラシル・オーブ）：世界樹の宝珠。何かのためにとっておこう。

秩序と混沌の魔道書（アルス・マグナ）：世界の心理が書いてある魔道書。魔道書なので、さまざまな魔法も書いてある。ただし、すべて封印クラスの魔法。

生命の小瓶（命の神水）：命が詰まった小瓶。中には命の神水が入っている。聖水を入れれば、命の神水に変わる。〈命の神水：聖神霊のマナが多く含まれた水。〉

レニクス王家の羽ぺん（ライト・フェザー）：レニクス王家に伝わっていた羽筆。精霊の加護をうけている。

レニクスの古文書：５０００年以上前のレニクス王国の歴史が記されている。簡単に言うと初代レニクス王の日記。ちなみに現国王は１３８代エドワード・Ｓ・レニクスである。余談であるが、現国王は既に息子に王位を譲ったつもりでいるが、精霊冠の戴冠が終わっていないため、まだ王位継承はまだできていない。

レニクス神霊金貨：遺失金属（レリックメタル）の神霊金のみで作られた、今は既に使われていない貨幣。１枚で国が買える価値がある。レニクス精霊金貨１００枚で、１枚だった。

レニクス精霊金貨：遺失金属（レリックメタル）の精霊金のみで作られた、今は既に使われていない貨幣。１枚で小国が買える価値がある。レニクス王金貨１００枚で、１枚だった。

レニクス王金貨：王金に遺失金属（レリックメタル）の天金が含まれている、今は既に使われていない貨幣。今の王金貨には遺失金属（レリックメタル）の代わりに、ミルリル銀とオリハルコンが含まれている。現在のディア王金貨と形状・デザインが異なる。価値は現在のディア王金貨の１０倍以上。レニ

クス白金貨１００枚で、１枚だった。

レニクス白金貨：白金に遺失金属（レリックメタル）の天金が含まれている、今は既に使われていない貨幣。今の王金貨には遺失金属（レリックメタル）の代わりに、ミルリル銀が含まれている。価値は現在のディア白金貨の１０倍以上。レニクス金貨１００枚で、１枚だった。

レニクス金貨：金に遺失金属（レリックメタル）の天金が含まれている、今は既に使われていない貨幣。今の金貨には遺失金属（レリックメタル）の代わりに、白金が含まれている。価値は現在のディア金貨の１０倍以上。レニクス銀貨１００枚の価値があった。他に、銀貨、銀板、銅貨、銅板、石貨があった。今現在では同じ形状。デザインのものは使われていない。当時レニクス金貨１枚で、一般の４人家族が１年暮らせた。今の現在の相場では、レニクス金貨１枚で４人家族が１０年以上暮らせる。

［アイテムボックス：その他］

［刻止の封印柩］

中と外の時間の進み方が異なる柩。見た目から柩と名がついているが、本当に柩なのかは不明。何かが中で眠っている気がする。封印柩には鍵穴のようなものはなく、外側から封印する力も宿っていない。そのため、内側から封印が施された可能性がある。

［レニクス王家の鍵］

代々レニクス王家に伝わっていた鍵。ちなみのどこの鍵かは分からない。

［失われし神樹の種子］

太古の昔に失われた神樹。その種子。いつ目覚めるとも分からない。この種子は、いまだ眠っている。

うん。素材も売れないな。自分で使う専用にしよう。まあ、分からなくなったらナツキさんやトーカさんに相談しようかな。素材以外は流し読みだが、問題ないだろう。

……よし。確認は終わった。これ以上はどうしようもないからな。

あ、そういえば、アイネさんから貰ったアルプパイってどんな効果なんだろう？

［アルプパイ］

アイネさんから貰ったパイ。もともとは町長のおやつだったもの。実は間違えてアルプ以外にも、知恵の実と悪夢の実が入っている。食べても死にはしない……と……思……う……よ？　ちなみに味は絶品で、一度食べたら止まらない。呪の強度はレベル？。効果：空腹度回復。呪毒、呪弱、呪麻痺、呪睡眠のいずれか２つの呪をうける。

成長：Ｉｎｔ＋３、Ｍｉｎ＋１

うん！？これ僕が貰わなかったら、町長はどうなっていたんだろうか？　と、言うかアイネさんは味見とかしなかったのかな？　いや、していたら大惨事だったか。しかし、ステータスは成長ってことは、良いのか悪いのか分からないな。

よし。ひとまず洗濯物をしまいに《ダイブアウト》するかな。

『スフィ、ベル、ファノ。ちょっと洗濯物をしまいにダイブアウトするね』

『うん。わかったよ』『おう』『はい』

『『『散歩でもしてるからごゆっくり』』』

『それじゃね』

散歩という台詞に、嫌な予感がしないでもないが。

そんなことを思いながら《ダイブアウト》をした。

武器と素材とステータスと……。（後書き）

ありがとうございます。

〈修正１４０６１６〉巨神剣スキルを待機にする下りを消去。ステータス値を修正します。１８２８

道具屋と友達と室長（ロリコン）と……、一部テンプレ？（前書き）

お願いします。

道具屋と友達と室長（ロリコン）と……、一部テンプレ？

《ダイブアウト》をした。

「ん～」

体の伸びをした。

さて、洗濯物をしまうか。時間は3時だから、ちょうどいいかな。

庭に出て洗濯物を触る。

「うん。乾いてるな。生乾きでもないし、やっぱり夏はすぐ乾くな」

洗濯物をしまい、たたみ終わったころ。

ドタドタドタ、と姦しい音か聞こえてきた。

ん？　妹かな？

「兄ぃ。いるぅ？」

「お腹が少しすいた」

まあ、妹だよな。両親は今は海外で、姉（大学生）は一人暮らしだし。

「なんだいきなり。昼ごはんは食べてないのか？」

「うん。朝ごはん食べたあと、すぐ潜ったから」「第2陣には負けないよぅ」

「そうか。あれからってことは、ダイブ時間ぎりぎりまでやってた

のか」

制限時間があってよかった。なかったら廃人になってるな。
まあ、僕も小腹が空いたからちょうどいいかな。

「わかったよ。晩御飯も7時前後には作るから、軽くだぞ。コンフレークなら、買ってきてるから、それでいいか？」

「「は～い」」

台所に向かい、コンフレークを取り出した。ちなみにプレーンです。ってか、最近はプレーンしか売ってない。昔は甘いのも売っていたらしいが。

「牛乳、豆乳、ヨーグルト。どれがいい？」

「牛乳」「よぅぐるとぉ」

茜が牛乳、瑠璃がヨーグルトか。さすがに豆乳はないか。まずくはないのだが。

「甘味は、苺ジャム、蜂蜜、メイプル。どれがいい？」

「「全部　（ぅ）」」

そうきたか。まあ、全部持っていって、好きな分量の方がいいか。
フレークはこちらで決めるがな。

「おまたせ。持ってきたから、好きな量でかけな」

「「ありがとう（ぅ）。いただきます（ぅ）」」
瑠璃はだら～。茜はべた～。と掛けた。
なんか甘味のかける量が多くないか？　どちらが多いかは不明だが。
まあ、いいか。僕も食べよう。

「そういえば、兄ちゃん。今は第2の町を拠点にしてるんだけど、
その周りのフィールドに、次の町に続いてそうな洞窟を見つけたんだよ」
「そぅそぅ。そこを超えれば、チュートリアルも終わりぃ。ギルドも
多分作れるし、他にもクエスト、イベントが盛り沢山だよぅ」

おおう。そうなのか。でも、そんな簡単に行くのかな？　う～ん。
2週間っていう時間が鍵だと思ったが、時間は関係ないのか？

「そうなのか。ってことは、今回もボスがいるのか」

「うん。そうだよぉ。今回も一番乗りだぁ」
「他の人には、負けないよ」

「ははは、頑張れ」

意気込んでる妹に押され気味に、笑いながら言った。

「「うん！　ごちそうさま！」」

そう言うと、部屋に戻っていった。
タタタタトトトタタ、と明らかに走っている音が聞こえてきたが、
まあ、いいだろう。でも、時間的にはまだ入れないんじゃないか？
まあ、リアルで打ち合わせかもね。

もぐもぐもぐもぐ
くちゃくちゃ音を立ててはいけません。
「ごちそうさまでした」
自分と妹の分の食器を洗い。水を飲んで、トイレに行ってから、《ダイブイン》した。

◇◇◇

ファストの広場に降り立った。
さて、う～ん。
調合でもしようかな。ファノに貰った水も結構あるし、全部使って試行錯誤しようかな。
前回お世話になった、道具屋さんのところで、いい作業場はないか聞くことにした。多分大丈夫だろう。
「こんにちは」
「いらっしゃい。おう。あの時の嬢ちゃんか。今日はどうした？」
相変わらず、中に人が入ってるんじゃ。いや、もしかしたらプレイヤーか？　でも、プレイヤーは店舗をまだ持てないしな。
「どこかで調合をやるのにいいところを、知らないか聞こうと思いまして」

「う～ん。……なら、うちの作業場を貸してやろうか？」

「いいんですか！？」

道具屋さんの部屋なんか借りること出来るの！？

「ああ、嬢ちゃんならかまわないぞ。なかなか、腕も良さそうだからな」

「それでは、お借りします。あ、僕の名前はニズといいます」

「おう。ニズか。んじゃ、ニズ嬢ちゃん。俺の名前はエドワードだ。エドって呼んでくれ。よろしくな。作業場はそこのドアから入ってくれ、中に人がいるが俺が許可したといえば納得するだろうよ」

「わかりました。ありがとうございます」

僕はドアから中に入っていった。

ポーン

〔称号［レニクス王に認められた者］を取得しました〕

王！？王様ってこと。なんでここに！　いや、なんかあるんだろうな。その前に知りたくなかったが。これってならないように設定できないのかな？

あとで確認してみよう。そんなことを考えた。

コンコン。ドアをノックした。
「失礼します」
「あなたは？」
中には女の子がいた。
「エドさんに、作業場を貸してもらう許可をいただきました」
「祖父にですか。わかりました。でしたら問題ないです」
この人、今、王様を祖父って言ったよね！？　てことは！
気にしたらダメだな。きっと何か理由があるのだろう。
「ありがとうございます。一応、道具持っていますので、場所を貸して頂くだけでかまいません」
「わかりました。ですが、祖父が許可したのです。必要とあらば、道具も自由にお使いください」
「はい、わかりました。ありがとうございます」
優しい人のようだ。
「あ、僕の名前はニズと申します」
「これはご丁寧に、私（わたくし）の名前は、シルフィーナと申します。祖父が認めたかたです。シルフィとお呼びください」
「わかりました。シルフィさん」

「はい。作業場はあちらのドアです。どうぞごゆっくり」

ドアに向かった。ドアノブに手を掛けたところで呼び止められた。

「あ、あの、ニズさん」

「はい。なんでしょう？」

「あ、あの、その、あの、う～～」

？

「お、お友達になって頂けませんか？」

おおう。そういうことか。エドさんの孫らしいから悪い子ではないんだろう。しかし、王族と、……う～ん。ん？

涙目でこちらを見ていた。

んなっ！

「わ、わかりました。僕で宜しければ」

にこっ、と笑って答えた。少し苦笑ぎみになっていたのは、許してもらいたい。

「あ、ありがとうございます。そ、それで、ですね。私（わたくし）のこと、シルフィを呼び捨てで呼んでいただけませんか？　ニズさんのことも、ニズと呼びたいので。あと、言葉使いも……」

もじもじ、しながらそんなことを言われた。

「わかったよ。シルフィ。これでいい」

「はい。ニズ♪」

にこにこ、しながらシルフィは言った。喜んでますね。

ポーン

〔称号［レニクス王の孫娘のお友達］を取得しました〕

そこから、エドさんの仕事が終わって、部屋に入ってくるまで、ずっとお話しすることになった。エドさんが来たら、ご飯の支度を手伝ってくるとかで、部屋を出て行った。

シルフィの話しが止まらなかった。途中、なんか聞いてはいけないことも混じっていたような気がするが、気にしないでおこう。

「ニズ嬢ちゃん。お疲れ様。すまなかったな」

「いえ。お話しが楽しかったですよ」

エドさんから労いの言葉をもらった。

「シルフィは友達ができない環境にいたから、友達ができて嬉しかったんだろう」

「そうなんですか。僕も楽しかったので、かまいませんよ」

「ありがとう」

「いえいえ」

「実はな。うちの家系のものは視る力が強く精霊に好かれやすいんだ」

なにか唐突に、話し出した。家系ってことは王族の話かな。

「視る力ですか？」

「ああ、シルフィはそれが特に強い。その力はうちの家系では、重要視されるものなんだ。そのせいで、シルフィは権力争いの道具にされかけたんだ」

「……そんなことが、あったんですか」

この話は僕が聞いていいのか？

「それで、このまま道具にされ続けたら壊されてしまうと思い、シルフィをつれてこの町にきたんだ。本来なら父や母のそばに居たいだろう。……精霊冠の戴冠が終わりさえすれば、シルフィを家族の下に帰すことができるのだが」

「……」

「精霊冠は少し特殊で、いつでも簡単に戴冠できるものではない。大いなる精霊様から認められる必要があり、戴冠式の時期が決まっている。ほとんどの場合は王位継承が済んでから行うものなんだ。

さすがに4年に1回しかできないとなるとな。だから、王位継承と精霊冠の継承は別なのだ。そのため、戴冠前に王位を継承したのだが、その王位継承が引き金になってしまった。あるとき、自分が王になりたい一心で、シルフィを取り込もうとする者が現れたんだ。精霊冠の継承は大いなる精霊様が決めるから、シルフィは精霊に愛されているという事が、精霊冠の継承に有利だと思ったのだろう。実際に王位継承を終えてから、王以外のものが精霊冠を継承して王になった記録もある。それほど、精霊冠とは重要なものなのだ。そのため、まだシルフィは狙われている。まったく、王位は既にアルに継承したのだから、ヒューズは諦めればいいものを、私が甘やかし過ぎたか？」

ふう、とため息を吐いた。

「まあ、私が傍にいるから、そう簡単には手を出せないだろうけどな。それに約1ヶ月後に、【エレスト】で戴冠式が行われる。戴冠式は精霊祭で行うと決まっている。それが済めば、問題は解決だ」

明らかに王家の話だよね。途中から、ぶっちゃけてたよね！？　シルフィを取り込もうとしてるのって、多分ヒューズって人か、その一派だよね！？

それに約1ヶ月後か。う～ん。そういえば、この世界って、1日が何時間なんだろう？　広場の時計塔の文字盤は、一応12分されてるが、本当のところは分からないな。その前に暦が分からない。

「【エレスト】というと、【精霊使帝都市エレスト】ですよね」

「そうだ。他の町や国からも人が来るぞ。【エレスト】の精霊祭は4年に1回行われ、一週間に亘って開催される。王都では毎年あるが、【エレスト】では4年に1回なんだ。今回、戴冠式は、そのメ

インイベントとして行なわれる。一般への発表はまだしてないけどな。まあ、戴冠式があるときは、１ヶ月前から【エレスト】内部に入ることができなくなるから、バレバレといえばバレバレなんだけれどな。と言っても、その前に一般人は戴冠式に出席できなしな。」

「町の中に入れないんですか？」

物資は不足しないのだろうか？

「ああ、そうだ。まあ、一応、商人なんかは例外で入れるが、基本的に都市外の者は入ることはできない。入れるようになるのは、精霊祭が開催される３日前からだな。そして、祭りは１週間行われる」

「１ヶ月前からですか。何かあるのですか？」

「大いなる精霊様を召喚する準備のためだ。召喚には地脈と気脈が関係していて、人が多く流れると気脈のほうが乱れやすいんだ。その乱れを沈静化するために、１ヶ月かかるんだ。と、言っても、大いなる精霊様は一般の人では会えず、地位の高いものしか御目通り出来ないが」

「地位が高いですか。貴族とかですか」

「そうだ。しかし、貴族以外にも高位の精霊と契約していれば、話しは別だ。あそこは【レニクス王国】ではなく。精霊使帝が統べている場所だからな」

「【エレスト】は王都とは違うのですね」

「王都は【アイレリーフ】という名前だ。まあ、【エレスト】も大

きい都市だから、間違えるもの無理はないな。特に異世界【ティエラ】から来たものにはな」

そうなのか。確かに名前も精霊使帝都市であって、王都ではないな。……ん？　異世界？

「この【〔レ・フォスリトス〕】には７つの大陸がある。名前は【ウァリエテラ】【アクアヴィテ】【カリブンクルス】【ウェントクラルス】【ミッラルシオラ】【ノックスニゲル】【メトゥス】で、そのうち６つの大陸１つ１つに、精霊使帝都市がある。その都市を統べているのが、精霊使帝だ。ちなみにこの大陸【ウェントクラルス】の精霊使帝は、大精霊エレストと契約している者が継ぐんだ。契約する家系は決まっていてな、契約した者が当主となる。今の精霊使帝はアルベルト・Ａ・エレストという人で、温和で寛大な人柄で、とても民人に好かれているよ。」

他にも大陸があるのか。っていうか。この世界広いな！　ん？　６つ？

「なんで、７つではないのですか？」

「１つの大陸には人の町がないんだ」

「町がない？」

「そうだ。大陸の名前は【メトゥス】。その大陸は、邪呪霊（メルムモルス）が加護を与える邪王の支配領域なんだ。だから、人が足を踏み入れれば命は無い」

「そんな存在がいるんですか？」

魔王じゃないのか!?　ってことは、魔族は敵ではないのか。

「ああ、いる。まあ、邪王は人類の敵と言っても、間違いではない。今までの歴史の中で何度も侵略を受けたからな。こちら攻めたことは一度も無いのだが、資源があまりないのか、それとも他の理由があるのか分からないが。ちなみに勘違いさせないように言っておくが、魔王と邪王はまったくの別だ。魔王は魔族の王であって、邪悪な存在ではないからな」

「そうなのですか。それでは、呼び方を変えたほうが良い気がしますね」

「確かにな。語感と言うか、感覚が近いから、昔から魔族を邪王の配下と勘違いするものは、多いからな」

ふ～ん

……ん!?

「その話を僕にしてよかったのですか？　結構重要そうな話が混ざっていたのですが」

「ああ。かまわない。ニズ嬢ちゃんなら話しを広めたりしないだろうからな。第一、後半は子供でも知っているような事だしな。それに、この短時間で、あそこまでシルフィが懐いたんだ。そして、私たちには視る力がある。私でもお前は無条件に信用しても平気だと思ったんだ。なんというか、勘というか、本能というか、まあ、それで確信できたんだ。今までこんなことなかったからな。……いったい何者なんだ?」

一人称が変わっているな。こっちが地かな?

しかし、何者か。う～ん。　ん！？　もしやアレのせいか。

「もしかしたら、私が精霊に近しい者だから、かもしれませんね」

「精霊に近しいもの？」

「はい、そうなんです。思い当たることはそれぐらいです。ハイ・エルフの長が言っておりました。僕の力は人とは異なると。精霊の影響を受けてるそうです」

少し言い回しは違うが、まあ、似たようなものだろう。

「ハイ・エルフの長と知り合いなのか。それに、精霊か。そうか、だからか」

？

頭を傾げた。

「いや、初めて会った時に、違和感があるほど、違和感がなかったんだ。そうか、そこに居ることが当たり前の存在と近しい存在だからか」

うんうんと、なにか納得しているようだった。まあ、納得できたのなら、いいか。

「ご飯できたよ。ニズも食べていって」

パタパタパタパタ、むぎゅ、っと

シルフィが小走りでこちらにきて、抱きつきながら言った。

話しの途中から良く抱きつくようになったが、これは？

「ははは。ずいぶん懐かれたようだ。そうだな。ニズ嬢ちゃんも食べていきな」
エドさんも笑いながら、そう言って誘ってきた。
リアル時間的には食べてからでも、なんとか大丈夫だな。そして、抱きつくのは友情の証のようだ。

「わかりました。ごちそうになります」

その後、女性店員兼侍女らしいアンジェリカ、アンジェさんも交えてご飯をいただいた。ご飯の味は絶品でした。レシピを貰ったので、あえて現実で作ってみようと思います。

「ごちそうさまでした」

「おう。また来い。と、いうか作業できてないだろう」

「うう。ごめんなさい。つい楽しくて」

「僕も楽しかったよ、シルフィ。それじゃエドさん。また来ます」

「おう、気をつけてな」「またね。ニズ」

「はい。お邪魔しました」

ポーン
〔称号［レニクス王に認められた者］は、称号［レニクス王から信頼を得た者］に進化しました〕

ポーン
〔称号［レニクス王の孫娘のお友達］は、称号［レニクスの孫娘の親友］に進化しました〕

目の前で《ダイブアウト》するのもあれなので、少し歩く。

あ！　そういえば、異世界【ティエラ】って、プレイヤーの住んでる世界。現実世界のことだよな。タイミング逃して聞き忘れてた。機会があって、覚えていたら聞こうかな。

ピロリーン
ん？メール？　え！？　運営から！？
開いてみる。

〈あなたはプレイヤーで始めて、この世界におけるプレイヤーを理解しました。また、始めて、世界および7つ大陸の名前、精霊使帝の意味、邪帝の存在、それらを知りました。よって、アイテムと称号が送られます。〉

うん？　こんなこともあるのか？　まあ、貰えるものは貰っときますか。って、言うか、正式名称は、邪王でなく、邪帝なのか。
そんなことを思いながら、メールを閉じた。

ポーン
〔称号［世界を始めに知った者］取得しました。特殊特典アイテムを入手しました〕

……うん。時間もないし、確認は後でいいかな。

ピロリーン

ん？　また、メール？　え!?　室長って。……やつか！

とりあえず、開いてみる。

〈あなたとシルフィーナがいちゃいちゃしているのが、とても目の保養になりました。よって、私的ボーナスをあげよう。是非とも使ってみてね〉

いちゃいちゃしてないよ！　っていうか。これって自動メールなのか？　いつから見てた!途中から言葉使いが崩れてるし。

ポーン

〔称号　［存在は正義（ロリ）］取得しました。幼女専用初期装備が進化しました。特殊消費アイテム［早着替宝珠（スペシャル・チェンジ・オーブ）］、固有専用武器アイテム白傘［高貴なる純白（ノービリス・アルブム）］を入手しました。〕

……、

……、

……うん。

「室長おぉぉ！　いくら開発トップだからって、これはいいのかぁあぁぁあぁぁぁ！！」

ピロリーン
ん？　またメール？　室長からだ。
〈大丈夫だ！　問題ない！！　可愛いは正義！　ロリこそがジャスティス！！　そして、いちゃいちゃムービーは録画済さ！！！〉

「見てんのかぁあぁぁあああぁぁぁ！！」

はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、……ふぅ

「うん。そうだったね。しつちょうってこういうひとだったね」
なぜか言葉使いが若干幼児化してしまった。

その後、俺は少し歩き、《ダイブアウト》した。

道具屋と友達と室長（ロリコン）と……、一部テンプレ？（後書き）

ありがとうございました。

調薬と調金と普通じゃない普通と……。　第二の町【ソラルル】（前書き）

お願いします。

「ん～。よし」
何もなかったかの様に、伸びをした。
さて、今日は回鍋肉だから、作り始めますか。

リビングに下りて、台所にいって料理を始めた。

キャベツと肉を切って、回鍋肉の素を入れて焼いていく。キャベツは火を通し目で、しかし、歯ごたえを残すくらい。肉はしっかり火を通す。

よし。皿に盛って、完成。

ドタタタタ、カチャ、と、姦しい音が足音が聞こえ、
「良い匂いするぅ」
「兄ちゃんできた？」
妹が入ってきた。第一声はご飯でしたか。まあ、特に言うことはないが。

「回鍋肉はできたよ。後はサラダ作るから待って」

「は～い」
良い返事だ。

ザクザクザク、スパパン、トントントントン、と野菜を切っていく。まるまるはさすがにダメだろう。よし。これでできた。ドレッシン

グはゴマとフレンチとソルトでいいかな。
机まで持って行った。
「はい。お待たせ。ドレッシングはこれ使って」
「「いただきます（ぅ）」」
もぐ　もぐ　もぐ　もぐ　もぐ　もぐ　もぐ、と今日はゆっくり食べ始めた。今日はおやつのコンフレークが入っているからかな。
「兄ちゃん。ついにボスまで行ったんだよ」
「お。そうなのか。やったじゃん」
「うん。でもボスが強くて強くて」「あれは無理ゲーだよぅ」
ん？　無理ゲーって、確か１０前後で頑張れば倒せる敵でしょ？
「どんなボスなんだ？」
「ボスは［マジックゴーレム］っていうボスなんだけど」
「おお。ゴーレムか定番だな」
ゴーレムなら魔法波状攻撃でいけるのでは？
「定番は、定番なんだけど、強さが序盤のボスじゃないんだよ」
「ん？　どうゆうことだ？」

「物理攻撃は効かないのは想定内なんだけどぉ、魔法も効かないんだよぅ」

はぁ！？　物理も魔法も効かない？

「物理攻撃は完全に効かないわけじゃないんだけど、魔法攻撃は完全に効かないんだよ。魔法使うと吸収してＨＰが回復するし、攻撃力や防御力もあがるし、あれは今の段階で倒せる敵じゃないよ」

「それは、確かに無理ゲーだな」

なんか、僕なら行ける気がするが、目立ちたくないし、多分何か方法があるんだろうな。

「そうなんだよぅ。もしかしたら、道が違うのかもしれないけどぉ、他の道も見つかってないんだよぅ」

「そうなんだよね。う～ん。でも、一度他の道も探してみるのも手かな」

「そうかもぉ」

なんか二人で話しがまとまった様だ。

「そういえば、ゲームの中って、時間はどうなってるんだ？」

エドさんと話しているときに思ったことを聞いてみる。

「時間？　時間は２倍だよ」

「その時間じゃなくて、１日の時間の話し」

「ああ、そういうこと。1日は24時間だけど、リアルの時間で8時間。時間が2倍になってるから16時間だね」

「そうか」

と、いうことは精霊祭は

もぐ　もぐ　もぐ　もぐ　もぐ　もぐ　もぐ、とこれまたゆっくりと食べる。

「「ごちそうさまでした（ぁ）」」

「食器は台所に持っていってね」

「「は～い」」

そう言って、台所に行った。

「それじゃぁ、私はお風呂入ってくるぅ」

「あ、私も一緒に入る」

「ああ、入って来い」

二人してお風呂に向かっていった。ちなみに、うちの風呂は父親のこだわりで大きいので、二人でも十分入れる大きさである。まあ、家自体も大きいが。

食器を洗い、妹がお風呂を出たら次に入って、歯をみがいてから《ダイブイン》した。

ちなみに妹は風呂から出たら、髪を乾かして即行で2階に上がっていった。

◇◇◇

始まりの町【ファスト】の中央広場。

さて、どうしようかな。なんかこの姿で視線を集めるのにも、とっくに慣れたな。

う～ん。そうだ。僕も第２の町【ソラルル】に行ってみようかな。

さっそく“道（ゲート）”に向かい、起動させた。

〔“道（ゲート）”を繋ぐ場所を選択してください〕

≪ソラルル≫

≪ノエアイナ≫

≪枢要罪の地≫

……枢要罪の地？

ポチッ

僕は見なかったことにして、【ソラルル】に向かった。

【ソラルル】は【ファスト】よりも少し都会的は田舎といった感じの、ヨーロッパ風の町並みで、なんか水路が多く、水の町って雰囲気。

さて、どうしようかな。

「お～い。ニズちゃん！」

ん？

「あ、ナツキさん」

ナツキさんがこちらに向かって手を振っていた。

「今きたの？」

「はい。今きました。ナツキさんもですか」

「私は昼間にきて、ここら辺の素材で商い中だよ」

「そうなんですか。良い素材はありましたか？」

「あの素材に勝る素材はないね。でも、いろいろあるよ」

あの素材というと、あの狼軍団の素材だな。

「やっぱり、あれは店舗もってからのほうが安全かな。いろいろな意味で」

「ははははは。それで、ここら辺のフィールドってどんな感じですか？」

笑いながら、ここら辺の状況を聞いた。

「そうだね。北は［新栄の谷］、東は［針葉の森］、南は［静穏の森］、西は［浸緑の樹海］があって、［新栄の谷］の先が［勇気の森］で【ファスト】に繋がってる。それで［針葉の森］の先に［鉄兵の洞窟］があって、その先がおそらく第３の町【エレスト】だ

と思う。それで、［静穏の森］と［浸緑の樹海］の先はわかってない。って感じかな」

「詳しいですね」

「女性の嗜みです」

ナツキさんは舌を出しながら、ふざけたように言った。

「さすがです」

こちらもふざけて対応した。

「「ふふふふ」」

「なんか楽しそうだな」

二人して笑っていたら、トーカさんに声を掛けられた。

「おう、ニズ。どうよ。双剣の使い心地は」

「とても使いやすいですよ」

しゅる、ぱんっ

そういいながら、双剣（夕暮）を鞘から両方とも抜いて広げた。

「わぁ～」「おぉ～」

二人して感動したような声をあげた。

「きれいね」「我ながらいいものを作ったな」

「はい。なかなか使いやすいです。双剣か、と聞かれたらちょっとあれですが」

「確かに双剣には見えないわね」「私も作った時は首を傾げたからな」

ははははは、と三人で笑った。

「あ、そろそろフィールドに出てきますね」

「頑張ってね」「【ファスト】周辺より確実に強いから気をつけろよ」

「はい。それじゃまた。あ、そうだ。木材とか使いますか？」

「木材？　ああ、知り合いに木工職人がいるから、受け取っておくよ。お金は後日でいいか？」

「別に無償でもいいですよ。お金に困ってないので」

「本当に欲がないね。でも、そういうのはダメよ。しっかり払わせるからね」

「わかりました。それじゃとりあえず、すべて渡しときますね」

なぜか沢山ある。そこまで名前の問題のなさそうな木材をすべて渡した。

不思議な木材とか、不可思議な木材とか、驚愕な木材とか除けば大丈夫だろう。

「あ、トーカさん。あげたジャムや飴は食べましたか？」

「ああ、すまん。まだ、見てもいないや」

「まあ、今日の今日ですものね。それじゃ、行きますね」

「おう。気をつけろよ」「いってらっしゃい」

「いってきます」

僕はとりあえず［浸緑の樹海］に向かって行った。

◇◇◇

［浸緑の樹海］に着きました。

確かにこれは、森じゃなくて樹海だな。

さあ、行くか。

周りの気配が細かく分かる気がした。

「これは［マナ操作］の影響かな？　なんだか不思議だな」

歩き続けると、魔物（モンスター）の気配がする。

ちなみに、こちらの住人は魔物（モンスター）と呼ぶらしい。（シルフィ情報）

ぐるるるる、がぅ！

いきなり飛び掛ってきた。

「まあ、来るよね」

双剣（夕暮）を鞘から抜いてかまえる。

［フォレストウルフ］×3

ＨＰ：３２０　　ＭＰ：８０

一扇ぎし、衝撃波を飛ばす。２匹吹き飛ばしＨＰをゼロにした。残りの１匹がかわし、遠吠えをした。

「しまった。外した。衝撃破は結構扱いが、やっぱり難しいな」

遠吠えで集まってきた、敵の気配を感知した。

「まあ、来るよね。って、気配が多くない！？」

［フォレストウルフ］×１２
ＨＰ：３２０　ＭＰ：８０

［ウッドウルフ］×３１
ＨＰ：２３０　ＭＰ：１００

［バンディットウルフ］×５６
ＨＰ：２７０　ＭＰ：１２０

［グリーンウルフ］×８２
ＨＰ：１９０　ＭＰ：３０

「いやいや。多すぎるでしょ。もしかして、誰もここで狩ってないから増えたとか？」

そんなこと気にしてる場合じゃないな。

大きく一扇ぎし、敵を薙ぎ払う。Ｓｔｒの影響で、かすっても一撃で仕留めていく。真後ろから襲い掛かってくる敵を光魔法（ライトシールド）で防ぎ、左手の双剣で一閃する。その間に前から来る敵は、再度、《ライト

シールド》で防ぎ、それと同時にスキル［双刃紅葉］の効果《残刃》で残った刃で、勝手に切り裂かれていく。

「一撃で倒せるからいいが、普通これは難しくないか？　これが原因でこの森の攻略が出来ないんじゃないか？」

呟きながら、双剣を回転しながら大きく扇ぎ、全方向の敵を薙ぎ払う。跳んでかわした分は、《ライトシールド》で防ぎつつ、斬撃と、勝手に《残刃》で切り裂かれていき、掃討した。

「うん。意外といけたな。この双剣とスキルの組み合わせやばくないか！？　衝撃波にも《残刃》が発動するとは」

凄い組み合わせだな、しかし、衝撃波からできたこの《残刃》って、紅葉みたいに形が変化するのね。それに、なんか舞うように動いてるし。

これは、いつか見た日本舞踊的なことが出来るのでは？　試してみるか。

そんなことを思いながら歩き出した。

歩いたら、すぐそこにセーフティエリアがあった。

「お、セーフティエリアか、誰もいないし、どうせだからここで調合でもしようかな。エドさんのところで、出来なかったしな」

セーフティエリアに入り、座って準備を始めた。

今日は何を作ろうかな。薬草や月下草も沢山集まってるし、ポーションをつくろうかな。

「さて、ライフポーションの方からだな」

まずは、エプロンを着る。前回使ったものを出していく。今回は調薬に向いている、発熱石（ヒートストーン）のみを取り出す。

薬草を取り出し、調合のアーツで乾燥させる。乾燥した薬草をビーカーに入れ、ファノから貰った水を注ぎ、発熱石で熱する。ここでだんだん色が出てきたので、［マナ操作］で魔力とマナを半々くらいの割合で加えていく。５分くらいたったら、発熱石から離して冷ます。さらに魔力とマナを通して、澄んだ緑になったら、ライフポーションは完成。

［ポーション？］

ＨＰが７６％回復する。薬草と聖水が魔力とマナにより反応を起こし活性化した回復薬。味は少し苦い。

おおう。いい感じだ。

それでは次は、月下草で作ろうかな。同じ操作を行って、最後に魔力を通した。色は澄んだ青になった。完成だよな。

［マナポーション？］

ＭＰが６２％回復する。月下草と聖水が魔力とマナにより反応を起こし活性化した回復薬。味は少し苦い。

できた。そして、味は随分と軽減されている。

うん。果汁を入れてみるか。少し苦味があるほうが合うかな。

六宝柑っていう、デコポンみたいな蜜柑があった。これでいこう。
果汁を搾り、ポーションに入れた。

［カンカンポーション？］
ＨＰが８０％回復する。その後、継続的に５分の間、ＨＰが毎分６％回復、ＭＰが毎分１％回復する。薬草と聖水が魔力とマナにより反応を起こし活性化した回復薬。六宝柑の味がして飲みやすい、六宝柑ジュース。

［カンカンマナポーション？］
ＭＰが６５％回復する。その後、継続的に５分の間、ＭＰが毎分７％回復する。月下草と聖水が魔力とマナにより反応を起こし活性化した回復薬。六宝柑の味がして飲みやすい、六宝柑ジュース。

おおう。いい感じだ。
これを後は量産だな。そのあと、いろいろ実験だな。
ちなみに量産本数はライフが５０本、マナが２５本。月下草の方が手に入り難いから。

さて、はじめようか実験を

始祖の葉、暮桜の花びら、凪桃、生命の小瓶（命の神水）で、何か作ろうかな。
まずは［命の神水］に［凪桃］を入れて煮込む、もちろん皮ごと。
濾過したあと攪拌分離を行い、［澄んだ薄い桃色の液体］の方を使う。
そのあと［暮桜の花びら］と［始祖の葉］を乾燥させてから、細か

く砕く。こちらを［命の神水］にいれて、煮込み濾過後、攪拌分離する。［澄んだ青緑の液体］を使う。

［澄んだ薄い桃色の液体］と［澄んだ青緑の液体］を混ぜて、それに［賢人の宝石（サージュ・リトス）］を細かく砕いたものを入れて、混ぜながら熱を通す。この作業中は温度を一定にして莫大な魔力とマナを加え続けている。さらに多くの魔力とマナを注ぐと、［賢人の宝石（サージュ・リトス）］が融けて、だんだん淡く光を発しはじめた。光が一段と広がり周りを満たしたところで、発熱石から離して冷ましていく。この間も魔力とマナの供給は忘れずしておく。熱が完全に取れたら、出来うる限り魔力とマナを注ぎ、なんか神々しい光を放ったので、完成。……完成？

うん。ＭＰを完全に使い切ったの初めてだな。どんなのができたかな。

［？？？］

森羅万象のものを最善最高の状態にし、永遠に近い悠久の時を与える命の水。

なんだこれ。やたらめったら入れたのが失敗だったか？　それとも魔力の注ぎ過ぎか！？

ん～、まあ、そういうこともあるか。

残りの上澄み液とかも、一応まぜて作るか。まあ、［賢人の宝石（サージュ・リトス）］は使わないが。

・・・・・・・・・・・・うん。できた。

［ニズ特製の進化リキッド］×２
４階位以下の水・風・光精霊専用。精霊の階位が上がる。階位が２アップ。１度しか使用できない。

［ニズ特性の進化タブレット］×３
４階位以下の地・火・闇精霊専用。精霊の階位が上がる。階位が２アップ。１度しか使用できない。

うん！？　凄いのか？　階位ってなんだろう？　ナツキさんやトーカさんに聞いてみようかな。

次は調金でもしてみようかな。
道具を出した。携帯炉、鍛冶鎚、溶融鉄鋼合炉、溶融鉄鋼分離炉、金属粉砕機、灼熱石（ボルケーノストーン）、武器融合炉、が入っていた。
炉が多くないか？　なんだ、鍛冶もできそうだが、聞いたこともない道具があるな。携帯炉と鍛冶鎚は何と無く意味はわかるが、他は……。うん。まあ、説明書見ながら使ってみればわかるだろう。

まずは溶融鉄鋼分離炉で［何かの鉱石］を分離してみよう。灼熱石を使って火を入れる。灼熱石は魔力を原料に高温の炎を出す石だそうだ。
［何かの鉱石］はだんだん溶けて、液体になった。ここで、溶融鉄鋼分離炉のスイッチを押して、分離を開始する。ファンタジー仕様で勝手に分離が終了した。
鉄、軽鋼（ライトメタル）、重鋼（ヘヴィメタル）、重力鋼（グラヴィティメタル）、地鉄、水鉄、火鉄、風鉄、光鉄、闇鉄、が手に入った。

鉄は鉄だが、軽鋼（ライトメタル）、重鋼（ヘヴィメタル）は普通の鉄よりも通常よりも、異様に軽いか異常に重いかの違いのようだ。重力鋼（グラヴィティメタル）は魔法鉄と呼ばれる分類で、流す魔力量で重さがある程度変更可能なようだ。地鉄、水鉄、火鉄、風鉄、光鉄、闇鉄は属性金属らしく、それぞれの魔法属性は付加された金属だそうだ。

ものは試しと、鉄で剣を作ってみることにした。携帯炉に灼熱石を入れて、魔力を注ぎ込む。十分な温度になったら、炉に鉄をいれて赤くなったら出して打つ。冷めたら再度、炉に鉄をいれて赤くなったら出して打つ。それを繰り返して、だんだん剣の形になっていった。さすがファンタジー、良かったよ、かなり簡略化されていて。

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカン。

よし。もう一回か。

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカン。

よし。水につける。

ジュじゅーーーー。

すると光に包まれ、形が剣なった。ショートソードだな。

「これで、完成なのか。ふむふむ。リアル設定に変更可能で、リアル設定で完成させたほうが、武器の性能は良くなるのか。簡易設定は完全にスキルレベル依存で、リアル設定には劣ると。しっかり考えられてるな」

とにかく、完成した、完成品はこちら。

片手剣［鉄のショートソード］

鉄で作られたショートソード。出来が中々良い。

効果：Ｓｔｒ＋１８　耐久５００　スキル：なし

普通の片手剣が出来たな。

次は溶融鉄鋼合炉と金属粉砕機を使って、金属の融合をしてみようかな。

まずは軽鋼（ライトメタル）と重鋼（ヘヴィメタル）でやろうかな。金属粉砕機で、双方粉砕してから、混ぜて。まとめて溶融鉄鋼合炉に入れる。完全に混ざりあったら完成。

何が出来たかな

［普通鋼（ノーマルメタル）］

軽鋼（ライトメタル）と重鋼（ヘヴィメタル）を融合することによって出来た金属。普通でない強度を持つ。

普通でない強度って、どんなだよ。取り合えず、おいといて。次は魔法金属で試そうかな。

地鉄、水鉄、火鉄、風鉄、光鉄、闇鉄を金属粉砕機で粉砕してから、混ぜて。まとめて溶融鉄鋼合炉に入れる。完全に混ざりあったら完成。

何が出来たかな

［均衡鉄］

中で様々な属性が均衡状態を保てている金属。魔法金属としての属性は地・水・火・風・光・闇属性。

なんか凄いことになってるな。というか、結構むちゃくちゃやって

るのに、なんで作成が失敗しないんだろ。確か成功率って、……あ、そうか。そりゃ、失敗しないか。

Ｌｕｃが異常なことを思い出した。

さて、［普通鋼（ノーマルメタル）］と［均衡鉄］で、短剣でも作ろうかな。そういえば、鍛冶も魔力注ぎながらやると良いことあるのかな。試してみよう。

携帯炉に灼熱石を入れて、魔力を注ぎ込む。十分な温度になったら、炉に鉄をいれて赤くなったら出して打つ。冷めたら再度、炉に鉄をいれて赤くなったら出して打つ。それを繰り返して、だんだん剣の形になっていった。その間、魔力を絶え間なく注ぎ続ける。

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン。

よし。もう一回か。

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン。

よし。水につける。

ジュじゅーーーー。

すると光に包まれ、短剣が完成した。

短剣［普通の短剣］

［普通鋼（ノーマルメタル）］と［均衡鉄］で作られた短剣。魔法発動媒体としても使える。短剣でもあり、杖でもある。

効果：Ｓｔｒ＋６８、Ｉｎｔ＋２３　耐久５００００　スキル：［六方陣］［均衡崩壊］

なかなか、意味の分からないものが出来たな。

もう一本はリアル設定で作って見ようかな。

結果は、

短剣［出来損ないの短剣］
［普通鋼（ノーマルメタル）］と［均衡鉄］で作られた出来損ないの短剣。金属同士がお互いの長所を見事に殺しあっている。切れ味は悪く、ほぼ鈍器。
効果：Ｓｔｒ＋１２、Ｉｎｔ＋２　耐久５００

リアルで出切る程、甘くはないか。
スキルもついてないし、形状も色も悪い。基礎も知らないでやるものじゃないな。

さて、時間は、……こんな時間か、町戻って宿で《ダイブアウト》しようかな。ナツキさんやトーカさんに意見聞きたいし。

僕は道具を片付けてから、セーフティエリアから出て町に向けて歩き出した。

調薬と調金と普通じゃない普通と……。　第二の町【ソラルル】（後書き）

ありがとうございます。

精霊と階位と秘薬的な何かと……。（前書き）

お願いします。

精霊と階位と秘薬的な何かと……。

町についた、行きのときと同じことが2回あったが、問題なく殲滅しました。

とりあえず、ナツキさんかトーカさんに精霊の階位のことを聞きに行こうかな。さて、フレンドリストで確認。うん。いるみたいだな。

ん？

メールマークがチカチカしていた。

いつの間に、まったく気付かなかった。

トーカさんからのメールのようだ。ポチッ、とな。

〈今すぐ露天に来い。聞きたいことがある。〉

ふむ。ちょうどいいから、行きますか。なんだろう？

露天にて、

「お～い。ニズちゃ～ん」

「ニーズー！」

ナツキさんが手を振っていた。トーカさんがこちらにもうダッシュしてきた。

「あ、こんにちｈ「ニズ！　あれはいったいなんだ！」あれって？」

「トーカ。あれじゃ、分からないわよ。多分、本人は問題ないもの

と思ってるだろうし。っていうかお菓子扱いだと思ってるよ、きっと」

ナツキさんと女性が来て、ナツキさんそう言った。

「おお、そうか。あのジャムと飴の話しだ」

「ジャムと飴、ああ、この前あげたやつですか。美味しかったですか？」

「ああ。美味しかった。確かに美味しかったが、あの効果はなんだ！　現行の回復量を考えたら異常だぞ！　特にＭＰ回復のほうは、今までの概念から逸脱している」

「そうなんですか！？　ジャムに薬草を混ぜただけなのですが」

あんな簡単に出来るものが、そんなに凄いのか？　それに逸脱って言いすぎでしょう。

「そもそも、調薬を持ってる人がいないのですけれどね」

女性が補足を入れた。どちらさまで？

「えっと、あの」

「ああ。こちらは生産職仲間のエリスよ」

「はじめまして、私（わたくし）は木工職人のエリスと申します。宜しくお願いしますね」

「はい。こちらこそ。僕はニズと申します。宜しくお願いします」

木工職人ですか。杖とか弓とかの職人ですかね。

「こっちの話しを聞けー！」
「あいたたたた」
トーカさんが何故かナツキさんにアイアンクローをかましてた。

「トーカ。なんか変な音してるから。ギブギブ」
ナツキさんはトーカさんの腕を叩いている。

「トーカさん。それ以上は危ないですよ」
そういいながら、俺はトーカさん足を少し力を入れて、肘で小突いた。

パキャッ
ん？　なんか軽快な音が。誰かウインナーでも食べたか？

「ギャーーーー」
トーカさんがナツキさんから手を離し、足を押さえて転げていた。
女性らしくない悲鳴？　だな。

「ニ、ニズ。お、お前どんな力してんだよぉぉおおぉぉおおぉぉ！！！」
ううぉぉおおぉぉおおぉぉおおぉぉ！　と、なんかトーカさんが唸りながら言った。

「え！？　少し力入れて小突いただけですよ！？」

はぁ、はぁ、はぁ、ふぅ
セーフティエリア内では、痛みのみでダメージは入らず。かつ、痛みは長時間残らないので、まもなく復活した。

「まあ、いい。それで、話しの続きなんだが、あのジャムと飴は自分で作ったんだな？」
トーカさんが、足をさすりながら言った。
これはいかんな。どうにかステータスを落とせないものか。無双するつもりはないからな。っと、何だっけ？　ああ、そうだ。飴作ったの質問か。

「はい。そうです」

「そうか……」
トーカさんは真剣な顔で考え事をしているのか黙って目を瞑っていた。
？

「ニズさん」
エリスさんが話しかけてきた。

「はい。なんでしょうか」

「トーカが停止したので話しを変えますが、あの木材の代金なのですが、ナツキの時と同じでよいのでしょうか」
「そうそう。私と同じ。あの木材の質が良過ぎて、お金が出せないんだって。その前に加工が大変らしいけど」
なるほど。しかし、加工が大変ってことは、上等な木材が紛れていたかな？
「そういうことですか。わかりました。それでかまいませんよ」

お金にまったく困っていないので、快諾した。

「ニズ」

今度は、復帰したトーカさんが話しかけてきた。

「はい。なんですか」

「私たちが店舗持ったら、お前の作ったものを置かせてもらえないか？」

作ったもの。ポーションとかか、まあ、いいかな。素材は実質無料だから取れば良いしな。

「いいですよ。他に使う当てもないですし。あ、そうだ。それじゃこれも渡しときます」

俺はそう言って、今日作ったライフポーションとマナポーションを渡した。

「おう。預かっ、と、く、ぁ、……なにぃ！」

「どうかしたの？」

「どうかしましたか？」

二人とも覗き見た。本人の承認があれば見ることは可能。

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ええ！」」

トーカさんは硬直のままで、ナツキさんとエリスさんが叫んで止まった。

「ニズ！」
「ニズちゃん！」
「ニズさん！」

「他人に絶対に渡すなよ」
「他の人に渡しちゃダメよ」
「他の方に渡してはいけませんよ」
硬直から復帰したと思ったら、ステレオで注意された。

「わ、わかりました」
引き気味に返事をした。

話しに一区切りついたところで、聞こうと思っていたことを思い出した。
「あ、そうだ。ひとつお聞きしたいのですが、精霊の階位ってなんですか？」

「「「へ？」」」
三人とも呆気に取られていた。

「知らなかったのか」
トーカさんが代表して言った。

「はい」

「精霊の階位っていうのは、精霊の力の強さを表すもので、これはレア度と比例してるんだ。まあ、強さの指標だな。この階位を上げるのは大変なんだぞ」
「確かにそうね。私たちはβ得点で精霊引き継いでいるけど、それでもなんとか4階位よ。βの時に最強って呼ばれてた人が5階位で一番高いもの。正規版組は最初にランダムで1~3階位ってなってるけど、βはみんな1階位からだったんだから。まあ、正規版でも1階位が基本で、2階位でも相当稀らしいけどね」
「今の平均は、高く見積もっても2階位未満だと思うわ。3階位まではいいのだけれど、4階位以上にあげるのが、ものすごく大変でしたから。公式設定では戦闘の他に、契約者の魔力や、空気中のマナを糧に成長するらしいです」
トーカさん、ナツキさん、エリスさんの順番で説明をしてくれた。
「そうなんですか。ありがとうございます」
ん?
「じゃあ、これって凄いものなんですか?」
俺はそう言って、ニズ特製の進化リキッドと進化タブレットを見せた。
「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」
「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・えぇえええぇえええぇえええぇえええぇえええ!!」」」」
なんか、もの凄く驚いていた。やっぱりこれはおかしいのか?

「「「これはおかしい！！！」」」
うん。やっぱりおかしいようだ。よかったよ。僕がおかしいって言われなくて。

「とりあえず、階位の制限がありますから、使ってみますか？」
多分だけど、僕の契約精霊には使えない気がする。スフィは神様だし、ベルはそもそも竜だし、ファノは精霊じゃなくて、聖霊だしな。

「う～ん。どうするかな」
「確かに迷うわね」
「使っても良いものなのでしょうか」
三人とも悩んでいるな。まあ、確かにこれは、って思うか。

「しかし、使ってみないことには、効果も本当かわからないしな」
「そうね。使わないとわからないか」
「売るにしろ、売らないにしろ。効果は見ておくべきかしら」
さらに、三人は悩む。

「確かに効果を見るのは大切ですが、階位が上がった場合にデメリットとかは、あるのですか？」

「特にデメリットはないと思うのだが」
「そうねぇ。あえてデメリットと言うなら、ＭＰ消費が多くなることね。４階位でも、既に具現化は３分くらいしか出来ないもの。２階位もあがったら、具現化時間が１分もたないかも知れないわね。その代わりに契約精霊魔法（ウィンクル・マジック）の威力が、桁違いに強力になるわね」
契約精霊魔法（ウィンクル・マジック）？　はじめて聞く魔法だな。

「契約精霊魔法（ウィンクル・マジック）ってなんですか？」

「「「知らないの（ですか）？」」」

「ごめんなさい。公式サイトとかほとんど見てないので」

「「「ああ～」」」

三人とも納得しているようだった。常識なのか！？

ナツキさんが代表して教えてくれた。

「契約精霊魔法（ウィンクル・マジック）って言うのは、スキルやアビリティとは別の魔法のことで、契約した精霊の力を借りて使う一種の精霊魔法ね。プレイヤーならみんな使える魔法なの。契約精霊の力を借りているから、その威力はプレイヤーのステータスでなく、契約精霊の力で決まるの。それが特徴かしらね」

なるほど。

「と、言うことは、今の段階でも契約精霊が強いほうが、ステータス関係なく強い契約精霊魔法（ウィンクル・マジック）を使えるってことですね。でも、その分、ＭＰ消費が多くなるということですか」

「そういうこと」

ナツキさんは頷きながら言った。

「なら、自分自身が強くなるまで契約精霊魔法（ウィンクル・マジック）を多用できない。と言うことですから、契約精霊が今強くなっても、あまり有利にならないってことですね」

何と無く思ったことを、述べてみる。

「「「確かに（そうですね）」」」
う〜ん。と三人で悩んでいる。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん」」」
決まったかな。

「「「よし。使おう（いましょう）」」」
お！　最後は合ったな。三人とも仲いいな。

「それでは、契約精霊の属性はなんでしょうか？」

「私は水属性よ」
「私は火属性だ」
「私（わたくし）は風属性です」

それじゃ、ナツキさんとエリスさんがリキッドで、トーカさんがタブレットか。
「それじゃ、ナツキさんとエリスさんには［ニズ特製の進化リキッド］で、トーカさんには［ニズ特製の進化タブレット］ですね。はいどうぞ」
そう言って、三人に渡した。

「これ、どう使うのかしら」
「確かに。自分が食べればいいのか」
「精霊用ですから、精霊に渡せばいいのではないでしょうか」

その時、三柱の精霊が顕現した。
「「「え！？」」」

「お。彼女たちが契約精霊ですか？」

一人は水色の長い髪と青い目の少し長身の女性。一人は朱色の髪と赤い目の高校生くらいの女性。一人は緑色の肩に掛かるくらいの髪と緑色の目の中学生くらいの少女だった。

「「「なんで（ですか）？」」」

生産職三人が言った。

「「「あの方の力で顕現しました」」」

三柱の精霊は僕を見ながら言った。

「ああ。やっぱり、僕のアビリティって、他の契約精霊も顕現可能なんですね」

「「「どういうこと（ですか）？」」」

生産職三人が首を傾げながら言った。

ってか、仲いいな。それにエリスさんはさっきから、驚いても言葉が丁寧だな。

「私もよくわからないのですが、そういう能力だそうです。そんなことよりも精霊にあげてみてくださいな」

「なんか釈然としないんだけれど、わかったよ」

「そうだな。渡せばいいのか」

「そうですね。とりあえず渡してみましょう」

三人がそれぞれの契約精霊に進化薬？を渡した。

「「「「「！！！」」」」」
そうすると、それぞれの進化薬?が光り精霊に入っていき、同時に精霊も光りはじめた。
光りが治まると、姿が少し変わっていた。

一人はスカイブルーの長い髪とサファイアのような瞳の少し長身の女性。一人は炎髪灼眼の高校生くらいの女性。一人は新緑のような色の髪とエメラルドのような瞳の中学生くらいの少女。髪と目の色が変わってるな。

「どうなりました！？」

「階位が2つ上がって6になってる」
「私もだ」
「私(わたくし)もです」

「どうやら、この進化薬は本物のようですね」
成功か。まあ、説明文がそうだからな。使用制限があるから副作用はないのかな。そういえば、契約者の魔力や、空気中のマナで成長するとか行ってたから、進化薬に入れた魔力やマナが成長に関係しているのかもな。

「ニズ。本物とわかったからこそ、これは売らないほうがいいかもな」
「そうね。これは危険だわ」
「そうですね。私(わたくし)も賛成です」
三人とも、これは売らないほうがいいと言った。
確かに、これは売らないほうがいいか。使った素材的にも高レベル帯っぽいしな。あまり量産も出来ないし、するつもりもないしな。

「わかりました。これはアイテムボックスに封印しておきます」

「それがいいだろうな」

「ただ、信用できる人には渡してもいいんじゃない」

「ニズさんのものですからね」

うんうんと三人で頷いていた。

さて、

「それじゃ。私は《ダイブアウト》しますね。そろそろ時間ですし」

「おう。お疲れ」

「またね」

「またお会いしましょう」

「はい」

そう言って、宿屋へ行き、ベッドの中で《ダイブアウト》した。

◇◇◇

「ん～。さて。って、ベッドで寝てすぐ起きてるみたいで、変な感覚だな。そして、またすぐに寝るとなると、さらに変な感覚だな」

その後、トイレ行ってから眠りに着いた。きっとまだ妹はチャットかダイブ中だろうな。

そういえば、スフィ、ベル、ファノはいったいどこを散歩してるんだろう？

今回は、討伐アナウンスがきたりしてないから、どこかでのんびりしてるのかな。
そんなこと思いながら眠りについた。

精霊と階位と秘薬的な何かと……。（後書き）

感想という機能があることを、今さっき思い出しました。
しかし、結構な人に文才がないことがばれてますね。
それと、トーカが最初からドラゴン素を加工できたのは、βテストの貢献度特典で、鍛冶スキルランク（現在は上級鍛冶師）を引き継いでいるからです。それにβ時代に一応ドラゴン素材が見つかっていたので、加工方法が判明しており何とか加工できます。ただし、道具が間に合っていないので、大きな反動が起こります。まあ、偶然加工方法が同じだっただけで、他の高位素材はさすがに無理です。加工できません。ナツキとエリスも引き継いでいます。
主人公が高位の素材を加工できるのは、ステータスと幸運値のごり押しです。さすがに大量生産するときは、2～3割くらい失敗してます。ジャムや飴系は、普通に作っているので、今のところ失敗してませんが。それと秘薬は魔力を大量にこめることが出来れば簡単に出来ます。難易度でいうなら、ポーション?と同程度。ちなみに秘薬は持てるのが1つのみで、実はクールタイムがリアルタイムで３００時間。クールタイム中に使用すると、死亡します。そして、クールタイム中は、回復アイテムも、回復魔法も受け付けなくなります。ある意味では毒を持って、なアイテムです。
妹を妹達としていないのは、主人公視点から一まとめにしているからです。双子にしてますからね。ちなみに二卵性です。
アイテムに関しては申し訳ないです。自分でもしつこいかな。とは思ったのですが。非才な身ですが、もう少し何とかします。そこを飛ばしても大丈夫なようにしています。
ありがとうございました。

指摘を頂いたので、キーワードに幼女を追加。

名前の修正しました。

一人称を変更。室長のテンションを上げるために。

リアルとスキンシップと母による強制イベントと……。（前書き）

お願いします。

リアルとスキンシップと母による強制イベントと……。

目を覚ました。時間は8時すぎ。

「ん～」

いつも通り伸びをしてからベッドを出る。

今日は家事を済ませたら、今日はどうしようかな。ここ最近はしっかり運動してないからなぁ。少し散歩でもしようかな。うん。ダイブは夕食後にしよう。

洗濯機を回してから、朝御飯を作り始める。

「兄ちゃん」「兄ぃ」

そして、タイミング良く妹が起きてきた。

「「おはよう」」

タイミング良過ぎる気がする。

「おはよう。今日はタイミングいいな」

「「えへへ」」

なんか妹は照れている。

「朝御飯食べるか？」

「「食べる（ぅ）」」

そうか、僕と同じミルクトーストでいいかな。

日本風で、食パンでなく、今回はフランスパンを用い、鶏卵と牛乳を混ぜ、その液体をパンに染み込ませて、フライパンで焼く。なんて簡単な料理。お好みでハニーやメイプルをおかけください。

まあ、本当は染み込ませる液体に砂糖を加えるらしいが、一回甘くし過ぎたことがあるので、それから混ぜ込みません。

じゅーじゅーじゅー、ジュージュージュー、っと音が変わって、少し経ったら裏返す。っと、こんなものかな。

皿に盛って、盛った皿を持って、妹に持っていった。

「はいどうぞ」

「「いただきます（ぅ）」」

「いただきます」

妹が食べ始めたのをみて、僕も食べ始めた。

うん。やっぱり、あとがけのほうがいいかな。

「兄ちゃん。ゴーレムって何が弱点かな？」

茜がそんなことを効いてきた。

「ゴーレム？　ゴーレムは確か額に記された”ｅｍｅｔｈ”っていう文字の頭文字”ｅ”を消し去り、”ｍｅｔｈ”にするとかだったと思うが、ゲームの中はわからないぞ」

「だよね。どうすればいいんだろ」

「そのゴーレムって魔法が効かないっていうか、吸収するんだよな？」

「そうだよ」

「もしかして、魔法を吸収すると何かが低下しないか？　例えばスピードが落ちるとか」

「なんでわかるの!?　そうだよ。スピードが少し落ちるんだよ！」

やっぱりそうなのか。ってことは、やっぱり魔法吸収は、魔法無効とは別物だ。

「でも、その分、攻撃力と防御力が大きく上がるんだよね」

「魔法を一切使わないか、逆に魔法しか使わないか、ってところかな」

「兄ぃ。それはどおゆうことぉ？」

瑠璃が首を傾げて、質問してきた。

「魔法を使わずに、物理で着実に削っていくか。魔法を使って、魔法吸収の上限まで魔法を打ち込み続けるか。って、ことだよ。魔法を吸収ってのは、魔法を無効にするのとは別物だからな。まあ、どちらも長期戦になるかもだし、魔法使う方は賭けみたいなものだけどね。上限がないかもしれないし」

「う～ん。物理でこつこつの方がいいかなぁ」「そうだね。魔力回復薬は高いし、最高級品で回復量が５０ポイントだから、今の段階では厳しいかな」

「そうなのか。ん？　５０ポイントって、５０％じゃないの？」

僕が作ったマナポーションは、全体量からの割合での回復だったぞ。

「当たり前だよ。ＨＰは％だけど、ＭＰは基本的にポイントだよ。βの時の最大は５００ポイント回復だったよ」「それが、最高級で値段も破格の３０万だったよぉ。まぁ、βではそのせいで、ＭＰ回復速度上昇とかのスキルが必須で、ＭＰ回復効果付きの武器が高級品だったしぃ。正規版でも同じで、必須だね。とってないのは正規版からで、ネットをみていない人だね。今じゃ、とってない人は１人もいないね」

ほう。まあ、最悪ボス戦だけ回復薬を使って、他は休憩して自然回復を待つっていうのが、定石なのかな。しかし、まあ。僕が作ったあれは、ポイントでなく％だったが。……だから逸脱している。って言っていたのか。

「本当に必須なのか？」

「当たり前だよ。初期スキルにＭＰ回復系が一つもないから大変だけど、スキルポイントが溜まった段階で取るのは常識だね」「取らないと、すぐに詰まるからねぇ。初心者応援スレでも、それを一番に教えるよぉ」

「そうなのか」

僕が作ったポーションはおかしいのか？　でも、あの方法はテンプレだしなぁ。うん。

気にしてもしようがないか。そういえば、トーカさんやナツキさんが凄く驚いてたな。

「それに、回復薬ってまずいんだよね。なんであんなにまずいんだろう？」「ねぇ。飲まずにふりかけても効果あるけどぉ、効力が８０～５０％になるからねぇ」

二人して、う～ん、と悩んでいた。まあ、確かに回復薬（初心者マーク）はまずかったな。

「あ。ありがとう、兄ちゃん。参考になったよ」「ありがとぅ」

「ああ。役に立ったかはわからないが、どういたしまして」

ピロリーン

ん？

メールが来たようだ。そういえば、なんで僕の携帯とＥ２のメッセージメールの着信音が同じなんだろう？　買ってから変更していないせいか？　まあ、いいや。メールは、っと母からだ。

〈そっちはお昼前かな？　言い忘れてたんだけど、明日から鎌倉のお祖母ちゃんの家に行ってね。お祖母ちゃんに８月１日に行くって言ってあったのよ。お金は戸棚に入ってるから使ってね。旅行から帰国して、少しのんびりしてから合流するから。それじゃ、お願いね。〉

うん。これはしょうがないか。しょうがないか？　まあ、大丈夫か。妹は知らないが。

「二人とも、話しがあるんだが」

「「何？」」

「今、母さんからメールがあって、明日から鎌倉のお祖母ちゃんの家に行くことになりました」

「「え！？　なんで（ぇ）？」」

「母さんが8月1日に僕らが行くって言ってあったらしい」

「今いいところなのにぃ」

「そう言っても、こういう機会でないといかないし、多分、お祖母ちゃんもお祖父ちゃんも、瑠璃や茜がくるのを楽しみにしてるぞ」

多分じゃなくて、間違いなく楽しみにしてるな。妹のことかわいがってるからな。

「「え～」」

「え～、じゃない。行く度にお小遣い貰ってるし、お年玉も貰ってるだろ。明日の朝出るから、準備しといてね」

「「は～い」」

二人とも嫌がりながらも了承した。

「瑠璃！　今日中にあのゴーレム倒すよ」

「うん。茜ぇ、当たり前だよぉ」

そして、なんかやる気を出していた。

「まあ、頑張れ。準備は忘れるなよ」

「「わかってるよ（ぅ）」」

そういいながら、速度を上げて食べ始めた。

「「ごちそうさまでした（ぁ）」」

妹は朝ごはんを瞬く間に食べて、即行で自分の部屋に行った。

早食いは体に悪いし、食べてすぐに寝転がると逆流性食道炎になるぞ。でもまあ、そんなすぐにはならないか。

明日外出が決定したから、スフィ、ベル、ファノに話さないとな。

あと、シルフィとエドさんにも言っとこうかな。

そんなことを思いながら、自分と妹の食器を台所まで持って行って、しっかり洗った。その後、洗濯物を干してから、

「あ。晩御飯何がいいか聞き忘れた。まあ、自分で決めるか」

今晩のおかずの材料を買いに行き、散歩はやめて《ダイブイン》した。

◇◇◇

第二の町【ソラルル】にて

「ん～。さて」

伸びをした。

「って、つい癖で！」

そんな調子で、《ダイブイン》した。

『主。お帰りなさい』

『主殿。散歩中にどこにいったのかと思っていた』

『ご主人様はお帰りなさいませ』

三者三様に話しかけてきた。

『うん。ただいま。散歩ってどこ行ってたんだ？』

『私は面白いものないか探しに』

『我は火山に何かないか探しに』

『私は山に薬草がないか探しに』

これまた、三者三様に答えた。上から順にスフィ、ベル、ファノ。

『何かあったか？』

『それは、アイテムボックスを覗いてみて』

『我も、なかなかいいものがあったと思うぞ』

『私も、十分自信があります』

皆さん自信満々だな。なんか、見るのが少し怖いぞ。

『そ、そうか。それは楽しみだな。ああ、そうだ。みんなに言わないといけないことがあったんだ。実はお祖母ちゃんの家に行かなくちゃならなくなったから、少しの間来られないと思うんだ』

『鎌倉のお祖母ちゃんの家ですね』

そう、スフィが言った。

『そうそう。って、何で知っている！？』

『ふふふふ』

うん。スフィなら当たり前だな。そうそう。問題なし。

無理矢理納得して、話しを進めた。

『そんな訳でこられないと思うから、その間は自由行動で』

『了解だよ』

『承知した』

『わかりました』

『頼んだよ』

さて、三人には了解をもらったから、今度はエドさんとシルフィに言いに行こうかな。そのあとは【ファスト】に戻って、［深き沼地］に薬草とか月下草を採りに行こうかな。あそこの巨兵の噂とか気になるし、あの大きな岩もね。

『それじゃ、道具屋さんに行こうと思うんだが、みんなはどうする？』

行く場所を決めたので、一緒に行くか。と、みんなに聞いた。

『私は面白いものないか探しに』

『我は高山に何かないか探しに』

『私は海底に薬草がないか探しに』

『そ、そうか。ほどほどにな』

『りょーかい』

『うむ。承知した』
『かしこまりました』
そう言って、三者三様に飛んで行った。
不安しか湧かないのは気のせいか？　そういえば、ここでなら念話の必要なかったな。
それと、あれだな。スフィもベルもファノも、スペックがオーバー過ぎて一緒に戦えないな。どうするか。
そんなこんなで、話しが終わったので、道具屋さんに向かった。
歩くこと２０分ほどで“道（ゲート）”についた。
今実感したが、この町【ソラルル】は【ファスト】より大きいようだ。
“道（ゲート）”を潜り、【ファスト】に着いた。
「さて、道具屋はあっちだったな」
僕は小声で呟いた。
１０分ほどで道具屋についた。前言撤回、やっぱり【ファスト】も十分大きいです。
「こんにちは」
「いらっしゃい。おお、ニズ嬢ちゃんか。今日も作業場か？」

「いえ。用事があって当分来られそうにないので、お伝えしておこうかと。特にシルフィに」

「そうか。それはわざわざすまないな。でも確かにシルフィには言っておいたほうが安全かもな」
不思議なことをエドさんは言った。

「安全？　それはど　「ニズ～！」　へ？」
どふん、むぎゅ、むにゅむにゅ、むぎゅむぎゅ、と、効果音が出るほど、色々揉まれた。
「んなぁぁ！？」
「ニズぅ！！！」

何がどうなった！

「ははははは。こらシルフィ。落ち着きなさい」
エドさんは笑いながら、シルフィに声をかけていた。

ハッ！　としたような顔をして。
「す、すいません。体が勝手に」
シルフィは顔を赤くして言った。

ふぅ
「シルフィ。いきなりどうしたの？」

「すいません。嬉しくて体が勝手に」

「そうなの。まあ、実害がないから、これくらいなら大丈夫だよ。それでさ、用事があって当分来られそうにないっていうの、伝えに来たんだ」

これは、早めに言っておこう。

「用事ですか？　でも、もう来れなくなるわけではないのですよね？」

「うん。精霊祭までには来れるかな」

「そうなのですか？　実はお爺様と一緒に精霊祭に行く予定でして、もしかしたら用事が終わる頃には、【エレスト】に向かってしまっているかもしれません」

少し俯いて、残念そうにシルフィは言った。

「大丈夫ですよ。私も精霊祭に行く予定ですから、会える時間があったら、向こうで会おうよ」

「本当ですか？　絶対ですよ！？」

「はい。もちろんですよ」

王族の人だから、会えるかどうかは分からないが。

「楽しみにしてますね」

シルフィは満面の笑みで言った。

「はい」

僕も笑顔で答えた。

「それで、ニズ嬢ちゃんはこれからどうするだい」

「僕はこれから、薬草や月下草の採取のために、［深き沼地］に行こうかと。気になる事もありますし」

「そうか。あんなところに、一人で行って大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。こう見えて強いんですよ」

「そうなのか。……うん。大丈夫そうだな。なら、次に会うのは【エレスト】かな」

じっと見られたが、どこかに強い要素があったのかな。それとも、視る力か……。

「かも知れませんね。それでは失礼しますね。このまま居たら、ずっと居てしまいそうですし」

「ははは。確かにシルフィに捕獲されて、そのままかもな」

笑いながらエドさんは、ある意味確信をついた。

「ははは。そうかもしれません」

僕は乾いた笑みで、答えた。

「そんなことないもん」

シルフィは頬を膨らませていった。

「「ははは」」

エドさんと一緒に笑った。

「それでは、もう行きますね」

「おう。またな」

「はい。またね」

「はい。お邪魔しました」
そう言って、お店からでて、［深き沼地］に向かった。

あれ、そういえば、ここから【エレスト】にどうやって行くんだろ？　王族専用の抜け穴があるのか、それとも時間をかければ普通に行けるのか？

リアルとスキンシップと母による強制イベントと……。（後書き）

ありがとうございます。

感想・指摘有り難うございます。

h加えて修正しました。

岩と仮装と異なる国……。（前書き）

お願いします。

岩と仮装と異なる国……。

［深き沼地］にて

「さて、着いたはいいが、巨兵なんているのかな？　あの的の代わりにした壊れない岩が怪しいが、あんだけ叩いて反応も何もないしな。う～ん」

独り言を言いながら歩き出した。記憶を確かに岩の場所まで。

途中、芋虫に遭遇・戦闘をしたが、何故か芋虫のみで、他のモンスターに会わなかった。

此処って芋虫しかいないのかな？

スキル［発見］を使い、道草採りつつ森の奥へ進んで行った。

色々と考え事をしていたら、ふと疑問に感じることを思い出した。

と言うか気付いた。

「そういえば、なんでみんなケモミミに反応がなかったんだろ？

シルフィは始めから着けてたから、反応ないのは当たり前だけどさ。

う～ん。エドさんは忘れてたとして、ナツキさんとトーカさんは、明らかに目の前で変えてるんだよね」

なぜだ。と、考えているが、答えはでない。

（ちなみに、気付かないのは、ニット帽で耳が隠れていることと、出てる尻尾を見ても、見逃していたと勘違いしているからである）

まあ、いいか。

お！　見えてきた。相変わらず大きいなこれ。そういえば、ここら辺って魔獣（モンスター）や魔物がいないな。やっぱり特殊なエリアなのかな？

……とにかく、また調べてみるか。

ペタペタと表面を触った。反応がない、まるで岩の様だ。

「ふぅ。どうするなかぁ。あ、運営から特殊特典で貰ったアイテムでも、確認しますか。周りに敵の気配もないし、問題ないな」

さてと、どれどれ、

消費アイテム［技能宝珠（スキルオーブ）］

スキルをポイント消費なしで取得できる。このアイテムでしか、取得できないスキルも存在する。

特殊（スペシャル）消費アイテム［秘技創造宝珠（クリエイトオーブ）］

オリジナルの秘奥義を作成できる。作成するのは、一度自力でその技を使う必要がある。作成が成功するまで、何度でも使用可能。

特殊（スペシャル）素材アイテム［七光夢晶（オーロラ・クリスタル）］

七色に光り輝く水晶。その輝きは夢をみせる。

特殊（スペシャル）素材アイテム［異世界乃輝石（ティエラ・グリフ）］

異世界のみに存在していた輝石。今では異世界でも失われているため、太古の遺跡から極僅かに痕跡が発見される程度。

特殊（スペシャル）アイテム［クラン設立許可証］

クランをつくる為の許可証。これでクランがつくれます。

特殊武器（スペシャル）アイテム　白刀［真秀刃（まほろば）］
成長する武器。今はまだ力を持たない。

固有（ユニーク）専用アイテム［知られざる島への鍵］
知られざる島へとつかながる道を開く鍵。鍵の形状をしているが、転移魔方陣を展開する触媒であり、本来の鍵の使い方とは異なる使い方をする。

固有（ユニーク）専用ホーム［知られざる島］
家（ホーム）というか島（アイランド）。面積は１２６８ｋｍ？である。

特殊消費（スペシャル）アイテム［早着替宝珠（チェンジ・オーブ）］
スキル［早着替え（クイック・チェンジ）］を取得できる。

固有（ユニーク）専用武器アイテム　白傘［高貴なる純白（ノービリス・アルブム）］
純白よりも白い傘。決して汚れることはない。雨傘としても、日傘としても使える。
効果：Ｓｔｒ＋５００、Ｉｎｔ＋２０００
スキル：［純白聖域］［気配遮断］［魔法遮断］
譲渡・売却不可。耐久度なし。

なかなか、有用なアイテムだな。大盤振る舞い過ぎないか？　あ、全部、譲渡・売却不可だ。まあ、売るつもりはないが。

とりあえず［技能宝珠（スキルオーブ）］は使ってみようかな。何故か４つも貰ってるし。

と、その前に称号の確認かな。

称号［世界を始めに知った者］
世界を始めに知った者に与えられる称号。世界地図（ワールドマップ）が使用可能になる。

称号［存在は正義（ニズロリ）］
貴女こそが正義！　魅惑（ウインク）の瞬きが使用可能になる。

なんだこりゃ！？　それに世界地図（ワールドマップ）って、確かに大陸があるとは聞いたが、そこまで世界は広いのか。といっても、今見てもどうしようもないな。

そういえば、初期の装備が変わったとか、そんなこと書いてあったな。

服一式［純白の高貴なる御令嬢（アルブム・フィーリア）］
純白よりも白い。麦藁帽子、ワンピース、ショートパンツ、ローファー、からなる初期装備が変化した装備。公式の場での正礼装としても使える。
効果：Ｖｉｔ＋２３００、Ｉｎｔ＋１３００、Ｍｉｎ＋２５００、Ｄｅｘ＋１２００、Ａｇｉ＋６００
スキル：［高貴なる嗜み］［姫の振舞い］［王族の威厳］
譲渡・売却不可。耐久度なし。

強すぎないか？　ま、まあ、とにかく［技能宝珠（スキルオーブ）］を使って、何か良いスキルないか調べるか。

さて。う～ん。

魔法を覚えるか、それとも、他の、……ん！？　これは何だ！？

スキル［能力仮装］

能力値を元々の数値以下へ、自由に仮装できる。本来の数値は変化しないため、簡単に言うと手加減の達人になれるスキル。自身の能力を制限するデメリットスキルのひとつ。

こんなスキルがあるとは。これはちょうどいいかも。

……う～ん。……うん、取得！

これは使える。主に、僕が楽しむために使える。さすがに、ほとんど一撃じゃつまらない。

さてと、この岩もいくら調べても分からないし、町に戻って《ダイブアウト》しようかな。明日の準備もあるしな。

ん？

何かの気配がした。魔物（モンスター）ではないような。

「なんだろう？　人かな。ずいぶん気配が弱いが」

そんなことを思いつつ、気配のする方向へ注意をはらいながら、向かって行った。

こっちのほうか？　ん！？

人が倒れていた。

「え？　ええ！？　だ、大丈夫ですか。って、倒れてる時点で大丈夫でないか」

ひとりツッコミをしながら、倒れている人に駆け寄った。

見た目は６０～７０代の男性。顔は東洋人のようだ。プレイヤーか？　でも、格好からすると、一概にそうといえないな。なんか刀っぽいものをもってるし、まだ刀スキル、刀術か？　まあ、いい。そのスキルは見つかっていないから、ＮＰＣ、こちらの住人だろう。俺らが異世界人なら、かれらは現界人かな？　って、そんなこと考えている場合じゃない！

……うん。なんとか呼吸はしているようだが、顔色が悪く、真っ青（顔面蒼白ってやつ）になっていた。

「どうしよう！？　そうだ。薬！　万能薬とポーションどっちがいいんだろ。でも、急がないと、このままじゃまずいぞ。……もう考えてもしょうがない。ポーションかけて、ダメだったら万病薬を飲ませよう」

早速、ポーションをかけた。体が淡く光り、その光るが体に吸い込まれていった。

「うぐ。ここは？」

どうやら目覚めたようだ。しかし、この人。よく見たら、何でこんなところに？　まあ、見た目で言えば、僕よりは違和感はないが。

「大丈夫そうですか？」

「あんたは？」

「ここを通りかかりまして、倒れているのを見つけたんですよ」

「そうか。死に場所を探して旅をして、ここまで来たが、命を助けられたか」

「死に場所ですか？」

「ああ、そうだ。いや、別に自殺願望があるわけではないぞ。ただな、弟子も育ち、子も育ち、そして孫も大人になり、今では曾孫もいる。妻に先立たれたので、自分の死に場所と、生きてきた中で訪れた場所を再び巡ろうと思ったのだよ」

「そうなんですか。自分の為の旅なんですね。訪れた場所はすべて巡りきったのですか？」

「いや。まだ残っている。もう一度会いたいものもいるからな」

「なら、会いにいかないといけませんね」

「ああ。そうだな」

二人で目を合わせて、笑いあった。

「そういえば、なんでこのような場所に倒れて？」

「ああ。ここの敵は芋虫しかいないようで、実は迷彩毒蜘蛛（ステルスパイダー）と言うモンスターが出るのだ。芋虫だらけで気を少し抜いた途端に、麻痺毒にやられてな。なんとか敵は倒したのだが、自分が動けなくなっ

てしまったのだよ。耄碌したかな。体力が昔に比べて随分と落ちておるのに、無茶をしてしまったかも知れないな」

「そんなことが、あったんですか」

う～ん。そんなのがいるのか。それは気をつけないといけないな。しかし、ステルスってことは見えないのか？　それとも、隠れるのが上手いだけか？

「それで、嬢ちゃんはなんでこんなところにいるんだ？　ここは嬢ちゃんのような、子供が来るようなところでもないだろう。いくら俊敏性と気配察知に長けた犬系獣人でも、その年では危ないのではないか？」

心配してくれているようだ？　まあ、確かにこの容姿（そういえば、まだ鏡をみてないな）では、そう思われてもしょうがないか。

「しかし、驚くほどべっぴんさんだな。幼いのに可愛いと美しいが合わさったような、綺麗な顔をしている。将来は安泰だな」

いきなり話しの方向が変わったな。そういえば、僕って本当にどんな顔なんだろうか？

「まあ、ワシは妻一筋だがな」

そう言って、豪快に笑った。僕もつられて、一緒に笑った。

「そういえば、お名前はなんていうのですか？　僕はニズです」

「お。おお、すまんすまん。ワシの名前は桜季源内（おうきげんない）と言う。１６代目桜季流剣術師範でもある。瑞穂ノ国より来た」

源内さんはそういった。瑞穂ノ国？　日本の別称にそんな名前があったような。

「もしかして、瑞穂ノ国とは、島国ですか？」

「そうだ。ニズ嬢ちゃん。ここより、東。海を越えた先にある」

どうやら、日本的な国もあるようです。そして、名前を名乗っても、何故かみんな嬢ちゃんは消えないんですよね。なんでだろう？　呼び捨てでもいいのにな。まあ、いいや。明らかに僕は小さいからね。

「それは行ってみたいですね」

「ワシの国に興味があるか」

「はい。とても」

「そうか。それは嬉しいな」

ふたりして笑いあった。

ここで、ふと、思ったことを聞いてみた。

「この森にいたということは、この先に知り合いがいるのですか？」

「おう。エレストってところと、アイレリーフってところにいる。旅もこの国で最後だ。そのまま、友人のところで厄介になるのもいいかもな。一度誘われたからな。……そういえば、あの約束はまだ有効なんだろうか？」

「あの約束？」

「ん？　いやなに、昔した約束さ。俺がまだ、世界中を回って旅をしている頃にな」
そういって、懐かしんでいるような、悲しんでいるような、なんとも言えない表情をした。
「まあ、巡った中には、すでに無くなっている場所もあったがな」
「そうなんですか」
「時間は前にしか進んでくれないからな。まあ、ワシはそんな時間が好きだがな」
この人は、僕なんかより長い時間を生きてきたんだろうな。
「そうですね。僕もそんな時間が好きですよ」
「そうか。同じだな」
「そうですね。同じですね」
「そういえば、ニズ嬢ちゃん。ありがとうな」
「え！？」
「いや。命を助けてもらった礼をしてなかったと思ってな。それに、あんなに高い霊薬まで、使わせてしまったな」
あのポーションは高いのか？　自分で作ったからわからんな。てか

霊薬？

「どういたしまして。それについては気にしないでください」

「う～ん。そこで引いてしまうのも、大人としてどうかと思うな。なにかワシに願いはないか？」

唐突に聞いてきた。願いって、なんだろう。あ、そうだ。

「一つ興味があるのは、桜季流剣術です。確か、師範って言ってましたよね？　剣術と言っていますが、もしかしたら刀を使う武術でないですか？」

「おお。そうだ。よくわかったな。刀は瑞穂ノ国以外にはほとんど流通しないから、知っているとは驚きだ」

「いえいえ。それでですね。その桜季流剣術を出来たら、教えていただけませんか？」

岩と仮装と異なる国……。（後書き）

有り難うございます。

［能力仮装］は、［技能宝珠（スキルオーブ）］でのみ、取得可能なデメリットスキルのひとつ。

他には［空白体］、［呪毒強化］、［技能封印］、［自滅］、［武装解除］、［武器投げ］がある。

刀と修行と習得と……（前書き）

お願いします。

刀と修行と習得と……

「剣術を、か？」

「はい。剣術を、です！」

僕が、どうして剣術を教えてもらおうと思ったのは、感じからして桜季流剣術とは、刀を扱う剣術だと思ったからである。刀はやっぱり、男の浪漫だよね。

「う～ん。……うん。よし。いいだろう。命の恩人からの頼みだ、教えよう。もう弟子は採らないと決めていたが、ニズ嬢ちゃんならいいだろう。幼い様であるが、秘めた力はもしかしたら、ワシ以上かもしれん」

一瞬鋭い目付きになり、そう言った。

「有り難うございます！」

「まずは、桜季流の詳しい説明をしよう。桜季流は、剣術と言っているが、実際は刀を使う。桜季流は少し特殊な流派で、鞘も使用する」

「鞘もですか？　それは、抜刀術の様な感じでしょうか」

「確かに抜刀術もあるが、桜季流は鞘そのものを使う。刀身による斬撃と、鞘による打撃、それに刀先による突撃、それらに抜刀を合わせる」

「多様性に優れた流派なんですね」

「そうともとれるが、開祖のこだわりで、技（アーツ）が４種類しか存在しない」

「？　技（アーツ）が４つもあれば、十分なのではないですか？」

４種類って多くないか？

「いや。普通の流派は最低でも１０種類は存在する」

そんなに多いのか！　使いこなせる気がしません。

「多い流派では、３０種類以上だな」

それは、もう使わない技（アーツ）があるだろう。

「そんなにあっても使わないですね。桜季流は４つですから、すべて使えるので、無駄がなくて素晴らしいですね」

余分がないのは素晴らしいです。はい。

「ほほう。ほとんどの場合、ここまで言ったら、やめると言う者がほとんどだったが、逆にやる気を見せるのは初めてだ。それに、無駄がなくて素晴らしいか」

嬉しそうに笑いながら、源内さんは言った。

「そうなんですか？　それに嬉しそうですね」

「それは自身の技を褒めてもらって、嬉しくないものなどいないだろう？」

「確かにそうですね」

「それに、無駄がなくて素晴らしいというのは、開祖と同じ考えなんだ。これは、是非とも我が流派を覚えてもらわなくてはな」

「はい。宜しくお願いします」

そして、始まった。

「まずは、って。そういえば刀は持っているのか？」

「はい。持っています」

僕はそう言いながら、〔白刀［真秀刃（まほらば）］〕を取り出し装備した。

それを見て、源内さんは

「これはまた、白い刀だな。ここら辺では、とても珍しい武器のはずなんだが、どこで手に入れたんだ？」

「手に入れたのは偶然です。（ある意味で）知人が（ある意味で）創ったものなんです。それを貰ったんです」

「そうか。なかなか、いいものだ。大事にするんだぞ」

「はい」

「それでは始めるか。と、言っても、覚えるのはそう難しくないんだ」

「？　難しくないんですか？」

「ああ。ただ、それを使いこなすとなると、話しは別だ。素振りを見せて欲しい」
真剣な顔で、源内さんは言った。何かギアが変わったのかもしれない。
「わかりました」
そう言って、僕は素振りを始めた。

「よし！」
３０分くらい振ったところで、待ったが掛かった。
てか、今まで気付かなかったが、この体、まったく疲れないんだが、どういうこと。

「凄まじい体力だな。秘めた力があると言ったが、ここまでとは」
驚愕していた。僕もこれは驚きです。

「でだ、素振りを見たところ、身の丈ほど刀を振っているにも関わらず、体の軸にブレがない。これならば、技（アーツ）を伝授しても、大丈夫だろう。使いこなすには、更なる修練が必要だがな」
ブレがないのは［身体強化］の恩恵かな。確か、バランス補正とかあった気がする。

「有り難うございます！」

「よし。まずは、技名（アーツ）を教えよう。斬撃の［白椿］、打撃の［花桃］、突撃の［雪柳］、そして抜刀の［春光］、の４種類だ。今から

やって見せる。よく見ておけよ」

「はい」

「まずは斬撃の［白椿］からだ。いくぞ」

そう言って源内さんは刀を抜いた。正眼の構えを取った。その後、刀を振り上げ、技（アーツ）の起動光（エフェクト）が起こり、垂直に振り下ろされた。次に振り下ろされた刀を横に持っていき、再度起動光（エフェクト）が起こり、今度は水平に刀が振られた。

「見たか。これが［白椿］だ。通常の流派の技（アーツ）は型が決まっているが、桜季流では決まっていない。一番強い斬撃が、その者の型となる。その型を見つけ、極めて行くことこそが、桜季の極意だ」

「はい。やりがいがありますね」

「ああ。生涯修行だ。それでは次に打撃の［花桃］だ。よく見ておけ」

刀を納めた鞘を逆手に持ち、抜刀するような構えをした。それと同時に起動光（エフェクト）が起こり、鞘は振り上げられた。次に振り上げられた鞘に、再度起動光（エフェクト）が起こり、振り下ろされた。

「この［花桃］も、［白椿］同様、型が決まっていない。一番強い打撃が、その者の型となる」

「凄いです。……ひとつ思ったのですが、技（アーツ）の待機時間（クールタイム）はないのですか？」

「お、いいところに気が付いたな。桜季流には、待機時間（クールタイム）は存在しない。型がない唯一の流派故に技数（アーツ）少ないが、そのかわり唯一待機（クールタイム）

時間が存在しない流派なのだよ」

「それは最強ではないですか？」

「いや、もちろん欠点もある」

「欠点ですか？」

「ああ、そうだ。桜季流の技（アーツ）は消費ＭＰが、他の流派に比べて、かなり多いんだ。故に、ここぞと言う時に使うのは変わらない」

「成る程ですね」

「それでは、次に突撃の［雪柳］だ」

刀を鞘から出して、刀先を相手に向ける様に上段に構え、起動光（エフェクト）が起こったと同時に、前方に足を一歩踏み出し、それと同時に突きを放った。

「この［雪柳］も、［白椿］や［花桃］同様、型が決まっていない。突くという関係上、型が決まっているように感じるが、自身が出来うる最高の突きが、この技（アーツ）だ」

「片手で突いてもいい、と言うことですね」

「その通りだ。最後に抜刀の［春光］だ。一瞬だからよく見ておけ」

鞘に納めた刀を腰に構え、起動光（エフェクト）の発生と同時に刀身を鞘から滑らす様に上方に振り抜いた。本当に一瞬の出来事だった。

「見たか？　これが、［春光］だ。抜刀する特性上、ほとんど型が決まっているが、桜季流の特性上型がないので、逆手持ちでも使用

できる」

「桜季流は、変幻自在の流派なんですね」

「その通りだ。さあ、次はニズ嬢ちゃんの番だ」

「はい！」

僕は刀を抜いて構えた。

結論から言うと、すぐに覚えることは出来た。使いこなすには時間が必要で、技（アーツ）の発動だけはとりあえず出来る感じ。

「ニズ嬢ちゃん。本当にあんたは何者だ！？　基礎は出来てる様だったが、まさか一時間弱で習得出来るとは」

源内さんに物凄く驚かれました。

「僕も、まさかこんなに早く習得出来るとは思いませんでした」

しかし、なんでこんなに早く習得出来たんだろ？　まさか種族補正か！？　う～む。……考えても解りようがないか。

「技（アーツ）使いこなすには、時間を使い、個人で高めていくしかないな。う～ん。……よし！　ニズ嬢ちゃん！」

「はい！」

「ニズ嬢ちゃんに、ワシの権限で“桜季流剣術皆伝”を与えよう。技（アーツ）は既に使える。あとは高めていくだけだ」

「はい！　有り難うございます！」

「うむ。日々の修練を怠るでないぞ」
源内さんは、少しからかう様な笑顔で言った。

「もちろんです」
僕は当然だ！　とでも言うかの様に言った。

ポーン
〔スキル［桜季流剣術］を習得しました〕
〔称号［桜季流剣術皆伝］を取得しました〕
〔称号［桜季流剣術開祖の直弟子］を取得しました〕

ん？　開祖？　１６代目じゃ！？　え！？　あ、いや、うん。何か理由があるのかな？
よし！　気にしない！　我が称号はだてじゃない！！

刀と修行と習得と……（後書き）

有り難うございます。

余談ですが、起動光（エフェクト）は通常は見えません。源内さんの技（アーツ）の起動光（エフェクト）が見えたのは、わかりやすい様に、源内さんが見える様にしていたからです。

知り合いと邪神と救いと……（前書き）

お願いします。

知り合いと邪神と救いと……

「源内さんは、これからどうするのですか？」

桜季流剣術を教えてもらったので、このあとどうするか。う～ん。源内さんを町まで送るって言うのも、失礼だしな。

「ワシか？　ワシはこれから【エレスト】に向かおうと思う。何故か知り合いから、来る時期の指定があったからな」

「時期の指定が、ですか？　何かあるんですかね」

「おそらくな。まあ、招待状も入ってたし、何かあるんだろうな」

「何か、って。招待状に書いてなかったのですか？」

「そういえば、そうだな。中見てなかった」

気まずそうに、源内さんは言った。

「……まあ、行けばわかりますから、知らなくても問題ないですね」

「おう。そうだな。……ニズ嬢ちゃんは、これからどうするんだ？」

「僕ですか？　僕も【エレスト】に向かうつもりですが、精霊祭までに着ければいいかな。と言う感じなので、のんびり向かうつもりです。とりあえず【ファスト】に戻ります」

「そうか。なら、一緒に行こうか」

「はい。ご一緒します」

二人でそろって【ファスト】に向かっていった。
その間、敵に襲われたが、刀の修練に使わせて頂きました。

◇◇◇

【ファスト】に着きました。

「ニズ嬢ちゃんは、中々の腕前だな。この短期間に、あのレベルまで達するとは、さすがだ」
源内さんに、キラキラした目で褒められた。

「有り難うございます」

「機会があったら、手合わせしないか？」

「はい。機会がありましたら。ただ、もう少し修練してからお願いしたいです」

「わかった。楽しみにしてる」

「はい！」
今のところ、勝てる気がしないです。

「それじゃ、ワシは行く。またな」

「はい。それでは、また」

源内さんは、広場の方へ歩いて行った。

見えなくなってから、《ダイブアウト》した。

◇◇◇

《ダイブアウト》し、体をベッドから身を起こした。

「ん～」

体を伸ばした。

「さて、洗濯ものしまって、晩御飯の仕度でも始めようかな」

そう独り言て、下に下りて行った。

洗濯物を取り込み、畳んでから、晩御飯の準備を始めた。

今日の晩御飯は、ドライカレーでさぁ。さて、つくりますか。

あえて普通のカレーと同じ様に、隠し味に林檎と蜂蜜を入れて、時が来るまで、時っ来ることこと、水分飛ばしつつ。

なお、今回はニンニクは入れておりません。

よし。できた。目玉焼きと、チーズ乗せで食べようかな。

その前に、明日の仕度でもして、風呂を洗ってから食べますか。

仕度が終わり（まあ、服を準備するだけですから）風呂を洗って沸かして。さあ、ご飯を食べよう。

さて、ドライカレーを温めて。って。

「兄ぃ。晩御飯はカレー？」

瑠璃が下りてきていた。瑠璃だけが居た。

「そうだよ。……あれ？　茜はどうした」

「もう少しで下りてくると思うょ」

その時、ドタドタと、茜が下りてきた。

「兄ちゃん！　晩御飯は……カレー？」

茜はリビングに、入って来たと思ったら、晩御飯を言い当てた。

まあ、カレーはわかるか。

「ああ。ドライカレーだよ」

そう言いながら台所に行き、ドライカレーを火にかけた。

「目玉焼きとチーズを乗っけるか？」

二人に聞いた。

「私はぁ、チーズぅ」

「私は目玉焼きで」

「了解」
ふむ。瑠璃がチーズで、茜は目玉焼きか。
「はい。お待たせ。おかわりする場合は、自分で盛ってね」
瑠璃にはチーズ、茜には目玉焼きを乗せて持って行った。
「はぁい」
「わかった」
「「いただきます（ぅ）」」
さて、妹も食べ始めたし、自分の分を盛りますか。もちろん、予定通りチーズと目玉焼き乗せで行きます。
「兄ちゃん。マジックゴーレムが倒せないよ。パーティボスだから、じり貧に、なって勝てないよ」
「そうなのか？」
「そうなんだよぅ。まったく、歯が立たないよぅ」「そうそう。多分、何か忘れてるんだと、思うんだよね」
「そうなのか。それはそうと、明日の仕度は済んでるのか？」
「「勿の論です（ぅ）」」
「そうか。なら問題ないな。最低でも午前中には出るからそのつもりで」

「「了解（い）！」」
何故か敬礼しながら、二人は言った。敬ってはいないがな。

妹は二人一緒にお風呂に入って、
「今日中にマジゴ倒す！」
と、意気込んで、2階に上がって行った。

僕も風呂に入ってから、寝る準備をしてから、2階に上がって行った。

《ダイブイン》

◇◇◇

【ファスト】にて

さて、再度［深き沼地］で、もう少し巨兵でも探そうかな。試しにあの岩を、巨神剣使ってフルパワーで切ってみようかな。

さっさと門を出て、再度、岩のほうに向かって歩いていった。

道中、芋虫に襲われたが、難なく退けて歩いていった。どうも、蜘蛛は出てこない。何か条件があるのだろうか？

そういえば、源内さんはどうしたのかな？　まあ、その精霊祭で会えるかな。・・・・・・・・会えるかな？　祭りって言うからには、人も多いだろうし、【エレスト】も“精霊使帝都市”っていう

からには、間違いなくここより大きいよな。・・・・・・・・・・・・・・・・縁が有ったら会えるよね。

そんなことを考えて歩いていたら、いつの間にか目的地についていた。

「おぉし。ぶった切るか」

そういいながら、巨神剣のスキルを有効化し、巨神剣を具現化させて、力いっぱい振りかぶった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「貴様が、我の封印を解いた者か？」

なんでこんなことに。ご都合主義も甚だしいだろ！　もとい、なんでこんな序盤に邪神とか封印されてんだよ！

「ほほう。無視とは中々豪胆だな」

考え事をしている間に、なんか話が進んでいた。

「ああ。すまない。考え事をしていた」

「そうか。まあ、それも良かろう。どうせここで死ぬ運命だからな。第一、貴様が死なないと、ここから外に出られそうにないからな」

「そうか。なら、僕も死ぬわけにはいかないな」

そこで、完全に姿を捉えた。姿は、闇のように黒い髪を持ち、右目が銀色で左目が金色の、肌は浅黒い美丈夫だった。身長は１８０ｃｍくらいかな？

「そうか……ならば、戦争だ！」

そう言いながら、得体の知れない黒い球体の塊を１０個くらい浮かべ、こちらに打ち出してきた。

「何故その台詞を知っている」
僕は光魔法の《ライトシールド》を使用して、攻撃を防げなかった。
そのため、頑張って回避した。

回避スキル持ってよかった。このスキルって結構有用じゃない？

「ほう。よくかわした。それではこれはどうかな」
再度、得体の知れない黒い塊を３０個くらい浮かべ、槍状にし高速で回転させながら、こちらに先ほどよりも速い速度で打ち出してきた。大体１０個単位で3回。

「さっきよりも多いし、速いし、なんなの」
頑張って回避し続けた。攻撃が速過ぎて、自分でもどうやって避けたかわかりません。

「なかなか、貴様もやるな。なかなか強い幼女だ。しかし、その巨大な剣は飾りなのかな？　まあ、我にはただの剣や魔法は効かないから意味はないが。……さて、貴様を殺さないと出られないからな、名残惜しいが死んでもらおうか」
ははは、と笑いながら、更に大量の得体の知れない黒い塊を複数浮かべた。

数はもう数え切れません。１０００は超えてるかな。
そういえば、巨神剣の存在を忘れてたよ。僕、よく持ったまま、回避しきれたな。そういえば、【美幼女神化】ってあったな。使ってから、あのアーツ使えば倒せるかな？

「死ぬがいい」
浮かべた得体の知れない黒い塊を巨大な剣状にして、さらに高速で打ち出してきた。

とっとと殺りますか。

「あまい。もう使わないと思っていたが……。消滅せろ。［御元切伏］」

右上から左下へ斜めに斬り下ろした。もう、使わないと思ってたんだが。

その瞬間、周囲に光を帯びた、やわらかい風の様なものが広がった。

この感覚も、最近味わったな。

――――――

」の討伐に成功しました」

やっぱり、倒せたか。

「ありがとう。私を止めてくれて」

ん？

「どなた様で？」

パターン的には神様降臨？

「私は邪神と呼ばれていたもの」

そっちのパターンでしたか。

「すまなかった。私を止めてくれて感謝する」

申し訳なさそうに、邪神、いや、元邪神は言った。

「止めてくれてって。どう言うことですか？」

「私は、邪なるものに囚われていた。長い間、どのくらい時間が経過したかも分からない。……私は元は破壊神だった。しかし、私は破壊の心に負けてしまった。その心の隙間に邪なるものが、入り込んでしまった。それに気付いた時にはすでに遅く、強大な力を得てしまい、他の神でも、私を完全に止めることは出来なくなっていた。そのために、私は神霊と他の神の力により、この地に封印された。だが、まさか救われる日がこようとは……本当にありが

とう」
嗚咽を漏らしながら、これまでの経緯を説明してくれた。
「気にしないでください。困ったときはお互い様です」
すいません。おもっきり殺そうとしました。
「ありがとう。私に巣くっていた邪なものは浄化された。これで、世界の輪廻に戻ることが出来る。本当にありがとう」
少しずつ元邪神、その前は破壊神の体は薄くなっていた。
「また、どこかでお会いしましょう」
僕はなんとなく。もう一度会える気がした。
「ああ。その時は……」
最後まで聞けることなく、消えて逝った。

知り合いと邪神と救いと……（後書き）

有り難うございます。

誤字報告頂いた箇所を修正しました。

進化と真価と今後の予定と……。（前書き）

お願い致します

進化と真価と今後の予定と……。

彼は最後に何を言いたかったんだろうか？
いや。きっともう一度会える気がするから、その時に聞けばいいかな。
なんとなくだけど、覚えているような気がするから。

それに神にも輪廻ってあるんだなぁ。

あ、「神様って、殺しても良かったのか！」

い、いや。本人もありがとう。って言ってくれたし、問題ないだろう。

ポーン
〔称号取得条件クリア。ユニーク称号［絶対なる死を覆す者］を習得しました〕
〔称号取得条件クリア。特殊称号［邪神殺し］を習得しました〕
〔称号取得条件クリア。特殊称号［神を救いし者］を習得しました〕

【ユニークボーナス】
邪神剣［死を詠う邪神剣（デスマーチ）］
【ＭＶＰボーナス】
死齎邪神の邪神核
【ソロ討伐ボーナス】

防具一式［胎動する黒衣（ダーク・エンブリオ）］
【イベントボーナス】
割れた要石
【通常ドロップ】
死齎邪神の邪玉
死齎邪神の欠片
死齎邪神の残滓
死齎邪神の破片
【特殊条件クリアボーナス】
破壊神の神命珠

何はともあれ、倒せてよかった。しかし、やっぱりオーバースペック過ぎる。仮装のスキル取っといて良かった。早速メインにセットしますか。

ポーン
ん？　まだあるのか？　前回もあったようなパターンだな。

［特殊条件をクリアしました。種族［美幼女（美幼女神（めがみ））］は［无極神（ムニス）・美幼女（デア）］に特殊進化します。また、それに伴い、スキル［巨神剣　ＥＬｖＭ（エクシードマスター）］が［真・巨神剣］に完全覚醒しました。巨神剣［神姫遣神星乃御柱（カミヒメノツカイノミハシラ）］は、真・巨神剣［无極神御剣（ありしかみのみつるぎ）］へ、完全覚醒しました］

［戦闘フィールドより元のフィールドへ戻ります］

「……もう、何かいう気も起きないよ」

今回の条件も、いったいなんだったんだ？

「相変わらず、目線も変わってないようだし。多分容姿も変わってないよな」

さて、ここは落ち着いて詳細確認だな。

［无極神（オムニス）・美幼女（デア）］

あどけなさの中に婉然さを持つ、羞花閉月・天衣無縫な超絶可愛い至高の美幼女。その美しさは神をも超越した！

神様なので種族と言う分類でないが、便宜上種族になっている。悪ノリ我が儘悪ふざけの集大成。普通には進化できないように、進化条件が設定されている。そのため、進化することは不可能、と言っても過言ではない。ぶっちゃけ進化できた人は、『もはやなに！？』状態である。その分、種族特性も壊れ性能で『もはやなに！？』状態である。『いったいなんなの？　もはやなに！？』

〈種族特性〉

服系統以外の防具は装備不可能。その代わり、性能が飛躍的に上昇する。

１つ目のスキルが変更できなくなる代わりに、そのスキルの取得スキル経験値が１００倍になる。そして、１つ目のスキルを完全習得した場合、その後すべてのスキルの必要経験値が半分になり、取得スキル経験値は3倍になる。さらに、一つ目のスキルを使用した場合のスキル経験値は、他のスキルに分与される。

全ダメージ９９％減、全状態異常無効、呪無効、阻害妨害拘束系統無効、能力低下系統無効、全属性魔法無効、全防御透過貫通

全属性の魔法を範囲・威力の規模関係なく、タイムラグゼロで高速連射可能。
ＭＰがレベルアップ毎に、５０００増加する。
身長は９７ｃｍ、体重３ｋｇです。
なお、運営や開発への苦情や変更などは、一切受け付けません。
『Ｙｅｓ　ロリータ、Ｌｅｔ's　タッチ！　可愛いは神だ！　そして、これは犯罪ではない！　合法だ！！！』　ｂｙ運営及び開発一同
『いいじゃない！　小さい子を愛でてもいいじゃない！　僕っ娘も男の娘も大好物よ！！！』　ｂｙ運営室主任
『私はマイノリティではない！！　よく考えてみろ。年上過ぎるより、年下過ぎる方が良いだろう！？　そう！　それこそが、ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｔｒｕｔｈ　ａｎｄ　ｊｕｓｔｉｃｅ！！　さあ、サイレントマジョリティの皆さんも、ご一緒に！！　幼女最高ぅ～！！！』　ｂｙ開発室室長

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！

「悪ふざけが過ぎるだろう！　あとなんか、主任が増えてるし！！」

おっといかん。つい叫んでしまった。

ん？　なんか心なしか、体が物理的に軽いような！？　って、体重が減ってるし！　それに、この体重は人ではありえないだろう！？

……いや、神だから人ではないのか。

なんか疲れたわ。町に戻ってすぐに《ダイブアウト》して、寝よう。
うん。
いや。今のうちに、ステータスの確認はしておこう。先延ばしは、いかんな。

そんなことを思いながら、ステータス画面を開いた。

＝＝＝

〔アビリティ〕：［万物顕現］

〔セットスキル〕
［真・巨神剣］［双刃紅葉（ふたばもみじ）ＬＶ５６］［光魔法ＬＶＭＡＸ］［布防具ＬＶＭＡＸ］［回避ＬＶＭＡＸ］［身体強化ＬＶＭＡＸ］［生命之根源操作（マナ）ＬＶ６８］［発見ＬＶＭＡＸ］［調合ＬＶ７６］［研磨ＬＶ８９］

〔控えスキル〕
［能力仮装ＬＶ１］［桜季流剣術ＬＶ１２］

〔称号〕
［神精霊の愛娘］［森羅万象を受け流す者］［一気倒千］［孤立戦陣］［竜の友］［竜殺し］［トラップマスター］［神代之神姫］［ハイ・エルフに認められし者］［黙示の終焉を覆す者］［不可能を撃ち壊す者］［レニクス王から信頼を得た者］［レニクスの孫娘の親友］［世界を始めに知った者］［存在は正義］［桜季流剣術皆伝］［桜季流剣術開祖の直弟子］［絶対なる死を覆す者］［邪神殺し］［神を救いし者］

〔所持称号効果〕▼

〔所持金〕：１，２８４，００６，６７１，０７２，０００Ｄ

〔装備〕
Ｍ武器：真・巨神剣［无極神御剣（ありしかみのみつるぎ）］（不顕現）
Ｓ武器１：白刀［真秀刃（まほらば）》］（納刃）

S武器2：双剣［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］（納刃）
頭：［灰狼のニット帽］
胴：［灰狼のワンピース］
手：［灰狼の手袋］
腰：［灰狼のショートパンツ］
足：［灰狼の靴］
アクセサリ1：［神獣耳（ケモミミ）］
アクセサリ2：［恋美と夜天（ウェヌス）の髪飾り（ニュクス）］
アクセサリ3～10：なし

〔装備付加効果〕▼

＝＝＝

じでいいか。

そういえば、武器も進化って言うか、覚醒？　してたな。確認しておくか。

真・巨神剣［无極神御剣（ありしかみのみつるぎ）］
覚醒のその先に到り、完全覚醒した御姿。
効果：Ｓｔｒ×１０　　スキル：［森羅万象］［不可避］［無限剣域］

うん！？　何か凄いことになってるな。まあ、使う予定はないからいいか。

あ、スキルも進化できるっぽいから、進化させようかな。ＳＰは十分あるし。それに、進化した巨神剣も気になるし

［真・巨神剣］
その先へ到った力。幼女が巨大な剣を振るうのはいいです。これは決定だ！　異論は認めない！

……どうやら、すべてのアーツはＳｔｒの倍率が１０倍で、消費ＭＰが３倍になっているようだ。あと、一つアーツが増えていた。
↓［无夢一片（なきゆめひとひら）］：その一振りは、因果・理を無きが如く。走馬燈すら見ること叶わず。

新アーツに効果の説明と言うか、詳細がない。これも怖くて使えないな。

……よし！　次、行ってみよう！

［光魔法ＬｖＭＡＸ］は、っと、

［閃魔法］
光魔法の純粋上位魔法。バランスがいいが、どちらかと言うと、攻撃に秀でる。

［聖魔法］
回復と防御に秀でており、攻撃はあまり得意ではない。闇属性に高い効果を持つ。呪を解く魔法も取得できる。

［治癒魔法］
回復に特化した光属性の系統魔法。アンデットには攻撃魔法としても使える。

［守護魔法］
守ることに特化した魔法。系統内の無属性魔法。

これは何がいいかな。ライトシールドばかり使ってたから、守護魔法でいいかな。せっかく剣術を教えてもらったしな。それに、光魔法は使えるからね。
よし。［守護魔法］を選択。

次に［布防具ＬｖＭＡＸ］は、っと、

［皮防具］
皮素材の防具を装備時に補正がつく。

［軽防具］
軽装の防具を装備時に補正がつく。軽装ならば、素材に左右されない。

［鎧防具］
鎧の防具を装備時に補正がつく。レベル依存だが、多少重い防具であっても、素早さに影響を与えなくなる。

［服］
布防具の特殊上位スキル。布防具が服に属する様になる。また、服を着ることができる。
これは、［服］かな。よし。［服］に決定！　どうせ服系統以外着れないしな。
あ。体が更に軽くなった。

［回避ＬｖＭＡＸ］は、っと、

［予測回避］
回避スキルの上位。相手の動きを予測できるようになる。

［集中回避］
回避スキルの上位。集中することで、一瞬だけ周りの動きが、ゆっくりになる。

［残像回避］
回避スキルの上位。「それは、残像だ！」ができる様になる。残像を残し、相手の背後にまわることができる。
これはロマンを目指して、［残像回避］だな。決定。

次、［身体強化ＬｖＭＡＸ］は、っと、

［武身強化］
ＳｔｒとＡｇｉが強化される。近接戦闘が好きならこれ。

［平衡強化］
バランス感覚が、強化される。足場が不安定でも、安定しやすくなる。

［感覚強化］
ＩｎｔとＤｅｘが強化される。後衛にはこちらが有用。

［心身強化］
心身ともに強化する。身体強化の完全上位スキル。
これは、［心身強化］かな。純粋な上位スキルみたいだし。
よし。決定。

最後に［発見ＬｖＭＡＸ］は、っと、

［看破］

相手のステータスも含め、様々なことがわかる。［発見］の完全上位スキル。

［探索］
目当てのものを探し当てるスキル。［発見］の上位スキル。［発見］よりも広範囲を調べることができる。

［遠見］
遠くを見ることができる。

どれにしようかな。……う～ん。［探索］かな。……よし。
［探索］にしよう。決定。

よし。これで、オーケー。

さて、町へ戻ろうかな。そして、歩き出した。

とっとと町に戻って、《ダイブアウト》して寝るか。明日のために。

ちなみに、道中の敵は一撃でした。どうやら、武器が強すぎるようです。敵の種類は相変わらず芋虫ばかりで、蜘蛛や蛾は出ませんでした。

……何故？

進化と真価と今後の予定と……。（後書き）

ありがとうございます。

身分証とリアルと母方の実家と……。（前書き）

お願いします。

身分証とリアルと母方の実家と……。

何事もなく、町に着きました。

うん。双剣は封印かな。全て一撃じゃ、ゲームしてる意味がないよ。

まあ、それも後回しかな。

「さて、《ダイブアウト》して、寝ようかな」

《ダイブアウト》しようとしたところ。

「ニズ嬢ちゃん！」

エドさんがこちらに小走りで寄ってきた。

「あ。エドさん！」

「よかった、まだいたか。【エレスト】で合流するにしても、待ち合わせ場所なんか決めてないこと、すっかり忘れてたぜ。これを持って行け、これがあれば大丈夫だ。身分証としても使えるから、無くすなよ」

「わかりました。ありがとうございます」

エドさんから、大きさは直径７ｃｍくらいの、銀色のメダルを渡された。

「ストレアシルバー、っていう金属で出来た特注品だ。血を１滴たらしてみろ」

そう言って、エドさんはナイフを渡してきた。

これは、断れる雰囲気じゃないな。断る気はないけど。

指の先を軽く切り、メダルに血をたらした。
すると、メダルが淡く光り、透き通った白銀色に変わった。

「これは!?」

「これで、大丈夫だ。ニズ嬢ちゃん以外使えなくなった。しかし、不思議な色に変わったな」
驚いた様子で、こちらを見た。

「え？　みんな、この色になるのではないのですか？」

「普通は色がほんの少し変わる程度だ。こんなにしっかり変わることは今まで聞いたこともないな」

「そうなんですか！」
そうなのか!?　なんでだろう？　一応、異世界人（プレイヤー）だからかな？

「ああ。……やっぱり、ニズ嬢ちゃんは只者じゃないな。まあ、普通に森や沼地に入れる段階で、只者じゃないのは確定してるがな」

「それは、ありがとうございます？」

「まあ、そんなことはおいといて。これも渡しておく。人が多くて、待ち合わせは困難だろうから。その［友への手紙（フレンドメール）］を使ってくれ。魔法道具の中でも、安価で一般的なものだから、遠慮する必要はない。本当は、［携帯魔導通信機（ポケットマナカム）］を渡したかったのだが、予備がなくてな」
申し訳なさそうに、エドさんは言った。

「いえいえ。十分です。［友へのフレンドメール］でも、すぐに届くのでしょう？」

「勿論だ」

「でしたら、問題ないですよ。手紙メールしてから動かなければ合流できますから」

「まあ、そうなんだが」

まだ、申し訳なさそうに言うので、

「それに、僕は人を待つのは嫌いじゃないですよ」

「……わかった。それじゃ着いたら手紙メールを送ってくれ。無理だったら手紙メールで返答するから」

「わかりました」

「それじゃ、またな」

「はい。またお会いしましょう」

そう言って別れた。

さて、《ダイブアウト》しますか。

◇◇◇

《ダイブアウト》後、トイレに行って直ぐに寝た。
そして、翌朝。

「お～い。そろそろ行くぞ～」
僕は瑠璃に呼びかけた。ちなみに茜は準備済み。

「まってよぅ」

「待ってるよ」

バタバタと音を立てながら、小走りでやってきた。

「走らなくても、大丈夫だから。ほら、行くぞ」

「「は～い」」

荷物を持ち、扉を開けた。あれ？　なんで僕、妹どもの荷物まで持ってるの？

「はい。荷物」

「兄ちゃん」
「兄ぃ」

「「そこは男が持つところでしょ（ぉ）」」

「兄妹（きょうだい）じゃなければな」
僕はそう言って、渡した。

「「え～」」

ガチャ、と鍵を閉めながら（昔使われていた2次元鍵でなく、今は3次元鍵と生体データ認証の二重ロック）下に置いていた自分の荷物を持った。

「ほら、行くぞ」

「「は～い」」

駅に向かって歩き出した。

◇◇◇

電車内にて

「兄ぃ。ゴーレムを倒せなかった」

「ん？　ゴーレムって、あのゴーレムか？」

「そぅだよぉ。他のルートでも倒せてないみたぃ」「実際にどこのルートでも【エレスト】を見た者はいないんだよ。ホントにどうすれば倒せるのか」

ふぅ、と二人してため息をついていた。

「そんなに手強いのか？」

「無理ゲーだね」
「無理げ～だよぅ」

そんなに強いのか？しかし、そんなバランス崩すようなことするかな？　と、いうか他のルート？　ああ。そういえば、他のサーバーからスタートの場合は、違う町からで、【エレスト】で合流するんだっけ？

……ん？

「なあ、他のルートでもって、第２の町にいくためのボスは別だったのか？」

「？　うん。そうだよ」

「なら今回も、普通なら別のボスになるはずじゃないか？」

！

二人とも驚いたように、固まった。

「「確かに（ぃ）！」」

周りに見られて、周りに頭を下げた。

「それは盲点だった」「そのとぅりだよぅ。確かにおかしいよぅ」

興奮したように、うんうん、頷いている。

そして、携帯端末と取り出して操作しだした。

「どうした？」

「この情報がないか調べてるの」

「情報は、大事だからねぇ」

情報は大事なのはわかるが、ここ一応電車内なのだが。まあ、みんな使ってるし、今更か。良い子は真似しないように。

そんな、意味のわからない考えをしていると、

「やっぱりない」

「だれも、考察してないですぅ」

「そうか。このタイミングで言うのも変だが、瑠璃はこのしゃべり方のままで、お祖母ちゃんやお爺ちゃんに会うのか？」

瑠璃のしゃべり方は、本来はゆっくりしゃべるだけで、あまり語尾を延ばすことはない。

「ロールでしてたのがぁ、治らなくてぇ」

「そうなのよね。前のゲームでのロールがこんな弊害を生むとはね」

「まあ、なんにせよ。治らないならしょうがないな」

そのうち治るだろう。治らないかもしれないが。

「それで、その考察は流すのか？」

「う～ん。このままって言うのもあれだけど」「私たちがいない内にクリアされるのもなぁ」

「まあ、その考察が当たりかも分からないし、一応パーティメンバーにだけでも、自分の考えを言っておくのも手じゃないか？」

「うん。そうだね」「そうするぅ」

さて、どうなることやら。

◇◇◇

鎌倉に着きました。

ここから江ノ電で七里ガ浜まで行って、そこから坂をゆっくりゆっくり登って行く。そうそう、祖父母宅へ行く途中にある、お魚亭の寿司は美味しいよ。値段表記なくて怖いけど。

歩いて３０分ほどで、祖父母（母方）の家に到着。

「こんにちは」

「こんにちは！」

「こんにちはぁ」

祖父母の家の玄関を開けて言った。ちなみに隣りは従姉妹（いとこ）ん家です。

「いらっしゃい。よく来たね。さあ、中に入って」

おばあちゃんが出てきてくれた。

「「「お邪魔します（う）」」」

おばあちゃんに、促されて家の中に入った。

◇◇◇

何事もなく、美味しいもの食べて、両親と合流して、帰る日になりました。

その間は、従姉妹（いとこ）と遊んだりした。ちなみに、従姉妹（いとこ）も例のゲームをしているらしく、正規版組らしい。開始サーバーが異なるので、まだゲーム内では会えていないらしい。

まあ、【エレスト】からが、本番みたいな感じだからな。補足だが、僕は話しに入れないので、祖父母と話しているか、テレビを見ているくらいでした。

「みんな～、もうそろそろ出発するわよ～」

「「「はーい」」」

母親掛け声に、茜、瑠璃、父親が返事した。相変わらず、乗りがいいな。

道路に従姉妹（いとこ）が見送りに来ていた。

「茜、またね。次は【エレスト】で」

「今入った情報だと、精霊祭って言うのがあるらしいから、一緒に回ろうよ。その時にパーティメンバーを紹介するね」

と、裕美（ヒロミ）と奏美（カナミ）が言った。（ちなみに、裕美が姉で、奏美が妹です。ゲーム内の名前（プレイヤーネーム）はヒロとカナらしい。）

「うん！　モチロン！　お互いとっととマジックゴーレム倒して、【エレスト】で会おう」

「けっこぅ調査や検証も進んでるしぃ、倒すのも時間の問題だよぉ」

妹は何か凄くやる気の様だ。

ってか、まだマジックゴーレム倒せてなかったのか！？　どんだけ強いんだよ！　しかも、お互いってことは、他のルートも同じかい！？

「それでは、お邪魔しました」

「また、来ます」

父親と僕は挨拶をした。

「また、何時でもいらっしゃい」

「老後は趣味以外は暇だからな」

「その趣味で、私を置いて旅行してるのは誰かしらね」

「今度温泉に一緒に行く予定だろう。それで、許して」

何か言い合いを始めた。ちなみに、祖父母と言うが、おばあちゃんの見た目が異様に若い。見た目年齢は三十代前半だ。実年齢は、……ハッ！　殺気！

「とーさん。かーさん。それじゃ、帰るわね」

「「「お邪魔しました」」」

「それじゃ、またね」

「「「またねぇ」」」

「気を付けてねぇ」

そんな、こんなで、帰路に着いた。

ちなみに途中、倒木で電車が止まったが、ギリギリセーフで捕まりませんでした。

身分証とリアルと母方の実家と……。（後書き）

ありがとうございます。

馬車と風の都と王族と……。（前書き）

お願いします。

馬車と風の都と王族と……。

鎌倉の祖父母（母方）の家から、両親と共に我が家に帰ってきた。
ちなみに、両親は一度自宅に帰ったらしく、自動車で来ていたので、帰りは自動車。

帰ってきたのは、８月７日。ちなみに、その日丸々一日は旅行話しに巻き込まれたので、疲れて何も出来ずに終わった。

瑠璃と茜は上手く逃げて巻き込まれなかったので、ゲームをしていたらしい。

そして明くる日、８月８日。久しぶりに《ダイブイン》をした。

◇◇◇

【ファスト】にて、

さて、久しぶりの世界だな。

「主！」
「主殿！　やっと来られたか」
「ご主人様！　お待ちしておりました」
三者三様に挨拶をしてきた。

「久しぶり。何かあった？」

「「「ふふふふ」」」
三人は意味深に笑った。

「そ、そうか。何があったかは詳しく聞かないが、了解した」

「さて、私たちは十分楽しんだので、主の中で寝ています。何時でも呼んでくださいな。それじゃ、お休みなさい」

「わかった。お休みなさい」

三人とも、「お休み」と言って、僕の中に入っていった。……あれ？　なんでベル入れた？

「なんで、ベルは入れた？」

『真竜は、神霊に近い存在だからな。第一に普通の竜は契約できない。霊格を持つものでないとな』

『そうなのか！？　知らなかった』

『ちなみに、竜王・聖竜・四竜・天龍も霊格を持っているな。他にも上位の存在は可能だな。簡単に言うなら、高い知性を持った者たちだな』

『なるほど。勉強になります』

『うむ。では、お休み。なかなか良い寝心地だ』

『うん。お休み』

寝てしまったようだ。しかも熟睡。本当に寝心地良いのかな？

まあ、いい。さて、どこに行こうかな。

「おっ！　ニズ嬢ちゃんじゃないか」

後ろから名前を呼ばれた。

「え？　あ！　エドさん」

後ろを見ると、エドさんが笑顔で手を振っていた。

「久しぶりだな。用事は済んだのか？」

「はい。バッチリです。エドさんは馬車で移動ですか？」

「ああ、そうだ。良かったら一緒に行くかい？」

「良いのですか？」

「大丈夫だ。それにシルフィも喜ぶよ」

「ここから【エレスト】って、どのくらいかかりますか？」

「そうだな、これから馬車で向かう。モンスターが出る森でなく、公道の方を通って行くから、馬車で半日くらいかな。用意は済んでるから、今からシルフィを迎えに行くところだ」

半日か、結構近いのかな。

「わかりました。宜しくお願い致します」

「おう。それじゃ、一緒に来てくれ」

エドさんについて、道具屋さんに行った。
そこには、立派な馬車があった。

「ニズ嬢ちゃんも一緒に行くことになった。食糧は大丈夫か？」
エドさんは、丁度出てきたメイドさんに、色々聞いていた。
とりあえずは、人が増えても問題ないらしい。

すると、
「ニ～ズ～！」　どふぅ！
シルフィに、思いっきり抱きつかれた。

げほげほっ
「シルフィ。久しぶり」
若干咽ながら、笑顔で言った。

スリスリ、モミモミ
って、頬擦りはいいが、どこを揉んでいる！？
「うん。いい。いいよ」とか呟いている。なんか少し怖いです。

「シルフィ……気持ちは理解できるが、落ち着け」

シルフィは落ち着いた様で
「ごめんなさい。つい……」

エドさん。気持ちは理解できるって……！？

「それでは、出発しましょうか」

素知らぬ顔でメイドさんがそう言って、仕度を始めた。てか、ほぼ終わっている。

「おお。すまん。余り遅くなると、着くのが夜になるな。出発しよう」

「「はい」」

僕とシルフィは同時に返事をした。

メイドさんは手綱を握り、エドさんとシルフィと僕は馬車に乗った。

そういえば、この馬車を引いてる馬なんだけど、ただの馬かと思って［神眼］で見たら、グルフォクシって言う聖獣だったんだけど。普通の馬でなく、この馬での換算で半日って、結構遠くないか？ちなみに、歩きだと１０日かかるらしい。うん。迂回すると言っても遠いね。

シルフィと他愛もない話しをしていると、小川があったので一度休憩となった。馬車に乗るのって、結構疲れる様です。何故か僕は全く疲れてないのですが。はて？

休憩のため、外にでると、

「どうぞ、こちらへ」

何故か、テーブルと椅子とブランチな準備が完了していた。

「いつの間に！」

「メイドですから」

メイドさんはにこやかに言った。

メイドさんのこともそうだが、エドさん、もう素性を隠す気ないよね？　普通の人は、メイド雇わないし、聖獣に馬車を引かせないし、草原の真ん中でブランチしないし。

「さあ、どうぞ。本日のブランチはフルーツタルトとダージグレイティーです」

エドさんとシルフィが既に席に座っていたので、僕も座った。

「いただきます」

あ、美味しい。紅茶の香りもいいし、タルトのサクサク感も素晴らしい。

ん？　そういえば、どっから出したんだ？そう思い、メイドさんを見た。

こちらの言いたいことに気付いたのか、メイドさんが、

「王族に仕える者として、アイテムボックスくらい使えます」

「そうですか。……もう、隠す気ないですよね？」

王族とは言ってるよ。メイドさん。

そう言うと、エドさんが笑い出して、

「ニズ嬢ちゃんなら心配いらないだろうしな」

「シルフィが、若干青ざめでいますが」

「あっ！　シルフィには、ばらすことを言うのを忘れていた」

エドさんはうっかり！　てな顔で言った。

「大事なことですよね？　忘れないでくださいよ」

「すまん。すまん。と言うことで、ニズ嬢ちゃんには話しても大丈夫だ。良い子だし、恐らくうちの近衛騎士より強い」

「そうなの？」

不安そうに、小さい声で言った。

「ああ。そうだ。それに、シルフィも秘密にして友達を続けるのも嫌だろう？」

「はい！　でも、正体をばらしたら、皆友達じゃなくなったり、変なことを言い出したりする」

シルフィは悲しげな顔で、ポツリと言った。

エドさんは、シルフィの頭を撫でながら、

「ニズ嬢ちゃんなら、大丈夫だよ。現に呼び方を変えてないし、畏まってもいないだろ？」

優しい声で話しかけた。

「エドさん。それって、褒めてます？　貶してます？」

「ニズ様。褒めているのですよ」

メイドさんが返答した。

「そうなんですか？　なら、ありがとうございます？」

う～ん。と悩んだ。

「ニズ嬢ちゃん。今までと同じ様に接してもらえないだろうか」

「言われなくともそのつもりです。それに前から気付いていましたからね」

「そうなの！？」

「そうなのか！」

二人は驚いた様に言った。

「はい。理由があるのだろうと、気にしませんでしたが」

「ほほう。理由か。聞かないのか？」

エドさんは目をキラリと光らせた、様に見えた。

「そう言いましても、前の話しの時に、理由みたいなことを言ってましたよね？」

「ん？　……ああ！　そういえば」

思い出したかのように、エドさんは言った。

やっぱりそうだったのか。あれは、ほぼ初対面の人に話す内容じゃなかったよね。しかも、エドさんやっぱり無自覚に話していたか。

調子が軽いと思ったんだよなぁ。でも、まあ、

「エドさんとシルフィが嫌でなければ、今までの関係で行きますよ」

「はい！」

「ああ。宜しくな」

そう言って、シルフィは抱き着かれながら、エドさんと握手をした。

「そろそろ、進みましょうか」
そう言って、机と椅子をどこかにしまって言った。

「そうだな。行くか」
「はい！」
「はい。わかりました」

また、馬車とは思えない速度で、進んで行った。

「そういえば、【エレスト】には、まだ入れないのでは？」
ふと、思い出して、僕は言った。確か3日前だっけ？　リアルタイム（RT）で8時間がこちらの世界の1日だから、早くても9日からなんじゃ。

「問題ない。私は王族だからな」
いい笑顔でエドさんは言った。

「僕は王族ではないのですが」

「問題ない。王族と言うことにするから」

「そんな適当なことで良いのですか！？」
唖然でなく呆然として言った。王族はさすがにばれるだろう。

「冗談だ。私の客人として招こう。そうすれば問題ない。メダルも渡して、身元も保証しているしな」

よかった。さすがに冗談だったか。

「ありがとうございます」

「気にするな。シルフィの迷惑代も入っている」

苦笑しながら言った。

エドさんを話している間も、ずっとシルフィに後ろから抱き締められていた。……ホントにずっと。

「な、なんでですか！？　私はニズに迷惑なんて掛けてません！」

エドさんと僕は、肩を竦めた。

その後も、シルフィやエドさん、メイドさんを話していると、

「さて、見えてきたぞ」

ちょうど森を抜けたところで、エドさんは前方を指した。

そこには、明らかに幻想的（ファンタジー）な大都市が見えた。

巨大な樹と根元に白い城、それに囲むように壁ができており、城下町も見える。大樹が光っているのか、全体的にほんのりと山吹色（サンライトイエロー）をしている様に感じた。

「……綺麗ですね」

つい見惚れてしまった。

「ああ。いつ来ても綺麗だ。まあ、王都も負けてはいないがな」

王族としての矜持か、一言付け加えた。

「はい。綺麗です」
シルフィも一言そういった。その間、ずっと僕を抱き締めていたのは、もはやお約束になりつつある。今日この頃。

あっという間に、門に着いた。
さすが聖獣、駆けるスピードが速いです。８時頃出て、着いたの１４時前だよ。しかし、よく馬車もったな。……特注品なんだろうな。

商人であろう列から外れ、門まで進む。そこで、メイドさんが兵士に近づき、二言三言話すと兵士が扉の中に入っていき、騎士の様な人を連れてきた。

「申し訳ないのですが、お顔を拝見させて頂けないでしょうか？」
騎士？　はそう言った。

「はい。かまいませんよ」
エドさんはそう言って、馬車から降りた。

その隙に、どうせだからと、進化した初期装備に着替えた。
やっぱり、綺麗な服の方がいいでしょう？

なんかシルフィは「ほわぁ～」とか言っているが、まあ、いい。

着替え終わった後、促されて一緒に僕とシルフィも馬車から降りた。

一瞬、騎士？　が、ぽ～、としたが、すぐに佇まいを戻して

「ありがとうございます。確認致しました。では、どうぞお通りくださいませ」

騎士？　は綺麗な敬礼をして、開門を指示した。　王族を他の商人と同じ様に、脇の扉から入れるわけにはいかない。と、言うことらしい。

精霊祭前の時期に唯一開門しても問題ない門らしい。

（道中、エドさんに聞きました）

余談だが、僕の存在は既に魔法で連絡済みらしく、まったく問題なかった。（決まった時に、顔写真と一緒に送ったらしい。いったい、いつの間に！？）

「ニズ嬢ちゃん。いつの間に着替えたんだ」

「ついさっきです。やっぱり、綺麗な服の方がいいと思いまして」

「ニズ、可愛いよ」

シルフィはそういいながら、強く抱き締めてきた。

「うむ。確かに綺麗な服ならば、文句は言われないだろう」

「はい。よかったです」

そう言うと、エドさん少し苦笑いし、メイドさんの目が少し輝いた。

？　はて。何かしたかな？

「これは、持って帰りたいですね。最初からそうですが」

エドさんは苦笑しながら、

「さあ、行こう」

と何かを誤魔化す様に言って、馬車を先に進めた。僕はワクワクしながら町に入っていった。

ポーン

〔プレイヤーとして、始めて【精霊使帝都市(せいれいしていとし)エレスト】に到達しました。特典として、［エレスト限定特別優待券］と［水晶？の指輪］を入手しました〕

ポーン

〔特殊ルートを使用したため、精霊祭が開催されるまで、“道(ゲート)”を開通させることはできません〕

馬車と風の都と王族と……。（後書き）

ありがとうございます。

簡単な設定。

【精霊使帝都市（せいれいしていとし）エレスト】

大いなる風の精霊と契約の交わす者が、代々治める特殊自治都市。都市のすぐ側には、巨大な精霊樹が存在する。都市には六帝家と言う貴族階級が存在し、その中から大いなる精霊に選ばれたものが、その都市のトップとなる。地位は王族の次に高く、発言力も相応に高い。エレストに於てはその一族が風帝家と呼ばれる。精霊の選択に委ねられているため、世襲制ではない。（六帝家は世襲制）

別邸と内装と新居探しと……。（前書き）

お願いします。

別邸と内装と新居探しと……。

【エレスト】に入ると、周りには山吹色（サンライトイエロー）の光が浮いていて、とても幻想的な風景であった。嵐の前、いや、祭りの前の静けさか、人通りは多くはなかった。

「精霊祭の中でも今回は特別だからな、正に嵐の前の静けさだ」

エドさんは、こちらの考えが解っているかの様に言った。

「やっぱり、そうなんですね」

「ああ。今は平日の1割ってところだな。祭り中は稼ぎ時だから、今のうちに休んで、本番で全て使い果たすって感じだな」

「凄そうですね」

「凄いぞ。今は一番静かな時だな。明後日から開門するから、一気に人が増えるぞ」

その風景を、思い出しているかの様な表情で、笑った。

「それじゃ、この幻想的な風景も、一先ずはお預けですか」

それは、残念だな。平日の夜明け頃なら、また見られそうだな。そっちの方が綺麗かも。

「そうだな。……ん？　ニズ嬢ちゃん。もしかして、この光が見えてるのか？」

「はい。見えていますが」

なんだろう？　エドさんが驚いているぞ。シルフィは僕を抱き締めたまま、風景を楽しんでいるがね。……シルフィ。耳と尻尾は弄らんといて。

「そうか。そういえば、そうだったな。この光が見えることは、妄りに話すなよ。場合によっては面倒なことになる」

「よくわかりませんが、わかりました」

「まあ、そのくらいでいい。気を張ってもしょうがないからな。……おっ。丁度着いたな」

そう言って、エドさんの視線の先を見ると、豪邸が建っていた。

「豪邸ですね」

「代々受け継いでいる別邸だ。確かに無駄に大きいが、まあ、我慢してくれ」

言葉遣いが、丁寧だったり、少し乱暴だったりするが、どっちが素なんだろうか？

「わかりました。……って、僕、ここに泊まるんですか！？」

「他に行っても空いてないぞ」

「う～。わかりました。お世話になります」

「おう。お世話するぜ」

そう言って、豪邸内に入っていった。僕はシルフィに引きずられる様に、入っていった。

中に入ると、豪華絢爛な内装をしていた。てか、キンキラキンです。うん。落ちつかない。

「うん。やはり、落ちつかないな」
げんなり、しながら言った。

エドさん。それは言ってはダメでしょう。

「はい。まったく落ちつけないです」
やはり、げんなり、しながら言った。

シルフィも落ちつかないって言いましたな。
やっぱりこれは、少々悪趣味なのでは？

「ニズ嬢ちゃんはどうだ？」

「まったく落ちつけないです。まさか、各部屋までこんな内装ではないですよね？」
僕は恐る恐る聞いた。

「そのまさかだ」
エドさんは苦笑いをしながら、そう言った。

「これは、俺の次男の趣味なんだ。勝手に改装してな」
笑い成分がなくなり、苦々しく言った。

これは、キツいな。そうだ！
「エドさん。宿屋はダメでも、不動産屋は開いてますかね？」
「不動産屋か。それなら開いているはずだ。祭りだからと予約するものでもないしな」
なるほど。ってか、宿屋は開いてない。ではなく、空いてない。だったか。
「わかりました。これから家を買いましょう。埃が溜まっている可能性もありますが、ここよりは遥かに落ち着けると思います」
これは名案ではないですか！？
「確かに。だが、そんな大金を持っていないぞ」
「大丈夫です。私が持っています。行きましょう」
お金は有り余ってます。
場所を聞いて、早速来ました不動産屋さん。
ちなみに、土地には力が宿っているため、不正などすると精霊の加護を失うので、悪質な不動産屋は存在できない。それに、その加護の影響で、不動産屋は１つの町に１つまでしか存在しない。
あと、エドさんとシルフィは、別件で用事があるらしく、別邸で別れました。
とりあえず、入りますか。

カランカラン、と小気味良い音を響かせて、中に入った。

「いらっしゃいませ」

入った途端に元気のよい声が、聞こえてきた。

「こんにちは」

今は１５時くらいだから、こんにちは、であってるよね。

「何をお探しでしょうか？」

この男、できる。僕の容姿を見ても、対応するとは凄いな。迷子と間違われるかと思ったが。

「今日から住める家を探しているのですが、良い家はありますか？」

とりあえず、お薦めを聞いてみた。

「今日から住めるとなると、新築ですな。予算はどのくらいですか？」

「予算は気にしないでください。あと、大きくなくて良いので、良い家が欲しいです」

「予算は気にせず、大きくない。ですか」

う～ん。と、考え込んでしまった。

少し待とう。餅は餅屋と言うからな。

「ありますが、」
と、困った様な、それでいて、少し期待も含んだ様な表情で、数枚の紙を持ってきた。

「これなのですが」
僕な見せてきた。

「？　これは？」
簡潔に言うなら契約書かな。

「この土地は、大きな力があります。ただ、力が強すぎて、並の精霊様ではここに耐えうる家を建てられないんです。ですから、契約書の金額も桁が違うのです。ただ、間違いなく良い家ができます」
精霊が建てる？

「精霊が建てるとは？」

「？　！　もしや、異世界からいらした方ですか？」

「は、はい。そうですが」

「そうですか」
また、悩んでしまった様だ。なして？

「申し訳ないのですが、家を売ることはできません」
少し困った顔で言った。

「え！？　どうしてですか？」

「異世界の方は、まだ身分を証明するものをお持ちでないでしょう？　契約の際にどうしても、それが必要になるのです。確か精霊祭が開催されてからでないと、身分証は発行されないと聞いています」

なるほど。やっぱり期間に秘密があったのか。

ん？　でも、確かあれは身分を証明できるとか言ってたな。え～とたしか……あった。

「すいません。これではダメですか？」

僕はそう言って、エドさんに貰ったメダルを見せた。

「……なっ！　これはっ！」

わなわな、と震えながら、目を見開いた。

「これに魔力を流していただけませんか」

ん？　魔力？　こうかな。

魔力を流すと、メダルが光り、空中に何かの紋章（家紋かな？）と僕の肖像（いつ写したのかな？）が映し出された。ホログラムみたいだな。光属性の魔法かな？

「もう結構でございます。申し訳ないのですが、お名前を伺っても？」

「はい。僕の名前はニズと申します」

そういえば、名前を名乗ってなかったな。反省。

「ニズお嬢様ですね。申し送れました。私（わたくし）の名前はロイス・バーミ

ングと申します。以後、お見知りおきを」

「はい。宜しくお願い致します」

急に言葉遣いが丁寧になったような。いや、もとから丁寧か。

「ニズお嬢様。こちらの身分証がございましたら、問題ございません」

「そうですか。よかったです」

ほっとしたよ。さすがにあのキンキラキンの家は無理だよぅ。

「それで、先ほどのご質問ですが、精霊様が建てるというのは、建造神オプス様の眷属精霊様が建てるということです。普通の家は人の手で建てますが、精霊様が建てた家のほうが、強い加護が付きます。そのため、精霊様が建てた家に住むのは、一般の方々の夢になっているほどです」

「そうなのですか。ではそちらのほうが良いですね」

そういうことか。確かに精霊が建てたのなら、縁起が良さそうだな。

「はい。ちなみに精霊様が建てる場合は、1時間と掛からずに完成します」

「凄いですね」

「ええ。その分お金も掛かりますから」

お金か土地代かな？

「お金が掛かる理由は、等価の原理が働くからです」

「等価ですか？」

確か、同じ価値のモノってことだよな。

「はい。硬貨には一定の加護と一定の価値が存在します。それを等価にて差し出さなければならないのです」

「道理ですね」

「はい。ちなみに、先ほどのものは８００万Ｄのものです。精霊様の建てるものの中では、手頃なものです。最少額でも５００万Ｄで、最高額ですと１２００兆Ｄです。さすがに今まで１２００兆Ｄの契約書にサインしたものはいませんが。ちなみに最高額の１２００兆Ｄを除くと、次は１兆２０００億Ｄまで下がりますから、一応存在するだけですね」

小さい声で、１２００兆Ｄはもはや国家予算を軽く超えてますから。と言っていた。

「その最高額の契約書を見せてもらえませんか？」

お金あるから買えるな。

「はい。構いませんよ。少々お待ちくださいませ」

そう言って、ロイスさんは中に入って言った。

少し待つと戻ってきた。

「お待たせしました。こちらです」

「ありがとうございます」

見た目と内容は、他の契約書とほぼ同じで、値段の桁が違う。
ただ、備考欄に、“すべての町から出入り自由”“カスタム自由”
“空中島付き”“その他特典多数有り”と記載がある。

ふむ。お金の使い道もないし、買おうかな。これ。

「いかがですか？　買えるものではないですが、話しのタネにはなるでしょう」

うん。買おう。装備は十分足りてるし。ポーションは自分で作ればいいかな。

「これ買います」

「……え？　……ええええ！　本当ですか！？」

驚愕をしているようだった。
まあ、話しのタネとして出して、買うって言われたら驚くか。

「ダメでしょうか？」

「いえ。ご購入頂くのは構わないのですが、大丈夫なのですか！？」

心配そうにこちらを見る。
疑わしそうに見ないのか。なかなか凄い人だな。

「はい。今ここでサインします」

「は、はい。只今ペンを持ってまいります」
そう言って、がたがたと焦って言ってしまった。

なんか、ガタごとがたゴト、やっているのですが、焦りすぎでは？
音が止んだと思ったら、こちらに戻ってきた。

「お待たせしました。どうぞ。こちらのペンです」

ロイスさんは、不思議な光沢と言うか、オーラと言うか、そんなものを纏ったペンを持ってきた。

「申し訳ないです。まさか、契約する方が、私（わたくし）の生きている内にいらっしゃるとは、夢にも思ってもいなかったもので」

「いえ。大丈夫ですよ。それで、これはサインするだけで宜しいのですか？」

「はい。サインすると、納金が出来るようになるので、そこで納金すれば契約完了です。ちなみに契約できない場合は、サインが消えます」

「わかりました」
僕はそう言って、サインをし、全額納金した。

別邸と内装と新居探しと……。（後書き）

ありがとうございます。

誤字を修正しました。

［王銀証貨（ストレアメダル）］

ストレアシルバーで作られた身分証明をするメダル。王家が発行したもので、最高位の身分証明貨。ちなみに、硬貨としては使えない。

［友への手紙（フレンドメール）］

友人に手紙を送ることができる魔法道具のひとつ。一般流通している魔法道具の中でも一般的な物。

ホームと建造神と家精霊と……。（前書き）

お願いします。

ホームと建造神と家精霊と……。

結果から言うと、滞りなく契約は完了した。

ロイスさんは僕に何度もお礼を言っていた。なんでも、この契約をできたのは、創業以来のことらしく、世界で一番高い契約だったとのこと（次に高いのは１兆６０００億Ｄらしい）。契約のことは、世界中の不動産屋に情報が自動で流れるので、ロイス・バーミングの名前は不動産業界で、トップになったと、凄い笑顔で言っていた。ちなみに僕の名前も不動産業界に流れたらしく。不動産業界からは女神と拝められることになるのだが、これは少し先の話。

ロイスさん一家に見送られながら、不動産屋を後にして、建築地に向かった。

ちなみに、僕の友人が買う際に、僕の紹介状を持たせてくれたら、その友人に特典で家具や設備はサービスするとのこと。

（精霊が建てるのは、基本的には家のみなので、家具や設備は別途購入らしい）

紹介状は偽造防止のために、ロイスさんから貰った特殊な紙に書くことになっている。なんでも僕の魔力が染み込んでいて、僕以外は文字を書けない紙らしい。

ナツキさんやトーカさんに紹介状を渡そうかな。

「さて、ここか。なんか凄いところだな」

高級住宅地ではないが、少し特殊な空間が広がっていた。ちなみに、ロイスさんがここまで案内してくれなかったのは、精霊が建てる場

合は付いていってはいけないからだそうだ。昔からの教えらしい。

『来たか』

ん？　この声は？　どこからだ？

キョロキョロしていると、また声が聞こえた。

『誰が契約したかと思えば、幼子であったか。しかし、その波動は？』

波動ってなんだろう？　とりあえずは精霊かな？　もしくは建造神オプスかな？

『どれ？　……なにぃ！　我よりも神格が上！　无極神（オムニス）だと！　高位の神か！？』

「まあ、そうなんですかね」

『まさか契約者が“同士”とはな。何故（なにゆえ）顕現できている。……いや。我よりも遥かに高位の神格を持っているから、顕現するのも容易いか』

「そんなところです。冒険しようと思いましてね」

『そうか。いや、大きな力を持つものが考えることは、難解でわからないな。申し遅れた。我の名はオプス。建築・建造・造物の神だ。同じ神の1柱だ、オプスと気軽に呼ぶがいい』

楽しい雰囲気を醸し出してそう言った。

「初めまして。僕の名前はニズです。一応、全にして無の神です」

『全にして無の神。万物にして虚空の神か。そうか、貴方様が……。ははは。宜しくなニズ殿』

笑いながら、オプスは言った。

『まずは、契約の家を建てるか。まさか同士の家を現界に建てるとは思わなかったがな。どのような、家が良い？』

「落ち着いた家でお願いします。派手派手でなければ良いです」

『請け賜った。後からの調整や改築も可能だからな。それでは、ゆくぞ』

そう言って、目の前に長身の引き締まった男性が現れて、手を合わせた。

「ハッ」

手を開くと同時に掛け声の様なものを発した。

その瞬間には、家が建っていた。

「早いですね」

「私は、建造に特化した神だからな。建造に関してはどの神にも負けるつもりないな」

ご本人（神？）様でしたか。しかし、さすが神様。

「凄いですね」

「だろう？　さすが、私」

ん？

「一人称が、変わってないか？」

変わってるよね？　最初は我だったよね？　口調も違うような気が。

「ん？　ああ。あれは神様としての、こう、威厳を出すための口調かな」

なるほど。確かに。今の口調は、なんかフレンドリーだものね。

「それに、神同士なのに、わざわざ威厳を出す必要性も感じないし」

オプスは恥ずかしげに、頬をかいた。

「ありがとうございます」

色んな意味を込めて、感謝の言葉を。

「いえいえ。それでは、これで完成です。契約書の備考に書いた様に、“すべての町から出入り自由”“カスタム自由”“空中島付き”“その他特典多数有り”だ。特典は中に入ればわかるから、大事に使ってくれな。」

サムズアップして、そう言った。

なんか男前だな。さすが、建造神。なんだかんだで、ガテン系だな。

「わかりました。大事に使います」

「おう！」
そう言って、いい笑顔で、帰っていった。

さて、中に入るから。

僕はドアノブを掴み、ふと思った。
入るときは、“ただいま”か“お邪魔します”か。……自分の家だから、“ただいま”だな。よし。

「ただいま」
ガチャリ、と音を響かせながら中に入り、そう言った。

中は、シンプルだった。そして、少し不思議な感じでした。

おっ？　ここは土足でＯＫで、奥の方から土足厳禁か。

扉がいくつかあるな。この扉はなんだろう？　作業場、って、書いてあるな。

開けて入ると、さらに多くの扉がある部屋だった。
え～と。何か書いてあるな。“鍛治場”、“装飾・防具作製場”、“彫金”、“調薬”、“調金”、“調木”、“調理”だな。
文字どおり、作業場の部屋だった。

作業場部屋を出て、次の扉へ。

この扉は、“小道（パーソナルゲート）”？

中に入ってみたら……。なんか、小型の“道（ゲート）”がある。はて？

まさか！？

〔“小道（パーソナルゲート）”を繋ぐ場所を選択してください〕

≪ファスト≫

≪ソラルル≫

≪エレスト≫

≪ノエアイナ≫

≪枢要罪の地≫

うん。これは確かに、すべての町から出入り自由だな。

便利だな。

部屋から出て、次の部屋へ。

え～と。次は、“天空への道”？

扉の中に入る。床一面に魔方陣があった。

〔“空中島”へ転移しますか？〕

こう言うことですか。今は行かなくていいな。

転移せずに部屋を出た。

さて、次の扉は、“フリールーム”か。

扉を開けて、中に入った。何も置いてなかった。

うん。確かにフリーなルームだ。自由な部屋だ。あっ！　これは、あれを使うのに良くない？　……良いな！　あとで、使おう。

部屋から出た。あとは、奥の土足厳禁エリアに扉と、2階にあがる階段がある。

簡単に言うと、1階の土足厳禁領域（エリア）には、みんなで使う感じの部屋があり、2階に個人の部屋があった。ちなみに客間（ゲストルーム）も完備。

とりあえずは、一通り確認したので、エドさんに手紙を送っておこう。

地図も同封して、発送！

来るまでの時間、何してようかな。

ひとまず、リビングに行き、ソファーに座った。

ソファー。マジふわふわです。なにこれ！　弾力感はあるのに、このふわふわ感！　現実では有り得ない触感だ！

そんなことを考えていると、突然目の前に何かが現れた。

「！　何だ！」

すると、その何か（多分、精霊かな？）は、頭を下げた。

「はじめまして、私は家精霊（シルキー）と申します」

「シルキー？」

聞いたことがないな。個人の名前なのか？　それとも、種族の名前なのか？

「主。シルキーは、家精霊です」

後ろから、いきなり声がした。危険がないから、気づかないな。

「家精霊？」

「はい。ご主人様。簡単に言うなら、座敷童子ですね。と、言っても、あちらは妖怪で幸運を運びますが、こちらは精霊で家の手伝いをしてくれます」

「そうなのか」

なるほど、座敷童子か。って、スフィはまだしも、ファノは何で知っている。もしかして、この世界にも座敷童子はいるのか？

ちなみに、ベルは、

「主殿。ここは家か。買ったのか。なかなか、いい家だ」

と、言って違うソファーで丸くなっている。

「しかし、珍しいですね」

首を傾げながら、スフィはそう言った。

「どういうこと？」

「家精霊（シルキー）は、本来は他の使用人に紛れて働く精霊なのですよ。人前に名のりながら姿を現すのは、なかなかないです」

「そうなのか」

そう言いながら、家精霊（シルキー）に視線を移した。

「あなた様に。この家に仕えたいと思い、姿を現しました」

「どうしてまた」

この子に何かしたかな？　いや、初対面だな。

「この家は、他の家にはない、澄んだ力が宿っています。それに、惹かれてしまって」

少し照れた様に、そう言った。

「スフィ。どうしようか？」

「この子は、（色んな意味で）安全ですね。悪意もないし、ある種の家事や手伝いのプロだから、いいと思うよ」

主もわかっているのでは？　とばかりにこちらを見た。

僕は苦笑した。

「わかった。それじゃ宜しく」

そう言って、家精霊（シルキー）に目を向けた。

「はい。それでは、私に名前を下さいませ」

家精霊（シルキー）は、そんなことを言った。

「そうすれば、一生お仕えできます」
そうなの？
スフィが横で、家精霊（シルキー）が契約をお願いするなんて、やるわね主！
とか言っていた。そうなのか？
「名前か。う～ん。……ティエナなんて、どうかな？　略称はティナで」
そう提案すると、家精霊（シルキー）は満面の笑みをうかべて、
「はい！　私の名前は、ティエナです。宜しくお願い致します。お嬢様！」
嬉しさいっぱいな、返事をくれた。
ポーン
〔［家精霊：地水火風光］と契約しました〕
「うん。宜しく」
お嬢様か、僕は男なんだが。まあ、いいか。
そんなことを考えていると、ピロリン、という音と共にアイテムボックスに、手紙が配達されました。
ちなみに、後日聞いた話しでは、手ぶらの場合、普通は手紙がいきなり目の前に現れるらしい。
どうやら、アイテムボックスは鞄と同じ扱いの様だ。
とりあえず、手紙を開けて見る。

エドさんからだな。まあ、手紙を送ってくる人は、他はシルフィくらいしかいないがね。
内容は、
〈分かった、ニズ嬢ちゃん。今すぐに向かいたいところだが、もう少しかかりそうだから、のんびりしててくれ。用事が済んだら、手紙を送るよ〉
そうか。ならどうするか。

……そうだ！　フリールームで、あれを使おう。

みんなはどうするか聞いたところ、スフィ以外は家の中を見て回りたいらしい。ベルはソファーを堪能中。
早速、僕はスフィを連れて、フリールームに行き、アイテムボックスから［知られざる島への鍵］を取りだし、使用する。ちなみに、使い方は、扉を開ける動作をパントマイムの様に行うこと。
すると、魔方陣が展開されて、床一面に広がった。そして、白い扉の様なものが現れた。

「凄いな。これで、行けるのかな」

白い扉を触りながら言った。すると、
〔扉を開き、転移しますか？〕
と、いう表示が、現れた。

よし。行くか。

ホームと建造神と家精霊と……。（後書き）

ありがとうございます。

島と湖と神霊の樹と……。（前書き）

お願いします。

島と湖と神霊の樹と……。

扉を開き、中に入ると、麗らかな陽気の大地が広がっていた。

すると、突如目の前に

〔名前を決定してください〕

と、表示が現れた。

名前？

「島の名前でしょうか？」

「多分そうだと思う」

名前かぁ。名前。う～ん。……うん。決めた。

記入した。

〔【グラーティア】で宜しいですか？〕

はい。決定！

ポーン

〔世界地図（ワールドマップ）に【グラーティア】を追加しました〕

追加されるのか。

さて、散策しますか。

ここは高台になっており、周りを見渡すと、山あり、森あり、草原あり、っと、島にしては大きくないか？　海がぼんやりとも見えないのだが。

『綺麗ですね。山の中腹に湖がありますよ』

なぜに念話、って、上空に浮いていた。

『主も来てくださいよ。綺麗ですよ』

どうやって行けと？　こう、飛ぶ感じって、飛べるかい！

ふわ、っと、体が浮いた。

「へ？　僕、飛べるのか！？」

『それはそうでしょう。だって、神様だもん』

何を当たり前な。てな感じで言われた。

「そういえば、そうでしたね」

僕は飛んでスフィの隣まで行った。

思い通りに飛べるなこれ。なんか、体がぼんやりと光っているような気がする。まあ、いいか。

「主。ほら、湖。あそこに別荘を造りませんか？」

「ホントだ。湖だね。別荘か、そうだね。いいかもね」

いい感じのところだな。

「ちなみに、あの湖の水は、水ではないよ」

え？　水ではない？

「あれは、マナが液体になったものだよ」

「マナって、液体になるのか？」

「うん。特定条件下にのみ、マナは液体になるんだよ。その条件がマナが溢れて続けていること。そして、そのマナが極めて純度の高いマナであること」

「それが、ここということか？」

「そういうこと。まあ、あのサイズは普通ないけどね」

ぽろ、っと呟いた。

「珍しいのか？」

「普通は泉くらいのサイズなんだけど、湖サイズはないね。もしかしたら、星天核なのかも」

「星天核って？」

「マナの泉は、星流の溜まり場にできるの。その星流のすべての終始点が、星天核なの。星流は世界を廻り、そしてもとの場所に還る。そう思われていますからね」

「なるほど、それって近づいてもいいのか？」

「大丈夫です。性質は水とほぼ同じですから」

そういうことでは、ないのだけれどな。まあ、いいか。スフィがいうなら、問題ないだろう。

そんなこんなで、水際まできました。

「なんか、辺り一体が薬草とかなんですが……なんで？」

「マナの影響かな。湖を囲む森もマナが溢れているし」

辺りを見渡すと、光りが無数にふわふわ浮いていた。

これが、マナなのかな？　……う～ん。マナだね。周りに満ち溢れてるな。

そんなことを思いながら、ぼ～、っとしていると、手に入れた苗木や種子のことを思い出した。

「そうだ。ここに、簡易の畑を作って、苗木を植えよう。この［失われし神樹の種子］は、どうしようかな」

悩みながら、再度辺りを見渡すと、一部に開けた場所があせろった。マナも満ちていて、良い感じなところだ。

早速、真ん中らへんに種子を埋めてみよう。

しかし、種子は眠ってるらしいから、どうすれば良いのだろうか。

……あ、そうだ。確か、なんかあったよな。

アイテムボックスを確認した。すると、［???］があった。多分、秘薬とか、そんな感じかな。見た目は、オーロラみたいにぼんやり輝くポーションだし。

効果的にはいい感じがするが、原液のままはヤバい気がするな。水で薄めるか。

種子を埋めたところに、［???］と湖の水を同時にあげた。（2倍希釈くらいの分量）

すると、地面が光り輝き始めた。

「おお！　なんだ、薬が水と反応してるのか？」

「主。湖の水は、マナです。性質はほぼ同じでも、マナだから」

忘れてたのぉ～？　とばかり言ってきた。

「そういえば、そうだったな。……ん？」

「そうですね」

急速に種子を埋めた場所に光が集まり始めた。

「なんか、離れた方が良さそうだな」

離れようとすると、種子を埋めた場所から、ぴょこ、っと芽がでた。

「芽がでたな。目覚めたのかな？」

「そのようね」

すると、空中に光の流れが見えた。その流れが芽に集まりだた。とたんに芽がどんどん成長し始めた。

「「な！？」」

二人して驚いて声をあげた。

二人はその場から一気に空に舞い上がり、距離を大きくとった。

離れた瞬間に、まるでビデオの早送りの様に、巨大な大樹に成長した。上の方は、雲の上にある。

「……大き過ぎない？」

「間違いなく、エルフの里やエレストにあった大樹より、遥かに大きいね」

ん？

〔［刻止の封印柩］が、解放可能です。強制的に解放します〕

はい？

勝手に［刻止の封印柩］が、アイテムボックスから出てきて、扉？

いや、蓋？　いや、扉だな。が開いた。

「あれ、何？」

「何だろう？」

二人して首を傾げた。

「あれ？　スフィは知ってるかと」

「知ることは出来ますが、知ってしまったらつまらないからね」

「まあ、確かにそうだね」

少し逃避して話していると、［刻止の封印柩］から人？　いや、精霊かな？　が出てきた。その途端に、樹が淡く強く光り始めた。

「光ってるな」

「光ってるね。あと、あの子は精霊でなく、神霊ですね」

「ほほう。神霊ですか。何であの中にいたんだろう？」

「さあ」

話していると、神霊がこちらを見て、近付いて来た。

神霊は僕をジー、っと見つめた後に、スフィに視線を移して、

「いい？」

と、聞いた。

スフィは、神霊をジー、っと、見たあと、

「わかってる？」

と、聞いた。

その質問に、神霊は、
「貴女、一番」
と、言った。

すると、スフィは笑顔になって、
「なら良し」
と、言った。

なんの話しなんだろう？

神霊は、スフィから僕の方へ視線を移して、
「名前、ちょうだい」
と、言った。

「どういうこと？」

「契約」

「主。女性に恥をかかせちゃダメだよ」
スフィが諭してきた。

なして？

……うん。そうなのか。

とりあえず、名前か。何がいいかな。う～む。

「レンティア、はどうかな？　略称はレンで」

どうだろう？　語感で決めたが、悪くはないと思いたい。

「レンティア……レン……ありがとう。私、レンティア」

その瞬間、今までと違い、周りにマナが満ちた。

ん？

ポーン

〔［神霊：生命］と契約しました〕

……これは、……属性なのか？

ポーン

〔称号［神霊の契約者］を取得しました〕

……これは、まあ、そうか。

「主。これからどうしますか？」

「そうだな。……う～ん。ん？　そういえば、レンはどうしてあの中にいたんだ？」

確かあれは、外側からでなく、内側から封印してあったはず。

「自分、入った」

「やっぱりか」

内側からの封印で、間違ってなかったか。

「他、神霊、頼んだ」

「他の？」

「うん、６柱、神霊」

他にも神霊がいるのはわかったが、理由が分からないな。

「力、強過ぎた」

「力？」

「そう、だから、寝た」

力が強すぎたから、寝たってことかな。

「主。念話の方がスムーズかもしれませんよ」

「そうだな。試してみるか」

『レン。聞こえる？』

『うん。聞こえるよ。続きを話す。私の力を人が求めた。それで、戦争が起こった。私は誰の力にもなるつもりはなかった。だから、寝た。人が私を忘れるまで』

少し哀しそうに、それでいて、懐かしそうに。

『だから、あの中にいたのか。でも、なんで目覚めたんだ？』

『それは、私より強い力を感じたから。それに、私の樹が目覚めるのを感じた。だから、目覚めた』

『そうか』

『片方だけなら目覚めなかった。ニズのせい、だから責任とってもらった』

契約が、責任とるってことだったのか。

『そうか。まあ、これから、宜しくな』

『うん。宜しくお願いします』
頭をぺこり、と下げた。

「おう」
僕は声に出して、言った。

そのとき、ピロリン、という音がなり、アイテムボックスにエドさんからの手紙がはいっていた。
内容は、
〈用事が終わった。今から行くぜ。楽しみにしてるぜ、ニズ嬢ちゃん〉

ふむ。戻るか。待たせるのも、なんだしな。

「スフィ。レン。お客さんが、来るから家に戻ろう。散策はまた後日ってことで」

「「はい」」

今思ったが、スフィって、状況によって話し方をかえてねぇ。でも、聞いたら藪蛇になりそうな気がする。何故だ。

その後、3人で家に戻った。

あ、皆にレンを紹介しないと。それに、レンって、外の世界は何年ぶりなんだろう？

島と湖と神霊の樹と……。（後書き）

ありがとうございます。

紹介と詳細と招待と……。（前書き）

お願いします。

紹介と詳細と招待と……。

さて、我が家（マイホーム）に帰ってきました。

あ。そういえば、空中島も見に行かないと。いや、まあ、いつでもいいか。急ぐものでもないですから。

エドさんはまだ来てないな。

ベル、ファノ、ティナを呼んで、順に紹介した。レンを見た瞬間に、ファノとティナが、ガチガチに固まっていたが、あれはいったい？

そんな、こんなで、お互いの紹介も終わり、今回はファノの時の様なことは起こらず、実によかったです。

エドさんたちが来る前に、家の片付けを……って、新築で散らかってもいないから、必要ないな。

それじゃ、エドさんたちを待っている間に何しようかな。町に入ったときに貰ったものでも、確認しようかな。

そう思い、アイテムボックスを確認した。

え～と。［エレスト限定特別優待券］と［水晶？の指輪］か。片方の名前が不明だな。神眼を使えば、わかるかな？

［水晶？の指輪］の正体は、［アドモスサイトリング］というもの

だった。

ふむふむ。［エレスト限定特別優待券］は文字通りだな、便利と言えば便利か。［アドモスサイトリング］は、うむ。特に効果は付いていないな。純粋な装飾品か？　う～む。

そんな風に考え込んでいると、ピンポーン、とチャイムが鳴った。

ん？　来たかな？　てか、チャイムはピンポーンなのか。

「はーい」

そう言って、扉まで行き、出迎えた。

「おう。ニズ嬢ちゃん。来たぜ」

「お邪魔します」

「ニズ様、お世話になります」

エドさんとシルフィ、それと、メイドさんが来た。なんか笑顔が引き攣ってるな。疲れてるのかな？

「いらっしゃい」

3人を招き入れた。

そういえば、護衛はいいのか？　メイドさんしか、連れがいないが。

まあ、メイドさんが異様に強いことは、結構あるから大丈夫か。

「いい家だな。落ち着いてて素晴らしい」

「はい。金ぴかは嫌です」

やっぱりキンキラキンは嫌だよな。うんうん。

「普通が一番ですよ」
僕は同意した。

「それで、そちらの方は？」

「精霊様でしょうか？」

気付いた様で、真面目な顔で聞いてきた。

「一先ずは奥にどうぞ。立ち話もなんなので、リビングで座って話しましょう。そこで、紹介します」

「おう」
「はい」

3人を伴って、リビングに入った。

お茶とお菓子、それと、漬物を出したところで
「しかし、いい家だな。それに新築の様だ。精霊様に建てて貰ったのか？」
と、エドさんに聞かれた。その間、シルフィはキョロキョロしていた。

「その様なものですね」
曖昧に答えた。正直に言ってもいいが、まあ、いいか。

「そうか。……それでだ。その精霊様方は、ニズ嬢ちゃんの契約者だろう？」
本題だ。とばかりに聞いてきた。

「そうですよ。順にベルニール、ティエナ、トレファノ、レンティア、それにスフィリアです。まあ、ベルニールはドラゴンですが」
紹介していくと、スフィたちは順番に会釈した。

すると、今まで黙ってキョロキョロしていたシルフィが、キラキラした目でこちらを見て、
「凄いです。こんなに精霊がいるのを、初めて見ました」
と、驚いて言ってくれた。

「ああ、俺もだ。普通はできないからな」
エドさんも驚いていた。

ついでに、メイドさんも驚いていた。
そういえば、メイドさんの名前って何だっけ？　あれ。もしかして、聞いてないか？

「あ、ここに泊まりますよね。客間もありますし」
あのキンキラキンはキツいだろう。

「お世話になるよ」
「お世話になります」
二人は笑顔で同意した。ちなみに、メイドさんもいい笑顔で頷いていた。

「なら、ちょうど時間も時間ですし、晩御飯の用意しますね」
僕が立とうとすると、

「「私にお任せください」」
ティナとメイドさんが、同時に言った。
「お客様にやらせるのもなぁ」
どうしよ？
「お嬢様。ここは私にお任せください」
「ニズ様。お世話になる身として、お任せください」
お互い引く気はないようだ。ならば、
「エドさん。シルフィ。用事の時に、何か食べましたか？」
「食べてないな」
「食べてないです」
二人は食べてない様だ。
「なら、お腹は空いていますよね？」
「まあ、そうだな。食べてないからな。それに、精神的な疲れもあるが」
「はい。疲れました」
何があったんだろう？　まあ、いい。
と、いうわけで、
「なら、ここは得意料理で勝負ということで、二人で1品か2品ずつ作るということでどうでしょう？」
「「わかりました。お任せください！」」

二人とも、ヤル気満々だな。

「食材は大丈夫かな？」
ふと、思った。食材を買ってないと。

「ご主人様。大丈夫です。備え付けの食材庫に、あらゆる食材が入っていましたから」
ファノは、バッチリ確認済みでした。

「なら大丈夫だな。食材は自由に使っていいから、美味しいものを宜しくね」

「「はい！」」
ティナとメイドさんは、台所に向かって行った。

僕はエドさんとシルフィの方向に振り向いて、
「晩御飯が楽しみですね」
と、言った。

エドさんは、驚いた様な表情をして、
「あらゆる食材って、いったい」
と呟いていた。

そんなに、驚くことかな？　ちなみに、シルフィは笑顔で、「はい！」と言った。

晩御飯ができるまでの間、エドさんと話していた。

ちなみに、シルフィは、エドさんの「精霊と料理なんて、めったに

できないな」というセリフを聞いて、台所に手伝いに行った。シルフィは料理が少しできるらしい。

「ニズ嬢ちゃん。突然なんだが、戴冠式に参列しないか？」

エドさん。本当に突然ですね。参列って、いいのか？

「何ですか、突然。それに戴冠式って、そんな簡単には参列できるところではないのでは？」

「俺がいいといえば、一人くらいは大丈夫だ」

なにを当たり前な。的に言われた。

ああ。そうか、

「そういえば、王族でしたね」

「忘れてたのか」

呆れた風に言われた。

「まあ、血統や地位と、友人になったわけではないですから」

とりあえずの言い訳を。

「そうか。しかし、本当にニズ嬢ちゃんは何者なんだ？　見た目通りの年齢じゃないな」

エドさんはニヤリと笑って言った。

「さあ、どうでしょうね。少なからず、幼女ではないですよ」

僕もニヤリ（にっこり、となっているが）と笑った。

「成りは幼女だけどな」

「それは言わないでくださいよ」

ははははは、と二人して同時に笑った。

笑い終わったところで、話しを戻した。

「しかし、なんでまた、戴冠式に参列して欲しいなんて」

「それはだな。いまだにシルフィを狙ってる馬鹿がいるから、戴冠式中に傍にいて欲しいと思ってな」

疲れた様な表情をして、言った。

「戴冠式中にもですか！？」

「ああ。だが、ニズ嬢ちゃんなら腕はあるし、それに信念（マイペース）を持つ者だからな。十分に信用できる……頼めないか」

眼をじっと見て、真面目な表情で言われた。

これは、断れないな。戴冠式がどんなものかわからないが、まあ、いいか。

「分かりました。その馬鹿からシルフィを守るのも、友人の役目ですね」

「ありがとう。頼むよ」

そのあと、この町の事などを話した。この町は、区画分けがされているらしい。王族が住む王城、地位の高い上流階級が住む高位地区、貴族でない裕福なものが住む中位地区、平民が住む下位地区。それに加え、それぞれの地区内でも、住居地区、商地区で分かれている。

この他に、精霊樹地区と呼ばれる特殊な領域もある。ちなみにこの家は精霊樹地区らしい。王族などでも精霊に認められたものしか住めない地区とのこと。
この家の場所を聞いたときに、絶句して数分間止まったらしい。だから、最初笑顔が引き攣っていたのか。納得です。それに周りに家がなく、静かな理由もわかりました。土地も広大だし。

話が一区切り付いたところで、
「「晩御飯ができました」」
と、ティナとメイドさんが入って来て、ハモった声で言った。。
二人ともよく揃うな。まあ、同じタイミングできれば、揃うか。

「は～い。それじゃ、こっちに……」
いや、どうするか。ダイニングできな部屋は……あったな。台所の隣りに。

「台所の隣りの部屋にダイニング？　があるから、そこで食べましょう」

「「かしこまりました。準備致します」」
ティナとメイドさんが、同時に向かって行った。

「行きましょうか」
みんなに声をかけた。

「おう」
「「はい」」
「うむ」

「うん」

さて、ダイニングに、いや、食堂かな？　とりあえず行こう。

食堂（ダイニング）に着くと、既に料理が並べられていた。
速くない？　さすが精霊さんとメイドさん、質が違う！

「ニズ嬢ちゃん。どうした？」

どうやら止まっていたようだ。エドさんに呼ばれるまで、考え事をしてしまった。

「すみません。大丈夫です」

みんな席につき、（メイドさんも座らせました）
「いただきます」

？

「どうかしましたか？」

何故か僕が「いただきます」と言ったら、スフィ以外がみんなこちらを見てきた。

「その挨拶？　はなんだ？　初めて聞いたが」

「“いただきます”ですか？」

「そうだ」
「そうです」
スフィ以外が頷いた。スフィは、ニッコニコの笑顔でこっちを見ている。
なぜにスフィはいい笑顔？

「ご飯を食べるときの挨拶です。作ってくれた人と、食材の命に感謝をする言葉です。逆に食べ終わったときは御馳走様です、といいますね」

諸説あったが、確かそんな意味だったと思う。

「なるほどな」
「なるほどです」
皆さん、とりあえずは納得している様子。そして、スフィはニッコニコ。
なして？

そのあと、みんなで「いただきます」と言い、談笑しながら食べた。

ちなみに、ティナとメイドさんの料理勝負？　の勝敗はうやむやになりました。

紹介と詳細と招待と……。（後書き）

ありがとうございます。

［エレスト限定特別優待券］
エレスト内の様々な施設を無償で使用可能。店舗で買い物する際、特別値引価格で買える。ホームを購入の際には使用できない。

［アドモスサイトリング］
アダマンタイトの結晶をリング状に加工した指輪。１２面体構造をしており、壊すことができない不変の物質を素材としており、どの様に加工したかは不明。そもそも、アダマンタイトが結晶化することもありえないので、自然界には存在し得ない。存在しないはずの存在。

【契約者たち・まとめ】
スフィリア［神精霊：無元］
少し嫉妬深い性格をしている。ヤンデレ風味。時と場合（ノリ）で話し口調を変える。身長は１６５？、黒髪黒眼、大和撫子。

ベルニール［真竜：極光］
細かいことは気にしない性格。一人称は我。ニズを主殿と呼ぶ。サ

イズは自由自在で、大きくはなれないが、小さくはなれる。本来の身長は５０ｍほど。ぱっと見は白竜だが、良く見ると白竜ではない。実は人化も可能。

トレファノ［水聖霊：水聖］
最初は無口だったが、スフィの怒気を見て以来、なんだか丁寧な口調になり、良く話す様になった。どちらか素なのかは不明。身長は１７０？、青髪碧眼、クール風味。

ティエナ［家精霊：地水火風光］
丁寧で優しい性格。白い服か、白を基調とした侍女服を着ている。闇属性以外の力を使えるが、全て下位精霊と大差はない。生活魔法の達人。人？　身長は１６０？、髪は白銀で眼は濃い灰色、目指せメイドマイスター。

レンティア［神霊：生命（マナ）］
無口で、ぽつぽつ話す。念話時は結構おしゃべり。マナを操る神霊の王。身長は１５０？、虹髪金眼、クーデレデレ。

狼耳と姫の趣味と初級魔法……。（前書き）

お願いします。

狼耳と姫の趣味と初級魔法……。

ゆっくり食べて、「御馳走様でした」とみんなで言い、晩御飯を食べ終えた。
ちなみにメニューは、ステーキ、カルパッチョ、お吸い物、魚の煮物、焼売、竜田揚げ、などなど、二人が競様に作ったため、ジャンルに統一性がない。ただ半分くらい聞いたことのない食材でした。
一般的なものから希少なものまで、ほとんどの食材が揃っていたらしい。しかも、千人が千年生きていける量が入っていたらしい。

うん。今度確認しておこう。

そして今はお茶会中（ティータイム）で、紅茶を飲んでいる。銘柄はメイドさん曰く、プライムテラルムという最高級のお茶らしく、王族でも滅多に手に入らない代物らしい。テラルム山脈の高地でしか採れないものらしく、何故か飲む人が最高に美味しいと思う味になるらしい。なぜ憶測なのかというと、人によって感じる味が違うことを、確認しようがないからだそうだ。
さすがは異世界（ファンタジー）だ。理屈を超えたものもあるのだな。
てか、これはもしや購入特典の一部か？

「ニズ嬢ちゃん」
のんびり考え事をしていたら、エドさんに話しかけられた。

「なんでしょうか？」

「今更だが、ニズ嬢ちゃんの種族は何なんだ？」

「本当に今更ですね」

「ああ、まあ、獣人なのはわかるんだが、犬獣人ではなさそうだし」

う～ん。とエドさんは悩んでいた。

最初の時は獣耳も尻尾なかったことは覚えてないのかな？　まあ、いいか。今の種族でいいかな。今の種族は、っと、

「今の種族は、狼獣人ですよ」

「狼獣人か。聞いたことのない種族だな」

「そうなんですか？」

その時、シルフィか、トタタタ、と近寄ってきて、後ろから抱きつき耳を触りだした。

「えっと、シルフィ？」

「おおかみ……もふもふ……もふもふ」

なんか呟きながら、いい笑顔で、さわさわ、と触っていた。

「エドさん。シルフィどうかしたんですか？」

これはどうしたら？　と困った顔で聞いた。

「う～ん。何かが琴線に触れたのだろう」

「そ、そうですか」

シルフィって、ケモナーなのかな？　しかも、狼限定。

「あ、ごめんなさい。なんか我慢できなくて」
謝りながら、少し恍惚とした表情で言った。

「別にいいですよ。好きなだけ触ってください」

少しこそばゆいけどね。

「ほんと？」
そこから再度触り始めた。

「そういえば、エドさん。お風呂涌いてるので、よかったらどうぞ。
天然温泉ですよ」

「温泉が涌いてるのか。すごいな」

「ですよね。いつも涌いているので、いつでも入れますよ」

「それじゃ、いただこうかな」
そう言って、椅子から立ち上がった。

「ご案内しますね」
僕も椅子から立ち上がろうとしたら、

「私がご案内します！」
メイドさんが、出てきてそう言った。

「場所はわかりますか？」
メイドさんに聞いた。

「問題ありません。お任せください」

分かるのか。ティナに聞いたのかな？　まあ、メイドさんとしては譲れないところが有るんだろうな。

「わかりました。タオルなんかは、脱衣所にあるものを使ってくださいね」

「はい。それでは、こちらです」

メイドさんはエドさんを伴って、お風呂へ向かった。

少し経つと、シルフィが満足気に離れた。

シルフィは、発作？　が治まったのか。隣りで紅茶を飲んでいるが。

さて、どうしようかな。なんかスキルでも取ろうかな。

チラッ、とシルフィを見たら、いつの間にかレンと遊んでいた。

なんだろう。一定時間が経過したら、またシルフィに抱きつかれる気がする。

うん。よし。スキル選ぼ。

何かあるかな。

体術とかあるけど、リーチが違いすぎてダメな気がする。魔法とか覚えようかな。

【魔法】
〈地魔法〉〈水魔法〉〈火魔法〉〈風魔法〉〈闇魔法〉〈閃魔法〉
〈聖魔法〉〈治癒魔法〉〈付加魔法〉〈工作魔法〉〈初級魔法〉

ふむ。光魔法は選択不可で、選ばなかった魔法を選べるのか。
しかし、初級魔法っていったい？

見てみよ。って、見れないじゃん。
う～む。初期の魔法は5ポイント、その他は１０ポイントか。そして、初級魔法のみ５０ポイントか。なんで高いんだ？

よし。とりあえず、初心者らしく初級魔法でも取るかな。

ぽちっとな。

あとは、生産系のスキルでも取ろうかな。

【生産】
〈鍛冶〉〈服飾〉〈木工〉〈装飾〉〈彫金〉〈採掘〉〈採取〉〈彫刻〉〈判定〉〈技の指先〉〈錬金術〉〈魔法具作成〉

ふむ。

生産系は調合でなんとかなるな。ならばここは、魔法具作成かな。
難しそうだけど、楽しまないとね。

よし。これでいいな。さて、あまり多くスキルを取ると切りがない

からな。
ちなみに、取得できるスキルの量は、人により異なります。
そうだ。ついでに称号の確認でもするか。
称号の詳細一覧を開いた。
しかし、増えたなぁ。……ん？
〔［不可能を撃ち壊す者］の進化条件をクリアしています。進化させますか？　〈ＹＥＳ／ＮＯ〉〕
進化？
称号って自動的に進化するわけじゃないのか？　もとい、進化するのか！？
とりあえず、ＹＥＳを選択。
ポーン
〔［不可能を撃ち壊す者］は、［理外を超越した者］に進化しました〕
ふむ。
何か変わったのかな？　それに、なんか失礼なこと言われてる気がする。
え～と、ステータスは、どぅ「ニズぅ」　ごふ！
ステータスを確認しようと思った直後に、後ろから抱きつかれた。
「どうした。シルフィ」

僕は振り向きながら、聞いた。

「ん～」

唸りながら？　耳をさわさわと触りだした。

なんだ。これ。最初はこんなことはなかったよな？

考えていると、浴衣に着替えたエドさんが戻ってきた。そして、開口一番。

「ニズ嬢ちゃん。いい風呂だった、ありがとう。って、何やってんだ？　てか、あれからずっとか？」

「一度は治まったのですが、ついさっきこうなりました」

「そうか。すまんな」

「大丈夫ですよ」

エドさんが申し訳なさそうに言うので、何でもないかの様にかえした。

「シルフィ。次、お風呂入っておいで」

僕はシルフィを見て言った。

「わかりました。では、ニズも一緒に入りましょう」

これはダメだな。一緒に入ったらロリコン認定されるな。さて、どうするか。お風呂が小さいっていう言い訳は効かないし、エドさんと入ったらとも言えないな。既に入っているし。

うむ。……よし。

「今日はゆっくり一人で入ろうと思うので」
チラッ、とメイドさんを見る。

「お嬢様。私がお背中を流させていただきます。今日はお一人でのんびり入浴したい様ですので、ニズ様と入浴なされるのは、またの機会で宜しいではないですか」
シルフィを説得してくれている。

うん。こちらの意図を考えると、あまりフォローになってないよ。
まあ、次回は何とかするしかないな。

そう心に決めていると、シルフィの説得が完了した様で、メイドさんがこちらを向いて、こっそりサムズアップしてきた。

メイドさん、結構ノリがいいな。
よし。ひとまずはこれ安心だ。しかし、マジでどうするかな。まあ、なるようになるか。

そういえば、初級魔法ってどんなのなんだろう。

［初級魔法Ｌｖ１］
初級の魔法を使用できる。
Ｍアーツ：〈サンドショット〉〈ウォーターボール〉〈ファイアボール〉〈ウィンドプレッシャー〉〈フラッシュ〉〈ブラインド〉〈マジックアロー〉

うん？　これは初級なのか？　とりあえずは、簡単な魔法が一通り

使えるみたいだな。……便利だな。

さてと、次は、う～ん　「ニズ嬢ちゃん」

悩んでいるとエドさんに呼ばれた。

「は、はい。なんでしょうか」

存在を少し忘れていて、驚いたのは秘密だ。

「これを渡しておく」

エドさんはそう言って、イヤリングの様なものをくれた。

「これはピアスですか？」

「そうだ。だが、ただのピアスじゃない。通信の魔法道具だ」

「通信の魔法道具ですか。貴重なものなのでは？」

「そうでもないさ。値段は張るが、商人や貴族などの人たちも持っているよ。材料と作成方法それ相応の腕があれば作れる物だ。まあ、ミスリルなどの特別な金属や、レゾナンス・クオーツと呼ばれる宝石を使っているから値段は張るがね」

エドさんは何でもない様に言った。

高価な携帯電話かな？　それに、高いけど作れる物なのか。さて、どうしたものか。

「気にせず貰ってくれ。俺も持ってるし、シルフィも持ってる。メッセージを送れても、通話はできないからよ」

エドさんは相変わらず何でもない様に言った。

「分かりました。頂戴します」

潔く貰うことにした。少し興味があるしな。

「おう。耳に着けておいてくれ。ちなみに、魔法道具だから通常のピアスと違って、耳に穴を開けたりする必要はないぞ」

どういうこと？　あ、本当だ。磁石で耳に挟む感じに近いかな。

早速着けてみた。

なるほど。磁石で挟むのと違って、違和感はないな。

その後、エドさんと当たり障りのない会話をした。

ちなみに、話しによると、エドさんは剣術と風魔法が得意らしく、シルフィは風魔法と水魔法が得意らしい。

シルフィが出てきたので、次にお風呂に入ることにした。

……あ、そういえば、この世界でプレイヤーはお風呂に入れるのかな？

結果としては、お風呂に入れました。水着みたいな装備になる様で、色々な意味で安心設計です。ナイスです。

ちなみに、これも脱ごうと思えば脱げる様です。脱ぎませんが。

狼耳と姫の趣味と初級魔法……。（後書き）

ありがとうございます。

［理外を超越した者］

不可能を可能にし、不滅を滅ぼす。理の枠を遥かに外れた存在。

称号と天空島と妖精と……。（前書き）

間違えて書きかけをあげてしまったので、あげ直します。

称号と天空島と妖精と……。

お風呂（なかなか大きい木製風呂）から出て、何故かあった瓶に入った珈琲牛乳を飲む。リビングでエドさんと少し話していると、シルフィが船を漕ぎ始めた。そのため、話しはこれぐらいにして、寝ることにした。

エドさん曰く、シルフィとメイドさんは同じ部屋の方が良いとのことなので、二人部屋（単純にベッドが二つの少し大きい部屋）を用意した。エドさんは一人部屋。

ちなみに、僕はスフィ、レンと一緒で、他のメンバーはまとめて別の部屋。まあ、精霊やドラゴンはベッドは無くてもいいらしいが、ベッドがあった方が気持ちよく寝れるらしい。

さて、まだ時間があるから、……どうしようかな。天空島でも行こうかな。と、その前に使わない素材と武具は家の倉庫（ストレージ）に入れておこう。作業場で自由に取り出せるからね。

あっ！　そうだ。ステータス。称号が進化したから、確認を……てっ？……あれ？　何も変わってないな。名前だけなのか？

って、何か出てるな。

〔固有称号の取得条件をクリアしています。取得しますか？　〈ＹＥＳ／ＮＯ〉〕

なして？　てか、新しい称号って自動取得だったよね。

とりあえず、固有称号？　は置いといて。

え～と。さっき取得した称号は、進化後は効果の対象が無生物から生物も入った感じか？　てか、不滅も倒せるのか。……この効果は必要か？　そんな存在は他に倒し方があるだろう。
それで、多分この称号がクリア条件のひとつなのかな？
う～ん。固有称号か。……うん。ＹＥＳをぽちっ！とな。

〔プレイヤーネーム“ニズ”固有称号［无と弍を司る神］を取得しました〕

プレイヤーネーム“ニズ”固有称号　って、これは運営や開発辺りが絡んでる気がする。

まあ、こんなこともあるか。

ひとり納得して、天空島への“小道（ゲート）”がある部屋に向かった。

てことで、いざ。天空島へ。

“小道（ゲート）”（淡く光る扉）を通り、天空島へ。

扉の向こうは、草原でした。少し離れたところに森があり、その先に小高い山がある。森があるってことは水源もありそう。ただ、雲の位置が低い。

「綺麗なところだね。主」

「うん。綺麗」

両隣にいるスフィとレンが言った。

「そうだね」

……ん？

「スフィ。レン。なんでいるの？」

「着いてきたに決まってるでしょう」

「うん。一緒」

いつの間にかいた。あれ？　部屋で寝てたよね。

「契約してるからね」

顔に出ていた様で、こちらが質問する前にスフィは答えた。

「そうか。まあ、いいか」

すぐ呼べるし、すぐに来れるのか。便利だな。……便利だよな？

しかし、

「綺麗だけど何も見当たらないな」

周りには特にこれと言ったものがない。自然は溢れているが。

「そうだね。ここは魔物の気配もないし、生き物の気配は……あるね。この気配は……妖精かな」

「そうなのか。って、分かるのか？」

「勿論」

隣でレンも頷いていた。

分かるのか。僕は分からないぞ。

「行ってみる？」

スフィがこちらを見て言った。

「行ってみますか」

3人並んで歩き出した。

そういえば、この天空島？　の名前って自分で決める訳じゃないのかな？　アナウンスは流れなかったが。

歩いて行くと、森の中に大きな樹が見えてきた。それに伴い少し賑やかな音がする。

「この樹が家かな。いや、町かな」

「そうみたいね」

「うん」

話していると、こちらに気付いたのか話し声が無くなった。

警戒されているかな。

すると、ひとりの妖精（１５？くらいかな）がこちらに来た。

［初めまして。私は天穹族の長のリルルールと申します。オプス様よりお話しを伺っております」

名前に“ら行”が多くない？　それに天穹族っていったい。さっきから、話していることは分からないのに、意味は理解できるのがなんとも不思議（ファンタジー）だな。

まあ、とりあえずは、

「初めまして。ニズと申します」

挨拶は大事ですよね。

「私はスフィリアよ」

「レンティア」

さて、自己紹介を終わらせたから、

「話しを聞いているとのことですが、どういうことでしょうか？」

まあ、質問タイムですよね。てか、人？　が住んでるところを勝手にあげちゃいかんだろう。

『主。もうひとつの島の方にも住人が居ましたよ』

『マジで！？　てか、自然に心を読まないで』

『マジですよ。小さな集落が２０くらい。それなりの規模の村が５あって、大きな町が１つあります。それと途中から念話を使ってい

ましたよ』

『マジか～』

遠い目をしていると、

［あの、大丈夫でしょうか？］

おっと、聞いて置いて黄昏てしまった。いかんいかん。

「大丈夫です。それで、どの様な話しを」

［はい。ここアウラはオプス様によって造られ加護を与えらた土地です。そのオプス様より遥か昔から、他の者へ与えるための土地と言われておりました。私たち天穹族は、その事を理解した上でここに住み着きました。そして遂に先程神託がありました。この土地を譲渡したと］

「そんなことがあったのですか」

あれ？　オプスって島をつくれるのか？　建物の神様ではなかったのか？　それに住み着いたってことは、前は別のところにいたのか？　疑問がたくさん浮かぶな。

［それでお願いしたいのですが、この地に住まう許可を頂けないでしょうか？］

許可？

［この地は既に貴方様のものなので］

心配そうにリルルールは言った。

そういうことか。

「構いませんよ。僕のものになる前に、既に住んでいたのですから」

そう言うと、ぱぁ、っと表情が明るくなり、

「ありがとうございます！　ニズ様！」

と、嬉しそうに言った。

「いえいえ」

僕がそう返事をすると、

たくさんの妖精が出てきて、口々にお礼を言ってきた。

相変わらず、話し声は理解できないのに、意味は理解できるな。

あれ？　男性の妖精がいないような。

そんなことを考えていたが、時間も時間なので話しは今度にして、

家に戻り《ダイブアウト》することにした。

称号と天空島と妖精と……。（後書き）

ありがとうございます。

調合と調律と武器合成と……。（前書き）

お願いします。

調合と調律と武器合成と……。

ダイブアウト後、軽く運動した。（6時間不動だと体がね。まあ、1日中寝っぱなしでも大丈夫なベッドですが）

その後、ご飯食べてお風呂に入ってからダイブインした。

妹二人はご飯を速攻で食べて、お風呂に入ってから2階に上がって行った。合計時間は1時間掛からなかったな。

さて、

《ダイブイン》

そして我が家（ホーム）に降り立った。

まあ、実際は降り立ったと言うか、ベッドで目覚めたが。

どうやら、ホーム内でダイブアウトすると、自室のベッドにて目覚める仕様のようです。

てか、初めて自室を見ました。模様替えも自由で、なかなか色んな機能が付いている。と、カスタムメニューから推測できる。

窓を見た。

外はうっすらの明るいな。みんなは……寝ている様だな。

さてと、何をしようかな。どうせだから新しい作業場で作業でもしようかな。……うん。そうしよう。

え〜と。調合ってどんな技能があったけな。

〔調合〕

調合を行える。薬や毒など、あらゆるものが調合できる。複合スキルのひとつ。

〈調薬〉――精製――反応促進――短縮簡略化――???

〈調金〉――合金――武器合成――新金創成――???

〈調理〉――熟成促進――大解体――???

〈調木〉――???

〈調律〉――???

〈調印〉――???

ふむ。〈調木〉はわかるが〈調律〉と〈調印〉ってなんだ？　何をするためのモノなんだ？　何も技能（アーツ）がついてないが。使ってないからかな。

あと、最初から複合スキルなんて説明あったか？　後付けかな。

まあ、いいか。さて、なにしようかな。武器合成とかしようかな、武器は使わないものがたくさんあるし。

調金の作業場でやろうかな。しかし、武器合成用の装置とかあるのかな？

扉の部屋（エントランスかな？）に行き、作業場の扉に入ると更に扉があり、調金の部屋に入った。ちなみに調律の部屋が増えていた。自動更新なのかな、この部屋は。でも、鍛冶とか木工とかのスキルは取ってないのに、作業部屋があったな。なして？

それとも、調金や調木は鍛冶や木工に含まれるのかな。

そういえば、彫金と調金って違うものなんだな。響きは変わらないのに。

さてと、そこら辺は置いといて、いざ、武器合成！

と、その前に、え～と。

“闢焉剣［開闢と終焉を齎す混沌（ブラック・アンド・ホワイト）］”と“邪神剣［死を詠う邪神剣（デスマーチ）］”は、何故か合成できないな。他にはレニクス王家と付いた武器も駄目だな。特殊な武器なのかな。あとは防具やアクセサリも無理っと。その他の武器は合成できるようだな。

あとは……うん。“聖短剣［クラフォル］”はシルフィにあげようかな、この効果なら護身用にいいだろう。

おっ！　４文字シリーズは合成可能だ。……やるか。

え～と。武器合成は何れ（ど）でやるんだろう。う～ん。ん？　メニューになんか新しい項目が増えてるな。作業場の説明書か、これは便利だな。……お、あった。合成炉って言うのがあるのか。

〔合成炉〕

溶かすためでなく、合成するための炉。炉には鍛冶神が使うとされている神の火がともる。

神の火って、いいのか？　もとい、鍛冶神って……いや、建造

神がいるんだからいるか。

それでは、武器合成を始めようかな。

武器を合成炉に入れればいいのか。簡略化し過ぎてないか。いや、そもそも武器を合成するって言うのが、既に現実では有り得ないか。

そんなことを思いつつ武器を合成炉に入れた。

入れた武器は、“天剣［天宙虚空（ウラノス）］”“真刀［風色琴音（かざいろことのね）］”“梓弓［事象境界（ながれず）］”“穹弓［一穹千想（エトス）］”“覇斧［地裂焔斧（アーレス）］”“星槍［星屑聖槍（エンハンブレ）］”“雷鎚［鋼砕雷鎚（ユピテル）］”の合計７つ。ちなみに合成炉の限界は８つまで。

さて、何ができるかな。っと、どうやら合成する武器に応じた魔力を加えないと合成できないようだ。多い場合は問題ないようだが。

……異様に強い（多分）であろう武器を７つも入れちゃったが、僕の魔力で足りるかな。まあ、やるしかないな。全部使い切るつもりで行かないとダメかな。

僕は一気に合成炉に魔力を注いだ。

すると、様々な色の光が舞い初めた。

辺り一面に光が広がり舞い踊っていた。

その後、光の動きが一瞬だけ止まり、炉に向かって収束を始めた。

収束が終わる時、真っ白な強い光を放った。

その光が落ち着くと、ピロリン、という音がして、パーフェクトと

表情が出た。

良かった。成功したみたいだ。表示の意味は理解できないが、武器合成成功とパーフェクトの下に出てるから、成功だ。

どれどれ。

神具［凪嵐ノ指環］

指輪ではなく指環。様々な武器になれる、ちょっと意味のわからない指環。武器であるが、アクセサリ扱いでもある。

破壊・譲渡・売却不可。プレイヤーロック“ニズ”

効果：Ｍｉｎ＋１０（アクセサリ時）

スキル：

〈天剣天宙虚空（ウラノス）〉――宙舞千剣――閃剣穿天

〈真刀風色琴音（かざいろことのね）〉――透刃――風斬

〈梓弓事象境界（ながれず）〉――必中――閃放烈刺

〈穹弓一穹千想（エトス）〉――瞬刹――閃千討――光ノ矢

〈覇斧地裂焔斧（アーレス）〉――覇炎守護――地爆炎鎖

〈星槍星屑聖槍（エンハンブレ）〉――降注星屑――天之星光

〈雷鎚鋼砕雷鎚（ユピテル）〉――白雷招来――雷珠――雷星衝突

〈円環天鈴地鐘（テンリンチショウ）〉――凪ノ嵐――嵐ノ凪――扉ヲ叩

うん!?　なんかヤバイの出来た気がする。武器なのかアクセサリなのかわからないが、合成前と合成後のサイズが合ってない気がする。ってか、合ってない。それに、何故アクセサリっぽいのができる!?　そもそも、アクセサリは合成不可だったのに!

……いや、ありなのか。

う～む。この世界って魔法以外は結構物理法則に忠実なんだけどな。……もしや武器合成って魔法の範囲内なのかな。魔力を使うから、その可能性はあるな。

とりあえず、装備しておこうかな。折角だし、アクセサリ枠は空いてるからね。

そういえば、何で能力仮装してるのに魔力が十全に使えたんだろ。まさか、文字通り仮装は仮装でしかないのか。……でもまぁ、力の手加減は簡単にできるな。もしや、凄く手加減が上手くできるだけか。成長すれば何かしら変わるのかな。

そんなことを、ふむふむ。と考えていると、

「主。おはよう♪」

と、上機嫌なスフィがやって来た。

「おはよう。どうした？　って、実体化してるのか」

「うん！　最近はそんな機会もなかったからね」

「確かにそうだな。……あれ？　精霊って自分で実体化できるのか？」

ふとした疑問を聞いてみた。

「主の契約精霊は勿論だけど、主の近くにいれば４階位以上なら主の力の影響で実体化できるかな。大精霊なら単体で実体化できるけどね」

「そうなのか」

「姿を見せるだけなら、簡単だけど」

「簡単なんだ」

「簡単です。と言っても、微精霊なら光の玉がぼんやりと、下位精霊は人の形がぼんやりと。しっかりとした姿は中位精霊からだね。まあ、何事にも例外はあるけどね、大体そんな感じ」

僕の頭を胸に抱きながら、スフィは得意気に言った。

「そうなのか。それで、なんで僕の頭を抱いている？」

凄く自然に抱かれたので、違和感がなかった。

「気にしない、気にしない、そんなこともあるよ」

「そんなこともあるのか。まあ、いいや。皆はまだ寝てる？」

「うん。寝てるよ。昨日は色々大変だったみたいだからね」

「確かに、シルフィは疲れているようだったからね」

結構早い時間でも眠そうに、こっくり、こっくり、してたからね。

「うん。でも、そろそろ起きると思うよ」

そんな時間なのか。

「そうか。なら、朝御飯の準備でもしようか」

「手伝うよ♪」

「ありがとう。朝ごはんは洋食と和食のどちらがいいかな」

「う～ん。洋食かな」

「そりじゃ、そうしようかな」

そんなことを話しながら、二人で笑いあって、作業場を出た。

調合と調律と武器合成と……。（後書き）

ありがとうございます。

朝御飯と暦とカレンダーと……。（前書き）

時間がなく、遅れました。お願いします。

朝御飯と暦とカレンダーと……。

料理（調理？）をしていると、途中で慌てた様にメイドさんが起きてきた。ベッドの寝心地が至高だったそうです。
メイドさんと一緒に朝御飯を作っていたら、メッセージが届いた。
ん？　運営から？　なんだろう。確かアップデートがあるから、それ関連かな。

そんなことを思いつつ、料理は完成した。こんな感じ。

［和食朝御飯御膳］
米、味噌汁、沢庵、鮭の塩焼、だし巻き玉子、海苔、の、人によっては定番の朝御飯。だしを効かせて全体的に減塩している。（評価７）
効果：ＨＰ・ＭＰ回復速度上昇（小）

複数作ったのに、一つのアイテムになったな。あと、なんか効果が付いたが、まあ、美味しければいいか。それに評価ってなんだろう。上手く出来たかの評価かな。それとも味の評価かな。高いのか低いのかわからないが。

ちなみにメイドさんはメイドの矜持があるらしく。エドさんとシルフィの料理は自分が作るとのことで、洋食な朝御飯を作っていた。
ティナには手伝いを頼んだ。主にだし巻き玉子を作ってもらった。

巻くのが上手かった。

「おはよう」
「おはようございます」

できた頃にエドさんとシルフィが起きてきた。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「ああ、よく眠れましたよ」

「はい。よく眠れました。でも、いつの間にかベッドに入ったのでしょう？　ニズと一緒に寝るつもりだったので残念です」

「そうですか。よく眠れたのならよかったです」

危なかったな。場合によってはシルフィと一緒に寝ることになったのか。

「ニズの抱き心地を知りたかったのですが」
シルフィが、ぼそっと呟いた。

抱き心地って!?　マジで危なかった。いや、まだ危ない気が……。

チラリとシルフィを見たら目が合い、にっこりと満面の笑みでこちらを見た。

……oh

コレハヤバイカ？

「ん？　どうした？　ニズ嬢ちゃん」

「え、あ、い、いえ、なんでもないです。朝御飯を食べましょうか」

「そうだな」

「はい」

各自食卓の席についた。勿論、メイドさんも一緒。

みんなで食べた方が美味しいからね。

どこの王族もこうなのかしら？

「「「「「「いただきます」」」」」」

日本式の食前の挨拶をした。

ご飯は他愛もない話しをしながら食べた。（口の中に食べ物を入れて喋ってはいけません）　ちなみに、いつの間にかティナが手作りふりかけを作っていた。今回は海ｓｅｒｉｅｓ浅瀬ｖｅｒｓｉｏｎらしい。（発音がこんな感じでした）　他にもあるのか。とも思ったが、聞かないでおいた。

食事中に聞いたが、お風呂は上流階級やお金持ちしか家にはないとのこと。一般の人は、ある程度大きな町には“カララバ”と呼ばれる大衆浴場（銭湯みたいな処）に行って入り、小さな町や村の人は、生活魔法の“洗浄”で身体の清潔に保っているが、味気無い場合はタオルで身体を拭くか、川で水浴びらしい。一部の温泉が湧く地域の町や村には、小さくても温泉風呂があるらしい。

生活魔法は綺麗になるが、スッキリ感があまりなく、味気無いんだ

ってさ。

朝御飯を食べ終わり、

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまです」

二人とも、日本式の食後の挨拶をした。

馴染んでるな。……郷に入れば、というやつかな？　いや、違うか。その台詞は僕の方に当てはまるしな。

少しのんびりしていると、

「私、朝風呂に入ってきます！」

シルフィがそんなことを言った。

朝風呂かぁ。それは気持ち良さそうだ。

「温泉だから、いつでも入れるから行ってきなよ」

「ニズも一緒に入りましょう！」

まあ、何となく予想してました。しかーし、

「また今度ね。僕は後片付けもあるから」

僕、ナイス言い逃れ。

「私が後片付けしましょう。ニズ様は御嬢様とお風呂へどうぞ」

メイドさんが余計なことを！

「でしたら、僕が後片付けで、お風呂へはメイドさんがお願いします」

そのあと、軽い押し問答があったが、無事に？
一緒に朝風呂に入らずに済んだ。

後片付けが終わり部屋に戻ると、エドさんが話をふってきた。
「ニズ嬢ちゃんはどうするんだ？　確かプレイヤー（ティエラ人）だったよな。なら、次会えるのは祭りの日か、その前の日か」

「そうです。……ティエラ人とはなんですか？」

多分、プレイヤーのことをそう呼んでいるんだろうな。

「ん？　ああ！　この世界の住人は君達のことをそう呼んでいるんだ。他にも異世界人や渡り人、異邦人や放浪者なんて呼ぶ人もいるな」

やっぱりそうなんだ。そういえば、この世界から見た現実世界は【ティエラ】って名前だっけか。だからティエラ人か。言い得て妙だな。

「そうですね。そう言うことならティエラ人で間違いないです」

「ふむ。やはりそうか。と、言うことはやはり数日来られなくなるだろう？」

「確かにそうです。夏休みが終わったら頻繁に来られなくなりますね」

「ん？　夏休み？」

ん？　ああ、そうか、こちらに夏休みはないのか。

「夏休みっていうのは、夏にある長期休暇です」

ん？　この世界って四季があるのか？

「成る程、長期休暇か。魔法学園なんかは火の星には長期休暇があるから、似たようなものか？」

魔法学園があるのか。……まあ、魔法がある世界だから、魔法学園ぐらいあるか。

「そうですよ。似たようなものですよ」

まあ、内容は違うがな。あくまで似たようなものです。

「シルフィは魔法学園には通ってないのですか？」

気になり聞いてみた。ってか、休みになったからこっちに来たのか？　でも逃げて来たみたいなことを言ってたよね。ってことは通ってないのかな。

「シルフィは基本は家庭教師だな。本当は学園に通わせたいのだが、奴らに隙を与えることになるからな。問題が片付けたら入学させるつもりだ。同世代と共に学ぶのは良い刺激になるだろうし、タイミ

ングも良いから。それに、今回の戴冠式で落ち着くはずだからな」

なるほど、そう言うことか。何のタイミングが良いのか分からないが。まあ、何かあるんだろう。

それに、

「そうですね。確かに同世代と一緒に遊んだり学んだりするのは、良い経験になるかもしれませんね」

「だろう」

「はい。……話の途中にあった火の星ってなんですか？」

そういえば、火の月って、なんだろう？

「ああ、そうか。火の星と言うのは、簡単に言うなら環の次の単位だ。１環が８星で、１星が３０日だ。１環が２４２日になる」

そういうこと……ん？

「日数が合ってないのですが」

「ん？　ああ、それは神霊の日があるからだな」

「神霊の日ですか？」

「そうだ。神霊の日は古い環から、新しいの環に移り変わる時の前後の日を言うんだ。この日は星には数えられない。ちなみに、星は風に始まり、風火・火・火地・地・地水・水・水風、順番だ。これに、神霊の日が入って２４２日だ。ちなみに、神霊の日は風の星の前にある」

「そうなんですか。あれ？　でも、光と闇の星はないんですか？」

地水火風に光闇が基本属性だったと思うが。

「光と闇の星は6環に一度だが、3環ずれて交互にある。まあ、日数は一巡のみだけどな。今環は丁度、光の星があるから1環248日だな」

「なかなか、分かり難いですね。あと、今の話しにあった1巡って6日っぽいですけど、一日一日に名前はあるんですか？」

「あるぞ。星とあまり変わらないがな。風に始まり、火・地・水・光・闇、だ。基本四大属性と特殊二極属性の名前がそのまま使われている」

ふむ、やはり暦は違うな。てか、光と闇は基本でなく特殊なのか。他にもこちらの認識と違うところがありそうだ。

でも、時間の単位は同じっぽいんだよな。それに1日の単位も。

まあ、何となく理由は分かるかな。

「ありがとうございます。勉強になりました」

「おう。分からない事があったら、なんでも聞いてくれ。知ってることは教えるぜ」

ポーン

〔この世界の時間の単位を知りました。これにより〈カレンダー〉機能を解放いたします〕

こんな機能をいったい何に使うんだ？

朝御飯と暦とカレンダーと……。（後書き）

ありがとうございます。

用事と漢方と調薬のススメと……。（前書き）

お願いします。

用事と漢方と調薬のススメと……。

シルフィがお風呂から出てきて、僕に「次は一緒に入ろうね」と言ったが、機会があったらね、と誤魔化しておいた。

……うん。次誘われたらどうしようか。いや、マジで。

そんなことを悩んでいると、

エドさんが、

「さて、行く準備を始めるかな」

と、言った。

ん？

「何かあるんですか？」

「ああ、馬鹿どもの相手だ」

げんなり、とした顔で言った。

「そ、そうですか」

僕も苦笑いをしながら言った。

「シルフィは置いていく。頼んだぞ」

こちらの目を見てエドさんは言った。

「分かりました。まあ、ここなら安全性は大丈夫だと思いますし」

こちらも目を見て言った。

二人して、ふっ、と笑いあった。

すると、エドさんが、

「しかし、ニズ嬢ちゃんは本当に大人っぽいな。前にも聞いたが、実は見た目通りの環齢じゃないだろう。長寿の種族なのか？　しかし、獣人族で長寿な種族はいたかな？」

突然そんなことを言い出した。

「僕ですか。う～ん、どうなんでしょう。普通の獣人族よりは長生きでしょうが、特に長寿の種族と言うわけではないと思いますよ」

多分そうだろう。……その前にこの世界の普通の寿命をしらないな。猿獣人が人族とイコールっぽいから、７０～８０歳くらいかな。

「普通の寿命ってどのくらいですか？」

聞いてみた。

「？……ああ、そうか。種族によるが、獣人族は事故や病にならなければ大体８０環くらいだな。ちなみに、妖精族は３００～８００環で、亜人と呼ばれるそれ以外は２００～１０００だ。上位種は除くが」

「獣人族は短いのですね」

一年、いや、一環の日数を考えると、かなり短くないか？

「まあな、ただ、この世界の人口の８０％以上は獣人族だから、特に短いと思ったことはないな」

「確かにそうですね。１０００環とか、人生に飽きそうですね」
それでも、現実時間で、え～と、２００年くらいかな？……って、十分に長いな。この世界の時間軸はどうなってんだ？

僕がそう言うと、

エドさんは笑いながら、
「そんなことを言ったら、上位種なんでやってられないな」
なんて言った。

え？
「上位種ってそんなに長生きなんですか？」

「ああ、そうだ。獣人の上位種でも１０００環は生きるし、妖精族や亜人の上位種なんて１００００環も生きる者もいるらしいからな」

わお！　そんなにか、さすがファンタジー！
現実時間で２０００年オーバー。

「それは凄いですね」

「ちなみに、レニクス王家には時折他種族の、特に妖精族の血も入っているから、普通の獣人族より長生きだ」

「そうなんですか！？　そういえば、シルフィの力は先祖帰りや隔世遺伝っぽいですものね」

そういえば、そんな経緯があったな。

「そうだ。だから王家の者の寿命は長い。私の曾祖母も妖精族で今も健在だからな。初代国王の王妃もハイエルフだから、今も健在でエルフの里で長をやっているな。ほら、この前話していた」

この前……って、あの人か！　アリアさんか！　あの人は王族だったのか。

うん。会いに行って見ようかな。あの時は置き手紙で失礼したからね。

「だからあの時、知り合いなのか、と言ったんですね」

「そうだ。驚くのを隠すのに苦労したぞ」

「隠す必要があったのですか？」

隠せてなかった気がしないでもないが。

「あの町は隠れ里だから、一応な。今となっては意味はなかったと思うが、まあ、嬢ちゃんの様な見た目幼子に警戒する必要はなかったな」

ははは、と笑ってエドさんは言った。

「そうですよ。何かするつもりもないですし。……何かされそうにはなった気はしますが」

「何かあったのか？」

眉を寄せて言った。

「いえ、大丈夫です。危険度で言うならシルフィの方が危険です」

「なるほど」

二人してシルフィの方を見たら、視線に気付いたシルフィがこちらを見て首をかしげた。

「どうかしましたか？」

「「なんでもない」」

僕とエドさんは声を揃えて言った。

「そうですか」

不思議そうな顔をしていたが、とりあえずは納得したようだった。

メイドさんはクスクス笑っていたが、薮蛇はお断りなのでスルー。

その後、エドさんは仕度をして、迎えの人（騎士の格好をした人が玄関に来ていた）と外出。

シルフィはメイドさんやベル、ファノと庭の散歩（庭がバカらしいほど大きいのですが、こんなに大きかったか？）

ティナは昼御飯の買い物と晩御飯の仕込みだそうだ。（家精霊（シルキー）は普通の精霊よりも妖精寄りらしく、実体化なんかは基本中の基本とのこと）

そして僕はスフィやレンとお茶会（ティータイム）中である。

そういえば……なんか、エドさんには会うたびに頼まれごとされたり、色々教えてもらったりしてる様な気がする。

まあ、それは置いといて、運営からのメッセージってなんだろう？
せっかくなので、ゆっくりと確認することにした。

〈プレイヤー様へ
毎度のご利用ありがとうございます。
今回は明日９日に行われるアップデートのご案内です。
時間はＡＭ９時～ＰＭ３時の６時間を予定としております。
時間は短くなることはございますが、長くなることはございません。
詳しいアップデートの内容は、９日０時よりホームページにて発表致します。
今後とも宜しくお願い致します。

《Ｅｌｅｍｅｎｔ　Ｅａｒｔｈ　Ｏｎ－ｌｉｎｅ》運営部及び開発部より〉

うむ。やはりアップデートの話しか。でも、この時間だと、いや、いいのか。丁度昼間になるのか。よく考えてるな。

そういえば、妹や従姉妹たちが時間がないとかかんとか言ってたが、この話に関係があるのかな。まあ、僕は持ってないことにしてるから、聞こうにも聞けないな。……さすがにこの格好は少し恥ずかしいし。

さてと、これからどうしようかな。

……うん。調薬でもしようかな。新しい設備も気になるし。

と言うわけではお茶会(ティータイム)茶具を片付けて、調薬の作業部屋へ来ました。

さて、何を作ろうかな。

ん？

部屋の端に本棚があった。近付いていくと、どうやら薬草図鑑や調薬のレシピ本、それに、

「この本は読めないな」

文字が意味不明で、読めない本だった。図を見ると、これも調薬のレシピ本っぽいな。

「私、読めるよ」

スフィはそう言った。

「読めるの！？」

「うん。これは精霊言語の高位古代文字(ハイエンシェント)だよ。ある程度の高位精霊なら読めるかな」

スフィはそう言ってレンに見せた。

「うん……読める」

どうやら、レンも読める様だ。
もう一度見た。……うん。僕はやっぱり読めない。
なんか特別なスキルか必要なのかな？

「どんな内容なんだ？」
気になるし、聞いてみた。

「え～と、“広範囲蘇生薬”“精霊化薬”“魔宝玉”“聖宝玉”“付加薬”それに、各種高位ポーションなどの作り方だね」

よく分からないアイテムの名前を言われた。
宝玉の作成って調薬の範疇なのか？　知らなかったよ。

「名前を聞くと、あまり作らない方が良さそうな名前だね」

「そうだね。これは今の段階では過剰性能（オーバースペック）だよね」
うんうん、と頷きながらスフィが言った。
納得してくれた様だ。

「だな。その前に材料も今の段階では、持ってない物もあるだろうし」

「多分……ある」

ん？
レン？　それはどういう……

「そうだねぇ。多分あるねぇ」

ん？
スフィ？　それは……

「「つくる？」」
二人はこちらを見ながら言った。

「作らんでいい」
止めておいた。

「わかったよ」
「ん」

よし。ならば、
「作りますか。スフィとレンも、何か作る？　その危ないレシピ本に載っている物でなければ、作っていいよ」
作れるかは、分からないがな。

「やるぜ～、がんがんやるぜ～」
「任せて」
二人は、張り切って（レンはよく分からないが、多分）言った。ちなみに、やり過ぎない様に行っておいた。

「さてと、始めるか」

あ、その前に、スフィたちが集めた素材を確認かな。
家のストレージを見た。

……うん……多いよ！　多過ぎるよ！！

とりあえずは、使うものから……ん？　これは？

［桔梗］
根を乾燥させて細かく刻むことで、生薬として使用できる。

桔梗って、あの桔梗だよね？　この世界にも生えてるのか。しかし、生薬って漢方薬のことかな。

他にも見覚えのある名前があるな。え～と。

［菊］［百合の球根（魔種）］［椿］［藤こぶ］［薊］［桜皮］［朝顔の種子（魔種）］とかだな。
って、魔種って何？

［朝顔の種子（魔種）］
成熟種子を乾燥させ粉末にしたものを生薬に用いる。魔種の特性として、通常よりも生薬にした際の効果が格段に向上する。

ふむ。魔種とは効果が高いものを言うのか。
……使ってみるか。結構量があるから少しくらいはいいだろう。

“成熟種子を乾燥させ粉末にしたもの”ってことは、これを粉砕すればいいのかな。乾燥している様だし。

棒に円盤がついた器具（薬研？）で砕くことができた。そのあと、

石臼で細かくして粉末にする。
これでいいのかな？

［牽牛子（けんごし）］
強い瀉下作用をもつ瀉下薬。魔種を使用したため、効能が極めて強力になっている。その代わり一定量（３ｇ以上）を服用しないと効果を発揮しない。（妖精族及び亜人種には５ｇ以上にて効果を発揮）
効果：瀉下作用（極大）

できたはいいが、瀉下作用って何？　まあ、それは後で調べるとして、このままじゃ使いにくいから、丸薬にしようかな。

ん～、ん？
何気なくストレージ内を眺めていると、丸薬の素と言うものが入っていた。どうやら備え付けの材料の様だ。

［丸薬の素］
粉末や液体のものに混ぜることで、容易に錠剤にできる。そのかわり、効能を下げることはないが、上げたりなどの効果もない。魔法薬の一種。

様は固めるだけの素材か。使ってみるか。

……

……

……どういう理屈なんだろうか。

出来たには出来たが、何故に水も嵩が増えない？　普通は入れたら増えるでしょう？　さすがは魔法薬だな。もしや物質ではないのかな、この“丸薬の素”は。水は蒸発したかな。

今は考えても分からないか。

そして、出来ました。単純に水と入れて混ぜただけですが。（液体の場合は水は必要ない）

［牽牛子（けんごし）（丸薬）］

強い瀉下作用をもつ瀉下薬の丸薬。魔種を使用したため、効能が極めて強力になっている。一粒服用で凄まじい効果を発揮する。

効果：瀉下作用（極凶大）

効果が上がってないか？

……いや、これは上がっているのか？

う～む。

悩んでいてもしょうがないか。次は何をしようかな。

そこで、ふと、“調薬のススメ”という本が目に入った。

これは読むべきか。うん。読もう。

手に取り、本を広げた。

何々。

〔調薬とは、草花に秘められた力を調べ、薬として力を引き出す技

術のことである。調薬を行う者は、独り善がりになってはならない。草花を取り過ぎてはならない。自然に対し感謝を忘れてはならない。」

自然に感謝か。確かに自然のものを使って作っているのだから、感謝は大切だな。

ん？　“取り過ぎてはならない”ってことは、もしかしてこの世界のアイテムって無限じゃないのか！？

うん。これは気を付けねば、他には、

……うむ。

……ほうほう。

……へぇ～。

……これは？

内容は基礎から応用まで、色々書いてあった。図解入りで解り易く書いてあった。

気になった一文はこちら、

「調薬の作業中に多くの魔力を加えると、“魔秘薬”と呼ばれる薬となる。この薬は正規の手順ではないので、連続して服用すると効果に応じた酷い副作用が起こる。そのため、その方法で作った魔秘薬を一度服用した場合は、一年以上他の薬の服用を控えることを推奨する。（対象が人でない場合はこの限りではない）」

秘薬を渡さなくて良かった。あれは正規の秘薬でなかったのか。そして、人に使わなくて良かった。

いや、精霊に使ったか。あれは良かったのか？

そんな風に悩んでいると、

「主ぃ。私も作ってみたよ」

「私も」

スフィとレンが何かを作って持ってきた。

「ん？　どれどれ」

僕は作った丸薬をしまい、そちらの方向を向いた。

レンの作ったものは何かはわからないが、綺麗な色合いをしていた、が、……ん？　なんかスフィの作ったものの色合いがヤバイのだが。

色を表現するなら、レンのものは綺麗な南の海の色、スフィのものは混沌（見たことないが）の様な色。

二人は期待したような眼差しでこちらを見ている。

「え～と。一先ず、確認してもいいかな？」

僕は少し震えた声で言った。

「うん。はい、どうぞ」

「ん」

二人は快く渡してくれた。

二人からポーション（仮）を受け取り、名前や効能を確認した。

こちらがレンが作ったもの

［ファンタジアポーション］
ＨＰ・ＭＰ・状態異常を全回復させる。また、一定時間ＨＰ・ＭＰ共に継続回復、状態異常無効。精霊の力が宿ったポーション。人では作ることのできない精霊薬の一種。

うん。素晴らしい性能だな。

それで、スフィの作ったものは、

［ゞ£я∀ж∽〆ＰｏтюиＸ］

なんだか力が湧き、どうにかなるポーション、の様なもの。飲んだ後の事は知らない。自己責任で飲むのは自由です。

……これはなんだ？　文字化けしてない？
これは……と、とりあえず、封印で。とにかく、封印で。

「どう？　どう！？」
「ん」
二人はこちらの反応を待っている。

「二人とも凄いね。レンのものは素晴らしい性能だし、スフィのものは（いろんな意味で）凄まじい性能だよ」

うん。嘘は言っていない。断じて嘘は言っていない。
しかし、調薬もそうだが、色々自由度が高過ぎないか？　もしや、制限がないのか！？　明らかにレシピがないものも作れるし。

まあ、悪いことではないか。
兎に角お礼は言わないとな。
「二人とも、ありがとう。大事にするよ」
二人は嬉しそうに聞いていた。
嬉しそうで、何よりです。

……あ、そうだ。秘薬のことを聞こう。
「二人に聞きたいんだが、あの時の秘薬って大丈夫だったのか」
聞いてみた。
「うん。大丈夫だよ。精霊にとっては魔力は毒にならないからね」
「ん。大丈夫」
二人は何でもないように言った。

「そうなの」
「そう。それに、主の魔力は極めて清んでるから、全く問題ないね」
「心地好い」
ぽやん、とした顔で二人は言った。

「それなら良かった」
ほっ、として僕は力を抜いた。

「まあ、質が良くても人にはあまり関係ないけどね」
「そうなのか？」

「悪いよりは良い程度だよ」
「ん」

あ、そうですか。
「秘薬は人には使えないな」

「そうだね。複数飲んだら死んじゃうね」
「ん」

あ、やっぱり。

秘薬はもう作るまい。

ちなみに、魔力を加える行為は、完成後に正規の設備で適量加えるのが正解ですって。加え過ぎると、これも魔秘薬になるとのこと。
（調薬のススメより）

あ、やべっ、ポーションの類いも魔秘薬になってるかも。

用事と漢方と調薬のススメと……。（後書き）

ありがとうございます。

今後とポーションとアップデートと……。（前書き）

お願いします。

今後とポーションとアップデートと……。

さてと、

居間に入ると涼しい風が吹いた。

みんなはまだ戻ってないか。シルフィくらいは戻ってきてると思ったんだが……そんなに家の庭って広いのか？

……うん。まあ、それは後で聞こう。

今のうちにポーションの確認をしよう。多分まだ売ってないよね。店を持ってから売りたいっていってたし。

え～と、ポーションは結構な量を作ってるな。

〔神眼〕を使えば分かるかな。これで分からなかったら鑑定だかのスキルを取らないとな。

［カンカンポーション？］（（秘薬・劣））

ＨＰが８０％回復する。その後、継続的に5分の間、ＨＰが毎分６％回復、ＭＰが毎分１％回復する。薬草と聖水が魔力とマナにより反応を起こし活性化した回復薬。六宝柑の味がして飲みやすい、六宝柑ジュース。

（（多くの魔素が含まれているため、連続して摂取すると魔素中毒になる可能性が極めて高い。魔素中毒が起きている時に摂取すると、個人差はあるが絶命する））

うん。これは駄目だな。事情の説明しないとな。売っても使用制限しないとクレームが来そうだ。それに、絶命するってのは嫌だな。他のポーションも全部同じ様な感じだ。

もしくは、正規のものをつくって渡すかだな。それなら売れるかな、作ったことないが。やっぱり、これからは力業じゃ駄目だな。調薬の本もあるから正規の手順でやりますかな。

あとは、……あ、ジャムとかはどうなんだろうか。

［ライフアルプジャム］

アルプのジャム。甘酸っぱくて、中に残ったアルプの果肉がよい歯ごたえ。ＨＰが３２％回復。

（（ジャム状にしたことにより余分な魔素が加わらず、連続して摂取しても魔素中毒になりにくい。その代わり、連続して摂取すると効果がなくなる））

これなら、悪くはないな。複数食べると効果がなくなることを言っておけばクレームにはならないかな。いや、その前に食品だから関係ないかな？

しかし、“魔素中毒”ってなんだろうか。中毒って時点でいいことじゃないのは分かるが。調薬のススメに載ってたかな？

あ、あった。どれどれ、

〔魔素中毒〕
体に魔素が溜まることにより起こる中毒。軽度の場合は船酔いの様な症状が起き、重度の場合は死に至る。魔力多過症と症状が似ているが、原因が異なり特効薬は存在せず、自然治癒に任せる他ない。極稀に高位のヒールなどの魔法でも起こることがある。

ふむ。特効薬がないのか。これは気を付けないといけないな。ヒールなどの魔法でも起こる、ってことは自身以外の魔力が関係しているんだろうな。
……“魔力多過症”ってなんだろうか。
え～と。あった。

〔魔力多過症〕
高い魔力を有している子供がなりやすい。未熟な身体が高い魔力によって軽度の免疫不全に陥っている状態。魔力を封じ込める魔法具か、魔力の抑える薬を服用することにより症状を緩和できる。身体が大きくなれば次第に落ち着いていき、大人になる頃には完治する。死に至ることはない。高い魔法の才能を持った証でもある。

ふむ。才能の証か、才能の証か！
この本は本当に凄いな。調薬関係のことなら何でも載ってるな。まあ、これが調薬の基礎なのかもしれないが。
ん？　魔力は何と無く分かるけれども、魔素は……魔素とマナは違うものなのかな。
どこかに魔素の説明はないのかな？

ペラペラとページを捲っていく。

ページが多過ぎてどこにあるか見付からないな。って、目次があるじゃん。

え～と。あった、これか。

〔魔素〕

魔気の一種。魔法を使用した際に極僅かに発生するが、低濃度では不安定なため瞬く間に分解されてマナとなる。精霊や樹木などが生み出すマナと異なり、濃度が高いと人体に悪影響（頭痛や酩酊など）が起こる。濃度が高くなると強力な魔物や魔獣など産み出すことがある。

特記：魔素が多量に発生する場所が存在し、その場所を魔泉という。密林の奥地やダンジョンの最下層に存在し、貴重な薬草などが自生していることが多い。

ふむふむ。魔素は魔気の一種なのか。

……魔気を知らんがな。まあ、でも、定番からは外れてないようだな。それに、高濃度の魔素でも死にはしないようだな。

これから考えると、ポーションがヤバイのは魔素が極めて多量に入っているからだと思われる。

う～む。何とか魔素を分解出来ないものか。いっそ［生命之根源操作］で魔素を無理矢理にでも何とか出来ないかねぇ。

とりあえず、カンカンポーションを出してじっと見つめて観察。

所謂、魔素は不純物なわけだよな。この不純物を取り除けば良いわ

けだ。

でも、そんな方法はないよな。魔素中毒は自然治癒しかないようだしなぁ。

考えて、というか悩んでいると

「ただいま」

エドさんが帰ってきた。

「おかえりなさい」

足音が近付いてきて、部屋に入ってきた。

「おう。ただいま。……何してるんだ？」

僕はポーションをじっと見ていたからか、不思議な顔をして聞いてきた。

「おかえりなさい。ちょっと考え事を」

「そうか。シルフィはどうした？」

少し周りを見渡してから、エドさんは聞いてきた。

「庭の散歩に行って、まだ戻ってないです」

「そうか、そんなに広いのか？」

「どうなんでしょうか。え～と」

メニューから確認してみた。うん、シルフィたちは庭にいるな。ってか、分かるようになってるのか。あっと、広さは……これでいいのかな？　え～と……６０ｋｍ？……って！？　……広過ぎないか！

「……６０ｋｍ？。って言えば分かりますか？」

「６０キロヘイホウメートル？　面積の単位か？」

あ、やっぱり分からないか。まあ、だよなぁ。お金の単位も違うんだから、そりゃ、違うよな。

「はい、そうです。ん～、他の言い方だと……この国の単位って、いや、わかっても変換がすぐにはできないか。どうしよう」

「大体でいいぞ」

「そうですね。おそらく、ファストの町の５～６倍くらいでしょうか」

「……広いな」

「……やっぱりですか」

「庭なのに町が何個も入る時点で広いだろう」

「確かにそうですね」

少し変な雰囲気になった。

「ま、まあ、そんなこともある。そういえば何をしていたんだ？」

「え？　あ、はい、魔素を取り除く方法はないかな、と思いまして、考えていたんです」

「魔素？　ん～、そうだな、魔素か。無くはないが……」

「あるんですか！？」

「ああ。共鳴氷晶という鉱石で魔素を分解することができる。ただな、稀少な鉱石でな」

「共鳴氷晶……どのくらい稀少なんですか？」

「そうだな。魔宝石と呼ばれるものの中でも、特に稀少なものだ。市場に出回ることが滅多にないから、お金で買えたら運が良いな」

「そうですか。なら、自力で何とかするしかないかな」

そう言いながら立ち上がり、冷蔵庫（っぽい魔法具）からオレンジジュース（っぽい柑橘系）を取り出した。
コップを４つ持ってもとの位置に戻った。

「はい、どうぞ」
と、エドさんにコップに注いで渡した。

スフィとレンにも渡した。
エドさんとスフィはゴクゴクと、レンがチビチビと飲んでいるのを

見てから、僕も飲んだ。
その後再度、ポーションをじっと見つめる。
「どうするかな」
「主」
スフィに呼ばれた。
「何？」
「共鳴氷晶は有りませんが、共鳴天晶は有りますよ」
「共鳴天晶？」
僕は小首を傾げた。
「共鳴天晶だと！？」
なんかエドさんが驚いていた。
いきなり大声を出されたからビクッとしましたよ。
んで、共鳴天晶ってなんでしょう？
「主、共鳴天晶は簡単に言うと、共鳴氷晶と同じ様なものだよ」
なるほど。ならば使えば魔素を取り除けるのかな。
「いやいやいや、確かに似てるが別物だ！」
「スフィ。エドさんはこう言ってますが」

「主。性質は同じです。但し、共鳴氷晶は効果が少し低くて使い捨てで、共鳴天晶は効果が大きくて半永久的に再利用可能と言うだけです」

「なるほど。なら、同じ様なものだね」

納得、納得。

「いや、ニズ嬢ちゃん。納得せんでくれ。その違いだけで色々と桁が違う！」

ふむ。どれだけ桁が違うか分からないが、

「確かに再利用できる方が便利ですね」

隣でスフィとレンも頷いている。

「まあ、そうなんだが……はぁ、まあ、そうだな」

エドさんがなんか疲れてる。今晩は栄養があるものにしよう。いや、してもらおう。と、いうことにしておこう。

「スフィ。それで、その共鳴天晶はどこにあるんだ？」

「倉庫の中です」

倉庫か。よし、メニューから。どれどれ、どこどこ。

……あ、あった。これか。

倉庫（ストレージ）から取り出した。

［共鳴天晶］

魔素を分解する力を持った鉱石。効果が強力なため魔物や魔獣と呼ばれる存在はこれを避ける。そのため魔除けにも使うことが可能である。同系統の力を持つ共鳴氷晶よりも稀少で、同じ大きさの金剛石よりも桁違いに高価である。

これだな。

外見は水晶に近いが、中に様々な色の波紋が踊っている。少し白色と青色の波紋が多いかな。

取り出して机に置くと、エドさんが、ほほぅ、と感動した様な雰囲気を醸し出した。

「これを近付ければいいのか」

なんか、「国宝よりも遥かに大きいな」とか言っているエドさんはスルーして、ポーションに近付けた。

すると、ポーションがぼんやりと発光した。

これでいいのかな？　どれどれ、変化したかな？

［カンカンポーション？］（品質６）

ＨＰが８００回復、ＭＰが５０回復する。薬草と聖水が魔力とマナ

により反応を起こし活性化した回復薬。六宝柑の味がして飲みやすい、六宝柑ジュース。
（（魔素を取り除いたポーション。秘薬としての効果はなくなったが、連続して摂取しても魔素中毒にならなくなった。ただし、多量に摂取するとポーション中毒にはなる。））

ふむ。これが普通のポーションか。回復量は固定なんだな。

ってことは、何%と言うのは秘薬の特性なのかな。
確認のために正規の手順で秘薬を作りたいけど、調薬のススメに載ってるなものの名前がヤバイんだよな。
エリクシール、ネクタル、アムリタ、ソーマ、仙丹（せんたん）、変若水（をちみづ）、一部知らないが。
それに、素材が知らないものばかりだ。

「全部あるよ」

全部あるらしいが……え？

振り替えるとスフィが本を覗き込んでいた。

「あるのか？」

「もち」
スフィは満面の笑みで頷いた。

「そうか。あるのか。……とりあえず作成は、もとい、調薬は保留だな」

「そう？　好御期待だね」とワクワクした様に言っていた。
試しに作ってもいいが、とりあえずポーションで様子見だな。

「ニズ嬢ちゃん」

一人で納得しているとエドさんに話しかけられた。

「そのポーションはニズ嬢ちゃんが作ったのか？」

「そうですよ」

「そうか。その高位（ハイ）ポーション作ったのか。凄いな」

「高位（ハイ）ポーションになるのですか？　使った素材は通常の回復薬と同じですよ」

「そうなのか？　特殊な調合でもしたのか？」

特殊？　特殊と言えば特殊かな。

「まあ、色んな調合方法はあるからな、独自なものもあるのだろうな」

僕の場合は独自と言うか適当だったなぁ。

「そうですね」
笑顔でスルーしました。

「ただいま」

話しが一区切りした時、ちょうどのタイミングでシルフィが帰ってきた。

「おう、おかえり」

「おかえり。どうだった？　なんか面白いものはあった？」

入ってきたシルフィに庭の感想を聞いた。

ちなみにメイドさんとティナは「すぐに晩御飯の仕度を」と言ってキッチンに一直線だった。下拵えはしてあるからバッチリなんだろう。栄養あるものにしてもらうのは明日でいいか。

「そうですね。泉や花畑なんかがあって凄く綺麗で幻想的でした。精霊さんもたくさんいて、なんでも聖域になっているそうです。ただ、一人なら遭難するくらいの広さでした」

「そうか。今度、散策してみようかな。……しかし、そんなに広いのか」

恐るべし６０ｋｍ？、どのくらいか想像がつかないが。

「やはり、町が何個も入る広さは庭とは言えないだろう」

「みたいですね」

エドさんの言葉に同意していると、シルフィが思い出したかの様に言った。

「あ、でも、精霊さんに頼めばこの家の場所を教えてくれるそうです」

「そ、そうなのか」

「はい！」

エドさんの相槌にシルフィは元気に応えた。
何か良いことあったかな？

そのあと、シルフィによるお散歩の話が延々と続いた。ご飯になっても続き、シルフィがお風呂に入るまで続いた。

「エドさん。シルフィ、喋りましたね」

「ああ、そうだな。こんなに喋るシルフィは久しぶりだ」

僕はエドさんと二人してぐったりしていた。そして、精霊（竜込み）は餌食にならずのんびりしていた。

「まあ、元気なことは良いことですね」

「だな」

ちなみに、シルフィの話しを要約すると、凄く清浄な空気に包まれた場所で、特に泉と花畑は素晴らしく、是非みんなで行きたいところだそうです。
ファノに聞いたところ、聖樹があるらしく聖獣も住んでいる（気配があったので、間違いない）らしい。

家の庭はどうなってるんだ？
メニューを開いて再度確認してみた。総面積２３００ｋｍ？（境界未確定部分有り、建築可能最大敷地面積６０ｋｍ？は除く）

うん？　なにこれ？

「ニズ嬢ちゃん。どうかしたか？」
僕が固まっているのを不思議に思ったか、心配そうな視線を向けてきた。

「あ、は、はい。大丈夫です」

まあ、こんなに広い土地がどこにあったのかはスルーしよう。何てったってファンタジーだからな。
大は小を兼ねるとも言うし、問題無しだな。

あ、そうだ。
「エドさん。多分、精霊祭まで留守にすると思いますが、この家を使っていいですからね」

「ん？　そうなのか？　ああ、そう言えばそんな話も有ったな」

「え？　そんな話というと？」

「いやな、精霊祭の前日準備は基本住人や信徒なので行うのが通例でな。その間は町に異世界人は来ないと聞いたからな」

「そうなんですか、大変そうですね」

「まあ、前日以外の大規模なものは例外だがな」

「精霊祭自体が大規模な祭りなんですね」

町を挙げての祭りだから、そりゃ規模も大きくなるか。

僕が「今から楽しみです」と言うと、エドさんは「そうだな」と言ったあと、小さな声で少し疲れたように「終わったら肩の荷も降りるしな」と呟いた。

聞こえたが、踏み込むのはいけないな。

その後、シルフィにも精霊祭まで留守にすることを言って、遊んでから寝床についた。

エドさんも疲れていたのか、昨日よりも早く寝た。

「みんな」

「「「「「はい」」」」」

「僕のいない間、何かあったら頼んだよ」

「任せて」
「うむ」
「わかりました」
「承知しました」
「わかった」
みんなそれぞれの返事で応えた。

「ありがとう」
僕はみんなを見回して感謝した。

その後、僕は現実世界、この世界で言うと異世界（ティエラ）かな。
「ダイブアウト」
帰った。

今後とポーションとアップデートと……。（後書き）

ありがとうございました。

リアルと友だちと妹たちと……。（前書き）

お願いします。

リアルと友だちと妹たちと……。

ダイブアウトしたら結構遅い時間だったので、寝る準備をして、

「さて、寝るか。明日は買い物をしようかな。今日はゲーム三昧だったからな、体に悪いな」

即効にて睡眠。

翌日、

「おはよう」

目を覚まして下に降りると、妹たちが精神的に死んでいた。

「おはょぅ」
「ぉはよぅ」

妹たちが精神的に死んでいた。

「だ、大丈夫か？」
少したじろいでしまった。

「だいじょうぶです、あーしはげんきです」
「はい、げんきです」
うつらうつらしながら言った。

「寝たらどうだ？」

「ここで寝たらゲーマーがすたる」「だから寝る訳にはーーー」

「寝ろ」

「「でも、今日中にあいつを倒さないと、やっとヒントの発表も出たのに」」

「仮眠でもいいから寝な。体調なんか崩したらゲーム禁止になるぞ」

「「はい！　寝ます！」」

二人とも敬礼して自分の部屋に戻っていった。

「まったく、あの調子じゃプレイ時間の制限が意味なしだな」

ふう、と溜め息を吐いた。

おっと、溜め息吐いたら魂が出てしまうな。そう、肺の中には魂が入っているのです。

さてと、なに食べようかな、っと。

その時、ドタドタ、と2階からおりてくる音がした。

ん？

「兄ぃ」「どうゆうこと！？」

妹たちが駆け込んで来てた。

ん？

「何が？」

なんかしたか？　見に覚えがないんだが。

「なんでＶＲＰを持ってるのさ」「なんでなんで」

妹たちが詰め寄ってきた。

てか、近い近い、怖い怖い。

「何でって、集めてた福引きで当たったから。てか、あんたら持ってんだから、僕が持ってってもいいじゃない」

「ソフトは！」

「まあ、ソフトとハードのセットだったから、持っているよ」

「なら、一緒にしようょ、兄ぃ！」

そうは言っても、あの姿は辛いな。……って、あれ？　何で僕がＶＲＰを持ってるのを知った？

「ねぇ、二人とも、まさか、僕の部屋に勝手に入ったのかな？」

「「え！？　いや（ぁ）、あの（ぅ）」」

二人とも目を逸らした。

「用事があったのなら、別に構わないけど。どうなの？」

なんとなしにじっと見つめてみる。

「「ごめんなさい」」

「瑠璃が部屋に入って見つけて」

「茜もぉ乗り気で入ってきたじゃなのさぁ」

「何よ！」」

「何よぉ！」」

二人が喧嘩を始めた。

まあ、いつかバレると思ってたから、別にいいかな。

「まったく、許すから喧嘩をやめなさい」

「「ハーイ」」

ニコニコ笑って言った。

「まあ、用事もなく入ったのは変わらないが」

僕も作り笑いをうかべて妹たちを見た。

「「ご、ごめんなさい」」

「まったく」

嘆息した。嘆いてないが、特に気にしてもいないが。

「それで兄ぃ、E2やってるんだよねぇ？」「何処にいるの？　一

緒にやろうよ！」
二人はワクワクしたようにこちらを見つめてきた。
「まあ、そのうちな。早くてもアップデート後かな、今日はダイブしないつもりだし」
「「えぇ～」」
「当たり前だろ。毎日やってたら体に悪い。それにまだ現代文の宿題が残ってるから、それをやる」
「「えぇ～」」
「えぇ～、じゃない。てか眠くないのか？」
寝るために2階に行ったんだよな。
「「あ」」
妹たちは今気づいたとばかりに目を見張った。
「まあ、眠くないなら寝る必要はないけど。さっきから声が揃うな」
「偶然だよ」「そうだよぉ」
「そうか。別にいいけどね。さて、朝御飯でも食べようかね」
僕は台所に向かった。
「私たちは少し寝よう」「皆とマジックゴーレムを倒しにぃ行くぞぉ」

妹たちはドタドタと2階に向かっていった。

本当にやつらは眠いのか？

まあ、どちらでも良いか。

「さてと、ご飯食べるかな」

冷蔵庫から林檎だして、かじりながら考えた。

うむ。林檎だけでいいか。あ、紅茶も飲もうかな。

朝御飯を食べ終えテレビを見ていると、携帯にメールがきているのに気付いた。

ん？　メールは卓巳か。何だろう？　題名は無題か。

開けて内容を確認。

〈イエニテマツ〉

時間の指定がないな。その内行けば良いかな。

その時、ピロリンと音がして、メールが来た。

ん？　メールは卓巳からか、なんだろう？

〈ナゼニコナイ〉

ふむ。こいつはアホかな？　時間の指定が無いだろうが。

メール送信。

すると、直ぐにメールが帰ってきた。

〈すまん。忘れてた。支度してこれる時間で構わないから来てくれ。一応は9時集合にしてたぜ。〉

9時ってもう過ぎてるな。……しゃーないな、行くか。

財布やら携帯やらを持って、卓巳ん家に向かった。

着きました。はい、着きました。暑かったです。今も暑いですが。

ピンポーンと、チャイムを鳴らした。

ガチャリと音がして……て、しない！　無音で開いた！　って、前からそうか。

「お待ちしておりました」

いつの間にか執事さんがいた。

「あ、はい。お邪魔します」

お待ちしてた、ってことは話が通ってるな。

案内されて屋敷の中に入って行った。

「「「「「「へい、らっしゃい」」」」」」

「おう。お邪魔します……なんで八百屋風なんだ」

「「「「「「ノリだ」」」」」」

「そ、そうか。まあ、いいけど。それで何の用だ？　いきなり呼び出して」

「聞いたぜ。聞いたぜ！」

「何をよ」

なんか皆も「聞いたぜ」と唱和したので、引き気味に聞き返した。

「妹さんから、手に入れたって聞いたぜ」

「ん？　ん～、ん！？　ああ、あれのことが情報早いな。でも、時間的におかしくないか？」

時間的にバレたタイミングとメールの着信が合わないな。

「まあ、メールした後に聞いたからな」

「あ、やっぱり。んじゃ、なんの用だい」

改めて聞いてみた。

「細かいことは気にするな」

「そうか。帰るか」

踵を返して扉に向かった。

「ごめんごめん」

なんか足にしがみつかれた。

「んで、何よ」

「そこは、ほら、明日アップデートと再販があるだろう？」

「あるな」

「そこで、新規参入の人の支援でもしようと思ってさ、やってない人に意見を聞こうと思ったのさ。まさか持ってるとは思わなかった」

「なるほど、そう言うことか」

「そこで急遽話の内容を変更だ。んで、いったいいつの間に入手したんだ？」

辺りを見ると、皆興味津々といった様子。

「皆よりも手に入れたのは遅いぞ」

「そこだよ」

どこだよ。てか、指差すな。
卓巳の指を握り、曲がらない方向に曲げてやった。
すると、「ぎゃー」と変な声を出した。

「痛ってーよ！　折れるだろうが！」

「折れてないだろう？」

「まあ、な。それで発売日に持ってなかったのに、どうやって手に入れたんだ？　俺でも無理だぞ」
釈然といない顔で聞いてきた。

「福引きだ」

「福引きだ？」

「うん。商店街の福引きだ」

すると、大宮さんが思い出したように言った。

「あ！　そう言えばあったわね。確か特賞に。あれを当てたのね」

すると、卓巳は更に思い出したように言った。

「ああ！　それ提供したのうちだわ。そう言えば親父が言ってた。あれを当てたのか！　運がいいな」

「一年分の運を使った気がするよ」

「お前の運はそんなに柔じゃないだろう」

「なんだそりゃ」

二人で笑いあった。

てか、足にしがみつきっぱなしなんだが。

「はいはい。二人ともとりあえず座ったら？」

寒川さんは、手を叩きながらそう言った。

僕と卓巳は「それもそうだな」と、素直に座った。

「さてと、それで今は何処にいるんだ？　それにレベルはどこまで上がった？」

卓巳は何が気になるのか、僕の進行状況を聞いてきた。

「僕か？　今のレベルは６だよ」

うん。嘘は言っていない。

「６レベルか、まだまだだな。ちなみに俺は１６レベルだ。勿論トップだぜ」

「ほほう」

「ちなみに瑠璃ちゃんや茜ちゃんもトッププレイヤーだけどね」

「やっぱりか」

「おうよ。第二の町を解放したのも妹さんパーティだからな。負けたぜ」
少しガッカリしてるように言った。
「負けたぜ、って、勝負してたのか？」
そんな話は聞いてないな。
「いや、そういう訳じゃないけど」
「なんだそりゃ」
あきれた眼で見つめてみた。
すると焦ったように、話題を変えた。
「そ、そうだ、一緒にやらないか？　エレストにいったらギルドを作ろうと思うんだ。どうだ？」
「ギルドか。皆で作るのか？」
他の面子を見回しながら聞いた。
ちなみに今回のメンバーは美津橋卓巳、藤沢和哉、東一、高坂雄太、大路春、倉沖大地、寒川南月、大宮優佳、香川愛奈、川崎柚の男性６名、女性４名の計１０名。
「おう。なあ」
卓巳は振り向いて皆に聞いた。

「「「「「「「「「もち（ろん）」」」」」」」」」

あれ？　前回とメンバーが微妙に違うような。
てか、話を聞いてたのか。

「あ、ちなみにここにいないメンバーも一緒だぜ」

「何の話？」
藤沢が聞いてきた。

やっぱりか。聞いてなかったか。

「ギルドメンバーの話だ」

「ああ、なら勿論だ。あ、どうぞ話の続きを」
藤沢は「どうぞどうぞ」とよくわからん動きをして他の面子と話始めた。

「卓巳。それって全員で何人くらいなんだ？」

スルーして続けた。

「え～と、何人だろ」

卓巳は指折り数えている。
あれ？　折り返してるよな。
知り合い同盟か？　いや、学校同盟か？

「う～ん、とりあえずは５０人前後かな。ちなみに目指すはトップギルドだ」

「トップギルドって」

「夢は大きくできる範囲で！　って言うだろう？」
胸を張って言い切った。

「いや、聞いたことないけど」

「まあ、考えといてな」

「了解」

僕が了承すると、笑顔で頷いて他のメンバーと何やら相談を始めた。
どうやらマジックゴーレムの討伐計画に移った様だ。
まだ倒してなかったのか。でもゴーレムだろう？　何かを壊すか、
何か特殊アイテムでもあるんだろうか？

あ、今日の晩御飯は何かな。出来れば鰺フライがいいな。
机にあったお菓子を、ポリポリ、食べながら考えていると、

「よし！　それでは6時に広場集合だ！　アップデート前にエレストに行くぞ」

「「「「「「おう！」」」」」」

「私たちもアップデート前に行くわよ」

「「「おぉ～！」」」

男子チームは卓巳がリーダーで、女子チームは寒川さんがリーダーかな。

「一緒に来るか？」

卓巳はこちらを振り向き聞いてきた。

「う～ん。今日はダイブインせずにのんびりするよ」

「そうか。ならば、今日は解散だな。各自体調を崩さないようにしないとな」

各自張り切りながら、解散となった。

なんか準備でもあるのかな？

「んじゃ、僕も帰るわ」

いてもしょうがないしな。

「え～、帰るのかよ」

「なんでだよ！」

「んじゃ、またな」

「いいのかよ！」

「まあ、冗談は置いといて、昼御飯は食べてけよ。いきなり呼んどいて、このまま帰したら怒られるからさ」

誰に怒られるんだよ。っと両親か執事さんか、はたまたメイドさん？

「わかった。御馳走になるわ」

「おう。それじゃ」

ちらっとあさっての方向を見た。

「どうぞこちらへ」

メイドさんがいた。

ドアを開ける音がしなかったんだが。

僕は卓巳とメイドさんの後をついていった。

その後、ご飯をいただきお礼を言って卓巳ん家を後にした。

ちなみにお昼御飯は冷やし中華でした。

帰り道に本屋によって新刊のチェックして、家路についた。

夏休みの宿題を終わらせて（多分これでＯＫ）、いつもより早くベッドに入った。

リアルと友だちと妹たちと……。（後書き）

ありがとうございます。

アップデートは無事に終わった。……無事？（前書き）

お願いします。

アップデートは無事に終わった。……無事？

アップデートが終わった。

ちなみにマジックゴーレムは倒せたそうだ。

卓巳が言うには、条件をクリアすると途端に弱くなるらしい。（間違えると死ねるらしいが）

ちなみに卓巳のパーティが始めにマジックゴーレムの討伐に成功し様で、妹たちは悔しがっていた。

妹たちは3番目で、十分早いと思うのだが。

それでは、アップデート内容の確認でもしようかな。

〈アップデート内容〉

1、職業の項目の新規追加

2、加護の新規追加

3、ダンジョンの出現

4、モンスターのＡＩの強化

5、プレイヤーの行動範囲の開放

6、ファミリーネームの実装

簡単に言うとこんな感じ。

ふむ。よくわからないものもあるが。行けば分かるか。

まあ、詳細を見れば説明があるが。

さてと、
「ダイブイン」
1日ぶりのゲーム世界へ。

やって来ました。
まあ、マイハウスのベッドの上ですが。

ピロリン♪
ん？　メールか？　だれから、って、運営から！？
アップデート内容の確認かな。開けば分かるか。

〈部分的に戯れで変更出来ましたので、変更致しました。ご確認くださいませ。〉

？
これだけ？

なんだこのメールはステータスをみれば分かるか？

……って、戯れって、あんた戯れって何よ！？

と、とりあえずステータスを、

なんか久しぶりにステータスを開いた。気がする。

＝＝＝

ｖ９７］［探索Ｌｖ１］［調合Ｌｖ７９］［研磨Ｌｖ８９］

〔控えスキル〕

［能力仮装Ｌｖ３６］［桜季流剣術Ｌｖ１２］［初級魔法Ｌｖ１］

［魔法具作成Ｌｖ１］

〔称号〕

［神精霊の愛娘］［森羅万象を受け流す者］［一気倒千］［孤立戦陣］［竜の友］［竜殺し］［トラップマスター］［神代之神姫］［ハイ・エルフに認められし者］［黙示の終焉を覆す者］［理外を超越した者］［レニクス王から信頼を得た者］［レニクス王の孫娘の親友］［世界を始めに知った者］［存在は正義］［桜季流剣術皆伝］［桜季流剣術開祖の直弟子］［絶対なる死を覆す者］［邪神殺し］［神を救いし者］［神霊の契約者］

〔所持称号効果〕▼

〔所持金〕：８４，００６，６７１，０７２，０００Ｄ

〔装備〕

Ｍ武器：真神御刀［无極神御刀（ありしかみのみつるぎ）］（不顕現）

Ｓ武器１：白刀［真秀刃（まほらば）］（納刀）

Ｓ武器２：双剣［夕暮之妖精（ダンシング・フェアリー）］（納刃）

頭：［灰狼のニット帽］

胴：［灰狼のワンピース］

手：［灰狼の手袋］

腰：［灰狼のショートパンツ］

足：［灰狼の靴］

アクセサリ１：［神獣耳（ケモミミ）］
アクセサリ２：［恋美と夜天（ウェヌス・ニュクス）の髪飾り］
アクセサリ３：［アドモスサイトリング］
アクセサリ４：［携帯魔導通信機（ポケットマナカム）（ピアス式）］
アクセサリ５：［神具〈凪嵐ノ指環〉］
アクセサリ６～１０：なし

〔装備付加効果〕▼

＝＝＝

ノリ我が儘悪ふざけの集大成。普通には進化できないように、進化条件が設定されている。そのため、進化することは不可能、と言っても過言ではない。ぶっちゃけ進化できた人は、『もはやなに！？』状態である。その分、種族特性も壊れ性能で『もはやなに！？』状態である。『まあ、神ですからね？』

〈種族特性〉

服系統以外の防具は装備不可能。その代わり、性能が飛躍的に上昇する。

１つ目のスキルが変更できなくなる代わりに、そのスキルの取得スキル経験値が１００倍になる。そして、１つ目のスキルを完全習得した場合、その後すべてのスキルの必要経験値が半分になり、取得スキル経験値は3倍になる。さらに、一つ目のスキルを使用した場合のスキル経験値は、他のスキルに分与される。

全ダメージ９９％減、全状態異常無効、呪無効、阻害妨害拘束系統無効、能力低下系統無効、全属性魔法無効、全防御透過貫通

全属性の魔法を範囲・威力の規模関係なく、タイムラグゼロで高速連射可能。

ＭＰがレベルアップ毎に、５０００増加する。

身長は９７ｃｍ、体重３ｋｇです。

なお、運営や開発への苦情や変更などは、一切受け付けません。

『Ｙｅｓ　ロリータ、Ｌｅｔ'ｓ　タッチ！　可愛いは神だ！　そして、これは犯罪ではない！　合法だ！！　浪漫であり、義務だ！！！』　ｂｙ運営及び開発一同

『いいじゃない！　小さい子を愛でてもいいじゃない！　僕っ娘も男の娘も大好物よ！！！』　ｂｙ運営室主任

『私はマイノリティではない！！　よく考えてみろ。年上過ぎるより、年下過ぎる方が良いだろう！？　そう！　それこそが、ａｂｓｏｌｕｔｅ　ｔｒｕｔｈ　ａｎｄ　ｊｕｓｔｉｃｅ！！　さあ、サイレントマジョリティの皆さんも、ご一緒に！！　幼女最高ぅ～！！！』　ｂｙ開発室室長

『ふっ、甘いな』　ｂｙ　Ｓｙｓｔｅｍ.

……ふっ。

「なんでだー！　てか、システムってなんだよ。なんで、なんでシステムにまで……」

僕はベッドに倒れ込んだ。もとい、崩れ落ちた。

数十分後に何とか復帰し、続きの確認をした。

それで、この神格ってなんだろう。

神格［无と弍を司る神］
無と有の神。神は数多存在するが、その中でも最高位。
人化時効果：スキルの成長速度が１０倍になる。
神時効果：ステータスをステータス数値のＬｖ数値一乗冪とする。

いやいや、なにこれ！
こんなの使えねぇ～。今段階でもｏｖｅｒｋｉｌｌなのに……あ、そうか。どうせ変わらないか。

うん。なら良し。

さて、決まったことをどうこう言ってもしょうがない。他の項目でも確認しますか。

スキルを確認し始めた。

何も変わってないと思うが。

〔真神御刀〕

その力、全てを切り裂き総てを救う。

『巨大な剣もいいけど、やっぱり刀っていいよね。日本人の命だよね。てか、巨大な剣って使い難いでしょ？　あ、でも、巨剣にも出来るから使ってね。』　ｂｙ室長

〈巨神剣〉――山崩――海裂――地割――空破――山脈崩――幻砕――真切――天貫――隕石砕――星切――御元切伏

〈神・巨神剣〉――无夢一片

〈真神御刀〉――祈如葬刃

変わってるな、おい。

確かに使い難いけど、なんでここで変わる！？

もしや、ダンジョンがあるから壊さないようにか！

有り得るな……気を付けよう。

って、ことは武器も変わってるのか。

顕現させてみた。

真神御刀［无極神御刀（ありしかみのみつるぎ）］
先に到り覚醒した御姿。神が使う片刃の刀剣。
スキル：［森羅万象］［不可避］［無限刃域］

ふむ。読み方は変わってないな。とりあえずは大きくない。普通のサイズだな。てか、小さくなってなかったらこの部屋壊れてたんじゃ？　もしや場所で大きさがかわるのか？　今は小さいし。まあ、身長と対して変わらないが。
……って、なんかおかしく……いや、多分アップデートによる変更だな。

他は……変わってないな。見た目は、見た目はね。
一応、他のスキルも確認しておくか。

……。

……。

……。

ふむ。特に変化は……ん？
能力仮装のレベルが上がってるな。まあ、使いっぱなしだから、そりゃ、上がるから、

［能力仮装Ｌｖ３６］

〈能力仮装〉――ステータス仮装――外見仮装――???

ん？　“外見仮装”？　なんだこりゃ？
とにかく、確認してからだな。え～と。

［外見仮装］
外見を仮装できる。ただし、自身より小さくはなれない。仮装中はＬｕｃ以外のステータスが１／１００になる。
連続使用時間：１２ｈ（ゲーム内時間）
待機時間：使用時間（ｈ）×１０ｈ（リアル時間）

！
マジか！？
これはいけんじゃないか？
試しに使ってみようか。
“外見仮装”発動！
ぽんっ！　と音がした。
え～と、鏡、鏡、おっ！　変わってる。
そこには髪と目の色は違うが、リアルな自分がいた。
うん。これはいける。この格好なら会いに行ける。

よし。これからはリアルの知り合いに会うなら、この格好でいこう。
何故か本来の姿で会うことに、嫌な予感が。特に女性陣が危険が危ない気が……いや、考えるのは止そう。

ぽふん、と音がして、もとの姿に戻った。

さてと、そろそろ部屋を出るか。エドさんやシルフィはいるかな？

そう思いながら、部屋を出た。

アップデートは無事に終わった。……無事？（後書き）

ありがとうございます。

ここから下は設定の様なものです。
飛ばしても問題ないです。

Ｌｖ：様々な行動を行うことで上がる。レベルを表す。
ＨＰ：０になると死亡する。５分以内に蘇生しない場合、死に戻る。時間と共に少しずつ回復する。回復速度はＶｉｔおよびスキルに依存する。
ＭＰ：アーツや魔法を使用することで消費する。時間と共に少しずつ回復する。回復速度はＭｉｎおよびスキルに依存する。
Ｓｔｒ：高いほど与える物理ダメージか増加する。筋力を表す。
Ｖｉｔ：高いほど受けるダメージが減少する。体の丈夫さと生命力を表す。
Ｉｎｔ：高いほど魔法の規模が大きくなる。魔法との親和性を表す。
Ｍｉｎ：高いほど状態異常にかかり難くなり、魔法によるダメージが減少する。体の抵抗力を表す。
Ｄｅｘ：高いほど生産の成功率があがり、評価も高くなりやすい。また、クリティカル率もあがり、命中率にも影響がある。
Ａｇｉ：高いほど移動速度と行動速度があがる。
Ｌｕｃ：クリティカル率、ドロップ率、アイテム生産率に関係する。

スキル（仮）

［双刃紅葉（ふたばもみじ）Ｌｖ５８］
〈双剣〉――クロススラッシュ――ダブルスラッシュ――サークルスラッシュ――ツインピアース――スラッシュサーキュレーション
〈双刃紅葉〉――双重撃――円舞――嵐舞――？？？

［守護魔法Ｌｖ８］
〈光魔法〉――ライトシールド――ライトヒール――ライトボール――ライトショット――ライトレジスト――ライトアロー――ホワイトベール――シャイニングジャベリン
〈守護魔法〉――魔衝壁――？？？

［残像回避Ｌｖ１０］
〈回避〉――後方回避――上方回避――回り込み――三次元回避――脱出――大脱出
〈残像回避〉――幻影回避――瞬身――？？？

［心身強化Ｌｖ８］
〈身体強化〉――ブースト――エレベート――アクセル
〈心身強化〉――ライズ――？？？

〔調合Ｌｖ７９〕
〈調薬〉――精製――反応促進――短縮簡略化――？？？
〈調金〉――合金――武器合成――新金創成――？？？
〈調理〉――熟成促進――大解体――？？？
〈調木〉――合木――？？？
〈調律〉――音叉――？？？
〈調印〉――書印――？？？

［生命之根源（マナ）操作Ｌｖ９７］

〈魔力操作〉――魔力探知――魔法操作――術技操作
〈生命之根源操作〉――マナ察知――魔法減衰――？？？

［探索Ｌｖ１］
〈発見〉――採集――発掘――透視――見破り
〈探索〉――探査――？？？

［能力仮装Ｌｖ３６］
〈能力仮装〉――ステータス仮装――外見仮装――？？？

［桜季流剣術Ｌｖ１２］
〈桜季流剣術〉――斬撃・白椿――打撃・花桃――突撃・雪柳――抜刀・春光

［初級魔法Ｌｖ１］
〈初級魔法〉――サンドショット――ウォーターボール――ファイアボール――ウィンドカッター――フラッシュ――ブラインド――マジックアロー――？？？

［魔法具作成Ｌｖ１］
〈魔法具作成〉――形状変化――？？？
〈付加術〉――魔法付加――？？？
〈加工魔法〉――融解加工――？？？

以上

碧の石は高価、紙も高価です。（前書き）

お願い致します。

碧の石は高価、紙も高価です。

トコトコ、と歩いて行った。そう言えば何で歩幅が違うのに転ばないんだろ？　最初から転ばすに走れたよね。

今更なことを考えながら歩いた。

居間に入ると、

「おう。お帰り」

入った時、こちらに気付いたエドさんが笑顔で話しかけてきた。

「ただいま」

笑顔で返事をした。

その時、ぼふん、と後ろから衝撃を受けた。

「お帰りなさい」

シルフィに後ろから抱きつかれた。

「ただいま」

もはや抵抗はすまい。意味がないからな。

「お嬢様。お帰りなさいませ。丁度朝御飯を作っております。少々おまちくださいませ」

ティナがいつの間にかメイド服を着ていた。

そのメイド服は何処から仕入れた。いや、もとからメイド服だったっけ？　少なからず服のデザインが変わってるな。てか、精霊って服を着替えることができるのか？

「主。霊布を精霊が服に仕立てれば、精霊が着ることの出来るんだよ」

「なるほど。……スフィ？　僕、声出てた？」

まさかの読心術！？

「不思議そうな顔をしてたからね」

表情でしたか。

「そうか。……ん？　霊布なんてあったの？」

「風を編んだ霊布を貰ったんだよ」

「そうなのかぁ。……ん？　風って編めるの！」

普通に驚いてしまった。

もとい、誰に貰ったんだ。編める人にかな。顔が広いな。

「うん。出来るんだなこれが」

「出来るのか。凄い人もいたものだ」

感心して何度も頷いた。

そのタイミングで、ティナから「ご飯ができた」と言われた。

ティナとメイドさんが料理を運んできて、みんなで食べ始めた。
みんなでご飯を食べていると、エドさんが思い出したかのように話しをふってきた。
「ニズ嬢ちゃん。今日から精霊祭なんだが、“サフィラス”は用意したか？」
エドさんは唐突に聞いてきた。
「サフィラス？」
首を傾げながら、聞き返した。
「ああ、そうか。サフィラスって言うのは青い石のことだ。精霊祭では青い石を持って参加することで、その石に幸運が宿るとされているんだ。実際、石に神霊の加護が宿ったことも有ったそうだからな」
エドさんが説明してくれた。
「青い石ですか。青い石ならどんな石でも良いのですか？」
「青い石なら良いと言われているな。ちなみに青い石は実際には緑の石なんだけどな」
「え！？」
「昔は緑のことを青って言っていたからな。今は勘違いしてる人も多いがな」
嘆かわしいとばかりに言った。

「なら緑の石を持ってればいいのですね。え～と、あったかな？」

探してみると、緑の石はなかった。

「主。はい」

スフィが緑色（いや、翠かな）の石を持っていた。

「こんなこともあろうかと、用意しておいたよ」

「いいの？」

「うん」

スフィはそう言って手を出してきた。

「ありがとう」

僕はお礼を言いながら、手を前に出して受け取った。

何の石なんだろう？

じ～、っと見て観察。うん。分からん。石に詳しいわけじゃないからね。

諦めてエドさんに確認を取った。

「この緑の石で問題ないですよね？」

「あ、ああ。問題ない。……なあ、その石って……」

エドさんは驚いたような表情をしていた。

うん？

「この石は、“風翠碧”だよ」
何でもないようにスフィは軽く言った。

「風翠碧だと！？　そんな色ではなかったはずだが」

エドさん、驚きっぱなしだね。

「それは不純物が入ってるからだよ。純粋な風翠碧だから綺麗な色なんだよ」

スフィ、物知りだな。それとも精霊には常識なのかな？

「そうなのか。……その風翠碧は何処で手に入れたんだ？」

「秘密だよ。主になら教えてもいいけどね。主、知りたい？」
こちらをチラリと見たあと、じっと見てきた。

「いや、一つでいいから知らんでいいよ」

「まだ、あるよ」
一つでいいと言ったら、スフィは更に風翠碧を出した。
あるのか！

「そ、そうなの？　ま、まあ、持っててよ」

「うん。わかった」
スフィは風翠碧を何処かにしまった。

「なんか、ニズ嬢ちゃんといると、常識が壊れていくな」

エドさんは苦笑していた。

「壊すようなことをした記憶は無いのですが」

「まあ、本人に自覚は無いものさ」

ため息をはきそうな雰囲気で、遠くを見た。

「ま、まあ、とりあえずこれで良いですよね」

「まあ、な。　ん？　シルフィ何してるんだ？」

エドさんは気付いたように言った。

僕も後ろを振り向いた。スケッチブックに何かを書いていた。

「設計図を描いています」

設計図？

「設計図って何のだ？」

エドさんがシルフィに聞いていた。

「杖です」

「「つえ？」」

「はい！　前にお祖父様が護身用に何か持った方がいいと」

ニコニコ笑いながら楽しそうに言った。

「エドさん。言ったんですか？」

「う～ん、……あ、言ったな」

遠くを見たと思ったら、どうやら言ったことを思い出したようだ。

「はい。だから設計図を描いてます」

「そうか。どんな感じだ？」

僕とエドさんは見せてもらった。

……う、うん。これは凄いな。主に材料が、ね？

詳しくは分からないが、名前の字面で凄そうと思う。

「エドさん。この素材ってあります？」

「……難しいだろうな。特に風属性の魔宝石は何とかなるが、“風皇鷲の尾羽”と“風聖樹の枝”が無理だな」

「その素材はーー」

チラリとスフィを見た。

「“風聖樹の枝”はあるけど、“風皇鷲の尾羽”は捕ってこないとないね」

「ーーらしいです」

そして、エドさんに視線を戻した。

「そ、そうか。“風聖樹の枝”も簡単に手に入る物じゃないのだがな。それに“風皇鷲の尾羽”は伝承に出てくるような物だ。それに

風皇鷲（ルク）はそう簡単に見つかるものじゃないだろう」

「そうなの？」

エドさんが力説するので、スフィに聞いてみた。

「うん。確かに大変かも。……あ、それって“不死鳥（アムルゼス）の風切羽”で代用できないかな？」

そんな素材があるのか！？　いつの間に集めたんだ？

「“不死鳥（アムルゼス）の風切羽”だと！　どうやって手に入れたんだ！？」

エドさんは驚いて声を大きくした。

「いつの間にか持ってたから分からないよ」

「　な！　」

声を失っていた。と、思いきや、何かを小声で呟いている。

しかし、いつの間にか、か。

まあ、アムルゼスが何かは分からないが。風切羽ってことは鳥の仲間なんだろうな。

「それで代用できるのかな？」

「大分すれば、どちらも王鳥なので大丈夫じゃないかな？」

「代用は可能だ！　いや、代用というか、代用と言う言葉に違和感

を覚えるぞ」

エドさんは早々に復帰した。
呟いているエドさんは少し怖かったな。

「なら、素材は何とかなりますね」

「だな」

なんかエドさん、開き直ってないか。遠い目をしている。

「ハイ、コレ」

スフィは素材を持ってきていた。
持ってたの？　どこにしまってた？

「あ、ああ。ありがとう」

戸惑いながらエドさんはスフィから受け取った。

さてと、それじゃ、
「シルフィ。これで作ろうか？」

「はい！」

「エドさん。伝はありますか？」

多分、僕は杖は作れないな。作ったことないし、スキルないし。

「大丈夫だ。私の知り合いにいる。エルフで、素晴らしい腕の職人

だ」

「エルフですか」

「そうだ。国宝も手掛けた人だ。これほどの素材なら喜んで作ってくれるだろう」

「なら、問題ないですね。それじゃ他のスケッチを片付けますか」

「そうだな」

失敗作か試作品は分からないが、画用紙が散らかっていた。
特にシルフィの周りに。

「しかし、画用紙は高価だから、捨てるのは勿体無いな」

「ごめんなさい。どうしても納得できなくて」

ふむ。画用紙は高価なのか。

「大丈夫だよ」
そこでスフィが画用紙を拾って、こちらに渡してきた。

？　なんだろ。
僕は受け取りながら、首を傾げた。

「ただの画用紙じゃないから、生活魔法“ウォッシュ”を使えば綺麗になってまだ使えるよ」

「それは……もしや、伽藍紙か！？」

エドさんは驚いた様に声を大きくした。

がらんし？　どんな漢字だろ。

「似てるけど、違うもの。解浄紙って言って、伽藍紙よりも安価な紙ですよ」

かいじょうし？

スフィは人差し指を立てながら説明を続けた。

「伽藍紙は半永久的に再利用可能だけれど、解浄紙は１０回くらいしか使えないからね」

よく分からないが、１０回再利用出来るだけでも凄くない？

スフィは落ちている画用紙を拾い、更に説明は続く。

「ちなみにこの紙だけは解浄紙じゃなくて、悠久紙だね」

ゆうきゅうし？　また分からない単語が……。

「なに！？　悠久紙だと！　何故ここに！」

エドさんは紙を凝視して驚いている。

ちなみに使った本人（シルフィ）はよくわかっていない様だ。

「そうです。悠久紙です。しかし、これは特性上再利用できないですね」

「そうだな。しかし、なんで混ざってたんだ？」
エドさんは残念そうに紙を見た。

「それは分からないよ」
スフィは首を傾げた。

僕は何となく、ちらり、と横にいるメイドさんを見てみた。
ふと目が合い、気まずそうに逸らして俯いた。

う～む。これはあれかな？　まあ、この話はここら辺で止めるか。
僕は殆ど理解出来てないし。

「二人とも、とりあえず片付けようか。ゆうきゅうしとやらは……
うん、紙質は良いみたいだから、いっそハリセンにでもしよう。ほ
ら、片付けよう」

スフィとエドさんは「まあ、そうだな」と片付け始め、シルフィと
メイドさんは「はい」と片付け始めた。ちなみに生活魔法はこちら
の住人なら誰でも使えるので、特に問題なし。

その時、メイドさんにお礼と謝罪をされた。
やっぱりですか。まあ、許しましたが。価値は分からないし、メイ
ドさんも悪気があった訳じゃないしな。

片付けが終わると、僕はゆうきゅうしを手に取った。

さて、まずは確認からかな。

［　悠久紙（使用済）　］

悠久に記録する紙。劣化や破損などに極めて強く、１度書き記したものが失われることはない。別名“最強の紙”

なるほど、こう言う漢字か。最強なのか。

って、ことで、マジでハリセンを作ってみた。

シルフィ曰く失敗作だからいらないらしいし、勿体無いので使いました。

ハリセン［ウェンペリペル］

よい音がなるハリセン。攻撃力はほとんどないが、精神ダメージを与える。ネタ武器の定番の品。作った人にしか使えないが、使うのに特にスキルは必要ない。使いこなすにはある意味でスキルが必要。

効果：Ａｇｉ＋１０　ダメージ固定（最大ＨＰの０．１％）

行動制限解除（セーフティエリアでも使用可能）

スキル：［耐火］［耐水］［耐刃］

アーツ：〈クラクションアタック〉〈ＭＰアタック〉

どっからみてもハリセンだな。てか、ハリセンはハリセンと言う区分なのか。それに、使うのにスキルが必要なし。

……ある意味でスキルが必要。ってなんだろか？

ハリセンを眺めていると、エドさんに話しかけられた。

「ニズ嬢ちゃん。それはなんだ？」

シルフィも興味深そうにハリセンを見つめていた。

あれ？　ハリセンってこの世界に無いのか？

「画用紙の様な厚い上質な紙は高価だから、それが何か分からないが、そんな風に使うことはないな」

「はい。そうです。特に悠久紙は名のある人でも滅多に使うことのないものです」

僕が不思議そうにしていると、エドさんとシルフィが理由を説明してくれた。

顔に出てたかな。まあ、この世界での感情は我慢しにくいからしょうがないな。

「そうなんですか。捨てるよりは良いと思ったのですが」

残念そうな顔をした。

「まあ、確かに捨てるよりは良いな。それでそれは何なのだ？」

エドさんは僕の顔を見て、少し慌てていた。

さてと、これはなんと説明すれば。……こちらの世界にも劇団はあると思うから、そこから説明すれば良いのかな？

と、言うことで説明した。どうやらサーカスや演劇といった娯楽は普通にあるらしいので、そこで使われるような道具と、簡単な実演付きで説明した。

説明したところ、こちらの世界にも似たようなものがあった。こちらの名前は《フェイクソード》と言う、切っても切れずに音がなる競技や芸に使われるものらしい。

世界が変わっても、人は変わらないってことだね。

碧の石は高価、紙も高価です。（後書き）

ありがとうございます。

「それじゃ、出掛けましょう」

ん？

「そうだな、行くか」

んんん？

シルフィとエドさんから外出のお誘いが。……今、始めて聞きましたが。

「何処にですか？」

エドさんとシルフィは首を傾げて、納得したのか手を叩いた。

「すまん。そうだな、言ってなかったな」

「一緒にお祭りを回ろうと話しをしていまして、ニズも誘おうと思ったのです」

なるほど、お祭りのお誘いか。うむ、行きますか。

「そう言うことでしたか、分かりました、ご一緒します」

シルフィは僕の腕を組みつつ手を握った。

「なら、行こうか」

さて、お祭りを楽しもうかな。
ちなみにメイドさんが護衛も兼ねているらしい。
メイドさん、戦闘も出来ますか、さすがです。

皆で街へと繰り出した。

街の中心部に行くにしたがい、どんどん賑やかになってきた。屋台も出ていて、まさしくお祭り騒ぎだった。
多分、プレイヤーもいると思うが、見分けがつかない。アイコンでも付けば分かるんだが、無いんだよなアイコン。まあ、お互いに分からないから平等ではあるな。

皆で屋台を巡っていく。時々スリの様な人もいるが、メイドさんのガードにより、すべて（主に手首の骨が）粉砕されている。

メイドさん、マジで強ぇー。ってか何者！

「ニズ様も素晴らしいです」
メイドさんなニッコリ笑った。

心読まれたか！？

「気付いてらしたようで、時々防がれてますよね？」
笑顔のままのメイドさん。

まあ、何故か反応できるんだよね。だから防いでいるんだが。手加減が出来ているので、悪くて骨折、良くて打撲程度で済んでいる。何となくだが、ある程度力を入れても手や腕などへの打撃では、相手は死なないようだ。

あ、また来た。

少し力を入れて打ち払ってみるか。

ほい、っと。

その時、メイドさんが同タイミングで声帯を潰した。

「ー・ーッー・・ーーッー・ーー」

スリは声にならない悲鳴を上げて転げ回った。

メイドさん。小さくサムズアップしないでください。

《神眼》で確認してみた。これって便利。

どれどれ？　ふむ。どうやら《状態異常：粉砕骨折（右腕）》となっているが、ＨＰはまだ９割以上あるな。少しずつ減ってるけど、まあ、大丈夫だろう。

さて、行こうか。あ、また、ほいっ、っと。

今度も確認。

《状態異常：複雑粉砕骨折（右腕・完治不可）》

ふむ。やり過ぎたな。やっぱり手加減しないとまずいな。

ふむふむ。

考えていると、シルフィがこちらをじっと見た。

「ニズ、どうしたの？」

「なんでもないよ」

「そう？　なら、行こうよ！　こっち、こっち！」

シルフィに手を繋がれ、引っ張られて行った。

主に屋台の方に、あ、また、スリか？　しかも二人？

手は塞がってるから、しょうがないから空いている足で蹴り飛ばした。

さいっ！

心の中で掛け声。脛を蹴り壊して一撃必壊。

とりゃ！

更に心の中で掛け声。足の甲を蹴る砕いて一撃必砕。

さっきから多過ぎないか？　しかも、初回の奴等以外は、なんか殺気の様なものが漂っているんだが。

それに、倒した人の掃除が異様に早いんだが、つっこんだら負けかな？

チラリとメイドさんを見た。満面の笑みを向けられた。

ふむ。

次に、先程から回りに見え隠れしている人を、チラリと見た。

ふむ。なんかサムズアップしてるな。とりあえず犯罪にはならなそうでとても有り難いな。正当防衛だよね。

どうやら今ので最後みたいだから、後はゆっくり回りますか。既にシルフィに引っ張り回されていますけどね。

「ニズ嬢ちゃん、わざわざ対応しなくても大丈夫だぞ」

「はい。それに今のが一応最後みたいですから」

「そうか。ありがとうよ」

エドさんは笑顔をうかべた。

「ニズ、お爺様、どうかしたのですか？　さっきから仲間外れですか？」

目に涙をうかべて、こちらを見つめてきた。

「シルフィ、心配しなくても仲間外れにしてないよ。ねぇ、エドさん」

「お、おう。ただちょっと祭典に参加してもらうから、その時の服はどうしようかって相談してたんだ」

「そうだったんですか、それは楽しみです」

涙が引っ込んで、笑顔になった。

「「楽しみですが、仲間外れは嫌です。さ、行きましょう」」

二人は無言で手を引かれて行った。

夕方まで色々回りました。
この世界にも名前が違うがお祭りの定番が結構揃っていた。
例えば、“綿あめ”は“曇あめ”、“タコ焼き”は“トルマ焼き”、“お好み焼き”は“包み焼き”、“かき氷”は“砕き氷”など、微妙に違った。
ちなみにトルマと言うのは、見せてもらったが、足が１３本ある軟体動物でタコとイカを２：１で足した様な姿。
とにかく名前は違うが作り方は殆ど同じだった。“砕き氷”だけは本当に魔法で氷を砕いていたが。非効率かと思いきや、実は効率が良いというのは驚きでした。

家に着くとシルフィが眠そうに船を漕いでいた。

「シルフィ。眠そうだな」

「まだねむくないよ」
明らかに眠そうだ。ほぼ寝言で答えていた。

「ベッドの準備は出来てます」

メイドさん、いつの間に！

「そうか。なら頼む」

エドさん、動じませんね。

シルフィに引っ張られて歩き回ったので、さすがに疲れたので、その後みんな早めに寝た。

あ、ナツキさんたちに連絡してない！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3418bz/

In a different world to be named a virtual-reality

2015年9月16日22時38分発行